

ハターン・モンスター の狩りと愛の日々

ヨイヤサ・リングマスター

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

自分以外は人間だろうとモンスターだろうと弱者にしか見えない圧倒的なまでに強い男、ハターンが日常をかき乱される物語。

そんな彼に心休まる時は来るのか!?そしてその行き着く先は!?

前作が鍛冶屋が主人公だったので狩人が主人公の小説も書き始めちゃいました。モハンとは思えないような狩り以外の話もかなり多いです。

前作『最強鍛冶屋の街づくり物語』と同じようなノリで書いていきます。

あと作者にネーミングセンスはないです。

今回『小説家になろう』様から引越してきましたので本文は丸写しです。

ヨイヤサ作品No. 4 (だった)

テーマは『モンハンらしくないモンハン』

目次

第一章：イトラが黒くない編

厄介なことを押し付けるなよ | 1

いきなり同居よ!?! | 9

こういう得点なら悪くないな | 15

いやいや俺なんかに一目惚れ娘はいな

いでしょ | 21

ようやく武具製作開始か | 31

これ、やりすぎじゃないだろうか?

40

俺流弟子育成方法 | 45

イトラVSミラボレアス 上 | 54

イトラVSミラボレアス 下 | 59

登場人物の設定 | 66

第二章：イトラが黒い小話編

気弱な性格を直すのには成功したが

74

の〜んびり行こうよこの道を | 80

アホな奴に絡まれるのは宿命か

90

可愛い外見と恐ろしい二つ名 | 99

揺れ動く心 | 107

夜這いに耐えるのってけっこう精神的

にくるものがある | 115

第三章：デイオシキ襲来編

かつての弟子の来訪は歓迎すべきでは

ない | 123

やはりこうなるのか…… | 132

縞パンってすごくない？ | 140

第四章：初めての4人クエ編

俺の弟子は超電磁ロボだよ | 147

牙獣種が大好きだ、だから殺そう

156

俺の真の姿を見せてやろう！ | 165

俺の理性はもう駄目かもしれない……

| 172

第五章：ハターンが過去の清算？ | 243

をす

編 | 180

かつての同志 |

ちよっ、俺の過去をバラすなよ！

187

貴様が降参しないのなら俺はこの組織

を破壊しつくすだけだ | 197

滅びゆくなら自分の手で | 204

悔い改めな！ | 213

登場人物設定2 | 219

第六章：この子にしてこの親あり編

胸に残るは苦さ | 227

イトラ・ウボンガの花嫁試験 | 236

愛が重い時もある | 243

寡黙で渋いハードボイルドこそ俺らし

き……のはずだ | 251

最強親子の共闘 | 258

第七章：泥棒ネタ混ぜ込んだ話編

暁の大作戦 | 266

大泥棒を捕まえろ！ | 275

てめえは大切なものを盗んでいきや

がった！ | 283

第八章：闇に潜む者編

そーいや武器の修理してなかったな

295

忍者なんて絶滅したもんだと思つてた

ぜ | 302

かつてのライバルの弟子 | 312

クエストの中身は…… | 321

俺って観戦ばかりしてないだろうか？

イトラ無双 | 329

第九章：狩り場で一泊するのって修学旅

行気分になれそうじゃね？ 編 | 335

一人で夜を過ごすというのは叶わぬ夢

そして不幸は加速する | 344

月夜に煌めく血染めの刃 | 361

大泥棒マツク・ステイツド再び | 353

369

第十章：ネコの村の長かよ編

ネコネコ農場 | 379

ネコの村	385	か……	488
囚われのワリサ	394	こいつは宇宙人なのか？	497
第十一章：各キャラメイン編		第十二章：帰ってきたハターン編	
たまには牧歌的に	405	跳んだ先でもまたまたトラブル	
愛の形	412	508	
モンニャン隊、蟹を狩る	420	カーザン族の村	515
命令だ！ 消し飛ばせ！	428	激突！ 覇竜アカムトルム	524
サライバル	436	星が滅びかねん！	533
山頂決戦	446	闘争の終焉	543
ライバルの最後……	456	第十三章：ヒーローとは俺のことだ編	
自分の居場所	465	弟子の願いを叶えるために	555
久し振りの主役復活	478	無茶振りに応えるのもハンターの仕事	
この頃から俺の運命は決まっていたの			563

見つかるべき時に見つかるが候

571

第十四章：機械の体に熱いハート編

またも爺さんに迷惑かけられるぜ

582

アイルガーX・剛（ゴー）――

594

ネコバトル――

605

背中で語るネコ――

614

第十五章：これで終わりだハッピーエン

ド？ 編

武士道精神――

625

侵入、メラナト島――

634

何でも食べるのは元気の証拠♪

644

暗闇に浮かぶ二つの眼――

652

イトラの咆哮――

662

俺の手をとれ――

670

これもまた一つの幸せなのか？

677

登場人物設定3――

691

第終章：完結後の番外編

番外編：愛しの師匠、私を食べて♪

698

第一章：イトラが黒くない編

厄介なことを押し付けるなよ

酒とタバコの匂いの漂う店内に慣れた様子で入っていく。

そんな俺に気づき食事の手を止めて、憧れの眼差しを向けてくる者がいるがそんな事は俺の知ったことではないので足を止めることなくまっすぐにカウンターに進む。

「あら、おかえりなさいあーい。

やっぱりハターンさんには今回の依頼も簡単すぎたみたいね」

カウンター席からの受付嬢とは思えないだらけきった態度の出迎えすら俺にとってはどうでもいいことだ。

「俺より強いモンスターなどいない。

いるのは獲物だけだ」

「うーん、そんなところがカッコいいけどその無愛想な所を直さないとモテないわよ」

「ほっとけ」

俺はいつものように報酬の入った麻袋を受け取り、いつもの席に着き、いつものメニューを頼む。

これが俺の日常だ。

さて軽く説明すると俺の名はハターン・モンスター。

このトイダーヴァという街でハンターとして第一位の座にいる者だ。

それと信じられないだろうが俺はこれまで恐怖を感じたことがないのだ。

生まれついての特異体質なのか俺の目に映る生き物はすべて弱者にしか見えないからな。

そんな事だから新人研修の手伝い以外で俺が誰かと組むこともなく、つねに一人で狩りに出ている。

そしてそれは今日も変わることなくいつも通り食事を終えたらいつも通り帰って寝るといいういつも通りの行動を予定していたのだが、今日に限ってはいつもと違って珍し

くそれができなくなってしまうのだった。
うるさい馬鹿にみつかつてしまったからな。

「おーいハターン。

やっぱりここにいたかー♪」

お気楽な顔をした背の高い女が手を振りながら俺の席に近づいてくる。

まったく手を振るな、周りをよく見ろ、人のグラスを床に落とすんじゃない。

「また面倒事を持ってきたのか。

俺に近づくな」

「釣れないこと言うなよお。」

「可愛い弟子が会いに来てやったんだからさあ〜♪」

このアホ女、サラ・ムーイという名前なのだが俺が以前に新人研修をしたときに勝手に弟子として任されてしまったのだが、ずば抜けて優秀な成績でハンターになってわず

か一週間でリオレウスを狩るまでに成長した太刀使いとなったのです。弟子は卒業している。

もつとも俺のことを師匠だなんてこれっぽっちも思っていないから尊敬の念などは持つちやいないがな。

ちなみにこの街のハンターの中でナンバー2、俺の次に強いハンターだ。

「実はハターンに頼みがあつてきたんだよ」

「そんなこつたらろうと思つたよ。」

そして断る。

俺は食事を終えたら帰つて寝るから忙しいんだ」

こいつが来るのはいつも面倒事を押し付ける時だからな。近づきたくないのだ。

「それにしても相変わらず無愛想だなハターンは。」

もつとあたしみたいに笑顔を意識すればモテるんじゃないか？」

「俺は恋だの愛だのといったキャラついたものに興味はない。

ただのハンターであり続けることが出来ればそれでいいんだ」

「まあそれは置いといて、あたしは弟子を育てることになったんだ♪」

唐突だな。そしてやはり俺の話なんてこれっぽっちも聞いちやいない。

「だけど師匠になるってのはどうしればいいのかわからないからハターンに師匠のやり方を教わりにきたんだ」

「そんなもん知るか！

ひとり立ちしたお前に俺が教えることはないさっさと帰れ」

それでもサラは帰らない。

「ふっふっふ、実はハターンならそう言うだろうと思って連れてきているのだ！

さあ、出でよ我が弟子。

ハターンに色々と教えてもらえ♪」

サラの背後には俺ですら気配に気づかないほど存在感の薄い少女がいた。

そしてサラよ。教わると言っておきながらこれは俺に丸投げしてるんじゃないのか？

「あ、ああの、始めまして。

サラさんの弟子になったイトラ・ウボンガと言います。

その、よ、よろしくお願いします」

そう言うと再びサラの背後に隠れてしまう。

気弱な少女のようだな。

背中に背負っているのはライトボウガンのようなだがそれがヘヴィボウガンに見えてしまうくらい目の前の少女は小柄だった。

「おいサラ。

この子はいったいいくつだ。

俺もお前も背は高い方だがこの子は異常に小さく見えるんだが」

「おう、イトラは今年で10歳だ。

「本来ならまだまだ遊び盛りなんだろうけど両親が死んで引き取り手がいないからあたしが弟子として育ててるんだ」

……ああ、やつばこう来るか。

俺がお人好しだというのを知ってるから来たんだろうな。

確かにここで断るのは簡単だが、俺としても何かしてやらざるを得ない気持ちになつてくるな。

サラを見ると断れないだろう、と言いたげな顔で俺を見ている。なんかムカつく。

「まあ、いいさ。

それじゃあお前ら二人に教育してやるさ。

これでいいんだろ？」

「さっすがハターンだ。

あたしつてば考えなくイトラを引き取ったけど子ども気持ちとかには疎いからさ」

ああ、そうだろうさ。だからお前が俺の弟子だった時に俺は他の弟子育成をしていた
ハンターよりも何倍も苦勞かけられたからな。

卒業は早かったけど。

「あの、よろしくお願いしますハターンさん。

弱いですけどがんばります」

外見通り小さな声を精一杯出したのだろう、イトラはビクビクしながら俺の前に来
て言った。

そんなに俺は恐いかねえ。

いきなり同居よ!?

……俺は確かに元弟子のサラとその弟子のイトラの教育を引き受けたわけだ。
それはいい、確かに引き受けたんだし今更断るつもりはない。
だが、

「なんで二人とも俺の家に来るんだよ!？」

「仕方ねえーだろ。」

あたしの家は狭いし、子どもの教育には相応しくないものが大量にあるし、イトラは一文無しの宿無しなんだからハターンの家に泊まるというのが自然な流れだろ?」

「あ、あの、すいません! すいません!」

「謝るなよイトラ。」

どうせハターンはこの街一番のハンターだから無駄に広い家なんだし自分の家みた

いに使いなよ」

そう言つてサラは勝手にお茶を淹れてソファでくつろいでいる。

「俺は一人が好きなんだ！」

それにお前だつて金は腐るほどあるだろ！

この街で第二位のハンターなんだから!!」

「ふっふっふ、実はこんなこともあろうかとあたしの貯金は全て昨日全部食いつぶしたからーゼニーも残さずきれいさっぱり消えているのだー!!」

そう、サラは昔っから金の使い方が適当でその日暮らしをしているのだ。

視線をイトラに向けてみれば何やらもじもじとして申し訳なさそうに見えるのを見るのは少しばかり心が痛む。

「あー、もうわかつたよ。

好きに使いえ」

俺はつくづくお人好しだな。

いつも人のペースに巻き込まれちまう。

「空いてる部屋は好きに使っても構わないから。

それと俺は疲れてるからもう寝るぞ」

さつきもフラヒヤ山脈でラージヤンを討伐してきたばかりだからな。

もちろん奴も俺にとって雑魚なんだが雪山の寒さには少しばかり体力を奪われたからな。

「あ、あの……」

「なんだ？」

「まだ何かあるのか」

「い、いえ……なんでもありません。

「おやすみなさい……」

……だーもう、このイトラって子は本当にハンターになる気あるのか!?
もつと自己主張しろよ!

「俺も顔は恐いかもしれねえけど別にとつて食やしねえからよ。

言いたいことは言ってみろ」

サラ以外にも面倒を見た弟子はいたがその中にもイトラみたいな子はいたから扱い方には熟知している。

ようするに新しい環境に不安があつたりするだけだろうししっかりと言話を聞いてやれば問題ないはずだ。

「あの……一緒に寝てもいいですか?」

考えてみればこいつもまだ親に甘えたい年頃だろうしな。
ひとりで寝れないのかもしれない。

「イトラは一人で寝れないさびしがり屋みたいだからハターンが面倒見てくれ。」

あたしは寝相が悪いから潰しても悪いしき。

それじゃおやすみ。」

サラはこの家に住んだこともあるのでかつて使っていた部屋に戻っていく。
完全に俺任せのようだ。

「……仕方ない。」

俺で良ければ一緒に寝てやるさ。」

「………お願いします。」

しかしさつきからイトラは目を合わせてくれないな。

対人恐怖症なのかもしれない。これもこいつの育成における課題の一つだな。

「よっ(っ)らせっ(っ)」

俺はイトラを担ぎあげ自分の寝室に行き、イトラを寝かしつけてやる。

人恋しかったのか、それとも疲れていたのかイトラはすぐに寝てくれたので俺も安心して眠りにつく。

しかしサラにも師匠となるための修行までつけなきやいかんとは俺の日常はしばらくは狂ってしまうだろうな。

イトラ side

この人すごいあったかい。

パパとママがモンスターに殺されたあと親戚もいない私はあちこちをタライ回しにされてようやくサラ師匠にハンターの弟子として引き取ってもらえた。

でも師匠はいきなり恐そうな人に私のこと任せちゃうし、自分は一人で寝ちやうからこの人、師匠の師匠と二人つきりになつてどうなるか恐ろしかったけどとても暖かい人だった。

師匠の師匠つてすごいハンターらしいけど私でもこんな人になれるかな。

成り行きでハンターになつちやったけどいつかはすごいハンターになりたいな。

おやすみなさい、師匠の師匠♪

こういう得点なら悪くないな

朝、何やらよい香りがするので目を覚ますと昨夜俺の隣で寝ていたイトラが見当たらない。なかつた。

「おーい、イトラいるのか?」

台所に入ってみるとイトラが朝食の準備をしていた。

メニユーは目玉焼きにトーストという簡単なものだが家で人の作った食事に取りつけないとは思わなかったな。

「お、おはようございます。」

居候させていただくわけですし朝食くらいは、と思つて作つてみたんですがご迷惑だったでしょうか?」

「いや、それはありがたいがそこまで気を使わなくてもいいぞ。

そもそも弟子の健康管理も師匠の役目なのだからその辺はサラに任せれば……つて
そういうやあいつは駄目だったな」

以前あいつを弟子として育成していた時に料理も一緒に叩き込んだのだが何一つ身に付かなかったので俺の方が匙を投げたのだった。

「まあ、食事は俺が作るから気にするな」

「いえ、私も少しでも恩返しをしたいんです」

たった一晩で何があったのかは知らないが俺の眼を見てはつきりと自分の意見を言うイトラには昨日は気付かなかったがきちんとハンターの素質を持っていた。

そうしてるうちにサラも起きてきた。

「おはよ……お、今日はイトラが作ってくれたのか。

さすがはできた弟子だよ。」

あたしは料理はからつきしだからこれからはハターンとイトラに作ってもらえるからやっぱこの家にきて正解だったぜ♪」

「お前はそんなことのために俺の家に来たのかよ」

だが、すでに何度も言ってきたが効果のないことを俺は繰り返す言うほど酔狂じゃないんでな。

せつかくイトラが作ってくれたのだから食べるとするか。

「ところでイトラ。

お前の防具はどこにあるんだ？

昨日はライトボウガンを背負っていたが今と同じ服装だったけど、どこかに置いてあるのか？」

「……ありません。

お金もサラ師匠に出してもらった分で武器を買っただけで防具は変えませんでした」

「そうなんだよハターン。」

実は昨日あたしの金は全部飲み代に使っちゃまったからなく。

残りの所持金全部で武器は買ってやれたんだけど、防具は買えなかったから元師匠のハターンに出してもらおうと思ってたんだよ」

「おい！」

そんなところも俺任せかよ!!」

ふう、先が思いやられる。

イトラなんて自分が叱られたと思ったのか、今にも泣きそうだしあまり強くも言えないな。

「わかった。」

じゃあ俺の馴染みの鍛冶屋に俺が昔作ってた防具を仕立て直させるから。

それなら一時間もあればすぐにできるし、金もあまりかからない」

「さっすがハターンだぜ♪」

やっぱあたしにはどうしようもないことでもハターンならなんとかできるもんだな」

「……で、でもハターンさんは体が大きいですし私みたいなチビに合わせて造り直すなんてほとんど一から作るようなものなんじゃないんですか？」

「ああ、それなら大丈夫だ。

俺もイトラと同じくらいの際にハンターになったんだが昔は俺もチビだったからさ。

その頃の防具なら直すのも問題ないはずだ」

「そうだぜイトラ。

もつとハターンを頼れよ。

こいつお人好しだからいくらでも助けてくれるぞ」

馬鹿なこと言ってるんじゃないよ。

俺は確かにお人好しだが人に言われるのは嫌なんだよ。

それと食べ物口に入れてしゃべるな。

「まあいい、とりあえずこれを食べたなら鍛冶屋にでも行くとするか」

いやいや俺なんかに一目惚れ娘はいないでしょ

朝食を食べたあと俺達三人は俺の馴染みの鍛冶屋に向かうこととなった。

俺を置いて先先行こうとするサラはこうして見るとイトラよりも幼く見えるな。

イトラにしても俺に心を開いてくれたのは嬉しいんだがサラよりも俺にべったりくっついてくるし。

俺の日常では今日も狩りに出かけて怪我ひとつなく瞬殺して今日の夜には酒場で飲んで食って帰って寝るつもりだったのにこりや本当にこいつらを追い出さない限り俺の日常は遠のいてしまうな。

はあ、不幸だ。

「お、見えてきたぞ。

あの店が俺の馴染みの鍛冶屋だ」

街の外れに一軒だけポツンと建っている寂しい場所だが周りに何も無いこともあり、店はかなり広さを持っていた。

この店の雰囲気はあまり好きじゃないから今回みたいな理由でもなければ来たくはなかつたんだがな。

「へいらっしやい！」

これはこれは珍しいハターン坊やか。

何か入り用かのう？」

店から出てきたこの男は店主のトン・カンジャという見た目は薄汚い爺さんだがこの街だけでなくこの世界に広く名の知れた天才鍛冶屋なのだ。

俺の駆け出しの頃から色々世話になってるもんだから呼び方はいつまでも『坊や』なんだがな。

別に俺は気にしてないが。

「久しいなトン爺さん。

今日は俺の元弟子の弟子の防具の依頼に来たんだ。

俺の昔使ってた防具を持ってきたからこいつ用に仕立て直してくれ」

「ほうほうほう、しかしワシもそろそろ引退しようと思っておったのでな。今回の仕事はワシの孫に任せてもよいかのう？」

俺の昔の防具を受け取りながらをトン爺さんは店の奥に向かつていった。

「おーい、チカ。」

お前に初のお客さんがきたぞーい」

「おい、俺はまだあんたの孫に任せるとは言っていないぞ。」

信頼できるのか？」

だが、俺の言葉を見殺してトン爺さんは店の奥に進んでいく。

仕方がないので俺達三人もついて行くのだが店内はまだ昼間だということのにかなり薄暗かった。

「なあ、ハターン。」

あたし飽きたから遊んできていいか？」

「お前はもつと人の師匠になることのなんたるかを学べ。」

俺は本来お前にもイトラにも手を貸す必要はこれっぽっちもないんだぞ！」

「私なんかのせいでごめんなさい……」

ああもうイトラもそんなに落ち込むな。

俺はサラの丸投げなやり方に文句言っただけなんだから。

「ほらイトラよく見てみる。」

ハターンはこの顔の時は慌ててるんだ。

お前が泣くのを見て良心にチクチクきてる証拠だぞ♪」

くう、俺はポーカーフェイスには自信があるのだが、サラみたいにごく一部の人間には微妙な違いを見抜かれてしまうから俺は人づき合いが嫌いなんだよ。

しばらくそうして無駄話をしながら店の中を歩いて行くと漸くトン爺さんはひとつ

だけ丈夫そうな金属製の扉の前で止まった。

「おーい、チカ、寝てるのか？」

お前さんにお客さんじゃぞ〜」

爺さんはドアをガンガンと叩くが返事はない。

「トン爺さんもういいさ。

いつも通りあんたが仕事を引き受けてくれないか」

「そうはいかん！

ワシの孫は最近までジャンボ村にて知り合いの鍛冶屋のところ修行に出ているが、こつちに帰ってきてからずっと寝て過ごしてるぐうたら娘なんじゃよ」

「実に共感できるな。

むしろ何者にも邪魔されず己のやりたいようにやってるなんて俺からしたら羨ましい限りだ」

俺は自分のやりたいように生きてるつもりなんだが周りにはサラミみたいに俺の日常をかき乱す連中がわんさかいるからな。

俺がそんなことを考えていると少しだけ鋼鉄製の扉が開いた。

「爺ちゃん、ここに来るお客さんってのはもしかしてトイダーヴァの街で一番のハンターのハターンさんか？」

ドアチェーンが掛かっているので扉は完全に開かず、声の主は姿を出さずに眠そうな声で聞いてくる。

「おお、そうじゃよ。」

ワシに依頼を出せるハンターなんぞハターン坊やくらいしかおらんからもう」

そうなのだ。

この店が客が少ないのはこの店の立地の悪さと知名度の低さだけでなく金がものすごいからなのだ。

職人氣質のトン爺さんは気に入らない奴からは億単位の金を巻き上げるからな。

……別に俺は元弟子の弟子の命を守るための防具を安物で揃えるのが俺の関係者に相応しくないからここに来ただけだ！

決して俺はお人好しではない……と思いたい。

「あー、俺がハターンだ。

あんたはトン爺さんの孫らしいが寝てるところ起こして悪かったな。

俺らのことは気にせずゆっくりに寝ててくれ」

客が言うセリフじゃないかもしれないが俺も熟睡してるところを起こされる辛さはよく知ってるからな。

そうしてトン爺さんを説得して爺さんにイトラの防具を作ってもらえばそれで今日の予定は終了だ。

ガチャガチャガチャガチャ

何やら物凄い勢いで扉のチェーンが外されていく。

一対いくつつけてたんだよ。

ガチャ

「はじめましてハターンさん。

トン・カンジヤの孫のチカ・カンジヤと申します。

今日はあなたの武具を精一杯作らせてもらいます」

さつきまでの眠そうな声はどうしたのか、まだ見たところ18歳くらいの女の子チカは顔を真っ赤にして出てきた。

「あんた寝てたんだろ？」

今回の依頼はトン爺さんに任せるからこのまま寝ても良かったんだぞ」

チカはさつきまで寝ていたために寝ぐせがひどいことになっているがそんな事には構わず俺の依頼を受けたいと言ってきた。

そこまでして俺の依頼を受けるなんてどうしたんだろいな。

「ハターン、ちょっといいか？」

サラが小声で俺に呼びかけてくる。

「この子はお前に惚れてるんだよ。」

「お前の名前はこの世界のどこに行ってもハンターやそれに関連する人たちで知らない人はいないくらいの『最強』のハンターなんだから」

そんな馬鹿な。

俺はこの子とは初対面だし、会ってすぐに恋に落ちるなんてことはないだろう。

サラの発言は無視だな。

「以前からハターンさんのお噂は聞いていましたが貴方様の武具の製作に携われるとはこのチカ、感激の極みでしょう！」

「あー、それなんだが俺の武具じゃなくてこつちの子の防具を頼みたいんだ」

俺はイトラを前に出すと途端にチカの表情が消えていく。

どうしたんだ？

サラは修羅場だ修羅場だ♪と楽しそうに言ってるがどういう意味なんだろうな。

ようやく武具製作開始か

「で、この子誰？」

ハターンさんにとってどんな関係の子？」

何やら冷めた目で見るチカにイトラは俺の後ろに隠れて出てこない。

「この子は俺の元弟子の弟子だ。

気が弱いんだからあんまり睨むなよな」

いまだに俺の後ろで震えるイトラ。

ここで助けてあげるのは師匠の仕事なんだろうが、その肝心の師匠は店の中の物をいじって遊んでいるのでこちらの様子に気づいた様子はない。

まったくあのバカ弟子め。

「……わかりました。

職人としてハターンさんの依頼を引き受けましょう」

「いや、別にトン爺さんでもいいし、嫌なら断っても構わないぞ」

俺としては嫌々仕事を引き受けてもらっても困るから言ったのだがチカの眼に宿る不思議な光はいつたいなんなんだろうな。

「ワシはチカにやつてもらいたいからハターン坊やもできればチカに依頼を出してくれ」

「申し訳ありませんハターンさん。」

「どうかこの私に仕事を受けさせてください」

「そこまで言うならやらせてみるかな。」

「イトラもこういう人種に慣れる練習と思えば悪くないし。」

「それじゃあ任せるよ。」

俺が昔使ってた防具をこの娘イトラに合わせて作り直してやってくれ」

こうしてチカとトン爺さん。それにイトラはさっきまでチカが寝ていた部屋に入っ
て行った。

この部屋工房だったのか。

イトラ side

うう、なんかこの女の人怖いよお。

ハターンさんは顔は恐いけどとっても優しい人なのにこの人は笑顔なのに恐い。

「おい、チカ。

ハターン坊やから渡された防具なんだがこいつは『暗銀』の鎧じやのう」

暗銀ってなんだろう？

「へー、駆け出しの頃からそんな防具を使ってたなんてさすがはハターンさんだね。でもそれを女の子用にするとなるとずいぶんといじることになりそうだよ。でもお爺ちゃんは手を出さないでね。これは私の受けた仕事なんだから」

「構わんよ。

「じゃあ採寸なども必要じゃろうし、ワシは部屋の外で待つておるから終わったら呼んでくれ」

「あ、お爺さん出ていかないで、私をこの人と二人きりにしないで。」

「ただどお爺さんは出て行ってしまった。」

「気まずい沈黙。チカさんは冷気を感じそうな冷たい目でずっと見てくる。」

「……君はハターンさんをどう思ってるの?」

「サイズを測りながらチカさんが聞いてくる。」

「その……とつても優しい人だと思えます。

いつもぶすつとしてますけどとつても私の事を心配してくれてますし」

どうしたんだろう？

チカさんは急に震えだしたけど寒いのかな？

「そう……」

さて、採寸は終わったわ、あと一時間もあれば終わるからあなたも部屋の外に出てもいいわよ」

やっぱりこの人怖い。

早くハターンさんとサラ師匠の側にいよう。

部屋を出るときチカさんは恐ろしい声で笑っていたけど私は振り向かなかった。

チカ s i d e

まったくあのチビジャリがあ！

あの！最強の名をほしいままに生ける伝説ハターンさんにここまで世話焼いてもらうなんて何様なの!?

それにサラとか言ったかしら、あの背の高いハンターの女も元弟子だかなんだか知らないけどなれなれしいのよ！

いつかぶちっ殺してやろうかしら!!

……ふう、私ったら頭に血が上ってたわね。

『仕事はきつちり片付けるのがプロというもの』。

と、ハターンさん本人に非公式のファンクラブで作られてる『ハターン様名言集』の中にも書いてあったし、私もプロとしての仕事は果たさなくちゃね。

こうしてまじめに仕事をしていれば私の腕を見込んでハターンさんが何度も来てくれるようになるでしょうし♪

……お爺ちゃんは邪魔ね。

そろそろお迎えが来ないかしら。

来ないならこちらから呼んであげてもいいんだけどね。

うふふふふふふふふふふふふふふ

ハターン side

トン爺さんが出てきたあとしばらくしてイトラが部屋を出てきた。

勢いよく飛び出てくるもんだから転んでしまったのでここでもサラに代わって俺が起こしてあげた。

「ここは物がゴチャゴチャして危ないから走ったりするなよ。」

それにしてももう採寸は終わったのか、これなら今日中に武具も完成して狩りに行けるかもしれないな」

「で、でも私はハンターとしての知識は何もないですし、無理ですよお」

涙目のイトラを見ると多少心が痛むがこれも俺流の修行方法なのだ。

極限状況だと人間は何か吹っ切れるからな。

サラの場合は何も考えずに直感だけで動くハンターだから俺の修行は必要なかったみたいだが。

「泣くな。

ハンターなら強くなるんだ。

俺が絶対に守ってやるから心配すんなって」

俺はイトラを抱き上げその背中をさすってやると落ち着いてきたのか目をとろんとさせながら俺を見つめる。

「なんじゃその子はまだ狩りに出たことがないのか。

ならばワシが武器を強化してやろうか？」

「それはいい考えだなトン爺さん。

この子の武器は初心者用のしょぼい武器だからさ。

せつかくだし爺さんお馴染みのありえないくらい強化をしてくれよ」

そう言う俺と一緒に持ってきていたイトラのライトボウガンを渡す。

初心者用の『猟筒』だ。

「うむ、確かに。」

ではチカが武器を完成させるのと合わせて強化を終えて見せよう」

そうしてトン爺さんは自分の部屋へと向かっていった。

これ、やりすぎじゃないだろうか？

工房に籠っていたチカとトン爺さんは二人とも同時に出てきた。

チカの方は白い布のかかった台車を押して、トン爺さんの方は立派な箱を担いでだ。

「まずは私からお見せしましょう」

チカは台車にかかっていた布をまくり、造り上げた防具をお披露目する。

「ハターンさんの暗銀の鎧は男性用だったのでこちらはイトラちゃんに合わせて貧金の鎧にしました。」

「もちろん多少の重量はありますが動きやすさと防御力を追及してありますので着てしまえば問題なく動けるはずですよ」

まったく別の防具になってしまったが見ただけでわかる。

こいつはまさに一流の職人の技術が使われた逸品だった。

「なあ、ハターン。」

これってお前の暗銀シリーズが元になってるとは思えないな。

素材も形状も違うのに作り直すことでこれに仕上げるなんてすごくねーか？」

「ああ、確かにこれはすごいな。」

正直サイズを合わせるだけで終わるのかと思つたらここまで最初と違う防具に作り直すなんてさすがはトン爺さんの孫だな。

これからも鼻屑にさせてもらうよ」

物の価値には無頓着のサラでさえ驚くほど俺の渡した暗銀の鎧は別の鎧へと生まれ変わっていた。

これは凄過ぎるな。

「いえ、ありがとうございます♪」

偉大なる鍛冶職人トン・カンジヤの孫としてこれ位できて当然ですから。

(おっしやー！)

ハターンさんからお墨付きをもらえるなんてこれはもう私のこと好きなんじゃない？好きなんじゃない？好きなんじゃない？好きなんじゃない？

でも焦つたらだめよ。

でも最後に幸せを手にするのは私なんだから、あのチビジャリとアホ女なんかに負けないようにしなくちゃね。

それさえ済めば結婚に向けて明るい未来が開けそうだわ♪」

一見すると笑顔のようだがその裏で何か考えてるんだろうな。

やっぱ褒めたのはよくなかったかもな。

「さて、では次はワシじやのう。

イトラちゃんのためにこのワシが老骨に鞭打って作った最高の一品を見るがいい」

トン爺さんが箱を開けると中には分解された真白なライトボウガンが入っていた。

「わあ、きれい……」

イトラはその輝きに目を奪われているが俺はこの武器の素材に驚いた。

「おい、トン爺さん。

これってミラルーツの素材を使って作る最強のライトボウガン『阿武祖龍弩』じゃねえのか!？」

ボウガンの強化つてのは確かフレームや弦の丈夫さとかスコープやロングバレルを取り付けるといった簡単なものだと思っていたが最初に渡した『猟筒』を元にこれを作るとはとほさすがの俺も驚きだな。

「ふふん、このワシがただの強化で終わらせる訳がなからう。

しかもこのボウガンは口径を通常のものよりも大きくしたため正確に言えば『阿武祖龍弩・アハトアハト』と呼ぶのが正しいのう」

自慢気に言うだけあって、このボウガンはよく見てみれば美しさだけでなく禍々しさも持っていた。

「もちろんワシの特別製じゃから10歳のイトラちゃんにも持ち運べるし、全弾種の速射機能と武器そのものに『連射』スキルをつけている。

おまけに反動を独自の技術で零にしたから片手でも撃ち続けることが可能じゃ！」

まったくチカにも驚いたがこの爺さんはさらに上をいくな。

しかし初心者のイトラには安全のためにもこれ位の装備がちょうどいいのかもしれないな。

俺流弟子育成方法

トン爺さんの店でイトラの防具の調整を済ませ、おまけに武器もとんでもなく強化してもらったので昼食と適当な依頼の受注のために俺達三人はギルドへと向かった。

「二人ともこのあとは大物討伐に行くんだからしっかり食つとけよ」

サラは言うまでもなくメニューを端から頼んで行ってるがイトラはなかなか注文が決まらずメニューとにらめっこしている。

「ちなみにこれは俺の奢りではなく、これから出る狩りの儲けから払ってもらうからな」

「なんだよ、ハターンのケチ！

アンポンタンのおたんこなす！」

「で、でも私は役に立てないと思います……」

「誰もイトラがいきなり役に立つなんざ思ってたないさ。

俺の教え方ではてつとり早く強くなるためには危険を察知するためのセンサーとして恐怖を飼いならず必要があると考え、弟子にとつた連中には毎回やってる修行でもある。

決して怪我ひとつさせないから頑張ってみろ」

もともと俺はモンスターごときに恐怖を感じるほど弱い心をしてないからこの修行を自分にはしてないんだがな。

「は、はい、頑張ります。

それと……あの……ハターンさん。

ハターンさんのことをハターン師匠って呼んでもいいですか？」

来たか……

突然の展開だが俺はこの展開を予想していた。

サラは相変わらず師匠らしくあろうという考えはないし、俺がこのままなし崩しで師

匠になるんじゃないかと考えていたがその時がもう来ることになるとはな。
やれやれだぜ。

「……まあ、俺の家にやってきた段階でこうなるのはわかってたし、もう俺もお前を弟子として扱ってもいいと思う。

が、それでもお前の現師匠はサラなのだから俺がお前の師匠になることはできない」

きつぱりとここで断っておかないとトラブルの元だからな。

俺のアホ弟子もいい加減人としても成長しなければ一生独身でいそうだし、弟子を育てることで人間的に成長してほしいものだ。

イトラだけでなくサラにも成長してもらうためには俺がイトラの師匠になることは出来ないのだ。

つておい、何だサラ？ その不適な笑みは。

「ふっふっふ、ハターンはそう言うと思ってたぞ」

先ほどから食事に集中していたサラが顔をあげて得意気に言う。

「つーかあれだけ頼んだ料理をもう全部食べ終わったのか。」

「実はさつき料理を受け取りに行った時に、あたしとイトラの師弟関係の書類をちよいちよいつと書き直してもらってきたからイトラはハターンの弟子としてギルドに登録しといたのだ♪」

なんとまあ、勝手なことをのたまう弟子に呆れてしまい俺としたことが少しの間呆然としてしまった。

「おい、何勝手なことやってるんだ！」

と、怒鳴ったところで今更なんだろうな。

ギルドの書類をいじるなんてサラには出来ないだろうし……ああ、またあのギルドマスターのイタズラだな。

俺の嫌がることをすることに長けた奴だからな。

「だからイトラはあたしの弟子を卒業し、ハターンの弟子となったわけだ。」

「これからよろしく頼むな♪」

俺はもう何も言うこともできず机に突っ伏して食事も中断してしまった。

「あ、あの大丈夫ですか？」

「やっぱりご迷惑でいしたら私出ていきますから」

「そう言いながらもイトラは今にも泣きそうになって俺にすがりついてくる。

……仕方無いか。」

「わかったそれじゃ俺が師匠になってやるよ」

「ほら見てみろイトラ。」

「ハターンはこうやって強く言えばいつでも人助けをしてくれるんだぜ」

「これが俺の弱いところなんだよなあ、はあ……もうサラの事は諦めよう。

俺の弟子の中で一番腕はいいのに、どうしてこう俺に迷惑をかけるのか。」

他の弟子も人格破綻者ばかりだがそれでもサラと違って弟子を卒業してからは俺に迷惑をかけることはないというのに。

なし崩し的に俺がイトラを弟子として認めたとところで店の奥から一人の女性が近づいてきた。

「やつぱりいゝ、ハターン君はあゝ、イトラちゃんを弟子にしたのねえゝ♪」

「あんたも俺の嫌がることばかりしてくれるな。」

トイダーヴアの街のギルドマスター、マル・ギスタードさんよお」

この年齢不詳の幼い外見をした女性がこの街のギルドマスターなのだ。

「やつほーマルちゃん。」

「キョウキョウリン」

「あらあゝサラちゃん。」

その様子だとお、無事に丸めこんだみたいねえ♪」

この二人は特に仲がいいもんだからさらさらは無茶やつてもこの街のナンバー2のハンターをしてられるのだ。

ぶつちやけサラは飛竜の子どもが可愛いからと言って街に連れ帰ったり、狩猟が禁止されてる場所まで行って狩りをしたり、気に食わないという理由で他のハンターを病院送りにしたりという問題を数多く起こしてるからギルドに目をつけられているのだがそれを守っているのがギルドマスターのマルなのだ。

出不精で滅多に人前に出てこないのだが出てくるときはサラ関連の揉め事か俺に嫌がらせをするためだけという変わり者なんだがな。

「ハターン君、それじゃ、私が意地悪みたいじゃないい。」

「これが私のお、ハターン君に対する愛なのよお♪」

「それがうつとうしいと言ってるんだ。」

「それでこれ以上俺に厄介事を押し付けに来たのか！」

「まあ、そうねえ。」

それはさておきい。

実は今ハターン君にい。

王家からの依頼が来てるからあ、行ってきてほしいのお。」

こいつの頼み事などすぐに断ろうと思っていたが渡された依頼書を見て考えは変わった。

「なるほど……これは確かに面白いかもしれないな」

マルの奴もたまにはまともな物を持つてくるじゃないか。

「おいハターン何の依頼なんだそれ？」

今度はデザートを注文していたサラが聞いてくる。

相変わらず口の周りをべたべたと汚す子どもっぽい奴だ。

「ああ、場所はシュレイド城。

討伐対象はミラボレアスだ」

サラはどんなモンスタ―だっけ？と首をかしげているがイトラはその名を聞いたただけで震えている。

俺が新たな弟子に課す最初の試練としてはこんなものでいいだろう。

イトラVSミラボレアス 上

暗雲漂う不気味な場所、シユレイド城。

以前にもミラボレアスの討伐依頼を受けたことはあったが俺が最初にミラボレアスを狩った時は11歳の時だ。

大剣で行ったのだが筋力がまだなかったので攻撃をはじかれまくったため狩るのに苦労したのを覚えている。

二回目に挑んだ時は13歳だったからある程度筋力もついて背も伸びてきたときだが大剣は向いてないと思つたからヘヴィボウガンで行つたんだつたな。

途中で弾切れになってしまいボウガンを鈍器として使つたら討伐後にはボウガンが壊れてしまったのも今思えばいい思い出だな。

……そしてそれからはミラバルカンやミラルーツの依頼も来るようになったがそれらも大剣で瞬殺できるようになったんだよな。

いきなり弟子にそれを期待してはいないが、時間内での討伐くらいは成し遂げてほし

いものだ。

「ハターン師匠、本当に私一人で戦うんですか？」

馬車の中からずっと俺に抱きついて離れないイトラはここに来てもまだしがみついている。

鎧の上からしがみついて疲れないのかね。

「ほんつとハターンは無茶ばかりすつからな。

あたしも弟子だった時は皆さん苦勞したものさ」

実際に苦勞したのは俺の方だな。

思い出すだけでもたくさんあるが、サラのやつは突然、腹が減ったと言って激昂したラージャン目の前で肉焼きを始めたこともあったんだよな。

あれにはさすがの俺も驚いたな。

俺が助けに入らなければ確実に死んでいたというのに、その出来事すら本人には楽しい思い出ししか認識してないのだ。

だからサラが弟子の時は最低限の基礎を叩き込んだら一週間でリオレウスを狩れるようになったので半ば強引に弟子を卒業させたわけだな。

つと、話が長くなったが今の弟子のイトラのことをよく見てやらんといかんな。

「さあ、イトラ。

もうすぐミラボレアスが降りてくるから上手い事やれよ。

ボウガンの引き金の引き方と弾のリロードの仕方さえ覚えればあとは体が勝手に動く」

「ハターン師匠」。

助けて〜！」

だが、ここで俺が出るわけにはいかないな。

なんせこれまでの俺の弟子たちはみんなこれ位の試練を乗り越えてきたのだから。

ある時は目隠しをしてクシヤルダオラを討伐させたり、またある時は両足を縛った状態でガノトトス相手に水中戦をさせたりとこれまでの俺の弟子たちはそうした修行を乗り越えて各地で一人前のハンターとして活躍しているのだ。

「あたしの時は片手だけでテオ・テスカトルの討伐だったな。

太刀使いが片手のみつてのはきつかったけどいい思い出だぜ♪

それを思えばイトラは武器も防具も最高レベルの物を揃えての狩りならミラボレアス相手でもいけるだろ♪」

「うむ、その通りだ。

イトラはこれで何かが吹っ切れるはずだ」

イトラside

恐い怖い怖い！

どうして私はこんな所にいるんだろ？

目の前には私なんか比べものにならないくらい大きな体の伝説の災厄ミラボレアスがいるけどこれって夢だよな。

夢って思いたいんだけど。

……………でも現実なんだよね。

やっぱり戦うしかないんだよね。

『J a o !』

うう、怖い……でも師匠の弟子として絶対に狩ってみせるんだから！

「ハターン・モンスータの弟子イトラ・ウボンガ！

正々堂々とあなたを倒して見せます！」

『グルルウウアアアアー!』

「うわああ!」

今度は回避も間に合わないと思つて、持っていた小タル爆弾を起爆させてその爆風でなんとか避けれた。

おかげで軽い火傷しちやっただけどこれくらい我慢できるもん。

ミラボレアスは圧倒的なまでに強いから私は恐怖のあまり、回避するのも体が震えちやつて紙一重になつちやうし、反撃が出来ない。

それに攻撃を避けていると言つても風圧だけで私の気力を一気に吹き飛ばすほど恐ろしいからだんだんと肌や鎧に浅い傷が増えていく。

ああ、私は何でこんな所で自然災害にたとえられるほどの怪物を一人で相手にしてるんだらう……

もしかしたらここで次の攻撃を避けなかつたら楽になれるかなあ……

パパもママもみんな殺されちゃったし、ここで私が死んでも悲しんでくれる人なんていないかもなあ……

そんな負の思考に囚われながら、ミラボレアスの攻撃を避けるのをやめそうになったところで思いだした。

自分が死んだらハターン師匠は悲しむんじゃないかと。

ようやく思考の渦から戻ってきた私はミラボレアスの懐深くに潜り込み、今度は震えることもなくそのブレスを、その爪を、尻尾を難なく回避できるようになってきた。

「くう、私はハターンさんに心を救われたのに何も恩返しできてない。

このまま死ぬわけにはいかない！」

今までの臆病なだけだった私は何か吹っ切れたような気がした。

あれ？なんかこれって楽しいのかもしれない。

というか何で私はこんな大きいだけのトカゲなんかを怖がってたんだろう？

「あははははは〜♪」

そこで私は初めて攻撃に転じることが出来た。

ハターン side

「お、これはイトラが何かを吹っ切れたようだな」

俺とサラは離れた場所から闘いの様子を見ていたのだが、最初は避けるだけで精一杯だったイトラの体から気迫を感じるようになり、先ほどまでの体の震えも止まったみたいだ。

「おいハターン。」

これって本当にイトラがミラボレアスの討伐を成し遂げちまいそうだな」

同じく隣でこの様子を観戦していたサラが菓子をつまみながら話しかけてくる。

「当然だ。

俺は最初からあの子の中のハンターとしての素質を見抜いていたからな。

それでもなければいくらギルドマスターの無茶だとしても弟子にしたりはしないさ」

俺はできると思ってたからこそイトラに一人でミラボレアスの討伐をさせているのだ。

「闘いはそろそろ決着のようだぞ」

俺がそう言うのとサラも再び視線をイトラに向ける。

吹っ切れたイトラの攻撃は最初はミラボレアスに一発も当たらなかったが、段々とコツを覚えたイトラはすぐにボウガンの命中精度を上げていく。

元々がミラボレアスの上位種のミラルーツの素材を使い、天才鍛冶屋のトン爺さんが改良しただけあって、『阿武祖龍弩・アハトアハト』はミラボレアスの硬い甲殻を削り飛ばしていく。

「あはははははは〜」

「うふふふふ〜」

イトラは一見、乱射してるだけのようにも見えるがその弾は最初と違って全弾命中するようになり、ついにはミラボレアスの翼を根本から千切り飛ばし、その巨体を地にひれ伏させる。

「私はハターン・モンスータの弟子、イトラ・ウボンガ。

あなたはここで私に殺されてね♪」

イトラはそう言うのと地面に落ちてもがいていたミラボレアスの頭部に連射した。

「ふう、ようやく終了か。

イトラも成長したことだしこれからが楽しみだな」

これであの弱気な性格も良くなっただろう。

だが、サラとは別の意味で厄介な性格になってしまったような気もするが本当に大丈夫なんだろうか？。

「あく腹減ったー。

なんか久しぶりにギルドのメニュー全制覇したい気分だな♪」

サラはギルドへの狩猟終了の合図の信号弾を撃ち上げながらそう言ってきた。

もしかしてこいつは俺の料理が食いたいがために料理を一切覚えなかつたんじゃないだろうか。

「そうだな。

イトラの初めての狩りの成功のお祝いにいい物食わしてやるか」

こちらに気づいて手を振ってくるイトラに向かって歩きながら俺はお祝いの料理は何にするか考えるのだった。

登場人物の設定

ハターン・モンスター

防具は『プロミウス』シリーズ。発動スキル『物理攻撃無効化』。

炎や電撃、毒などの状態異常は通るが、そもそも最強のハンターなのでこれから先モンスターへの攻撃を受ける描写があるかどうかは不明。

武器は何でも使えるが基本的に『竜骨砕き』という切れ味は皆無の大剣を使う。

性格は人嫌いの無愛想に見えて実は面倒見のいいお人好し。

頼まれると断れず、なし崩し的に元弟子のサラとその弟子だったイトラの面倒を見ることになった。

ミナガルデヤドンドルマに匹敵するくらいの大きさのトイヴァーダの街で一番のハンター。

過去に『キリン娘愛好会』の会長をしていた時期もあるがそれは隠しているので知っている人間はわずか。

寡黙でイカす無表情キャラというのもキャラ作りの一環である。

身長195cm 27歳 外見イメージは『灼眼のシャナ』のサーレ・ハビヒツブルグ

サラ・ムーイ

ハターンの元弟子で最優秀な成績で弟子を卒業したあとトイダーヴァの街でナンバー2のハンターになる。

性格は単純で狩り以外は何もできないので家はゴミ屋敷の汚れ放題だった。

現在はノリで全財産全てを一晚で食いつぶしてしまい一文無しとなりハターンの家泊めてもらっている。

基本、面倒事は人任せで元師匠だったハターンも直そうとはしたがどうしようもできずに匙を投げた。

一応書類上はイトラの師匠だったがほとんどハターンに任せるうちにギルドマスターのマルの策謀によりハターンに丸投げとなる。

太刀使いで『鬼哭斬破刀・真打』を愛用。防具は『レウスX』シリーズ。

とにかく勘で動いて毎回上手い事やってしまえる天才ハンター。

とんでもない幸運の持ち主でもある。

身長179cm 22歳 外見イメージは『クイーンズブレイド』のリストイ

イトラ・ウボンガ

普通の農家の家に生まれ、両親と旅行中にモンスターに襲われて頼れる人間がまとめて死んでしまい、悪人に家や土地などわずかに残った財産もみんな奪われてしまった所をサラに拾われてハンターを目指すことになる。

農家の生まれのため体力筋力などは人並み以上。

実質この物語のヒロイン的存在でとにかく気弱なため初対面の人と目を見て話すことができない。

孤独だった自分に安心感くれたハターンにだんだんと好意を抱いて少しずつ心を開いて行く。

そして結局ハターンの弟子になってしまう。

武器は『阿武祖龍弩・アハトアハト』。武器そのものに『連射』スキルと全弾種速射機能がついており、おまけに反動を零にする特別な構造をしているため、地面に固定する必要もなく、片手で持って乱射することも可能。

防具はハターンが駆け出しの頃使っていた『暗銀』シリーズをいじって作り直した『貧金』シリーズ。

発動スキルは『属性攻撃無効』。

モンハンの世界に魔法はないのでこの物語では魔法耐性≡属性耐性という風に変換した。

身長140cm 10歳 外見イメージは『ティアーズ・トウ・ティアラ』のラストイ

トン・カンジャ

天才鍛冶屋として名前だけ知られているが世間にあまり出ないので店の場所を知る者はごくわずか。

孫のチカと二人暮らしでのんびりと暮らしている。

気に行った相手には多少安くするがそれでも法外な金を巻き上げるので鍛冶屋の中では嫌ってる人も多い。

身長155cm、60歳、外見イメージは『デモンズソウル』のボールドウィン

チカ・カンジャ

ジャンボ村に住む、祖父の知り合いの鍛冶屋のところに修行に出ていたがその時たまにたまラオシャンロンが襲って来たのだが、それを討伐に来たハターンに命を助けられ惚れたてしまい、祖父が暮らすトイダーヴァの街にハターンが住んでいるという話を聞き帰ってきた。

意外と恥ずかしがり屋なのでトイダーヴァの街に帰ってきてもすぐに会いに行くことができず、ハターンが来るのを待っていた。

ハターンに惚れているため、イトラやサラみたいなハターンの周りの女を全て憎んでいる。

身長154cm、18歳、外見イメージは『狂乱家族日記』の乱崎千花

マル・ギスタード

トイダーヴァの街のギルドマスター。

ハターンのことは好きだがそれ以上にサラのことが大好きなので毎度毎度出てくるたびにハターンをからかうために問題を起こす。もしくは問題を大きくする。しかし本人に悪意はない。

間延びした口調で悪意なく人に迷惑をかける。たまに意図的に。

そして迷惑をかけられる苦労人なのが毎回毎回主人公ということになる。

種族は人間のようなだが中年のハンターが駆け出しの頃から姿が変わらないという証言をしていることから妖怪説もある。

身長124cm、年齢不詳、外見イメージは『刀語』の彼我木輪廻

ディオシキ・ブラザキ

ハターンの元弟子で弟子あだった時は割と普通の可愛い女の子だったがハターンの修行により変人へと目覚める。

トイダーヴァから少し離れた場所にあるムーラ村という村専属のハンターをやっていたが爆弾専用アイテムボックスに火属性の剣をうっかり投げ込んでしまい村ひとつ全焼させてしまったのでその損害賠償に有り金全部を失ってハターンの家に厄介にな

る。

武器は一応双剣をメインに使っているが何でも使えるオールマイティ。

匂いフェチでハターンの匂いが大好きであり、次にサラのに多いが好きなため二人のことも大好き。

ハターンの弟子だった時（ハターンが13歳、ディオシキが10歳の時）に動物を見ると殺したくなってしまいう衝動までも身につけてしまいその後ハターンの苦勞により牙獣種にのみ發揮されるようになる。

暗器使いなので武器は一切身につけていないように見えて体中に隠し持っている。

防具は基本的にキリン×シリーズの縞パンバージュンで武器は決まっていない。

ちなみにサラが弟子の時にも一度ハターンに会いに来たのでその時にサラと仲良くなり女と女の関係になる。

それとお気づきの人もいるかもしれませんが名前の元の一つに零崎一賊を混ぜてますが女なのに「ディオシキ」にしたのは「ディオオリ」という名前は語呂が悪く、気に入らなかったためであり、わざとです。

身長173cm、25歳、外見イメージは『ぶよぶよ』のルルー

ルナ・ギドイト

かつてハターンが『キリン娘愛好会』を立ち上げる時にもっとも尽力した女ハンター。ハターンが愛好会を抜けたのと同時にルナ自身も抜けてギルドナイトとしての仕事一筋で働くことで段々と出世していく。

『キリン娘愛好会』に入ったのもレズなので自分がキリン娘とにやんにやんしたいがためでキリン装備を自分が着たいからではない。

ギルドの中での地位は意外にも高く、千人長にまで出世し、部下からの信頼も厚い。厚すぎて何人か可愛い子を食べていたりもするがその辺の描写は割愛♪

武器はライト、ヘヴィ、ガンスの三種ならどれでも使える。

装備、メイドシリーズ 武器、夜砲「黒風」

身長180cm、26歳、外見イメージは『化物語』の神原駿河

第二章：イトラが黒い小話編

気弱な性格を直すのには成功したが

あー、何と言うか俺は今、イトラがミラボレアスを討伐したあと返り血で体中真っ赤に染まってしまっていたので一人で武器の整備ができるようにするために防具を脱がして手入れの仕方を教えようとしたのさ。

しかしイトラは防具の下も血でべったりだったのでその前にタオルを渡してまずは体を拭くように言ったのだが、その血を拭う作業を俺にせがんできたのだ。

こいつつてもつとこう奥ゆかしい、加害者妄想の持ち主じゃなかったっけ？

「ハターン師匠♪」

私は師匠に体を拭いてほしいんですけどいいですか？」

「イトラ、自分で出来ることは自分でするのが俺の弟子たる者の条件だ。

それにまだ幼いとはいえ、女の子が男に肌をさらすのはよくない」

性格もずいぶんと明るくなったようだが、ここで俺に頼ってくるようではまだまだだな。

「ハターン師匠、もう一度言いますね♪
私は師匠に体を拭いてほしいんです」

「俺ももう一度言う。」

自分で出来ることは自分でするんだ。
女の子としての恥じらいを持つのだ」

俺の考えは変わらない。

これまでも似たような弟子を見てきたがこう言えば最終的には向こうが折れたし今回も俺は退く気はない。

だが、イトラはこれまでの弟子とは大きく違った。

「なんならあたしが拭いてやろーか？」

先ほどからその流れを見ていたサラがタオルを手にイトラに近づくと、それがイトラは人間とは思えない眼で睨む。

サラは俺に次ぐトイダーヴァの街のナンバー2のハンターだというのにそのひと睨みで身動きが取れなくなったようだ。

「お・ま・え・コ・ロ・ス・ゾ♪」

やれやれ、まさか今回の試練がこのような結果になろうとはな。

サラが動けなくなったので仕方なく俺は目にもとまらぬ速さでイトラの背後に回り込み、一瞬で締め落とした。

「くきゅ〜」

「やはり身体能力はまだ人並みだな。

先ほどの眼力はサラが絶えれないとなるとトイダーヴァの街でも俺以外には耐えられないだろうな。

半端ない力強さを持っていたし、もう少し鍛えればサラよりも速く弟子卒業できるか

もしれん」

「……ふはあつ、あたしとしたことがイトラに睨まれただけで身動き一つ取れなかったぜ。」

なあ、ハターン。

本当にイトラをこのままハンターとして鍛えても大丈夫なのか？

一人で生きる力を手に入れる代わりに人格破綻者になっちゃうぞ」

確かにサラの心配はもつともだろう。

今更だが。

俺みたいに生まれつき恐怖を感じない体質でもない限り才能を開花させ、今以上に強くなったイトラの眼力をまともに見て意識を保てる奴はほとんどいないだろうからな。

「だが、俺の弟子たちはみんなどこか人格が破綻した奴らばかりだし問題はないだろう。

お前は勘で動くタイプだし俺の指導なんかほとんど受けてないから割と普通なんだろうが他の奴らもイトラほどではないにしろ破綻している」

「そう、俺がこの世界で異常な知名度を誇っているのは俺の強さだけでなく俺の弟子たちの異常性も関係しているのだ。」

俺はあまり弟子を取らない方だがそれでもサラやイトラの他に何人か弟子を育てたことがあるのだが、その誰もが異常な性癖や性格であり、常軌を逸した行動を常とする変人集団なのだ。

……：「そういえばあいつらは元気だろうか。」

俺は人間嫌いだが、それでも弟子を可愛く思わないほど人間をやめてないからな。

サラみたいにうつつとうしい奴ばかりだし、できれば会いたくないとも思うが、それでも弟子を愛している。

変人だけでなく一流のハンターだから忙しいらしいが。

そもそもあいつらが理由もなくトイダーヴァの街に寄ることもめつてにないし手紙もよこさないのが普通だし。

「まっ、とりあえずイトラの着替えはサラに任せるぞ。」

俺は弟子で子どもとは言え、女の子の裸を見る趣味はないからな」

サラをその場に残しベースキャンプに備え付けられたベッドに横になる。

サラは何やら面倒くさがって『あたしが弟子の時はヤラシー視線を向けていた癖に……』とかなんとか言ってるが俺は聞いちやいない。

俺は弟子には手を出さないからな……たぶん……きつと……

サラもあれでいて、面倒見のいいところもあるし、あのまま放置したりはしないだろう。

やれやれ、とりあえずイトラの気弱な性格を直すのには成功したし良しとするか。

こうして迎える馬車が来るまで俺は一人眠るのだった。

のゝんびり行こうよこの道を

ベースキャンプのベッドに横になってからしばらくすると気絶したイトラの着替えを済ませたサラがイトラを担いで俺の隣のベッドに横になる。

「なあ、ハターン。」

もしかしてイトラのこの目の光を最初から見抜いていたのか？」

俺はサラに背中を向けたまま黙って話を聞く。

「あたしもこれまでハターンほどじゃなくとも多くのモンスターを狩ってきたのに、それまでに体験したどの恐怖よりもイトラの眼は恐かったよ」

サラは心底イトラに恐怖したのだろう。

俺にはわからないがああ眼力は確かに10歳の少女とは思えない異常なものだったしな。

「……イトラは両親を殺されたために身よりがなく、僅かに残った財産も悪人に奪われたからお前が拾わなければそのまま死んでいたか、人買いにでも売り飛ばされていたかもしれないからな。

それが幼いイトラにはトラウマになってるんだらうな。

目の前で血のつながつた肉親が死ぬ様を見て、残った財産を奪う悪人を見て、そんなじよそこらの人間よりもよほど死と悪になれてしまったからあんなに俺に依存するようになったのだらうな。

そしてその黒い感情を抑え込もうとしてあんなに気弱になったんだらうがそのタガは俺がはずしてやったからこれからゆっくり教育していくつもりだ。

イトラは本質的にはあんな性格でありながらもまだ10歳の可愛らしい女の子なんだから俺達大人がしっかりと見ていてやればこれからいくらでも変われるさ」

俺が師匠であるうちはあいつに道を踏み外させるつもりはないし、自分で自分を律することができるようになるまでは手元に置いてやる。

なんせ俺はあいつの師匠だからな。

俺がそんな事を考えているといつのまにかサラがベッドから起き上がり俺の前に回り込んできていた。

「やっぱハターンは口では文句言っても弟子思いのいい奴だよな♪」

二カツと子どもっぽく笑うサラ。

それは俺を馬鹿にした笑いではなく俺の元弟子としての経験に基づいた信頼からなのだろう。

俺は目を逸らし、再び目を閉じて寝ようと思ったがそこで迎えの馬車は到着したようだ。

思ったよりも速かったな。

「サラ、迎えが来たぞ。

荷物はまとめ終わってるのか」

「あーしまった。

荷物は散らかしたままだった」

まったく最後まで締まらないアホ弟子め。

結局は俺も荷物をまとめるのを手伝ってやり俺達三人は馬車に乗って街へと帰る。

実質イトラが狩りに使った時間は50分だったかな。

俺やサラは文字通り一瞬で片付けるからまだまだハンターとしての技術はまだまだ未熟なのだな。

「あ、師匠おはようございます」

気絶していたイトラは目を覚ました。

「ああ、おはよう。

迎えの馬車が来てるから街に帰るぞ。

それと着替えは結局サラにやらせたからな」

「……今はそれでいいよ。

でもいつかは師匠を振り向かせてあげるから。

私は恩だけでなく本当に師匠に惚れちゃったんだから責任とってもらおうからね」

やれやれ、本当に手のかかる弟子だな。

だが、いつかはイトラならば……俺がこれまでいくら弟子を育てても成し遂げることの出来なかつた弟子による師匠超えを出来るかも知れないな。

俺はこれまでけっこうな数の弟子を育ててきたが、今まで一度も俺以上に育つた弟子はいないのだ。

「お前は俺以上のハンターになる素質がある。

これからも鍛えてやるからしっかりついてこいよ」

「はい師匠！」

その光景を静かに見ていたサラは熱い会話に感涙を流し、一人で盛り上がっていた。感動屋だからな、こいつ。

「もしもーし、迎えに来ましたけどお手伝いしましょうか？」

ベースキャンプに入ってきた迎えの馬車の御者は荷物が散乱する惨状（ほとんどサラの荷物）を見て手伝いを申し出る。

「ああ、助かる。

しかしすまないな。

俺の元弟子は片付けが苦手なうえに狩り場に要らない物をたくさん持つてくる習性があるのだな」

「おいハターン！

お前だつて狩り場に似つかわしくないような調理器具や調味料を持つてきてるじゃないか！」

「俺は狩り場であつても旨いもの喰わないとやる気が出ないからだ。

それにそれを言うならパジャマや抱き枕みたいなものを持つてくるお前の方がおかしいぞ！

そのファンシーなぬいぐるみも持ち込み過ぎだ」

サラはぬいぐるみと一緒にやないと眠れないという習性もあるのだ。

家でするなら構わないのだが狩り場にまで持ち込むんだから以前注意した事があるんだがまだやめてなかったのか。

「うふふふふふふ」

本当にサラさんは駄目ね。

私はハターン師匠を超えるハンターになるからそんなに子どもっぽい事はしないよ

そう言いながらも子どもっぽく俺にしがみついてくるイトラ。

こうして見ると少し前の愛らしいイトラの方がいい気もしてくるが成長したと思えば悪くない……のか？

それから荷物を片づけて俺達はギルドへと帰っていくこととなった。

ちなみに俺の調理器具と調味料は全部で40kg程度しかないのだが、御者は驚いていたようだ。

俺の持ち込む調理器具の量程度に驚くなんて新人のようだな。

「で、イトラは何でそこまで俺にひっついてくるんだ？」

ガタゴト揺れる馬車の荷台で、イトラは先ほどよりも積極的に俺にくっついてくる。サラもノリで俺にくっついてくるものだから俺は二人に両腕を抑えられている状況なわけだ。

「おい、いい加減に離れろ。

暑苦しいぞ」

だが、サラもイトラも終始笑顔で、俺の腕を離そうとしない。

「はつきり言うけど私はサラさんに命を救われて、そのあとハターン師匠には心を救われたわけね。

だから愛してるの。

恋してるの。

惚れてるの。

私のいまの気持ちわかる？」

「ちなみにあたしはノリでくつついているだけだ。

あたしは背が高いのがコンプレックスだったんだけどハターンはあたしよりも背が高いから一緒にいると心が安らぐんだ♪」

「俺は二人に対して特別な感情を抱いたりはしない。

元弟子と現弟子であり、それ以上でも以下でもない。

あんまり聞きわけがないと馬車から引きずり下ろすぞ」

正直うつとうしい、しかし無理やり話そうとすると二人とも泣きそうになるし（サラはいい年して何やってんだか）、それが気になってどうしても強くは出れないのだ。

というか二人ともえらく仲良くなったな。

サラは先ほどの覚醒イトラに恐怖していたことをすっかり忘れてしまったのだろう。根本的には似た者同士みたいだし。

「イトラ、覚えとくんだぞ。

ハターンはたとえ嘘泣きだとわかっていても女の涙には弱いからな♪」

「ええ、その辺はもう理解したわ。

私はハターン師匠とは将来を誓い合う予定なんだから♪」

やれやれ、ここで言い返せないのが俺の弱さなんだろうな。

こうして馬車はトイダーヴァの街に向けてゆつくりと進んでいった。

アホな奴に絡まれるのは宿命か

ギルドに到着する頃にはサラは俺から離れて寝てしまっていたが、イトラは結局最後まで俺にくっついたまま離れなかった。

仕方がないので俺が抱っこして店の中まで連れて行くことになったのだが。

甘えすぎだろ……

ギルドに入るとさっそく出迎えてくれるのはタバコの煙と酒の匂い。

ハンター歴も長いし嗅ぎ慣れた匂いだが、ギルドに入るたびに顔をしかめてしまう。

サラもそうだが俺はタバコと酒が大嫌いなのだ。

イトラもまだ子どもだし、こんな空気の悪い場所に長時間置いておくわけにもいかないのでいつもの俺専用の禁煙席に座る。

サラは俺の向かいの席でイトラは……俺の膝の上だ。

「あらあらあゝ、さすがはハターン君が弟子にただけはあるわねえ〜♪

身体的にも精神的にも無事みたいだし、本当にイトラちゃん一人でミラボレアス

の討伐に成功したのねえ」

「俺の弟子だ。当然だろう。」

今日はイトラの初の狩りが成功したお祝いとして裏メニューを注文する。
すぐに持ってきてくれ」

マルはいつものようにのんびりした口調だが、そこはギルドマスターなのだろう。

俺が店に入るタイミングを計算してすでに料理を作ってくれていたらしく料理を運ばせてくる。

「当店自慢のおく、黄金魚のすり身を骨に巻きつけた『黄金こんがり肉』よおく」

これこそがこの店の自慢の裏メニュー『黄金こんがり肉』だ。

黄金色に輝くその肉はひとたび食べると口の中で蕩けてしまうような極上の美味なのだ。

もちろん俺の大好物でもある。

「おいハターンこれ旨いな♪」

「こんな料理今まで食ったこと無いぞ！」

「本当においしいですね♪」

サラもイトラもこの料理には大満足のようにだ。

「よしよし、これは俺の大好物なうえに俺専用メニューでもあるからな。

イトラのためにも一度御馳走しておきたかったんだ。

もちろん代金は師匠の俺が払うから遠慮なく食え」

サラの分は出すつもりはないからあとで揉めることになるだろうがそれは今は放置だ。

イトラは食事の時も俺の側を離れようとしないので椅子に座る俺の膝の上に座らせているが身長差があるため、何やらぬいぐるみみたいで癒される。

それからしばらくはほのぼのとした時間が過ぎて行つたがここでもトラブルは起きるものなのだ。

「やあやあやあハターンさんこれは久しぶりじゃないですか」

ニヤニヤと気持ちの悪い笑みを浮かべるクックシリーズの男が近寄ってくる。

「あんたはいつ見ても美女を連れていて羨ましい限りだねえ。

おいらはあんたのそういうところが大嫌いなんですよ」

「気偶だな。

俺もお前のことが大嫌いだ」

この男、装備こそクックシリーズ（下位装備）だがこの街の第5位のハンター、片手剣使いのテケッタ・カン（17歳）という男なのだがしよっちゆう俺に喧嘩を売ってくるのだ。

もちろん俺の全戦全勝だがな。

「こいらでハンターを引退して俺にナンバー1の座を譲っちゃくれませんかねえ？」

おっさんは引退するべきだと思っただけですけどお」

こいつは本当に目上の者を敬う気持ちを持たない奴だ。
こいつの師匠は割とマシな奴なんだがな。

「俺が引退したところでこの街のナンバー1の座は現ナンバー2のサラに移るだけだ。
お前はとつと一人で狩りに出かけて地道に実績を積み」

そこでテケッタは『ふっふっふっ！』と笑い、

「サラさんはオイラのお嫁さんになってハンターを引退するからナンバー1の座は自然
とおいらに移るから問題ない！」

その自信がどこから来るのやら……

それにこいつの上には俺とサラ以外にも二人いるんだがな。

ちなみにテケッタはサラに惚れているのだが一度も見向きもされないのだ。

「くっはあ、やっぱミルクはうめー♪」

あたしは酒は駄目だけどミルクだけは手放せねーな♪」

サラの方を見ればテケツタに見向きもせず到大樽でミルクを飲んでいり。本当にミルク好きなんだな。

「サラさん。

オイラはあなたに惚れているんです。

ここらでそろそろおいらと結婚してくれませんか？」

テケツタは俺から離れてサラに向かっていくがサラはそれを華麗にスルー。

「なあ、ハターン。

この店は臭えな。

ドブネズミの匂いがぶんぶんするぜ。

おもにあたしの近くから」

サラは意図的にテケツタから目をそらして言う。

本当に文字通りテケツタに見向きもしないのだ。

「……サラさんひどいなあ。

オイラはハターンなんかよりも才能あるから君を確実に幸せにしてみせますよ。
オイラのどこに不満があるんですか？」

「ドブネズミがなんか言ってるが気のせいだろ。

それよりハターン、イトラがお前以上の素質つてのは本当なのか？」

ここまでされても近づいて行くテケツタもすごいがそれをスルーするサラもさすが
だろう。

「ああ、イトラには俺以上の素質がある。

俺はこれまでけっこうな数の弟子を育ててきたが一度もなしえなかつた事があるん
だがな。

弟子が師匠を越えるという経験もイトラならば俺が現役のうちに達成できると思っ
てるんだ。

そう考えると何か感慨深いものがあるんだよな」

イトラは黄金こんがり肉を食べ終わったあと、追加で注文したラオシャンメロンにしゃぶりついている。

……というか俺の膝の上でそんな汁の垂れるもの食われるとあとでニチャニチャするから膝から降りて食べてほしいんだがな。

「なに!？」

それは本当か!？」

テケツタはサラの隣の席に勝手に座っていたのだが机の上を乗り越えて俺の隣にこれまた勝手に座る。

「それはいい事を聞いた。

ではお前の弟子のそのちびっ子をたたきのめしてオイラがナンバー1であることを証明しようじゃないか!」

はあ、こいつの思考は本当におかしいんだな。

やれやれ、マルもカウンターの方からウケケケ笑ってるし。

イトラはイトラでだんだんと狩り場で見せたような暗黒面に落ちたような表情になつてきたがどうなることやら……

可愛い外見と恐ろしい二つ名

ゴゴゴゴゴ！

まるでそんな擬音が聞こえるかのような緊迫した空気が張り詰める中、その空気を作りだした張本人たる馬鹿は気にも留めずに行動を開始する。

「オイラはこの街のナンバー5のハンターだが、こと腕力に関しては一番だと思っている。」

「そのハターン以上の素質を持つというちびつ子に俺が勝てば俺が街一番ということが証明されるのさ！」

サラさんも見ていてくれ。

オイラは必ず君のハートを射ぬいて見せるからさ！」

「おいハターン、今月の新作スイーツはすごいぞ！」

食べてみるよ♪」

サラは相変わらずテケツタを無視し、俺に菓子をスプーンで掬ってを差し出す。

寡黙でカッコいい俺が弟子と間接キスでスイーツを食べるなんて恥ずかしいじゃねえか！

で、それはさておき話の流れ的にテケツタは俺以上の素質を持つイトラに腕相撲で勝つことで男らしさをひけらかしたいようだが、それを見る周りのハンターたちは呆れているということにテケツタは気づいていない。

「師匠ー、これって私があゝの馬鹿と腕相撲で勝たなきゃ駄目なの？」

俺を見上げて聞いてくるイトラも飽きれているようだ。

ちなみにイトラはまだ俺の膝の上に座っており、サラにもらったスイーツを美味しそうに食べているところだ。

……こうして見ると俺も食べさせてもらえば良かったかもしれないな。

「さあ、ハターンの弟子のちび。

オイラと勝負しようじゃないか！」

面倒なことになったな。

マルは武器を使った喧嘩に発展しない限りは止める気がないだろうしどうしたものか。

「師匠、私やつてきますよ♪」

「ん？ いいのか」

「はい、ちよつと待っててくださいいね。

すぐに殺（や）つてきますから♪

うふふふふふふふふふ♪」

なんか字が違うぞイトラ……

しかしずいぶんと変わってしまったが前よりは物事に積極的に頼もしい限りだ。

「さあ、始めようか。

おいらの名が最強である理由をここに証明しよう！」

テケツタは周りの観客からの呆れた視線にも気づかず手を振るが、イトラはそんなテケツタを無視して背後から忍び寄り、その股間を思い切り蹴り上げた。

「えい♪」

めめたあと、気持ちの悪い音が響き、

「ほでゆあああああああー」と、男の最大の弱点を潰されたかのような声を出しながらテケツタは地面を転がりまわる。

まあ、その通りなのだが、簡単に言えばイトラに金的蹴りを食らったんだな。

「うふふふふう♪」

その汚いおしりの穴を溶接して額に新しい穴を作ってあげましょうか？

私があなたみたいいな屑を相手に腕相撲で勝負なんてするわけないでしょう。

私の手をハターン師匠以外が握ろうなんて100年早いんだからね♪

……ところであなたのその腕、確かに太くて立派だけどこれが自慢なの？」

イトラは背負っていたライトボウガンを取り出し、テケツタの額に押し付ける。

「くつうううー」。

このガキよくもやりやがったな！

俺が本気を出せばお前の細腕なんてぶちゆ、なんだぞ！

男らしく正々堂々闘いやが「私は女だからーの♪」ひぎやあああー！

イトラは腰に提げた剥ぎ取り用ナイフをテケツタの腕に突き刺した。

何のためらいもなく。

喜々として。

「あらあら、ごめんなさ〜い♪」

腐った生肉かと思ったから解体して捨ててあげようと思っただの。

でもあなたの言う通り私は子どもだし、ちよつとお茶目なことしたくらい気にしない

よね?。」

うむ、どうやらイトラは俺の弟子の中でも特に人格破綻者になってしまったようだな。

まさか10歳の子どもがナイフをあそこまで上手く使いこなせるとは驚きだ。

ボウガンの使い方以外はまだ何も教えてないんだが本能のなせる技なのだろうか。

だがライトボウガンで額を撃ち抜かないあたり、まだ常識を理解しているのだろうな。

「ぐおおおおー！」

頼む、おいらが悪かったから助けてくれ。

まだ死にたくねえんだよ」

「うふふふふう♪」

じゃあ二度と師匠と私に近づかないでね。

あとサラさんにも。

今回はこれ位で勘弁してあげるけど次は無いと思った方がいいよ♪」

「すまねえ、これからは真面目に生きるぜ（くそ！　こうなったらあとで闇討ちしてやる

！)」

そこでイトラはナイフを抜き……………振りかぶったと思ったら今度は腕を完全に切断した。

「ひぎやあああああ！」

「今のが嘘だつてのはちやくんを見抜いていたんだから適当な事言ってるんじゃないですよお。

今度は容赦しないって言ったでしよ♪」

テケツタはこのあとすぐに病院に行き即手術を受けてどうやら時間はかかるが腕はくつつくようだ。

だが、それでもハンターに戻るのは無理だろう。

引退するかもしれないな。

「じゅじゅじゅじゅ」

ハターン師匠、ゴミを掃除しましたよ♪
ほめてほめて♪」

笑顔で俺に駆け寄り頭を撫でるように強要するイトラ。

そしてこの事件により、人形のように可愛らしい笑顔のままナイフを振り回すイトラの姿におびえた連中のおかげでイトラは『殺戮人形（キリングドール）』という二つ名を得ることとなってしまい、ハンター歴2日にしてトイダーヴァの街のナンバー5のハンターとなってしまうた。

これならイトラもさっさと弟子を卒業できるかもな。

揺れ動く心

さて、ギルドでひと悶着あつたわけが、もともとあの馬鹿の方から突つかかってくるだけなので後始末に閑してはマルがギルドの職員の何人かに指示を出して血で汚れた床の掃除や本来の業務を滞りなくやっている。

その現場を見ていた連中も最初はイトラみたいな小さな女の子が街一番のハンターの俺に弟子入りしたのを訝しげに想っていたようだがそうした連中も今回の騒動でイトラを馬鹿にしたりする奴はいなくなつただろう。

そんなこんなで俺とイトラとサラはすぐにそれら騒動の責任とかなんだかんだを全て放り出して帰宅したのだった。

「し・し・よ・う♪

一緒にお風呂入りませんか？

お背中流しますよ♪」

「……………は？」

うふふふふ、と笑顔で言ってくるイトラ。

ギルドに着いてからもそうだったが俺に恩以上、恋以上、愛以上の感情が芽生えていくようだがこれってどうすればいいんだろうな。

「おーい、ハターン。

おやつ作ってくれよ。

ギルドでイトラの勝負を見ていたら熱くなっちまって腹が減っちまったんだよ」

「お前はさつきあれだけ食べてまだ腹が減ってるのかよ」

一旦イトラを置いてソファに寝そべりながらだるそうな声をあげるサラに視線を向ける。

俺としては面倒だし断りたいんだが、あまりにもしつこく頼み込んでくるので仕方なく作ってやることにした。

「ハターン師匠、お手伝いします♪」

イトラはエプロンを取り出すといそいそと服を脱ぎ始めた。

「……ちよつと待て、何やってんだイトラ？」

いや、やろうとしてることは見ればわかるが俺にはそういう趣味はないぞ」

「そうでしたか。」

やっぱり師匠は裸エプロンの時は靴下も履かない方が好みですか？」

どこで仕入れた知識なのか幼い割に耳年増だな。

「いやいや、俺はそもそも裸エプロン自体に興味がないんだ。

イトラも手伝いたいなら服を着ろ、服を」

これまでそれなりに多くの弟子を育ててきたから女の子の弟子の裸なんていくらでも見てきたがイトラはその中でも特に小さいな。

だが、そんな小さきもいと思うが……つてなにを考えてるんだ俺は！
サラが弟子の時も危なかったがさすがにイトラに手を出してはいかん。

その様子をニヤニヤとサラが見てくる。

「ハターンつてば硬派を気取っておきながら女の子が大好きむっつりスケベだからな♪
イトラ、それは照れてるだけだからもつと強気で行っちゃまえ♪」

「こら！ つまらないことをイトラに吹き込むな！」

馬車の中でハンターとしての知識などを色々教えていた時から気づいていたがイトラは教えたことを完璧に記憶し、知識が経験を凌駕するという特異体質のようだからなるべく余計な知識は教えたくないのだが……

「おっと、そういうしている間にもおやつは完成したな」

口と同時に手を動かしていたのでサラが所望の俺特製のスイーツは完成だ。

「ハターン師匠って苦手なことないんですか？

私は師匠の身の回りのお世話がしたいのに完璧すぎるから苦手な分野が分からないんですよ」

あまりに完璧なお菓子の出来栄えに目を見張るイトラはそんな事を言ってくる。

ちなみに俺は王家からもハンターとしてよりも料理人や菓子職人としての依頼の方が多かったりすると明記しておこう。

しかし俺の世話ね。

男としては嬉しいがイトラの場合それ以上先に進んでしまいそうな予感がするんだよな。

「俺は何でもできるし今の生活に満足している。

しいて言うなら俺の望みはイトラに早く弟子を卒業してもらおうことだな。

そしてサラと一緒に家を出て行って自立してほしいのだ」

いやまあ、実際にはもうミラボレアスの討伐を成し遂げた時点でハンターとしては一

人前だし、報酬もたくさんもらってるから家を借りることも簡単なんだろうから今出て行ってもいいんだけどな。

見る限りこのままじゃ一生俺にべったりしてきそうだし。

「……師匠は私が嫌い？」

私は師匠のことが大好きなんだよ。

だから一生側に置いてほしいと思ってるしそのためなら今日ギルドで絡んできたようなゲスを殺すのも平気なんだよ。

だから私だけを見てほしいの」

俺の眼を見つめながら本気の覚悟と涙を滲ませるイトラ。

つい助けを求めてサラに視線を向けるが、サラはお菓子を食べ終わるとイトラを放置し、そのまま一人風呂に向かったようだ。

まったく肝心な時に役に立たん奴だ。

「俺は結婚とか恋愛とかそういうのに興味はない。

これからもただのハンターとして一人で生きていくだけだし、イトラのことでもこれま

で育ててきた弟子の一人としてしか見ていない。

俺のことは諦めるんだな」

イトラは泣きそうな顔をし、黙って俯く。

罪悪感もなくはないが俺なんかよりもイトラにはふさわしい男が出てくるはずさ。

この方がお互いのためにもいいに決まっている。

イトラをそのままにして俺は風呂にも入らずそのままの格好で自室のベッドで横になった。

……まあ、守っていくはずの弟子を自らの手で散らすというのも何やら思うところが
ないではないが。

イトラ side

どうして? どうして? どうして?

私はこんなに愛してるのに。

どうやったら師匠は振り向いてくれるのかしら?

こうなったら……振り向くまで愛し尽くすのみ!!

そうよ！ 女の子は行動力があれば結果は後から付いて来るんだから後先考えずに行動しちゃえばいいのよ♪

今はその答えで引き下がるけど必ず私に惚れさせてみせるんだから！

師匠、その時まで待っててね♪

うふふふふふふふふ♪

夜這いに耐えるのってけっこう精神的にくるものがある

イトラ side

ハターン師匠が自室に向かったあと一人で考えていた。

自分が子どもだからハターン師匠は振り向いてくれないんじゃないかと。

「はあく、いい湯だったあ♪」

お風呂から上がったサラさんが裸のままバスタオルを首に掛けて居間に現れ、台所におかれていた水瓶（みずがめ）を直接持ち上げてガブガブと飲みはじめ。

なんて男らしいのかしら。

「いいタイミングで来ましたねサラさん。

少し聞きたいことがあるのですが」

「ゴクゴクゴクゴク……ぶっはあ♪」

で、なんだ聞きたいことって？」

相変わらずこの人は豪快だと思いつつもサラさんは今の自分にはないものを持っているのでここはこの人に頼むしかないですね。

「ハターン師匠に振り向いてもらうにはどうしたらいいでしょうか？」

サラさんはハターン師匠の昔を知っているからこの人に聞けば師匠の好みも分かるかもしれないですね。

「うーん……ハターンの好みねえ。

あいつむつつりスケベだし清楚に見えて際どいのがいいんじゃないか？

ほら、裸エプロンとか」

「それはもうさつきやったけど効果がありませんでした！」

全く何を見ていたのかしら。

さつきのやり取りをサラさんも見てたはずなのに。

「それじゃあ とつておきを教えてやるよ♪」

以前、謀らずともあたしがハターンに生唾を飲み込ませるほどあいつを興奮させた装備を貸してやるさ」

そう言つてサラさんが取り出したのは『キリン』シリーズ。

大陸中の男性ハンター垂涎のエロ装備として有名。

「ふっふっふ、これはあまり知られてない情報だが、実はハターンは過去に『キリン娘愛好会』の会長をしていたこともあるのさ。

あたしが弟子入りしたのはハターンが会長職を辞したあとだから詳しくは知んないけどな。

弟子だった時にハターンが隠し持ってた女性用キリンシリーズを勝手に拝借した事があるんだけどその時のハターンったら理性を失いかけてたんだぜ！

もう笑いが止まんないよ♪」

バンバンと机を叩きながら面白おかしく語るサラさん。
それなら私が着ても効果があるかもしれないですね。

「ほら、この隠し部屋に各サイズ用意してあるからこの中からサイズを合わせてハターの部屋に行ってみるよ」

サラさんが食器棚をスライドさせるとそこには数多くのキリンシリーズが。

……師匠つてば本当にキリン装備が好きなのね。

下位、上位、G級の全てが各シンボルカラーごとに分けられ、それをさらに各サイズの数だけ揃えてあるなんて。

幻獣キリンは古龍種だし、私が倒したミラボレアスよりは弱いとはいえ、最強のモンスターなのにこんなに各サイズ作るだけ狩るなんてさすがですね。

「それじゃあサラさん。

行ってきますね」

「おう、行ってらっしゃい。

その愛であり、恋であり、それら以上の感情が実ることを祈ってるぜ」

私はキリン装備に着替えてすぐに居間を出たけど、その時にはもうサラさんは話を聞いておらず台所から干し肉を出して食べ始めていた。

さつきまでギルドでメニューを全制覇したあと、さらに師匠の手作りおやつまで食べたというのにそこからさらに干し肉をつまみにミルクを樽（タル）で飲むなんてこの人って本当に食いしん坊なのね。

ハターン side

はあ、イトラの奴元気になったのはいいけど今度は俺にべったりになってしまったな。

だが、俺が一線を越えるわけにはいかないし……
とりあえず寝よう。

今日のミラボレアス狩りはイトラ一人に任せただけで移動に時間がかかったし馬車で揺られて疲れたんだよな。

布団を被って寝ようとしたところで部屋の扉が開かれた。

ギイイイイー

なんだ？

部屋のドアはしっかりと閉めたはずだが……

「ハターンしししょー♪

起きてますか？」

「イトラか。

何か用 ……か……」

なんてこった俺の秘密の部屋に隠してあったキリンSシリーズ、シンボルカラー〈赤〉バージョンを着たイトラがそこにいた。

「どうです師匠？」

「可愛いですか？」

「あ……ああ、実に素晴らしい。

というかなぜその装備を!？」

「サラさんが師匠はキリン好きだと教えてくれたので着てみました♪

これで私が大好きな師匠も私のことになつてくれるかな〜と思つて着たんです♪」

ぐっはあ、可愛すぎる！

だがしかあし！

俺は人嫌いで寡黙なトイダーヴアの街一番のハンターで、イトラの師匠で……

「うおおおおおー！」

イトラ、俺はお前の師匠としてお前に手を出すわけにはいかん！

今夜はもう寝ろ！」

なんとか理性を保つことに成功した俺は、イトラを部屋から追い出すと扉を閉め、鍵をかける。

はあはあ、まさかイトラがここまで可愛いなんて。

俺も疲れてるのかもしれないな。

でもイトラがもしも大人になってもまだ俺を好いてるのならば俺も……いや、戯言だ。

今夜はもう寝よう。

第三章：デイオシキ襲来編

かつての弟子の来訪は歓迎すべきではない

翌朝、いつもより早くに目を覚ました俺は着替えを終えるとイトラ達の朝食を作るために台所に向かった。

「おはようございませす師匠。

朝は清楚なのがいいと思つたのでキリンSシリーズでシンボルカラー白にしてみました♪

それにしても下位、上位、G級のキリンシリーズの全サイズを全シンボルカラーごとに作成してるなんて本当に師匠はキリン好きなんですな」

しかしイトラは俺よりも早起きしてすでに朝食を作り、今朝もキリン装備を着て俺を出迎えた。

ああ、寡黙で渋いカッコいいという俺のイメージが崩れてしまった気がする。

「……キリン装備はイトラにとてもよく似合っているが一晚寝て頭をすつきりさせた俺にその装備は効かん（内心いっぱいいっぱいなのは秘密）。

ところでサラはどこだ？」

サラが余計な事を吹き込まなければ俺が理性と欲望の板挟みにならなくても済んだってのに。

まったくあのアホ女め！

イトラにつまらん事を吹き込んで楽しんでるんだろな。

……確かにキリン装備のイトラは可愛いけど。

「サラさんならまだ寝てますよ」

それは意外だな。

サラは食べることが生きがいだから食事の時間はきっちりしてたんだがどうしたんだろな。

「さて、イトラ。

今日の予定だが今日はお前にハンターの基礎として採掘や採取を教えるために農場に行こうと思う」

「いまさら農場ですか。

何やら師匠の教え方は気分で決めているみたいですね。

そんな所も私は大好きですけど♪」

キリンシリーズを着ているからか昨日までの三倍はかわいく見えるな。

まあ、いい。

「とりあえず朝食が済んだら出かけるから準備しろよ」

俺の弟子育成方法はかなり気分で決まっていたりするが、ハンターなのだからモンスターを狩るための知識と技術が一番大事で、採取や採掘、調査なんかは二の次三の次となるのが普通だろう。

そうしたやり方で俺はずっと多くの弟子を一流のハンターに育て上げてきたのだ。

ギルドでも最近俺のやり方を真似し始めているようだしな。

あとサラにも一応声を掛けてみたんだが二日酔いで寝ていたようだ。
ざまあみろ。

さて、そんなこんなで俺たちは農場に来ている。

実は俺専用ギルドが用意してくれたこの『ハターン農場』は広さも資源も豊富で俺一人では使いきれないほどの鉱物や虫、野菜や魚などもたくさん採れるため、ハンターをやめても食って行けるほど儲かっていたりするのだ。

「ニヤニヤーン♪」

そして、農場に入った途端に俺に飛び付いて頼ずりしてきたこの猫こそが俺の農場の管理を任せている管理責任者アイルーのワリサだ。

「ご主人久し振りだにや。」

あにやたのために忠誠を誓ったこの農場管理責任者のワリサはご主人のためにやられたとえ火の中水の中にやのにや。

はあく、ご主人のほつぺはスベスベにや、すくりすくり♪」

農場に来るのもかなり久し振りなんだがこいつの俺への忠誠心は相変わらずだな。

こいつとの出会いは思い出しても馬鹿らしいのだが、道端で死にかけているのを拾ったのだ。

困ってる奴を助けるのは男らしくてカッコいい、と思つて同情や情けみたいなチャチな感情ではなくそうすべきだという直感で助けてやったのだ……というのは嘘だが色々あつたんだよ。

まあ、それでもここまで懐かれてしまふのも照れてしまふがな。

怪我で尻尾は失くなつてしまつたようだがその銀色の毛並みは相変わらず美しい光沢と手触りのため、実は特にお気に入りのアイルーだったりする。

だからしばらく顔に張り付いてくるワリサを放置して頬に当たる肉球やふかふかの毛並みを堪能していたのだが隣にいるイトラの視線が段々と黒くなつてきたのでそこで終了。

つたく、イトラも猫相手にそこまで殺気をぶつけるなよな。

「暑苦しい挨拶は寄せ、ワリサ。

ところでほかの連中はどうしてた？

何やらしばらく来ないうちに農場はボロボロになってるしそれと関係があるのか？

これでもお前を信頼して管理を任せていたつてのに荒れ放題じゃないか。

俺の新しい弟子に採掘や採取を教えようと思つてたんだがモンスターでも襲つてきたのか？」

ハードボイルドなカツコ良さを目指すためにもこう言つておかなければこの猫は俺にいくらでも甘えてきそうだからな。

などと考えながら顔にしがみついていたワリサを引つpegしたのだが周りをよく見てみれば、鉱石採掘が出来る岩壁は無残にも崩れ落ち、釣り用の栈橋は破壊され、虫の生息する茂みは踏み荒らされていた。

前回来た時はここまで荒れていかなかったはずなのにな。

「はにゃ、実はご主人の元弟子の『殺獣鬼』デイオシキ・ブラザキ様がやつてきまして、暇だからと言つて暴れまわつてしまったのですにゃ」

いまなんて言つた？

デイオシキ・ブラザキ？……それは俺のもつとも聞きたくない名前じゃねえか！

「ハターン師匠、ディオシキさんって確か師匠の弟子の中でもサラさんと一位、二位を争う凄腕ハンターでしたっけ？」

「ああ、俺の弟子の一人で牙獣種専門のハンターなんだが、とにかく変人だな。

俺の弟子の中でも特に異常な性癖の持ち主だ」

俺の関わりたくない人物ランキングでも上位に位置するディオシキ・ブラザキという女が今ここに来ているというのならそうそうに立ち去るべきだろう。

あの女はとんでもない方向音痴でド近眼だから たぶん俺の家を指摘していたら俺の農場に辿りつき、これ以上探すくらいならここで俺が来るのを待ってた方がいいと考えたに違いないからな。

そして暇つぶしでそこらで遊んでいたら結果的に農場が滅茶苦茶になったってところだろうな。

「あー、すまんなワリサ。

俺とイトラはいったん帰ってまた今度来ることにする。

「ディオシキにはサラの次に迷惑かけられたから出来れば会いたくないんでね」

俺のこれまで育ててきた弟子達は俺の育成方法がトラウマになった奴も多く、俺に会いに来る酔狂な奴はそんなにいないのだ。

その中で俺に会いたくて会いにくる奴というのは本当にまともじゃない奴なのだ。

と、すでに俺の中ではディオシキも過去であり現在にかかわり合いを持たない者と位置づけていたのだがどうやらイトラの方は興味があるらしい。

「でもでも、私の姉弟子の方なら私は会っておきたいです。

ちよつと探してきますね♪」

「あ、コラ。

ディオシキは迷惑なやつなんだから探すんじゃない！」

だが、すでに走り出したイトラはディオシキを探すために農場の奥へと走って行ってしまった。

ああ、イトラも俺の弟子の中では特に異常なんだつたな……

もしかしたら弟子同士の何かしら感じる波動だか覇気だかにあてられたのかもしれない。

そんな事を考えながら俺も農場の奥へと足を踏み入れる。

かつての弟子にできるだけ会いたくないと思いつつも……

やはりこうなるのか……

イトラ side

デイオシキさんってどんな人なんだろう？

ハターン師匠は嫌っている、というより苦手意識を持っているみたいだけど昨日ギルドでマルさんにハターン師匠の弟子リストってのを見せてもらったけどデイオシキさんって牙獣種の討伐記録だけなら師匠よりも上だったな。

もしかしたらサラさんみたいに師匠の秘密を知ってるのかもしれないし教えてもらおう♪

ガキインバキインメキメキメキイ！

農場の奥は森になってたから入ってみたんだけどそのさらに奥から何かの破壊音が聞こえる。

「女王乱舞！」

そこには木を蹴りでへし折っていく長い青髪綺麗な女性がいた。

「ん？僕様ちゃんの修行を盗み見るなんて敵かと思つて見てみれば可愛らしい子猫ちゃんじゃないの♪」

子猫ちゃんつて私のこと？

この人がディオシキさんかな？

「はじめまして、イトラ・ウボンガと申します。

あなたはもしかしてディオシキさんですか？」

「おくやおや、君は最近……というか昨日から話題になつているミラボレアス殺し『殺戮人形（キリングドール）』のイトラちゃんかしら？」

やっぱ僕様ちゃんは運がいいね。

君の姉弟子のディオシキ・ブラザキで間違いないわよ」

ディオシキさんはとても丁寧なお辞儀をするとなんの前触れもなく突然私に抱きつ

いてきた。

「あつはー、もう最っ高に可愛いわ♪」

ハタつちもこんな可愛い子を弟子にしたならすぐに連絡くれれば良かったのに」

「むぎゆ〜、ちよつと苦しいです。

あ、あのハターン師匠も農場の入り口で待ってますし、早く行きませんか？」

この人すごい力だ。

それに優しそっだけどなんでハターン師匠は会いたがらないんだろう？

……というか私よりもずつと大きな胸でベアハツグだなんて嫌味かしら。

私だってまだ子どもだけどいつかは大きくなるんだから！

「それじゃあさつそく行きましようか♪」

ハタつちは僕様ちゃんを嫌つてるから早くいかなきゃ君を置いてでも帰つちやうだ
ろうからね」

ようやく離れてくれたディオシキさんは私の手を引いて歩き出した。
森の奥へと。

「ちよつとディオシキさん！

道が違います！

入り口はこつちですから！」

そう言えば方向音痴で目が悪いんだっけ。

それなのにハンターをしているなんてこの人はどんな戦い方をするんだろう。
だけどころその時ハターン師匠が私を追ってきたやつてきた。

「おーいイトラ。

ディオシキは本当に面倒な奴だから見つからないように早く帰ろ……う」

「あー、ハタつち見ーつけた♪」

ディオシキさんと目があつた師匠は心底嫌そうな顔をして逆方向に逃走しようとし

たけどそれよりも早くディオシキさんは師匠に飛びついた。

「ウツハー♪」

久しぶりのハタつちだー♪

くうううう、このハタつち特有の匂いは最高だよ〜」

「おい、離れろ馬鹿弟子！

気持ち悪い気持ち悪い、いやマジで気持ち悪い！

今の弟子のイトラはマジで ばないんだから俺に近寄るなつて！」

なるほどなるほど、これが知られたくなくて師匠はディオシキさんに会いたがらなかったのね。

よく分かったわ。

ディオシキ・ブラザキは私の恋敵ね！

ハターンside

まずいな、イトラの奴がまた黒くなつてやがる。

結局いつも俺が苦勞するんだよな。

やれやれだぜ。

「イトラも落ち着け。

そしてディオシキも離れろ。

俺は今更逃げたりしないからよ」

ディオシキを無理矢理押しにかけてイトラを抱き上げてやると途端にイトラは大人しくなりディオシキも素直に離してくれた。

「さて、ハタつちもイトラちゃんが可愛いから独り占めしたくて僕様ちゃんに連絡をしなかつたんだろう。

イトラちゃんも安心してよ。

僕様ちゃんはハタつちに惚れてはいるけど結婚には興味がないからお嫁さんの座は君に譲るよ。

「というか君の殺気はさすがの僕様ちゃんでも耐えれそうにないからさ」

「まくたイトラが勘違いするような事言いやがって、迷惑な奴だ。ほら見る、さつそく俺に甘えてきやがったじゃねえか。」

「それで目的はイトラだけじゃないんだろ？」

「見つかってしまった以上今更逃げたりはしないが俺も暇じゃない。用件は早く言ってくれ」

イトラの方を見れば俺の胸に顔をこすりつけて幸せそうにしている。これではばらくは暴走を防げるだろう。

「ぎゃはは。」

「気が早いハタつちも最高に可愛いじゃないか♪」

「実は用件とは僕様ちゃんをしばらくハタつちの家に泊めて欲しいってことなんだよ」

♪

俺の意見を聞くつもりはさらさら無いようだな。

こいつも昔からこうだった俺の家に泊まるのはもう決定事項のようだ。
抱き上げたイトラの温もりに癒されながら俺は現実逃避を試みてみた……

縞パンってすごくね？

結局ディオシキの出現によりイトラに採取や採掘を教えるどころではなくなつたので、俺はディオシキを連れて家に帰つて来たのだった。

「う〜ん懐かしの我が家。

やっぱハタつちの家は本当に落ち着くね♪

む、この匂いは……サラにやんまで泊めてるの？」

家に入るなり、あちこちの匂いを嗅ぎまわるディオシキ。

その様子も昔から変わっていないな。

ディオシキは匂いフェチなのだ。

……というか自分の家じゃないだろうにすでに我が物顔で家の中のもの嗅ぎまわる。

「お、何やら懐かしい声があるから起きてみればそこにいるのはディーちゃんじゃない

か♪」

二階の自室から降りて降りてきたサラは、ディオシキを見るやいなや飛び付いた。

それを当然のように受け止めたディオシキはサラの体をまさぐるように匂いを嗅ぎ始め、サラはサラで文字通りディオシキの体を舐めまわす。

「くんかくんか。

はあく、サラにやんの匂いもいいわあく。

「僕様ちゃんハタつちの次にサラにやんの匂いが大好きなのさ♪」

「ぺろぺろ。

うっはー、あたしもハターンの次にディーちゃんの味が大好きなんだよ♪」

俺の腕の中でもその様子を見たイトラが真似をし、俺の匂いを嗅ぎまわり顔をぺろぺろと舐めてくる。

なんだかんだで下ろす機会がなかったのでイトラは農場からずっと俺に抱っこされた状態のままだったりする。

こうしていると子犬みたいで可愛いんだけど中身は小動物みたいな弱さは欠片もないんだよな。

「はいはい、とりあえず感激の再会もそこそこにしてもらおうか。」

さてディオシキはなんで俺の家に泊まりに来たんだ？」

いい加減止めないといつまでもくつついていそうだったのでサラとディオシキをそこで引き剥がして、説明を求めろ。

イトラも椅子に座るのに邪魔になるので下ろそうとしたのだが、俺の首に腕を回し、離すまいとする必死な様子に俺の方が根負けしてしまい、結局俺の膝の上に座っているのだった。

「ふむ、そこなのよハタっち。

なぜ僕様ちゃんがこの街に来てハタっちの家に厄介になるかと言うとね。

実は僕様ちゃんが拠点にしていた村が火事で燃え尽きてしまったからなのよ。

ちなみに火事の原因は僕様ちゃんが火属性の武器をダーツに使ってたら爆弾専用のアイテムボックスに飛び込んで行って大爆発しちゃったわけなのよ」

サラは『さつすがディーちゃんだぜ♪』とか言ってるがそれは無視だ。

爆弾専用アイテムボックスだと!?

俺の弟子は異常だの変人だのと常々思っていたがまさか爆弾だけのアイテムボックスを用意し、さらにその近くで火属性の武器をダーツにするなんてそこまでの馬鹿だとは思わなかったぞ!?

「……言葉がないな。

わかった、もうお前は出て行け。

俺とおまえの師弟関係だった書類は全て焼却処分しといてやるからお前は大量殺人の罪で刑務所にでも入ってろ」

こんな馬鹿に構ってられるか。

もう俺とはなんの関係もねえ!

「そうつれないこと言わないでよハタっちゅ♪

幸い村人たちは全員で他の村に出かけていたから村にいたのは僕様ちゃん一人だつ

たから被害者ゼロだし、村のみんなは村を破壊したことは許してくれてるんだよ。

まあ、その代わり村の再建費用を出したら一文無しになっちゃったから村人たちの提案でハタつちのところに来たのさ」

体(てい) よく追い出されたんだな。

しかし弟子のイトラを置いているのはともかく、元弟子のサラまでこの家に住まわせているのだからディオシキも置いてやらないと不公平な気がするな。

「ちなみに僕様ちゃんもハタつちの好みについてはサラにゃんから聞いてるから把握しているよ。

ほら、鍛冶屋に無理言って作ってもらった縞パンのキリンシリーズも持ってきてるし」

ディオシキはいきなり服を脱いだかと思ったら目の前でいきなり着替えを始めやがった。

ブホオ！

こりやすげえ！スタイルも抜群にいいし！

こいつが弟子だったのは俺が13歳でディオシキが10歳の頃だったが、その頃はまな板胸だったつてのにここまでどえらいナイスボディに進化しやがるとは！

それに縞パンのキリンシリーズだと!?

これは何が何でもこの家に泊めてやりたくなる！

「ハターン師匠？」

私以外を見るような目ならいらぬですよね。

その目を抉つちやつてもいいですか？」

言うが早いかイトラは持っていた剥ぎ取り用ナイフを俺の眼に刺そうとしてきやがった。

しかし師匠たるもの、弟子の攻撃を紙一重でかわさねばならない。

「ふむ、だがまだ甘いな。」

それに勘違いしているようだが俺の今の弟子はイトラなんだからかつての弟子よりもお前のことを多く見ているぞ。

それがわからないのか？」

そう言つてイトラを抱きしめる腕に力を入れてやる。

「えーすいませんハターン師匠。

私としたことが先走つちやつたみたいですね」

ふう、これでようやく落ち着いたか。

イトラも俺に依存しないでも済むように色々と手を打っておかないとな。

ディオシキはちよつと目を離れた隙に話は終わったと言わんばかりに貯蔵庫の食糧を勝手に食い漁つてるし。

こうしてなし崩しのにまたもや同居人を認めてしまった俺の日常はどこにいったのだらうか……

第四章：初めての4人クエ編

俺の弟子は超電磁ロボかよ

ディオシキも俺の家に正式に下宿することになり、色々と倉庫から引つ張り出してきて部屋を用意してやったというのに、この馬鹿弟子は一人で寝るのは嫌、とか言いやがつてサラの部屋で寝ることになったのだった。

俺が掃除や荷物整理に使ったのは3時間。

空き部屋をわざわざ掃除したりハンターとして必要なものをそろえてやったりしたのにディオシキの奴ときたら……

「はあ……まあ、いつものことだ。

俺なんてこうしてかつての弟子に苦勞をかけられて老いさらばえていくのが関の山なのさ……」

ドツと疲れてしまい自分の部屋に戻ってもう寝ることにする。

しかしこんな時でもイトラの修行用にハンターとしてのトレーニングメニューや座学のための教科書に赤線引いたり、することがあるのを思い出し机に向かう俺ってな

んてかっこいい師匠なんだろう、とか自分で言ってみる。

ふっ、俺って馬鹿だな。

「し・し・よ・う♪」

私が癒してあげますから元気だしてください♪」

部屋には鍵を掛けたはずなのにどうやったのかイトラが侵入し、机に向かっていた俺に背後から抱きついてきた。

これもいつものことなので別段驚かないが毎回どうやって鍵開けしてるんだろうな。

「どうしたイトラ？」

また眠れないのか？」

イトラはミラボレアスの討伐を成し遂げても寂しがり屋な性格だけは治らなかつたようで、弟子になってから毎晩俺の部屋に侵入してくるのだった。

ちなみに今のイトラの服装は特注品のキッズサイズのキリンxシリーズのシンボルカラー桃色というものだった。

うん、実に可愛い。

「今日来たディオシキさんって防具はキリンXシリーズの縞パンバージョンを装備して
いましたけど武器は何を使う方なんですか？」

見たところあの人武器らしい武器を持っていませんでしたし、大木を蹴りだけでへし
折ってましたし、もしかして素手で戦うんですか？」

「いや、ディオシキは一応双剣使いだ。

俺と同じで何でも使えるし、それと同時に暗器使いでもあるからあちこちに隠してる
だけなんだ。

武器は殺す手段の一つと考えているから双剣をよく使うのも一番多く持っているか
ら、というだけだしな」

俺が仕込んだ技術でもあるのだが、修行の過程であいつは『モンスター』、特に牙獣種
を見ると殺したくなる衝動を抑えられなくなってしまっただけから動物に無意味に殺気を与えなくて済むように武器を見せない練習として暗器を教えたけ
ど結局は治らなかつたんだよな。

「お、そうだ。

明日は狩り場に出てディオシキの狩りを見せてやろう。

あいつの狩りを見れば勉強になるからな」

そういや以前、ディオシキが弟子だった時にあいつに惚れていた他の新人ハンターを同行させたことがあったけど狩りのあとその新人君はハンターを引退したんだったな。でもイトラなら大丈夫だろう……たぶん。

「よし、それじゃあ今日はもう寝るぞ。

おやすみイトラ」

「おやすみなさいハターン師匠」

ロウソクの火を消し、布団を被る。

イトラは俺を抱き枕代わりになっているが俺の方もイトラを抱き枕代わりにして眠る。

ああ、キリン娘最高!!!

そして翌朝。

イトラと手を繋いで降りると台所ではキリンXシリーズの腰装備をビストロエプロンに変更したデイオシキがすでに朝食を作っていた。

この辺がサラと違って安心できるんだよな。

料理も俺がきつちり教えたから一流だし、ちよつと暴走するところを除けばかなり有能な奴なんだよな。

「おはよう、ハタっち&イトラちゃん♪

僕様ちゃんは朝ごはんを食べないと力(りき)でないから勝手ながら作らせてもらったよ。

イトラちゃんは目玉焼きには酢と砂糖どっちをかける?」

「あの、目玉焼きにかける選択肢ってそれだけなんですか?」

そういや説明していなかったがデイオシキはすっぱいものと甘いもの以外はあまり

好きじゃないんだつたな。

料理のレパートリーもこの二種類しか覚えていないが今でも変わらないみたいだな。

「あらゆる調味料を置いてあるから好きなのをかければいいさ。

それよりサラはどうした？

「一緒に部屋で寝たんだろ」

「サラにゃんは朝からジョギングに行ったよ。

しばらく帰ってこないし先に食べてましよう」

それもそうだな、サラは人に合わせるといのが苦手だし、その方が時間の節約になるな。

「ところで今日の予定なんだがちよつくらディオシキの狩りの腕をイトラに見せてやってくれないか？

お前のやり方は学べる点多いし、少しくらい過激な方がイトラの今後がいいと思つてさ」

「ふむ、それは大歓迎だ。

もちろん獲物は僕様ちゃんの大好きな牙獣種なんだろう？

それなら僕様ちゃんのすべてをさらけ出して見せようじゃないか♪」

座っていた椅子を蹴飛ばし机の上に飛び上がると高笑いを始めるディオシキ。

こいつは本当によくわからない奴だな。

「ではではイトラちゃん。

僕様ちゃんの戦いは子どもに見せるのは禁止されるほどすごい事になるけど君は進んで見たいだなんて本当に素晴らしい感性の持ち主だよ。

さあ、さつさと食べてちやつちやと狩りに行こうじゃないか！」

ディオシキに急かされて俺とイトラは3分で食事を終えてギルドへ向かうべく家の玄関を開けたところでちょうどサラが帰ってきた。

「およっ？

三人そろってお出かけか？
なら少し待ってくれ準備するから」

サラはそう言うその後ろに下がり、玄関から離れる。

それを見たディオシキが何をするつもりか理解したのだろう。

両手で頭上に円を作る。

「大地をゆるがす正義のハンターー！

あたしの一撃は嵐を呼ぶぜえー！」

サラは助走をつけて飛びあがり回転を加え、ディオシキの頭上の輪つかを潜り抜けた。

「さっすがディーちゃんだ！

あたしの考えが伝わりまくりだな♪

ディーちゃんを貫いたことであたしの走りはゴールを迎えることが出来たよ」

「ぎゃはは、サラにやんの考えがわからないようでは人間として終わってるよ♪」

「あく、やはりそうだったんですか。

私はなんとなく予想しましたけどまさか本当にそんなことするなんて驚きです」

「ディオシキはサラと仲がいいし考えがわかるのも当然だと思いがイトラまでこの二人のやり取りが理解出来ていたなんて……」

「すまん、俺はサラの考えが分からなかったぞ。」

「サラは防具と武器を装備した状態で走りに言っていたらしいのでそのままの格好でギルドへ向かい掲示板を見る。」

「さあさあ、狩りにいきましようか♪」

「僕様ちゃんのを腕を見せるならやつぱり獲物はババコンガでしょ♪」

「こうして俺達は4人そろっての狩りへと向かうのだった。」

牙獸種が大好きだ、だから殺そう

メタペ湿地林。

そこは鬱蒼と生い茂る木々と湿度の高い肌に張り付くような空気をまとった場所だ。

メタ発言をするならMHP2Gの旧密林のことだな。

それに今日は天候にも恵まれ太陽がこれ以上ないくらいに輝いているので密林の中に入っていくとその湿度から防具を脱ぎたくなる衝動に駆られる。

「これが狩り場でなければ裸で走りまわりたいくらいだな！」

「……あー、ハタっち。

心の声のつもりだろうが、今のセリフは びっちしばっちし声に出してたよ。

でもハタっちが実際に裸で狩りをするなら僕様ちゃんも一肌どころか全部脱いですっぽんぽんになってあげるけどどうする？」

「なに！」

俺としたことがこんな恥ずかしい馬鹿な妄想を声に出していたのか!？」

うわっ、恥ずかしい。

しかも変人のディオシキに指摘されるなんて俺はどうしたらいいんだ。

ああ、一人の時なら平気だが、みんなにこんな妄想を聞かれてしまうなんて穴があつたら入りたいぜ。

「でもあたしもその気持ちわかるぞ。

これだけ湿気がひどいと露出しまくりの乳揺れバリポーしたくなっちゃうよな♪

やっぱハターンはそれが狙いなのか？」

♪ 「私はむしろ師匠の裸ならいくらでも見たいですし私自身もいつでも脱いであげますよ

それともそれは私に脱がして欲しいという意味の発言ですか？」

激しく同意を示し、自身のレウスXシリーズを脱ぎだすサラと俺の鎧を脱がせようとしてくるイトラ。

「デイオシキもそれを見て　では自分も、と縞パンバージョンのキリン×シリーズを脱ぎ始める。」

「おい、なんのためにここに来たと思ってるんだ！」

今回はババコンガ狩りでイトラにデイオシキの狩りを見せるのが目的だろ。

川で泳ぐことが目的じゃねえぞ！」

とか言いつつ実は俺も鎧の下に水着を履いてきているのだ。

いいじゃねえか、俺だって泳ぐのは好きなんだよ！」

「ぎやはは、ハタつちは真面目だにやう。」

「防具がないくらいで僕様ちゃん達がババコンガちゃんごときに遅れを取るわけないじゃないか」

「そうだぜハターン。」

「お前は考え過ぎなんだよ、普通は川を見たら脱ぐだろう！」

「……そうか？そういうものなのか？」

ならば俺は今回の狩りは水着でいこう。

実は下に着てきているから脱ぐのは一瞬だしな」

俺が鎧を文字通り一瞬で脱ぐと同時に三人も脱ぐ。

こいつらのことだからキリンシリーズを模した水着でも着てきて俺を誘惑しようという作戦でも考えているのかと思っただがその心配はなさそうだな。

水着の端つこに模様に見せかけて『マル』と書かれているところから想像するにあののんびり屋で厄介事を毎回押し付けてくるギルドマスターのデザインしたものなんだろうな。

マルのことだからこれを勝手に『貸し』としてあとから俺に何かしら厄介事を押し付けるつもりなんだろうな……

……というか密林で水着姿の男女4人ってなんか変じゃないか？

「師匠♪」

そういうのは疑問に思っちゃダメなんですよ♪」

ふむ、イトラが言うならそうなんだろう。

暴走状態でもなければ普段のイトラは割と常識人だしな。

さて、そんなこんなで水着のままさらに奥へ進むとババコンガ発見。

「ああ〜ん、ガンコババちゃん発見だ〜♪」

作戦も何も無く、ババコンガを発見してすぐにデイオシキが突っ込む。

だがババコンガはそれを後ろに飛びのき回避。

それと同時に糞を投擲してくる。

デイオシキは投げられた糞を避けるどころか自分からぶつかって行き、さらには自分の体になすりつけていく。

「あつはー、これよこれ！

この匂いがたまらないのよお♪」

俺とサラはデイオシキのその性癖を知っていたので驚きはしないがイトラは驚いて

いるようだ。

「師匠、アレって大丈夫なんですか？」

まあ、普通に考えればババコンガの糞は雑菌も多く、人体にも有害なはずだしその心配は当然だろう。

というかそれ以前に傍から見れば糞まみれになって悦に浸るなんて異常でしかない。

「ディーちゃんは匂いフェチだからな。」

あたしはあそこまで壊れてないけどイトラもいつかはあんな風になるんじゃないやねーの？

なんせハターンに弟子入りした奴はあたしも含めてだけど何かしら異常を持ってるのが普通なんだからさ」

ディオシキの様子を当然のように見るサラは当然のように当たり前前にそう答えた。
やっぱサラの眼から見てもイトラは異常なんだな。

「私はハターン師匠と二人で暮らしていければそれ以外何も必要ありません！
私は普通です。」

普通にハターン師匠を愛してるだけです！」

それがすでに異常の兆候なのかもな。

俺に異常なまでに依存することが。

「ぎゃははー！

最高に『傑作！』ってやつだぜー♪」

ディオシキを見てみればさつきまで水着一枚しか身につけず手ブラだったというの
にその手に何本もの双剣を持ち次々とババコンガに突き刺していった。

「お、始まったな。」

イトラもよく見ておけ。

あれこそが俺がディオシキに教えた技術だ」

そう、俺がディオシキに教えたのは暗器使いとしての能力だ。

身体中に隠し持ったたくさんの武器による数と種類でどんなモンスターと対峙しても勝つための技術なのだ。

「UUURRRRYYY (ウウウリーーイイイ)!!

殺して解して並べて揃えて晒してやんよー♪」

ディオシキはますますエンジンが掛かってきたようで、双剣だけでなく大剣、ハンマー、ランスなどありとあらゆる武器をババコングに刺してゆく。

これもディオシキの異常性なんだが、こいつは修行の過程で人間以外の生き物を見ると殺したくなってしまうという衝動に目覚めちまったんだよな。

今のところは牙獣種に限定されてるけどそれもどうなることやら……

そこからはもうあまりにも一方的な展開が続くので俺はこのままディオシキに任せたままでいいと思ったのだがサラとイトラまでもノリノリになってババコングに攻撃を加えていった。

なんかババコングが哀れに見えてくるな。

手足を失いそれでも逃げようとしているところをディオシキの剣が、サラの拳（太刀

じゃないところに注目)が、イトラの銃弾が切つて、潰して、吹き飛ばしていく。

まつ、とりあえずこれでイトラも暗器使いにして『殺獣鬼』デイオシキ・ブラザキの
実力というものが理解できただろう。

そうして俺はこれからイトラをどのように成長させるかを考えている間に狩りは終
わったのだった。

俺の真の姿を見せてやろう!

ババコングを討伐したあとすぐにギルドへ狩りの終了を知らせようとしたのだが、依頼で決められていた時間を大幅に残してクエストクリアしてしまったため、サラの提案で俺たち四人は川で泳ぐこととなった。

なぜだろう? その答えは簡単だ。

サラ・ムーイは単純に泳ぎたかったからなのだ。

「ハターンどうだこれ?」

さっきまでの普通の水着とは別にハターンが喜ぶと思って素材に幻獣キリンの皮を使った水着、『キリンシリーズ・水着』を持ってきてたんだぞ!」

川でしばらく泳いでいると急にそんな事を言われたので、振り向いて見るとサラは先ほどまで着ていたマルがチョイスした水着を脱ぎ、それとは別に持ってきていたキリンシリーズを元にデザインしたのでだろう水着を見せびらかすようにしてきた。

さっきまで着ていた水着がキリン水着ではないからと俺も何も感じることなく直視

できていたというのに油断したところでさっきまでの水着とは別にキリン素材の水着までも持つてきて見せつけるだなんて、なんとも用意周到だな。

だが言わせてもらおう、これは素晴らしい水着だ!!

そしてしばらく水着を見せびらかすと、サラは水中であることを感じさせない動きで俺の背後を取り、キリンの皮で隠された二つの柔らかいものを俺の背中に押し付けてくる。

「おいこら、そんなキリン水着で抱きつくくなって!」

俺の男としての部分が大変なことになっちまうぞ!」

絡みついてくるサラを振りほどこうとするがサラも一流のハンターとしての身体能力を最大限に使い身をよじらせて俺の攻撃を巧みにかわす。

「ああー!サラにやんだだけハタつちとイチャついてずるーい。

僕様ちゃんもイチャイチャするー♪」

そんな事を続けていると、サラが俺に抱きついてるのを見て甘えなくなってしまうた

のだろう。ディオシキまでもが俺に飛び付いてきた。

ちなみにディオシキもキリン素材で作った水着に着替えていた。

こいつらの愛情表現は正直うっとうしいし俺も我慢が出来なくなってしまう。そうだから早いところ離れてほしいという気持ちは確かにあるんだが、段々と『もう少しこのままでもいいか』という気持ちになってきてしまう。

それに二人ともかつて弟子だった時よりも頭はともかく体は育ちまくってるからな。だが、顔には出さないぞ。

「うにゆる、ハタつちつてばほっぺもすべすべで柔らかいし羨ましいね。

僕様ちゃんもこのほっぺが欲しいから剥ぎとつてもいいかい？」

「お前、モンスターだけでなくかつての師匠にまでそんな事するようなら俺の手で引導を渡すことになるぞ」

ぞ。
ディオシキは冗談だよ、と言うがその目が本気であったことを俺は見逃してはいないぞ。

もし誰か他の一般人にまで迷惑をかけるようになったら俺がこの手で……揉みしだ

いてやる。

だがその様子を快く思っていない子もいるわけだ。
いい加減この二人がこういうことをするのにも慣れてほしいのだがな。

「お・ま・え・ら・コ・ロ・ス・ゾ」

言うまでもなくイトラだ。

サラもディオシキも黒化したイトラの眼力に固まってしまい動けなくなってしまうた。

はあ、仕方がない……

「イトラもこの程度で怒るな。

ほらブレスレットブレスレット」

固まった二人を振りほどいてイトラを抱き寄せてやると段々と目の輝きは落ち着いてきたので自然と二人の金縛りも解ける。

やれやれ、イトラは別の意味で手がかかる弟子だ。

「……ハタっち、それは『深呼吸しろ』という意味で言ったのかい？」

「あたしも疑問に思ったけどハターンが恥をかいちや可哀想だから突っ込まなかったのにディーちゃんはさすがだな。

大丈夫だぞハターン。

この事は100人くらいにしか言わないから♪」

と、開口一番にそう言われた。

……なに？ブレスレットというのは深呼吸みたいな意味ではないのか？

だが男つてのはどんな時でも堂々としていればカッコいいものなので黙っていよう。寡黙で渋いハードボイルドな男ハターンは小さいことにこだわらないのだ。

「それはさておき、ハターン師匠。

ひとつ聞きたいことがあります」

イトラは先ほどの出来事を気にも留めずに聞いてくる。
お願いだからさっきのことは言わないでね。

「さっきのババコンガ狩りでも師匠は戦いませんでしたので私はハターン師匠の実力が一度見てみたいと主張します」

「……そういえばまだイトラに俺の実力を見せていなかったな。」

よし、ちょうどこの川にはガノトトスが住み着いてるみたいだしノリで狩ってきてやるよ」

俺としたことが自分の実力を示し忘れていたとは不覚だったな。

ここはひとつ師匠として何かすごいところを見せてあげなければ。

イトラ side

ふふふ、師匠ったら可愛い♪

師匠の実力は疑ってないけどピンチの時に助け合うことで男女の恋は加速してい

くって言うし、ばれないように邪魔をして師匠にはピンチになつてもらいましよう。

そこで私が助けることで私の魅力に気づかせてあげるんだから♪

大丈夫、手足の一本や二本なくなつても私はちゃんと愛してあげるからね♪

うふふふふふふふふふふふふ♪

俺の理性はもう駄目かもしれない……

イトラのやつ、あの目は俺をピンチに陥れて吊り橋効果による相思相愛でも計画しているような目だな。

だが、俺がそんな計画に捕まってしまうようなチャチな師匠ではないことを示してやる。

「それじゃあちよつと狩ってくる。

サラ、デイオシキ。

二人ともイトラのことを頼んだぞ」

サラとデイオシキにイトラが押さえられるとは思わなかったがだからと言って何も言わないのは師匠として問題あるし。

一人での狩りなんて久しぶりだし本当のところ俺の活躍をイトに見せるとかよりも俺が楽しみたいという考えもあるんだよな。

そうして川底に潜るために肺の中の空気をすべて吐き出し一気に潜水を開始する。

ちなみに俺は超人的身体能力により呼吸どころか食事も水もなくとも一月は生きていけるのだ。

「(お、さつそく見つかったな)」

川底には食事中らしいガノトトスの姿を見つけた。

ガノトトスは俺に気づいたらしくゆつくりと様子を窺うように近づいてくる。

このガノトトスみたい用に用心する心構えを弟子たちにも身につけてほしいんだがな。

あいつら単純だから作戦を立てたり考えて動くことをほとんどしないからいつか大怪我を負ってしまいそうだし。

まっ、それで死ぬようなら俺の弟子をやれるわけないしあいつらの事は気にせず、俺は俺の狩りを始めようじゃないか。

「だっしやあああああああー！」

川の水を大剣の衝撃波で切り裂き、すぐにガノトトスに接近し、その横つ面を思いっきり大剣で叩いて川から吹き飛ばし陸上戦にする。

うん、やっぱ戦うなら陸上戦に限るからな。

「そしてガノトトス。」

お前の次のセリフは『ギャオオオオオオー！』だ」

「ギャオオオオオオー！ はっ!!」

急に川の中から陸上へ飛ばされたことに驚いていたようだが、もともと水陸両用のガノトトスは落ち着きを取り戻し、ブレスを放ってくる。

そのブレスは難なく避けてトドメを刺そうとしたところで背後から俺を目掛けて飛んでくる物体を感じ大剣でガードをする。

「えへ♪」

師匠の手助けをしたくてサポートしようと思ったら外しちやった♪」

イトラだ……

やはりお前はこういう作戦だったのか。

「おいイトラ一応言っとくけど俺をサポートするフリをして吊り橋効果を期待してるならやめておけ。

俺はその程度でお前にときめくような柔らかな精神じゃないぞ」

「やつぱり……さすがはハターン師匠ですね。

じゃあこれでどうですか？」

イトラは先ほどまで着ていた水着を一瞬で脱ぐと次の瞬間にはサラと同じキリンシリーズ水着バージョンになっていた。

「こんなこともあるのかと思ってサラさんと一緒にトンお爺さんのところで特注して作ってもらってたんです♪」

と、着替えを終えたイトラは年に似合わぬ色気を出しながらその幼い体を晒してくる。

ぶほお！イトラの奴その格好でなんてポーズをとるんだ……

イトラだけは今回キリン水着を持ってきていないと思って油断していたがここでの水着を俺に見せるのか!?

ただでさえ今回はサラやディオシキの水着に普段の俺にはありえないくらい興奮していたというのにイトラの未成熟な四肢と膨らみかけたその小さな胸を申し訳程度に隠す幻獣キリンの美しい皮でできた水着は反則だろ！

見ればサラやディオシキもあられもないポーズで俺を挑発してくる。

「ハターン、お前の大好きなキリン娘三人衆による応援団はどうだー？」

「ちなみに言つとくけど僕様ちゃんに脱ぐのが好きなんじゃなくて見られるのが大好きなだけだからその辺を勘違いしないでね。

と言うわけだからハタつちになら特に見せたいし存分に見てちょうだい♪」

こりや、すごい。

まさに男の夢が詰まった最高の状況だ。

なんかもうガノトトスなんてどうでもよくね？

だってこの三人とイチヤついてそれで終わりにしてもいいじゃん。
誰もこんなおまけの狩りの結果なんて興味ないって。

「ギャオオオオオー！」

だがせっつかくいい気分で弟子三人を眺めていたのに心なしかイラついた様子のガノトトスが水ブレスを吐いて邪魔をしてくる。

「どうやらこのガノトトスは独り身のようだな。
さびしい奴め。」

「弟子にときめけ！」

「キリン娘にときめけ！」

「by, ハターン・モンスター」

俺は面倒になったので空高く跳びあがりガノトトスの背に降り立つと、その首に右腕を突き刺して中にある頸椎を一気にへし折る。

このやり方は楽ではあるが首に腕を突き刺すときに腕に血がつくからあまり好きで

はないのだがたまにはいいだろう。

すぐ傍に川もあるし俺はいま水着だし。

で、ボギンと。

命を狩り取った音が響く。

ガノトトスは首の骨を折った時点ですでに死んでいるが俺の攻撃はまだ終わらない。口の中に瞬時に大タル爆弾を仕込む。

「正義は必ず勝つー！」

チュドーン！

ガノトトスの死体に背を向けて決めポーズをとるとその瞬間死体が爆発した。

この演出のために俺はガノトトスの口の中に大タル爆弾を多数仕掛けたのだがやっぱりこれって最高にカッコいいよな。

剥ぎ取りが出来なくなるからあまりしないんだけど。

「ははははははー！」

見たか弟子よ！

この俺の真の姿をー！！」

なんか当初の目的とは大きく変わったがこれにてイトラに俺の腕前を見せる狩りは終了した。

……あれ？最初はディオシキの狩りを見せて終わりじゃなかったっけ？

第五章：ハターンが過去の清算？　　をする編 かつての同志

キリン娘三人衆に抱きつかれ、理性を失くした俺が踏みとどまることが出来たのはギルドからの迎えの馬車がきたからだだった。

ふいふ、あと少し遅かったら俺は弟子丼で三人を美味しくいただいでしまうところだった。

そんなことは俺の寡黙で渋くてカツコイイ男というイメージから大きく外れるから絶対に避けねばならない。

そしてその後は何事もなくギルドについて今は狩りの成功を祝うところだ。

「では、ババコンガ&ガノトトスの討伐を祝してかんぱーい！」

「「かんぱーい！」「」」

もちろん俺とサラとイトラは酒が飲めないからミルクだが、デイオシキはアルコール度数99%というとんでもない酒を飲んでいる。

「デイオシキはよくそんな酒が飲めるな。

カカオ99%のチョコなら俺も食えるけどさすがに度数99%の酒が飲めるとは思えんぞ」

「デイオシキは美味しそうに飲んでいるが普段は仲の良いサラでさえもその様子には理解できないという表情を隠してもいない。

「僕様ちゃんに言わせれば度数98%以下の酒なんて水とおんなじさ。

これくらいでない面白くないからね」

なおも酒を飲み続け、ボトル一本まるまる飲み終わると火のついたマッチを飲み込んだ。

「このお腹の中でお酒に火がついている感じがあつたかくて心地いいんだよねえ♪」

「デイーちゃんの腹が丈夫なのは知ってるけどあんまり無茶すると肝臓にも悪いぞ」

さすがにこんなに早いペースで酒を飲んで普通なら体を壊すだろうな。

だが、デイオシキはかつこよくポーズを作り、

「酒が肝臓に悪いのではない。」

肝臓が酒に悪いのだ」

いや、そもそも肝臓がないと生きていけないから……

「まあ、いい。」

それよりお祝いだつてのに料理がなかなか来ないな。

注文してからもう20分は経つたんじゃないのか？」

店の中を見渡せば時刻が午後4時というもつとも客の少ない時間帯で、客の姿もまばらでとてもここまで時間がかかるとは思えなかった。

「4人ともおく、おまたせしましたあ〜。

ご注文の女王エビと大王イカのパエリアよお〜♪」

今が旬だと言うので女王エビと大王イカのパエリアを注文したのだが俺の前に置かれたパエリアはなぜか他の三人のと違って半分だけスプーンで食われたように減っていた。

「おいマル。

あんた客の料理をつまんでたのかよ」

「あらあらあ〜、それは誤解よお〜。

つまむつてのは悪気があるから隠れて食べることを言うけどお〜、私はみんなの料理ならいいかなあ〜と思って堂々と食べさせてもらったのお〜♪」

そう言いながらマルはさらに俺の皿にスプーンを突っ込んでパクパクと食べ続ける。はあ、やはりこの人にとっては人の物も自分のものなんだろうな……

「うふふふふふ♪」

私たちのお祝いに手をつけるなんてマルさんったら死にたいの？

ハターン師匠は特に大活躍だったからお腹減ってるんだよ。

だから私があなたを料理しても文句を言わないよね♪」

イトラは腰に提げた剥ぎ取り用ナイフを構えマルに飛びかかる。

「はい、待ってイトラ」

毎度のことながら今回もイトラは俺の膝に座っていたので掴みやすい位置にあった襟を掴んで抱きよせて俺の胸に押し付ける。

「きゆう」

すると途端に大人しくなり、俺の首に腕を絡ませて穏やかな表情になっていく。これも毎度のこと。

「まあ、そういうことだマル。

料理は別にこのままでもいいけど代金は払わないからな。

それとイトラは暴走すると後先考えないからお前ももう少し考えて行動しろよ」

「ふふふう、たしかにい、今のイトラちゃんは恐かったけどお。」

偉い人の言葉にこんな言葉がありますう。」

『考えるな、感じる』とおく。」

「お前の場合は『感じるな、考えろ』だ。

俺が側にいないときにイトラがブチ切れたら死人が出るんだから気をつけろよ」

もしかしたらイトラはディオシキの殺傷衝動までも身につけちゃったかな？

もしそうなら厄介だがイトラは何でもこなせちゃうからそのまま殺人衝動に向かってしまいそうだな。

そんな事をグダグダと考えると俺達のテーブルに近づいてくる一人の女がいた。

「お久しぶりッス、ハターン会長。」

ウチを覚えてますか？

あなたの参謀『キリン娘愛好会』の元副会長ルナ・ギドイトが久しぶりに遊びに来たツ
スよ♪」

……テーブルを囲む三人の視線が目の前の女、ルナと俺に交互に向けられる。

こいつとは……『キリン娘愛好会』とは決別したはずなのにな……

これが俺の今後に大きく影響を与えるだろうことを考えると若干の不安もあるがもうノリで済ませちまうか。

ちよつ、俺の過去をバラすなよ!

「ざつすがハターン会長ツスね。

リアルでこんなに可愛いキリン娘三人を食べちやうだなんて憧れるっす!」

俺の過去を最もよく知る女が来た……

この女の名はルナ・ギドイト。

かつて俺が『キリン娘愛好会』の会長をしていた時に副会長を務めていた同志だ。

あらゆる銃火器(ライト、ヘヴィ、ガンスのこと)に精通し、ギルドナイトの一員でありながら『キリン娘愛好会』の参謀としてその名を大陸全土に広めたのは俺よりもこの女の力が大きいと言えるだろう。

「会長が愛好会を抜けた後、ウチも抜けて仕事に専念してたらこの間ギルドナイトの千人長に出世したんツスよ♪

でもやっぱりキリン娘に囲まれる生活も恋しいツス♪」

ちなみに付け加えるならルナはレズなので自分がキリン娘とにやんにやんしたいがために『キリン娘愛好会』に入ったのだ。

「ハターン師匠？」

この女は師匠の恋人だったりはしないよね？

もちろん師匠の初恋の相手は私でしょうけど私に出会う前に恋をしたことがあるってんだったら私もそれ相応の手段に出るよ。

けど今白状するなら指一本で許してあげるんだよ♪」

イトラは現在俺の膝の上に座っているわけだが、その両手にはディオシキあたりがあげたのだろう、いつもの剥ぎ取り用ナイフではなく人間の首を切り落とすために作られたかのような大ぶりのナイフを握り、俺の喉につきつけてくる。

あ、少し刺さった。

「イトラ、落ち着け。

こいつは……俺がかつて『キリン娘愛好会』を立ち上げた時に手伝ってくれた同志で、特にやましい関係ではない。

「そうだろルナ?」

「ウチは男には興味ないツスけど初めてウチをドツキドキにさせてくれたハターン会長のことはめつちや好きツスよ♪」

否定はしないのか。

サラとディオシキは大笑いしながら見ている。

俺を助ける気は皆無……というより、自分達の知らない俺の過去を知る女に興味があるようだな。

「あれはまだウチが12歳、ハターン会長が13歳の時。

夜の酒場で偶然出会ったウチら二人はキリン娘が大好きという共通の夢を実現するために協力しあった結果『キリン娘愛好会』が生まれたんすよ。

ハターン会長は途中で『ハードボイルドに俺はなる!』って言って愛好会を抜けて急に寡黙なハンターになつちやつたんすよね」

「あの頃の俺はまだ若かつたのさ。」

そして固ゆで卵のような男の中の男になれば自然に俺の魅力に惹かれて集まってくるかと思つてたんだが集まつてくるのはどうもこんな頭のネジのぶつ飛んだ弟子ばかりさ。

いや、まあ可愛いんだけどね」

イトラはすでに定位置となつている俺の膝の上から殺気を振りまき、サラとディオシキも『自分たちの魅力が分からないならわからせてやる！』と店の中だと言うのに防具を脱ごうとしますし。

はあ、まったくやれやれだな。

「で、そんな過去の思い出話を咲かせるためだけに来たわけじゃないだろう。

本当の狙いはなんだルナ？」

こいつが来たということは今度のトラブルはギルドナイトも動き出すような騒動なのだろう。

というか俺の知り合いが来て面倒なことにならなかつたためしがない！

俺にかかわってくる連中は出てくるたびに騒動を持ち込む輩しかいないからな。

「さっすがハターン会長ツス!

その慧眼による推理力にはただただ脱帽するばかりツスね♪

いつかはウチもそんな会長のようなキリン娘とリアルでにやんにやんできるハンター、もといギルドナイトになりたいと思うツス!」

「前置きはいい。

さっさと言葉」

「ちなみに前置きを続けさせてもらおうと、ウチもギルドナイトの中では人気があるから先週の『週刊ギルドナイト通信』で紹介されていた『可愛い新人ギルドナイト』特集でトップ10入りした女の子は全員食べちゃったんすけどね♪」

と、舌を出して照れたフリをする。

そう、フリだけで実際には反省も後悔もなく部下は自分のおやつ程度に考えてるのだから。

「お前はあのベスト10の女の子全員食っちゃまったのか。

俺も気になる子がけっっこういたってのに本当に手が早いなお前は。

とうかそもそも職場にまで百合の風を巻き起こす女を千人長に任命するなんてギルドの上層部は何を考えてるんだ!?

まったく……どうして俺の周りにはこんな変人しかいないんだよ」

こいつもどちらかと言えばカッコいい顔してるし同性からモテるんだろうな。

なんて羨ましい。

そう言えば確かに先週の『ギルドナイト通信』に出ていた新人の女の子達のコメント欄に『ルナに憧れて入った』と書いてあったけどそういう経緯があつたんだな。

「ふっふっふ、ウチはこれでも仕事はバリバリこなしてるからパーフェクトクールビューティーにも見えるらしいツスよ。

だから勤務中に『仕事の事で話がある』と言っては個室に引つ張り込んでウチのコレクションしているキリン装備を着せてにやんにやんしても上からは全然疑われてないツス♪

で、本題なんですが会長の立ち上げた『キリン娘愛好会』なんですけど昔とは全然別

物になって腐敗していつてるみたいなんスよ」

急に真面目な顔になったと思つたら真剣に話し出した。

こいつは本当に公私の切り替えが早い。

早すぎてついて行くのに苦労するのもいつも俺なのだ。

「なんだ？」

もしかして裏で密猟や奴隷を買いあさつてキリン娘を飼育し始めて、とかじゃないだろうな？」

「よくわかつたツスね！」

この事は連中も上手く隠してるからまだ表には出てないツスけど、どうやら連中は法を犯してまでキリン娘を大量生産しようと画策しているみたいツス！」

マジで当たりかよ！

てゆーか俺が作つた『キリン娘愛好会』は俺が抜けても問題ないようにちゃんと規則を文書化してあるし、そのルールを守る奴しか入れない決まりになってるのにか

らそんな腐敗しちまったんだ！

「つたく許せねえぜ……」

許せねえよなルナ。

キリン娘つてのは鍛え上げた女性ハンターの引きしまった無駄のない筋肉と適度な脂肪の混じり合った女性ならではの柔らかさのある美しいボディと、申し訳程度に隠す布地部分の絶妙なバランスによつて成り立ち、汗ばむ肌と煌めくキリンの皮が生み出す芸術的な眩い光こそ最高のものだ！

だというのに裏で奴隷を買つてきて、適当なハンターに密猟させて手に入れた素材で作ったキリンシリーズを着せて悦に浸っているような馬鹿共が俺の作つた愛好会の看板に泥を塗つてるなんて許せるわきやねえだろうがあああ!!」

「会長ならそう言つてくれると思つてたツス！」

ウチはこれからギルドナイトの仕事として『キリン娘愛好会』の本部に直接乗り込むつもりツスけど一緒についてきてくれないツスか？

今回会長に会いに来たのもちよつと別件が忙しくて人数が割けないからハターン会長ならそう言つて協力してくれると思つたからなんスよ」

「もちろんっついて行くぞ!

イトラ達はどうする?」

イトラ達にも一応確認のために視線を向けてみればイトラ、サラ、ディオシキの三人は俺についてきてくれるようだ。

「私もサラさんやハターン師匠に拾われなければ奴隷としてその子たちと同じ運命だったかもしれないですしそんな連中を許せません」

「あたしの大好きなハターンを怒らせるなんて本当に許せない連中だよな!

きつちり、地獄すら生ぬるい暴力でとっちめてやる!」

「確かにハタつち繋がりで愛好会の人たちにも友人はいるからその人たちの安否も気になるしね。

「僕様ちゃんもついていくよ」

さすがは俺の弟子だ。

俺の気持ちを分かってくれるなんて今日ほど三人の存在を嬉しく思ったことはないぞ。

「よし、今日はこのまま『キリン娘愛好会』を叩き潰しに行くぞお！」

「おー！」

こうして俺達は店を出るとルナが用意してくれていた竜車に乗り込む。

聞けば俺が同行すると言う前から用意されていたらしい。

俺がついて行くのはこいつの中ではすでに決定事項だったんだな。

あとギルドナイトの仕事を手伝うわけなんだから酒場での代金はしっかりとルナに払わせた。

ふつ、俺はいつでも冷静な頭脳を持っているからどんな事情があってもただ働きはしないのさ。

なんかこれって最高にハードボイルドじゃね？

貴様が降参しないのなら俺はこの組織を破壊しつくすだけだ

トイダーヴァの街の近くにレタリーボアというそこそこ大きな村がある。

もちろん大きいと言っても村なのだからトイダーヴァの街とは比べものにならない程度の規模だ。

だが、ある者にとっては聖地として崇められ、毎年多くの観光客が訪れることでも知られていた。

そう、過去形だ。

今は腐敗した『キリン娘愛好会』によって出入りが異常なまでに厳しい場所となっているようなのだ。

「さあさあ、今日は新しい娘が入荷してるよー！」

今買うならキリンシリーズの無料修理サービスのおまけつきだー！」

「二人まとめて買うともう一人おまけについてくるよー！」

この『キリン娘愛好会』の聖地レタリーボアに来たからには買っていないと損だよー！」

周りを囲む商人たちの声の響く中に俺達は今来ているわけだなのだが。

「想像していたよりも事態は深刻だな。

まさか本当に奴隷までも扱っているとはこの村はどうなっちゃったんだ！」

思わず声に出してしまったが誰も俺らのことなんて気にした様子はないな。

商売が忙しいのかもしれないがこんなのを商売にするなんて人として間違っている。

「これはこれはさすがの僕様ちゃんも予想外だよ。

この村は以前来た時は国からも軍人が派遣されていたからこんな堂々と奴隷商売みたいなおことをしてたらすぐに捕まってたんだろうけどね。

出這入りにいちいち許可証や厳しい審査があるからこんなになったのかもね」

「たぶん、警備の軍人に賄賂でも渡したんじゃないのか？」

あたしもこの村には以前来たことがあるけどその時はしつかりと警備員もいたしき」

ディオシキとサラもまだ『キリン娘愛好会』がまともだった時に一度観光に連れて来たことがあるんだが、その時二人と仲良くなった村人達の姿が見えないことも心配しているのだろう。

ふとイトラに視線を向けてみると自分の過去と被つてしまうのか青ざめた顔で俺のズボンにしがみつき身体を震わせている。

「すまないなイトラ。

お前のことをもつと考えてやるべきだったよ」

ついてくると言った時点でイトラはトイダーヴァの街に置いてくるべきだったかもしれないがここまで来た以上、今回のことを糧にさらに強いハンターに育つてほしいもんだ。

孤児になってすぐにサラが引き取ったとはいえ、何かしらトラウマでもあるのだろう。

俺はイトラの小さな身体を抱き上げて優しくなでてやると、そのまま目的地へと歩を

進める。

「やっぱり本拠地の場所は変わってないみたいッスね。

ハターン会長、調べによりますと『キリン娘愛好会』の現会長はアクト・シヨニクウを捕まえる証拠も十分なのですが奴はモンスターを手なずけて警備に当たらせているようなので注意してくださいね」

ルナの忠告はありがたいが特に準備をする間もなく敵さんのお出ましのようだ。

「……どうやらずいぶんと手荒な歓迎してくれるらしいな」

『キリン娘愛好会』本拠地前の正面玄関を開けるとそこには多くのモンスターがいた。イヤンクック、ゲリヨスなどの鳥竜種からリオレウスやディアブロスなどの飛竜種など、数多くのモンスター。

それらが鎖につながれて出てきたのだ。

「くつくつく、やはり来たか『キリン娘愛好会』初代会長にしてトイダーヴァの街の第一

位のハンター、『最強』のハターン・モンズータよ」

建物の奥から現れたのはまるで王族が使うかのような無駄に豪華な玉座に座りふんぞり返るけっこうな年をした隻眼の男。

「『最強』？」

イトラが首をかしげて俺を見上げてくる。

「『最強』ってのは俺の二つ名だ。

俺を現す言葉はこれしかないってんでギルドや他のハンター連中全員がこの二つ名で尊敬してくるもんだから否定するのが面倒なだけで俺自身が名乗っている訳ではないぞ。

俺は二つ名なんてばからしいものはいらないとだからな」

こんな恥ずかしい二つ名を弟子に教えんじゃねーよ！

寡黙で渋いカッコいいハンターにそんな呼び名はいらねえんだよ！

「ふん、『最強』殿はこの二つ名を気に入っていないようじゃな。

それにしても君ほどの者が弟子まで連れて来るとは予想外じゃったぞ」

現会長のアクトはディオシキとサラ、そしてイトラを見るとあからさまに馬鹿にしたような声で言ってきた。

「どうやら三人を知らないらしいが俺の弟子を馬鹿にするとはやつぱこいつムカツクな。」

「ハターン会長はただの手伝いツス！」

今回の騒動の総指揮はこのウチ、ルナ・ギドイトの仕事ツスから」

ルナは一歩前に出て、そう宣言する。

「面白い、ではこの私を捕まえたければここの警備員でもあるこのモンスター達を倒して見せるんだな！」

アクトは高笑いとともにモンスター達の鎖を解き放つ。

「やれやれ、まったく面倒なことをしてくれるぜ」

ならばこいつらを皆殺しにしてしまおうしかないな。

滅びゆくなら自分の手で

「この『新生キリン娘愛好会』の警備員をやらせているモンスターどもを倒すことができ
るのならギルドナイトにでも死刑台にでも自分から行ってやるわい！」

こいつらは特殊な薬で小さい頃から調教してきたからワシには絶対服従じゃしこの
頑強な甲殻に傷をつけるなんて生半可な攻撃では不可能だろうがなあ、ふぁーはははは
は！」

どうやらアクトは自分の育て上げたモンスターに絶対の自信を持っているようだな。
だが、そんな事でこの俺が諦める訳がないだろうに。

「よーし、四人は見てろ！」

「ここは俺が一人で殺つてやる」

俺が俺のために作った『キリン娘愛好会』がこんな俗物根性の染みついたアホの手に
渡ってしまうなんて俺のミスでもあるな。

未来あるうら若き女の子たちを無理矢理従わせるような腐っちゃまった組織の存在なんて断じて認めねえ！

俺の手で、初代会長としてぶっ潰してやる。

「さあてイトラ、この異常で無敵な俺が不本意ながら『最強』と呼ばれる由縁をとくと見せてやろう」

俺が手を振ると次の瞬間俺の手には数多くの種類のの武器が握られていた。

ディオシキの暗器の技術は俺が教えたのだから当然俺にも出来るし、その異常性はディオシキ以上なのだ。

「はっはー！

俺の体は武器で出来ている……

てめエら皆殺しだアー♪」

この状態になると俺も自分を抑えられなくなってしまうから寡黙で渋いハードボイルドな男を目指す俺としては使いたくない手ではあるのだが出し惜しみはしない。

普段使っている大剣にこだわらず、あらゆる武器を千や万の数を取り出すと同時に投げつける。

何頭かはその武器の雨で死に、生き残ったモンスターも翼や胴体を地面に縫い付けられ、身動きを封じられる。

「うりや、モンスター手裏剣！」

そうして動きの封じられたリオレウスなどの巨体を誇るモンスターを掴んでは投げ、掴んでは投げ、目に映るモンスターを全て殺戮してようやく止まることが出来た。

ふう、さすがにこの殺戮状態はあまりカッコよくないからな。

「くくくうううう、よくもワシの自慢のモンスターたちを……」

おい、子分A！

例のモンスターを連れて来い！！

「しかし会長！

あのモンスターはまだ調教が済んでいませんので危険です！」

モンスターを全て殺されたアクトは側に控えていた男に切り札らしいモンスターを出すように言うが子分の男は反対しているようだ。

「ワシの言うとおりにできんのなら死ね！」

アクトは控えていた男をナイフで殺し、建物の奥へと走って行った。

「こら、待ちやがれ！」

「あ、ハターン会長。

深追いは危険ツス。

さつきギルドの応援が来るといふ連絡が来たツスからここにいる連中が捕まるのは時間の問題ですし、ここは応援が来るのを待って慎重な行動をするべきツス」

「僕様ちゃんもルナちゃんに賛成よ。

あいつはまだ何か奥の手を持つてるみたいだしここで無理に攻める必要はないと思

うの」

ルナとディオシキは慎重だな。

だが、俺の作った『キリン娘愛好会』をここまで潰してくれちゃった張本人を人任せになんてできないし、即効でブチっ殺してやりたい衝動を抑えられないんだよ！

「あたしはハターンに賛成だ。

ハターンの大切なものを踏みにじった外道を潰さずして真の平穩はないと思うぞ」

「私はハターン師匠のためだけに生きてるので常にハターン師匠に従います。

このまま一気に潰しましょう！」

おう、サラとイトラの二人はわかってるじゃないか。

そうだよな、ここで引き下がったら俺が俺じゃなくなっちゃうもんな。

ルナとディオシキを無視してそのまま奥へと進む。

アクトは奥の部屋に隠れること無く堂々とした態度でそこに立っていた。

「はーっはっはっは！」

『最強』のハターンもこれで終わりだ。

『キリン娘愛好会』の予算のほとんどを使って捕獲してきたこの最強の化物にお前らはなすすべもなく殺されるのだー！」

アクトが最後の切り札として出したのは雪山の主としても知られるとにかく巨大なモンスター、ウカムルバスだった。

「グゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオー！」

だが大きさが俺の知っているウカムルバスの比ではない。

この大きさと迫力、さてはこいつ何か改造されてるな。

「ふっふっふ、さすがにハターン殿は気づいたようだな。

こいつは子どもの時に攫ってきて外科手術で脳を直接いじることで成長ホルモンを過剰分泌させ、通常のウカムルバスの倍の大きさと凶暴性を得ることに成功したスー

パーウカムルバスだ！

こいつならいくらお前さんが『最強』でも倒すことはできまい」

アクトの声に呼応するかのようにスーパーウカムルバスは建物全体に響くような鳴き声を発する。

「ううむ、すばらしい。

実にすばらしい化物だ♪

さあ、スーパーウカムルバスよ、このワシに楯突く愚か者共を殺すのだ！」

だがその一言がスーパーウカムルバスとやら気に障ったのか、アクトはウカムルバスに呑み込まれてしまった。

何をやってんだろうな。

だが、さすがにこれほどの大物相手だと実力的にまだ未熟なイトラにまで気をつかってやれないからヤバイかもしれないな。

俺が囿になっている間にイトラを退かせてサラとデイオシキとルナの三人を攻撃の

主軸に据えるのがいいかもしれん。

「よし、俺が囿をするからイトラは下がってサラ、ディオシキ、ルナが遊撃をしろ！」

「「嫌です！」」

うおう、こいつら即効で俺の作戦を拒否しやがった。

「ハターン師匠、その考えを否定させてもらいます。

私ももう一人のハンターとして戦えますし、さっきのハターン師匠の戦い方もすでに完璧に記憶しましたので安心して背中を任せてください！」

イトラはさっき俺の動きをもう覚えたのか……他の三人はイトラの意思を尊重する気なんだろうな。

しゃーない、俺が師匠として、会長としてカッコいいところを見せてやるとするか。

「よおうっし、てめエら！」

しつかりと俺についてこいよ！

この俺の脅威の大宇宙パワーを見せてやる！」

さあ、潰してやるぜウカムルバス。

悔い改めな!

雪山の主ウカムルバス。

これまで何度か狩ったことがあるがこいつの脅威は雪山でこそ発揮されるわけだからぶつちやけ周りに雪も氷もない温暖な気候のレタリーボアの村ではその力が発揮できていないのだ。

つまり何が言いたいかと言うと。

「やっちまえ!

俺の愛しの弟子たちよ!」

「僕様ちゃんの技術は世界一イイイ!」

「あたしの拳が真っ赤に燃える!勝利を掴めと轟き叫ぶ!
でもティガレックスは関係ないぜ♪」

最初に飛びだしたのはディオシキとサラ。

ウカムルバスは地面が雪でも氷でもないため（この部屋は飼育しているモンスターが逃げ出さないように鉄板で覆っているようだ）掘り返すこともできず、その巨体故に移動すらままならないのでこう言ってはなんだが動く的でしかないのだ。

それに二人は近接戦闘に関しては俺に次ぐ実力を持ち、弟子の中でも飛びぬけて強い。

この二人の攻撃は並みのウカムルバスなら272回は死んでいるだろう傷をいくつもつけていった。

ってサラは今回も素手かよ！

「私もハターン師匠の愛がある限り負けませんから♪」

イトラは機動力はまだないと言うので仕方なく俺が背負って中距離から散弾を撃ち続けている。

まだハンター歴二日じゃ体力的にウカムルバスを相手に動き回れないのは仕方がないか（何やら俺と一緒にいたいだけの気もするが）。

『阿武祖龍弩・アハトアハト』の大口徑による射撃は着実にウカムルバスの甲殻を削

り、ディオシキやサラがその脆くなった甲殻を砕くという作業を繰り返していく。

「さて、ここらでいっちょ師匠の実力をさらにひけらかしますかねえ」

イトラを背負ったまま飛びあがるとウカムルバスの頭の上に飛び乗った。

すでに弟子三人による攻撃で甲殻もほとんど砕け散って息も絶え絶えのウカムルバスにこの手を使うのは忍びない気もするがこんな組織に捕まった時点でこいつの運命は決まっているのだから仕方がないだろう。

「俺のとおっておきの武器を使わせてもらおうぞウカムルバス！」

俺が最後の一步手前の手札として常に隠し持っているお気に入り武器の一つ『魔剣良綱』だ。

禍々しい雰囲気纏い、光り輝くその様は見る者を惹きつける純粋に鍛え上げた剣の中の剣。

それを音も無く振り抜いて勝負は終わった。

「地獄でまた会おうぜ、ウカムルバス」

その言葉が引き金となったかのようにウカムルバスの体はバラバラと音を立てて崩れていく。

これにて『新生キリン娘愛好会』は消滅した。

「いやあ、さすがハターン会長ツスね。

どうツスか？

このまま旧キリン娘愛好会を復活させてみては」

まったくルナの奴め。

俺と弟子たち4人で十分だったとはいえ、終始一貫して柱の影に隠れていやがったな。

「いや、俺はもうそんな気はないさ。

言っただろ、俺は俺自身の魅力に惚れてくれるキリン娘とにやんにやんしたいのさ」

そう、『キリン娘愛好会』は俺にとっては大切な思いであり、過去のものだ。それに今の俺にはついてきてくれる可愛い弟子がいるからな。

「ハターン師匠、いま心の中で私たちのことを可愛い弟子と認めてくれましたね♪嬉しいです、私も師匠のことをとーっっても愛してますよ♪」

しまったイトラを抱っこしているのを忘れていた。

しかもこいついま心の声を読んだのか!?

「なんかハターン師匠と一緒にいると脳から発せられる電磁波?みたいなものを受信できるところになったのでハターン師匠の考えが読めるようになったんです♪」

うおう、イトラの奴そんな能力まで手に入れやがったか。

確かに俺も人の心を読むつてもある程度は出来るがこの能力は誰にも教えたこと無かったのに自分の物にするなんてさすがとしか言いようがないな。

「ぎゃはは。」

ハタつちつてば僕様ちゃん達のことそんな風に考えていてくれたんだ♪」

「おいディーちゃん。

こりや帰つたら4Pに突入だな♪」

デイオシキとサラはそんな事を言い合ってるし、ルナは遅れてやってきた応援のギルドナイト達にテキパキと指示を出していた。

はあ、不幸だ……でもないかもしれないな。

「これで『キリン娘愛好会』は完全に消滅し、この村も元の活気があふれる健全な村に戻るだろう」

そうして俺達の目的は達せられ、トイダーヴァの街へと戻ることとなった。

登場人物設定2

アクト・シヨニクウ

レタリーボアの街を本拠地とする『キリン娘愛好会』の乗っ取りを画策し、平会員としてなりを潜めていたが会長のハターンと副会長のルナがそろって抜けたことでこれ幸いと思い商人として培ってきた人脈を使い愛好会の中で少しずつ力をつけて真面目な他の会員を牢屋に閉じ込めて会長職に勝手に就任する。

一応キリン娘好きではあるが人として腐っているので力づくで従わせるやり方ではなく満足できない変態さんなので奴隷と密猟を始める。

モンスターの子どもを捕獲して人間に従順な警備員として自身の守りに使っているのでこれまでレタリーボアの出入りを厳しかったのとモンスターの護衛に誰も手出できなかつたからこれほど腐敗が進むまで誰も手出しが出来なかつた。

56歳、外見イメージは「ドラゴンボール」のパラガス

リユカ・モンスター

本作の主人公ハターン・モンスターの母親にしてハンターとしての師匠。役職としてはハンター協会の副会長をしており、会長職を務める旦那、つまりハターの父をサポートしている。

夫婦間はラブラブで見ている方が恥ずかしくなるほどの愛に溢れた家庭なのだがハターンはそんな両親を見ているのが恥ずかしいのでトイダーヴァの街で一人暮らしをしていた。

もちろん息子を溺愛しており行き過ぎた愛情の暴走も多々あるがそれでも息子を第一に考えての行動だったりする。

武器は狩猟笛を愛用しており、音を自在に操ってモンスターの体の自由さえも操作できるほどの音使い。

リユカ自身もけっこうな数の弟子を育ててきた実績を誇り、名トレーナーとして本も出していたりする。

ハターンの料理好きはリユカの影響でお料理教室の講師もたまにやっていたりする。ちなみに狩猟笛がなくとも声や心臓の鼓動などの音でも操ることも可能。

47歳、外見イメージは『ブラック・ラグーン』のバラライカ

マック・ステイツド

大泥棒として活躍し、犯行現場に必ず自分がやった印を残す習性がある。

ハターンの家にもテーブルにサインが残してあったのだがサラが暴れたためにサインには気づかなかつた。

両親はすでに他界しており、異常なまでに存在感が薄いので何をやっても自分の存在に気づいてもらえず、ついに泥棒になってしまったがそれでも誰にも気づいてもらえないかわいそうな人。

トイダーヴァの街で初めて自分の存在に気づいてくれた女の子のイトラに惚れてしまいイトラの心を奪うために色々と画策するが報われないと思う。

外見イメージ通り、二度三度出すかどうかは今のところ不明。

37歳。外見イメージは『大どろぼうホッツエンプロッツ』のホッツエンプロッツ。

カヤネ・グルルバ

ジャンボ村を拠点とするハンターで『キリン娘愛好会』のライバル組織『忍者娘愛好会』の二代目会長。

組織の長としては優秀だが、ハンターランクはまだ1なのでハンターとしては初心者。

先代会長はハターンと互角の殴り合いや口での勝負でも一歩も引かない確固たる信念を持っていたが怪我をして引退し、後継者を育てるのを忘れていたので人の上に立つ才能があるカヤネを急ぎよ2代目に据えた。

武器は片手剣のニンジャソードで、装備は忍シリーズ。

作者がMHP2Gで『狂乱家族日記』の死神三番のコスプレをするのに使っていた思いがあるという理由もあって忍者娘カヤネを出した。

15歳、外見イメージは特になし。全然イメージも無く書いてたキャラなので思いつかないのでw

ロッド・キツサ

トイダーヴァアの街の第四位のハンターの弓使い。

ハターンの母、リユカ・モンスターの弟子。

類まれな不幸体質のため採掘では『石ころ』、虫とりは『虫の死骸』しか出ない。

そのため武具屋で買ったハンターシリーズを装備。

武器の方は師匠のリユカにもらった『竜頭琴』を愛用。

音使いの能力は肉体支配しか使えないので音による衝撃波などは出来ない。

弓使いがMHP3ではけっこう強いみたいなので、こころで男のいつもニコニコ笑顔の前向きな新キャラでも出したいと思ったので出しました。

身長183cm、22歳、外見イメージ『涼宮ハルヒの憂鬱』の古泉一樹。

ワリサ

ハターンの最初のオトモネコ。

かつては気に食わない奴は誰であろうとぶつ殺す、という危険際ならない存在だったがある出来事がきっかけですっかりおとなしくなり、その後ハターンのオトモとして活躍する内にオトモネコの序列第一位となった。

農場の他のネコ達は全員ワリサの弟子でご主人であるハターンのために暗躍し続ける。

毛並みは銀色、尻尾は無く防具も特に装備している訳ではない。

というかハターンのネコは全員いつでもハターンに撫でてもらえるように防具みたいな刺々しいものを身につけていない。

必要があれば地面から取り出すようにしている。

ハターンに心酔しているため、ハターンが使える技術で使えないものはない、そのため暗器や糸の類も完璧にマスターし、『恐怖を感じない』という体質さえも身につけてしまっている。

ただしハターンと違って後天的に身につけた技術なので気を抜いている間は無効化される。

『ハターン農場』の三天王の一人。

カリピャー

『ハターン農場』警備ネコ部隊副隊長にしてワリサの弟子。

ある雨の日に木箱に入れられて捨てられて寒さに震えていたところを通りかかったハターンに救われ、ワリサの弟子としてハターンに仕えることを至上の喜びとしているネコ。

愛剣は『ストームルーラー』という嵐を纏う剣で相手の体格や体重に関係なく吹き飛ばすことが可能な剣。

ワリサの弟子で『ハターン農場』の三天王の一人。

サアズ

こちらは道に迷っていたら馬車の前に飛び出してしまい、危うく惹かれてしまうところをハターンに助けられてハターンに尽くすようになる。

ワリサの弟子で『ハターン農場』の三天王の一人

武器は不器用だったため糸使いの技術しか身につけてはいないがその実力はかなりのもの。

あとガーグア車の運転技術は他に類を見ないほどの実力者。

スーラン・ルシード

サラと同期のランス使いのハンター。

トイダーヴァの街はハンターの1割がG級ハンターなのだがスーランはその中でも下から数えた方が早いぐらいのレベル。

サラ以外の同期のハンターは全員狩り場で命を落としてしまい、唯一生き残り、かつ街でナンバー2のハンターまで名を轟かせたサラをライバル視しているが全戦全敗。

器用貧乏でどんな事でもある程度までこなせる才能はあるがそこから先にはなかなか進めないことを悩んでいたのも最後のサラとの勝負で勝てないことを悟って闘技場のモンスター調教師の仕事に転職する。

本人は寒いのが暑いのが嫌いなので前々から転職は考えていた模様。

器用貧乏キャラが出してみたいと思っただしたキャラなので外見イメージは『それ町のタツツン』。

第六章：この子にしてこの親あり編

胸に残るは苦さ

スーパーウカムルバスも討伐し、『キリン娘愛好会』の現会長であったアクトもそのスーパーウカムルバスに食われてしまった時点で組織はそのまま壊滅した。

その後の処理についてもギルドナイト千人長のルナの活躍により俺が会長をしていた時からの古参のメンバー達も本部の建物の奥に監禁されているところを発見され、彼らが良いように動けばレタリーボアの村もゆっくりだが確実に良い方向に向かうだろうがこれほどの騒動を起こした『キリン娘愛好会』は解散するしかなさそうだな。

「……ハタっちはこれで良かったのかい？」

かつての思い出の組織を自らの手で潰してしまつて」

「これで良かったのさ。

俺は初代会長としてこの組織に神の国への引導を渡したにすぎない。

それにここまで腐っていたのなら別に俺がつぶさなくとも誰かが潰していたさ」

確かに残念に思うところはある。

もつと上手くできなかつたか？

他にやり方があつたんじゃないか？と。

俺がこれから率先して動けばかつてのように『麒麟娘愛好会』を復興させることができるんじゃないか、と。

「寡黙で渋くてカッコイイ俺としちやあ恥ずかしい過去でもあるが、それでも大切な組織が瓦解していくのを見るのは辛いものだな……」

はっ、自分で潰しておいてこんなんじゃないやあ、弟子に示しがつかないよな。

「師匠、私は師匠のためならいつでも麒麟装備を着ますから元気だしてください」

「あたしもハターンのためだけに麒麟装備を作つたんだから見たいときはいつでも言ってくれよな」

イトラとサラは俺の心を読んだのだろう、どこか普段は見せない優しげな表情を浮かべている。

ははっ、俺らしくもねえ。

「すまない。

だがこれで過去にケジメをつけることが出来たし後の事はルナが上手くやってくれるだろう。

さっさとトイダーヴァの街に帰るとするか」

そうさ、俺にはこの可愛い弟子たちと自分の帰るべき家があるのだ。

これからも似たようなことがあるかもしれないがその時に考えればいい。

今回のことも俺の人生における思い出の一つに過ぎんのかな。

で、そんなこんなでトイダーヴァの街に帰ってきた。

「では『キリン娘愛好会』を潰し、奴隷商売を行う悪徳商人たちの撲滅を祝ってかんぱーいー！」

「「かんぱーい♪」」

「ディオシキ以外はミルクという締まらない宴だが、料理の方は店で一番の物を出してもらった。」

その様子を見ていたマルが近づいてきて、開口一番に
「おかえりい〜。」

「そう言えばあ〜、ハターン君にいく、お客さんが来ているわよお〜♪」

「ん？客？」

「また弟子の誰かが訪ねてきたのか？」

「でもサラとディオシキ以外で俺に会いたいなんて酔狂な奴なんていたっけか？」

月刊『狩りに生きる』の取材は先日済ませたばかりだし……

それとも王立古生物書士隊あたりから教鞭をとるように催促でも来たのか？

そんな事を考えてるとマルは勝手にその客を連れてきていた。

相変わらず俺の意見を聞くつもりもないような素早い行動だがそれはいいとしよう。いや、どうでもよくなった。

その客は俺のもつとも会いたくない人物でもあったのだから。

いやもうホントに、本当にその人物とはサラよりもデイオシキよりも付き合いが長くその二人に加えてイトラまでいるこの状況で会いたくない人だった。

「はあ〜い♪

ハターンちゃん、あなたの愛しのママですよ〜♪

元気にしてた〜?」

俺の母にしてハンターとしての師匠、リユカ・モンスタ。

47歳でありながら今なお現役。

『頂点』の異名を持つ文字通り女性ハンターとしての頂点に位置する俺の師匠の一人だ。

もう一人は俺の父だな。

「もうハターンちゃんつたら手紙すら全然よこさないし、新しく弟子の女の子をとつたつて聞いてたけどもつと詳しく小まめに手紙を寄こしなさいよ。

それと、そつちにいるのはディオシキちゃんとサラちゃんね。

はあい二人とも久し振りいゝ！」

「おい、こんな所でそんな大声出すなよ母さん。

恥ずかしいじゃねえか」

食事時でもあるため店内にはハンター以外にも多くの客で賑わっており、母さんのでかい声にほとんどの客が振り向いてくる。

だが騒ぎの中心にいるのが俺だと気づくと興味を失くしたように自分たちの食事に戻っていく。

おい、なんとか言えよ！俺がかわいそうな奴みたいじゃねえか！

相も変わらず以前会った時通りに元気な母さんはそんな喧噪お構いなしで俺の膝の上のイトラを見つけると、その手を取った。

「君がハターンちゃんの新しい弟子のイトラちゃんね。

はじめましてハターンちゃんママよ。

ところで君はうちのハターンちゃんのこと好き？」

「はい大好きです！」

いえ、むしろ愛してますし、さらに関係を発展させたいと思っておりますお義母様！」

母さんは俺の弟子に会うとまずは必ず挨拶から始まり、いつまでも結婚しない俺と結婚させようと思えるハタ迷惑な母さんなのだ。

そしてやはりイトラはそういう挨拶になるのか。

母さんは本気にしちまうから困るんだけど……

「まあまあ、もうハターンちゃんつたらこんな可愛い子に慕われてるんだつたらさつさと結婚してママに孫の顔を見せたらどうなの？」

口調は軽いがその言葉には子どものような笑顔に似合わない力強さがあつた。

どうやら本気で言っているらしい。

「さて、ハターンちゃん。

ママがここに来たのには当然ながらちゃんとした理由があります」

「そりゃそうだろう。

イトラに会うためだけに来たとは思えないし、母さんに限らず俺に会いに来る俺の知り合いは必ず厄介事を持つてくるからな」

「まあイトラちゃんに会うためだけという理由は本当なだけだね。

で、用件なんだけどそれは他でもなくそろそろあなたにも結婚してもらって孫の顔を見せてもらいたいと言うことよ。

幸いにもこのイトラちゃんはハターンちゃんのことを本気で愛してるみたいじゃない」

そう、母さんは前回来た時はサラと、前々回に来た時はディオシキと俺を結婚させようとしやがったのだ。

ちなみに二人とも俺のことを好いてはいるから子どもを産むのは構わないが結婚は考えてないというので母さんは諦めたんだが、イトラは本気で俺との結婚を狙っているからな。

ヤベ、これって俺詰んだ？

「し・し・よ・う♪

こうなつたらもう二人の関係を進展させましょうよ♪

お義母様も認めてるんならこのまま式場にゴーですよう♪」

頭の中はすでに俺とのバラ色新婚ライフで染まつてるんだろうな。

やれやれ、これもまた宿命ってやつかねえ……

俺はこの状況を打破すべく、これまでの経験と知識を総動員して対策を練るのだった。

イトラ・ウボンガの花嫁試験

「さあさ、ハターンちゃん。

ママは長旅で疲れてるんだから早いとこ家に連れて行ってよ♪」

「家の場所知ってるんだから一人で先帰ってろよ。

俺はまだ感傷に浸ってハードボイルドにミルクを飲んでいたいんだから。

ほら、イトラ達も何とか言ってやってくれよ」

「私はお義母さんに認めてもらうためなら何でもするから丁重に断らせてもらいます♪
師匠が私と結婚してくれるなら師匠の味方しますけど♪」

一瞬の逡巡もなくそう言つてのけるイトラ。

「あたし達もリユカさんにはハターン以上に世話になつてるし無理だぜ。

というかこの方がおもしろーじゃん♪」

「確かに面白いよね。」

僕様ちゃんもハタつちには世話になつてるけどそれはそれ、これはこれ、だもん♪」

イエーイ、とハイタッチをかまし、あくまで俺をからかつて楽しもうという意思がありありと見てとれるサラとディオシキ。

やれやれ、こいつらのことだから家に帰つたら、母さんがやってきたお祝いでもしようつて流れで俺がみんなの飯を作る羽目になるんだろうな。

「ところで母さん一人で来たのか？」

父さんはどうしたんだよ」

俺の両親もハンターとしてかなり名が知れてるのだがそれ以上にバカップルとしての方が有名なのだ。

結婚して27年だというのに今だに新婚のようなラブラブな毎日を送っている両親を見せつけるもんだから俺は家を出たんだがな。

ホントにバカップルだぜ。

「パパは狩りよ。」

『ちよつくら一人で狩りに行つてくるぜハニー』つて言つて一番いい装備を着て行つちやつたし、けつこう長くかかりそうね」

まったく父さんも自由人だな。

俺の父、ジドストラ・モンスータはハンター出身の叩き上げでハンター協会の会長というこの業界のトップにまでなつた人なんだが元ハンターだけあつて事務仕事をほとんど部下の人に任せて狩り三昧なおっさんなのだ。

これまでも仕事の手伝いをさせられたりで迷惑極まりない人だったが、ガキの頃は夜中にジャングルに放置されたり風船にくくりつけられて何処か遠い空に飛ばされたりと散々だったことを考えると少しはマシになつてきてるのかもしれないな。

本人は愛情のつもりらしいがあまりにも迷惑だったので俺は10歳の時にハンターとなつて独り立ちせざるを得なかつたんだよな。

今となつてはいい思い出だが。

「わかつた、じゃあ父さんが帰ってくるまで俺の家に泊つて行つてくれ。」

それとくれぐれもイトラに余計なことを吹き込むなよ。
絶対だからな！」

「はいはい♪」

でもせっかく遠路はるばるやってきたんだからあなたの可愛いお弟子さんたちと語らうことも必要でしょうし部屋は私たち4人一緒でいいわよ。

どうせ普段はイトラちゃんはハターンちゃんと、デイオシキちゃんはサラちゃんと一緒に寝てるんでしょ？」

う、鋭い。

サラとデイオシキが一緒に寝ているのはこの二人の仲の良さを知っていれば予想がつくかもしれないがイトラが毎夜ピッキングで俺の寝室に忍び込んでいることまで見抜いてくるとは……

恐るべし俺の母！

とまあ、そんな意味のないやり取りを終えたのち、結局俺は母さんを家に招いて料理を作り、母さん達は部屋に籠ってしまったので一人取り残された俺は自室で読書タイム

となった。

母さんはほつといても迷惑掛けてくるけど近づいて行くと余計面倒なことになるかな。

そしてベッドに横になりながら手にとったのは雑誌『週刊キリン娘』。

この雑誌を出版している会社『キリン娘愛好社』はかつての『キリン娘愛好会』の会員が立ち上げた会社で『キリン娘愛好会』が潰れたあと真面目な会員の生き残りたちを集めて愛好会よりも大きな組織へと育っているのだった。

こりや『キリン娘愛好会』を潰したのはいい方向にしか向かってないかもな。

イトラ side

うふふ、ここでお義母様に認められれば私と師匠の愛の日々は確実に前進するはず。必ず認められて見せるわ！

「そういえばサラさんとディオシキさんは何で師匠みたいに素敵な人との結婚を断ったりしたんですか？」

私なら師匠ほどの素晴らしい人と結婚できるなら問答無用で結婚しますけど」

実はけっこう気になってたんですよね。

この二人はハターン師匠になみなみならぬ愛情を持っているのは確かか……のようですけどそれを表には出しませんし私の応援をしてくれるのもありがたいですけど正直不安でもあるのです。

ここらで一つ聞いておきたいものですね。

「僕様ちゃんはハタつちのことはライクであってラブではないからさ。

そこにあるのは愛でも友情でもなく魂の共鳴！

というか僕様ちゃんは自分が変人である自覚があるから誰が相手でも結婚なんてするつもりはないんだね♪」

「あたしもハターンのことは好きだけど何かに縛られるのは好きじゃねーんだよ。

まあ、子どもだけだったら5分に一人のペースでポコポコ産んでやってもいいんだけどリユカさんはハターンの伴侶を探してるみたいだからあたしじゃ駄目なのさ」

なんともつたいない。

サラさんもディオシキさんも同じ女性として嫉妬してしまうくらいに美しいのに結婚を考えていないなんて。

私はそんな　いかず後家にはなりませんよ！

師匠を愛してますから!!

「さて、盛り上がつてるところ悪いんだけどここらでイトラちゃんの花嫁試験を始めましょうか」

あ、いけない。ハターン師匠のことを考えるとついトリップしちゃうのよね。

お義母様の前でいきなり失敗しちゃったかな。

「はい、お願いします！」

このイトラ・ウボンガ、ハターン師匠の名に懸けてお義母様の期待に応えられるように頑張ります！」

さあ、これからが本番よ！

愛が重い時もある

イトラ side

ここはトイダーヴァの街の第一位のハンター、ハターン・モンスータの家。
そこで未来の嫁姑の真剣勝負が始まるうとしていた……

……なーんちゃって♪

ナレーションみたいなことをしてみちゃいました♪

私はいまお義母様による試験を受けている最中なのですけれど。

「まず最初にイトラちゃんに言わせてもらいますとあなたは合格です。

うちのハターンちゃんのことを頼みますよ」

開口一番にお義母様が言ったのはそれだけだった。

正直『お前なんかうちの息子はやれん！』とか『息子と結婚したくば私を倒してか

らにしろ!』みたいな展開を想像していただけにちよつと拍子抜けです。

「もちろんお義母様のためにも一日も早く師匠を口説き落として孫の顔を見せてあげます。」

ではさつそく師匠にもう一度アタックしてきますね♪」

善は急げ、師匠にもう一度ちゃんと告白してお嫁さんにしてもらわなくちゃ♪

「はいストーツプ」

「にやぎぎー!」

せつかく新しく覚悟を決めた私の襟を引っ張って止めるなんてお義母様つたらどういうつもりでしょうか。

殺してほしいのかしら?

つと、いけないいけない、お義母様くらいには殺意を抑えないと師匠にも嫌われちゃう。

「さっきギルド待っている間にマルさんにも話を聞いてたけどイトラちゃんってば前に告白して駄目だったんでしょ？」

そのあとすぐにキリン装備で夜這いしたつてのあのハターンちゃんがキリン装備のイトラちゃんを拒んだなんてそれは寡黙で渋いハードボイルドな男になりたいという気持ち強い証拠よ。

そこで趣向を変えてみるの」

「どう変えるんですか？」

正直な話私は面倒な手順を踏んだやり方は好きじゃないですしこのまま乗り込んで行ってナイフを突き付けて結婚を迫るような実力行使の方がいいと思ってたんですけど。

師匠は私を殺せないけど私は師匠を殺せる。

だって私は殺したいほどハターン師匠を愛してるんですもの♪

「ふふふつ、実はこんなこともあろうかとギルドの関係者に無理言って色々を用意をし

てもらったのよ。

私自身もやり過ぎかと思うくらいだけど私の夫、ハターンちゃんのパパはハンター協会会長をしてるからその地位を利用した強権によるものなんだけどね」

そこで言うのを止め、お義母様は『楽しみにしてなさい』と言うだけでどうするのかを教えてください。

うふふ、でも師匠のお義母様ならそこまでの無茶はしないでしょう。

それでハターン師匠が私に惚れてくれるかもしれないならなんでもするわ。

その後お義母様は部屋の隅で二人でババ抜きをしていたサラさんとデイオシキさんの二人にも声を掛けて計画を実行に移すこととなったのです。

ハターン side

翌朝、母さん達はまだ部屋にいるらしいし、することもないので愛読書の『キリン娘全集1巻』（読む用）を読んでいたのだが何やら騒動が起きそうな気がしたので今日は一

日中寝て過ごそうと思い、ベッドに横になる。

「やれやれ、母さんも余計なことをイトラに吹き込んでなければいいんだがな」

もちろんあの母さんがイトラに何もしないととは思えないし、このまま観光を済ませて帰ってくれるとも思えない。

でもいいだろ？たまには何事もない平和な日々を送ることを夢見たとしても！

誰に言うでもなくそんな言い訳じみたことを考えながら目を閉じると家の外からイトラの悲鳴とモンスターの鳴き声が響いてきた。

もしやさっそく母さんが騒動を起こしたのか!?

「イトラ！

どうした！」

慌てて跳ね起きて外に飛び出して見るとそこには壊れた『阿武祖龍弩・アハトアハト』を持ち、血を流したイトラとその周囲にはリオレウスやリオレイア、その他多数のあら

ゆる種類のモンスターがいた。

「おいおいおい、こいつはどういう状況だ!？」

何でこんなにたくさんさんのモンスターがハンターの街トイダーヴァを襲撃してるんだよ!？」

とにかくイトラの安全が第一なので急いで駆け寄り、抱き上げると屋根の上まで跳びあがった。

その瞬間近くにいたりオレウスのプレスが先ほどまでいた場所を通過していく。

「イトラ無事か!」

なんでお前が怪我をしてモンスターがこんなに大勢いるんだよ!？」

イトラは息も絶え絶えになりながらゆっくりと説明を開始する。

幸いにも血を流してはいるがイトラの怪我はそれほど深くはないようだ。

モンスターどもはその間にも攻撃の手をゆるめたりなんてせずに俺とイトラを狙ってプレスなり体当たりなりを繰り返してくる。

さすがにイトラにこの数を一人で相手させるわけにもいかんし俺も本気で行くとしよう。

さあ、モンスターども、かかってこんかい！」

寡黙で渋いハードボイルドこそ俺らしき……のはずだ

母の策略によりモンスターだらけとなってしまうたトイダーヴァの街を守り、傷ついたイトラのためにも負けるわけにはいかない男の戦いがいま始まるうとしていた。

「てめえら、抱きしめてやる！」

地獄の、果てまで！」

ここが町ということもあり、俺は普段使っている武器を全て倉庫にしまっていたので防具の方もいつものブロミウスシリーズでも何でもないとだの『週刊キリン娘』の読プレで手に入れたキリンTシャツと安物のジーンズのみという状況だ。

普通のハンターなら武器も防具もない状況でG級のモンスター、その中でもとくに強い部類のモンスター達に大勢で囲まれては手も足も出ずに殺されるだろうが俺はそんな雑魚ハンターとは違う。

武器に頼っているようでは第一位の座は名乗れないからな。

「こつから先は地獄行きだぜエ！」

手近にいたティガレックスの頭に組みつき、頭蓋骨を締め付けて砕く。
名づけて超時空旋風締めだ。

並みのハンターではモンスターに触れることができるほど近づいて恐怖に震えない者はいないだろうから俺くらいにしかできない技だろうけどな。

そしてそれを繰り返し、次々とモンスターを仕留めていく。

素手でも単純に強く、恐怖を感じない体質の俺はバインドボイスを食らっても恐怖で体が硬直することもないので隙は一切ない。

あっさりど、簡単に、まるでショーのように華麗にモンスター達を仕留めていく。

「グガアアアアア……」

断末魔とともに倒れて動かなくなるモンスター達。

それを聞いていると段々と自分の中の殺意が目覚めそうになるがそれを必死に抑える。

「まじいな。」

ここで俺が本気を出したら背中のイトラのことを気にかけてやるのが出来なくなってしまう)」

背中では必死に俺にしがみつき、それでいてこの戦いから目を逸らさないイトラを見ていると自分がこいつの師匠だということを改めて認識させられる。

「(負けるつもりは端っからないが、せつかく弟子が見ているのだからこいつの前では『最強』でなくちゃならないよな)」

そうしてモンスターの死体の山を築きながら一向に減らないモンスターの大軍に向かっていく。

すると突然聞き慣れた音はその場に響いた。

「はあい♪」

なぜか偶然モンスターたちが街中に逃げだして大変そうなハターンちゃんのためにママが助っ人に来てあげたわよ♪」

突然現れたうえに、この状況でもあくまで自分には責任がないと言い張る母に俺は息子として何と言えがいいのだろうか。

「流石流石、流石はママの息子だわ♪」

でもその流石のハターンちゃんでもイトラちゃんを背負った状態で武器も防具も無しだなんてちよつと大変でしょ？

だから偶然通りかかったママが手伝ってあげるって言ってるんだからもつと嬉しそうな顔したらどうなの？」

「……悪いな母さん。」

今更そんな下手な芝居に付き合ってるつもりはない。

確かにこの数が相手ではいくら俺でも面倒だから手を貸してくれるのはありがたい。だがどうしてまだ経験や体力面で未熟なイトラにこんな無茶をさせたんだ!?

おかげでイトラが怪我しちまったじゃねえか!」

一応イトラの怪我也診てみたが大した事はないようだし、どうせ母さんの事だから面

白そうだから、というのが一番の理由なんだろうな。

「もう、ハターンちゃんだったらつまらないわね。

まあいいわ、教えてあげる」

そこで母さんは溜めを、本当に長い溜めを作りゆつくりと語り出す。

具体的には現在進行形で襲ってくるモンスターをさらに10頭ばかり殴って絞めて殺すくらいの時間だ。

「結論から言いますと最初に言ったようにハターンちゃんにはそろそろ結婚してほしいの。

だから聞いてると思うけどイトラちゃんを危険な目に合わせてそこを救ったハターンちゃんに命の危険を恋によるドキドキに錯覚させようと思っただけイトラちゃん私の予想よりも弱かったからこんな状況になっただけで私は何も悪くないわよ。

あと面白そうだったから♪」

いけしやあしやあと言つてのける母さんは見えてやはり自分の母なのだ気づか

されるものがあるな。

もちろん俺はここまで狂ってはいないつもりだぞ。

……たぶん……きつと。

「とりあえず手を貸してもらおうぞ母さん。

いや、『頂点』のリユカ・モンスター」

ふふふ、何だかんだで俺もこれだけの数のモンスターを一度に殺しまくり暴れまくることができののを非常識ながら楽しいと思っているのだからな。

「始めましょうか我が息子。

『最強』のハターン・モンスター♪」

こうなってしまうっては仕方ないし母さんは反省も後悔も無く、それどころか何も感じることなく、ただ本能のままに行動した結果を喜んでいただけなんだからこつちも楽しまなければ損だろう。

「さあ、狩りのはじまりだ（よ）」

最強親子の共闘

「私の歌を聞きなさいい♪」

母さんは肩に担いでいた狩猟笛を下ろすと演奏を始めた。

狩猟笛は俺も一応扱えるが母さんは俺なんかじゃ比較にならないほど狩猟笛の扱いに長けたハンターなのだ。

俺が隠れ音痴だということもあるが母さんも『頂点』と呼ばれるだけの力量を持っており本来仲間にしかな影響を与えない狩猟笛をモンスターへの攻撃としても使えるという異常なほどの聴覚を持っている。

「イトラちゃんの怪我も演奏により治療完了！

それと同時にモンスター達の動きも完全に停止させたわよ。

トドメを刺しちやいなさい♪」

モンスターは先ほどまで力の限りに暴れていたと言うのにその動きを完全に止めて

いた。

「了解だ母さん。

だがその前に……ハターンパワー全開！」

イトラの怪我は母さんが治してくれたから狩りに参加させても問題ないと思ったのだが肝心の武器の方が壊れていたのを思い出したのだ。

盾代わりにも使ったのかイトラの『阿武祖龍弩・アハトアハト』は見事に真ん中から二つにへし折れてしまっていたが俺が壊れたボウガンの破片を両手で包みこむように握り、なんとか形だけは修理することには成功した。

長時間の戦闘にでもならなければ再び壊れることはないだろう。

それと折れたボウガンを握ってからの修理の過程をどうやったのかは秘密だ。

「それにしても相変わらず母さんの笛による音色は異常なほど効果的だよな。

音で相手の体の自由まで奪えるなんて」

「これがお義母様の力なんですか。」

とんでもないですね」

イトラも常に異常な連中（一応俺も含む）に囲まれているうちに異常には耐性がついていただろうが俺の母さんはそんな異常とは異質のものがある。

そして野生のモンスターが動きを止めることがどれほど異常な事なのか、その使い手たる母さん自身は気づいていないのだからな。

まあ、本人からすれば出来て当たり前前の技術のようだが。

「私はハターンちゃんのママなんだからこれ位できて当然でしょ。

大体狩猟笛の音色が人間にのみ作用するなんて誰が決めたの？

『音』である以上聴覚を持つモンスターにも効果があっても当然よ」

母さんは笑顔でそう言うのと演奏を一旦止め、自分でも攻撃を開始した。

やはり母さんも、こうしてモンスターを前にすると殺意を抑えられなくなっただろうな。

笑顔のままモンスターの頭を殴り潰していく。

「イ・ト・ラちゃん。」

モンスター家の嫁に来るつもりならこれ位の事が出来ない駄目駄目よ。

確かにあなたの現在の弱さにガツカリしたのは本当だけどその素質には私はかなり評価しているのよ。

ハターンちゃん以上に才能がある子なんて今までに会ったこと無いしイトラちゃんはまだまだ伸びるんだから」

「はい、必ずお義母様の期待に応えられるくらい強くなってみせます！」

いつかはハターン師匠よりも強くなつて力づくで手ごめにして結婚までこぎつけます！」

そうやって一応の修理を済ませたボウガンを俺から受け取ったイトラは勢いよく手の中でボウガンを回転させ、適当に撃つたように見えてその実無駄撃ちが一切ない正確な狙いでモンスターの眉間を次々と撃ち抜いて行く。

やれやれ、ここで母さんに会ったことはイトラにとつてプラスになったのかマイナスになったのか分からんな。

俺よりも強くなつてくれるのは師匠としても嬉しいがそんな事を言われるとこのま

ま修行をつけてもいいものか分からなくなってくる。

「まっ、それよりも先にこのモンスター共の始末が先決だけどな。
よく見てろよイトラ。」

激流に身を任せ、同化することこそ狩りの極意だ」

目の前で必死に抵抗しようとしながらも爪や牙を少しも動かすことも出来ず、俺の拳が目の前に迫っても目を閉じることも出来ずに頭蓋を砕かれて次々と死んでいった。

いや、俺達三人によって殺していくことでそして狩りは終わった。

時間にして1時間もかかっていないだろう。

俺一人ならもう30分はかかっていたかもしれないことを考えると母さんの狩猟笛による音使いの能力はまさにあらゆる者の『頂点』に相応しい実力だな。

もしも俺と母さんが直接戦ったらどちらかが確実に死んでしまうことになりそうだ。そうならないことを祈りたいものだが俺の母さんだからいつか本気で親子で殺しあうことになるかもしれん。

「なーんて冗談を考えるくらいには俺の頭も冷えてきたか」

「師匠、何言ってるんですか？」

おっとしまった、イトラを背負っていることを忘れてつまらん妄想を考えてしまったな。

ちなみにイトラは体力的に機動力が低いので背負っていたのだが、激しく動き回っていた俺の背中からの狙撃を難なくこなすその天性のガンナーとしての素質には改めて惚れぼれするものがある。

「さあさあ、ハターンちゃん。

狩りが終わったらモンスターの死体の片付けが残ってるわよ」

そうだった……これだけ散らかしてしまっただうえにハンターは俺達しかいないんだったな。

「それじゃあママはこのまま自分の家に帰るから片付けはハターンちゃんに全部任せたわよ」

「ちよい待て！」

こんななおいていきなり帰るのかよ！

母さんがこの騒動の原因なんだから最後まで片づけて行けよ」

よく見れば母さんは自分が持ってきた荷物だけでなく俺が貯蔵庫にしまっていた俺お手製の保存食や酒や漬物なんかを詰め込めるだけ鞆に詰めて、ネコバアのように膨らませて背負っている。

本当にこのまま帰る気なのかよ。

「イトラの事はどうするんだ？」

俺の嫁や孫の顔が見たいって言ってたじゃねえか」

「イトラちゃんなら放つといっても近い将来ハターンちゃんを確実に超えるからしばらく見守ることにしたの。」

パパもハターンちゃんの好きなようにさせるつもりみたいだしね」

そう言うとき母さんは風のように走り去って行った。

「因果の交差点でまた会いましょう。」

ちなみにパパは今メラナト島という近くを通る船が全て沈没するっていう謎の島に向かったらしいからもしも行くことがあったら早めに帰るように言ってね。」

ドップラー効果を響かせ母さんの姿はあつという間に見えなくなりあとに残された俺はトイダーヴァの街のモンスターの死体の処理を一人ですることになった。

やれやれ、イトラも手伝ってくれようとしたが軽いいはいえ、怪我人を働かせるわけにはいかないし俺が一人でやるしかないんだろうな。

まったくこんな俺に本当に幸せは来るんだろうか……

第七章：泥棒ネタ混ぜ込んだ話編

暁の大作戦

「なああああーい！

ないぞおおおー！」

母さんが帰った翌日。

久し振りにのんびりした日常が過ぎせると思い、自宅の屋根に登って心地よい風を頬に感じながら熱いお茶を飲んでいたのでそんな落ち着いた雰囲気の中の日常は再び崩れさることになった。

「この声はサラか。

まったく俺の日常をどこまで壊せば気が済むんだ」

だが別段構ってやる必要もないのでそのまま放置し、イトラと二人で屋根の上に座り続けることにした。

イトラはいつでもどこでも俺にくっついてくるからすでにイトラが傍にいる状況が俺の日常になってしまっており、俺と目が合うと心底うれしそうな笑顔を向けてくる。うむ可愛いな。

「どうしたんですか師匠？」

私のハナマル笑顔でドツキンしたんですか♪」

確かにそうではあるが口には出さず静かにイトラの頭をなでてやる。

何も言わずに行動で示す方が寡黙で渋いかつちよいいハードボイルドな男っぽいな。

で、そういう訳なので（あまりイトラの可愛さを描写しているとボロが出そうなので）イトラの子ども特有の温かさや柔らかい抱き心地を感じながらサラの事は全力で無視しようと気持ちのいい風の中でのらりくらりとしていたわけだよ。

しかし家の中から響き渡る怒号と破壊音はますます激しくなり、途中からはデイオシキまでもが加わったのだろう、音はさらに破滅の音を響かせ家の中がどうなっているのか容易に想像がついてしまう。

「ハターン師匠、やつぱりサラさんとディオシキさんを放置するのはこの家の耐久性を考えれば出来ないんじゃないんですか？」

「……はあ、仕方がない。」

何が原因かは知らないが俺が出張らにやこの家が完全に破壊されかねんからな」

まったくあの馬鹿弟子共め、少しはイトラを見習って大人しく風情を味わうようなゆとりを持ったらどうなんだ！

ここ最近イトラは黒いというイメージが定着してきてはいるがそれでも大人しくしている時はいたって普通で俺の言うことにもけっこう従順だしあの二人ほどイトラは迷惑を掛けてこないのだ。

まあ、そんなことを考えながら仕方なく、本当に仕方なく重い足を無理矢理動かしながら階段を降りて様子を見に行ってみる。

だがそこは原型をとどめているのは壁と柱くらいなんじゃないかという酷い有様だった。

そして床には俺に背を向けるようにしゃがみ込んだサラとそれを慰めるようにその肩に手を置くディオシキがいた。

「おいお前らなにしてるんだ!？」

「ここは俺の家なんだから暴れるなら余所でしろ!」

視線を巡らせるとどうやら壊れているのは表に出ていたものだけらしい。

こつそりと保管している俺の秘蔵のキリン娘グッズを隠した部屋への入り口の食器棚は動かした形跡もないから大丈夫のようだ。

「あ、ちようどいいところにきてくれたね。

ハタつちもちよつと手伝つてくれないかな?」

サラは先ほどから微動だにせず固まっているのでディオシキが代わりに説明を始める。

「なんだ?」

「何か探し物か?」

「さすがはハタっちだね。」

その通り、無くなったのはサラにやんの大事にしていた勝負下着なんだよ」

「あたしのパンツを盗みやがったのはどおこのどいつだああああー！」

立ち上がって怒り心頭の叫びをあげるサラ。

なるほど。それで先ほどから大騒ぎで家を搜索という名の破壊活動をしていたわけか。

「しかしここまで家中探しても出てこないなんて外に飛んで行つたとか空き巣に入られたとかの可能性はどうだ？」

俺もサラ達も超一流のハンターだから名指しの依頼の数もかなり多いし、家を開けている間に盗まれたとしても不思議はないだろう。

俺の自室や隠し部屋はありえない位に厳重に鍵をかけているがサラは鍵をかける習慣なんてなかったみたいだしな。

「それにしても下着泥棒なんて今時いるんだな。」

洗濯物の管理や家の施錠をしっかりとしていればいいのにサラもずいぶんと間拔けな失敗をしたもんだ」

「ところでハタつちは盗まれたものとかないのかい？」

「俺は嚴重に管理しているから大丈夫だ。」

武器や防具も普段使う用と壊れた時の予備と鑑賞用に各3つずつ作ってあるし、大きさと重さがかなりあるから泥棒もそれらを持っていくことはないだろう」

「……でも師匠。」

なんか師匠の隠し部屋の鍵が壊されて落ちてますけど」

「なにい!？」

イトラが差し出したのは食器棚の裏の隠し部屋につけていた世界最高レベルと言われて行商人から特別に取り寄せてもらった鍵だったが、それはもはや鍵としての機能を

なしえないゴミとなっていた。

「では中は?」

俺のコレクションは無事か!？」

隠し部屋の中に入るとキリン関連の武器と防具はかさ張るからだろう、手付かずの状態であったが『キリン娘愛好社』出版の関連書籍がまるまる盗まれていた。

「オー、マイ、スパゲティー!!!」

だあれが俺のコレクションを盗んだんだー!」

「あぁー!」

私のハターン師匠グッズもなくなってるー!」

そして俺の隣で大声を上げるイトラ。

話を聞いてみるとどうやらイトラも俺の隠し部屋に『俺の使った道具』コレクションを一緒に隠していたらしい。

ゴミ箱に捨てたはずの歯ブラシやパンツなんかなくなっていたのはそういう理由があったのか。

イトラは俺に対してのみの変態に成長したな。

「これはもしかしなくても僕様ちゃんの明晰な頭脳で推理したところ泥棒の仕業だね」

カッコつけて言うセリフがそれかディオシキよ。

「ちなみに僕様ちゃんも牙獣種の部位コレクションやナイフとかの鋭いものコレクションが盗まれていたようですね。」

感情を表に出していないけど腹の中ではこうギョルルンって感じに怒りの炎が渦巻いているんだよ」

ディオシキも泥棒による被害を受けていたのか。

牙獣種の『部位』というあたりに通常の武器の素材以外を暗示しているようで嫌な予感もするがそれは個人の趣味だから放っておこう。

それにしても上等じゃねえか！

こうなったら俺の家から盗みを働くような泥棒なんて生まれてきたことを後悔させてやる！

大泥棒を捕まえろ!

泥棒をとつちめてやる!

とは言ったものの、俺にはそんな専門的な知識もないので仕方なく情報収集から始めようということになり、4人でギルドへと向かうことになった。

こんな時こそあまり関わりたくはないがギルドマスターのマルの出演だな。

イトラ達3人をいつもの俺専用（最近では三人も自然に座ってる）の席に待たせてカウンターまで歩いて行く。

マルは受付嬢が言うには今日も今日とてカウンターの奥でゴロゴロしているそうなので呼んでもらった。

「あらあらあゝ、ちようどいいところに来てくれたわねえ。」

実はハターン君にお願いがあるのおゝ♪」

相変わらず間延びした甘ったるい声で話しかけてくる一応ギルドマスターのマル（一応の部分に注目してもらいたい）。

そのマルは一応ギルドマスターなので情報通でもあるし、嫌な予感しかなかったがこいつの話の聞くしかなさそうだな。

「また何か厄介事を押し付けるつもりか？」

俺達は空き巣に入られていたからその届け出と情報を求めて来たんだが」

「うん、それえ。」

その泥棒が今この街を騒がしてるのよねえ。」

「俺ら以外にも被害にあった奴がいるんだな。」

それで情報を渡すから俺らに捕まえて来いって言いたいんだろ？」

「さすがはハターン君ねえ。」

貴方達にい、泥棒を捕まえてほしいのお。」

個人的なお願いだから報酬も出ないし情報もろくないんだけど受けてくれるかなあ？」

これはいわゆるアレだな。

『YES』か『NO』の選択肢を用意しておきながら『YES』を選ぶまで先に進めないというアレだろう。

「わーっつたよ。

どの道俺らも自分の手で捕まえたかつたし受けてやるよ」

「ありがとお〜。

それで情報なんだけどお〜、一切ないのお〜♪」

はあ？

被害が多いとさつき言ってたのにそれでも情報を一つも残さない泥棒なんているのか？

「犯行現場に『大泥棒マック・ステイッド参上!』って頭の悪そうな字で書かれたカードが落ちてるのは共通してるんだけど今だに影も形も目撃者も見つからないのよお〜」

「それはまた随分と腕のいい泥棒なんだな。

しかしそれほど泥棒ならギルドナイトが動いたりしないのか？」

「ギルドナイトは現在他の仕事で忙しいから当分は動かさないわよ。」

なんでも新種のモンスターがたくさん見つかったとかでえ、みいくんメラナト島に調査に向かつてるのよ。」

メラナト島と言えば確か父さんが一番いい装備を着込んで乗り込んだ島だったな。

たぶんハンター協会の会長が直接現地に乗り込んだりしたからそんなに人員を割かねばならなくなってしまったんだろうな。

まったく父さんときたら困った人だ。

席に戻るとすでに注文を済ませていた三人はテーブルの上を料理でいっぱいにして俺を無視して勝手に食い始めていた。

「……料理を注文するのはいいけどさ、みんな泥棒のことを忘れてるんじゃないのか？」

サラなんかさつきまでの怒り心頭といった様子を微塵も見せず、目の前の料理と格闘をしている。

デイオシキは俺に気づいているのだろうがあえて無視して料理に集中している。

唯一イトラだけが俺に気づいて食事を中断したが、俺が席に着くのを確認するとすぐに俺の膝の上に移動して俺の腕をマフラーのように自分の首に絡めさせてくる。

それから俺の顔を見てニパツつと笑い、満足したのかまた食事を再開する。

みんな泥棒のこと忘れてんじやね？

「私は大切な『ハターン師匠の使った道具コレクション』を盗まれたことを忘れてませんし許してませんので見つけ次第殺すことは決定してますよ♪」

いや、そんな笑顔で殺すとか言うなつての。

俺はそんな教育をした覚えはありませんよ!……たぶん。

「で、何か情報は得られたのかい？」

「僕様ちゃんもさつき他の席に座っているハンター達に話を聞いてみたけどどうやら最近この街で泥棒被害が増えてきているようじゃないか」

「……………（ゴワワワワ！）」

デイオシキはちゃんとまじめに捜査をするつもりがあるようだな。

サラは相変わらず食事を止めず、話も聞かず、幸せそうな顔してテーブルの上の料理を片っ端から片づけて行ってるが。

「でも案外泥棒なんてすぐ傍にいるんじゃないんですか？

ほらあそこの席に座ってる人なんて見るからに怪しいじゃないですか」

イトラが指さす方向にはと髭を生やした鉤鼻の怪しげな男がサラと同じくらいの勢いでテーブルいっぱいに出された料理と格闘をしていた。

「ぶふう、今日も俺様の仕事は上手くいったな。」

この街の連中トロ過ぎ♪

俺様が犯人だってまだ気づいていないんだもんな」

と、けっこうな大声を出す。が周りの連中、俺とイトラ以外は誰一人としてその男に見向きもしていない。

「なあイトラ、俺はあそこで食事をしている髭を生やした鉤鼻の男が今自分が犯人だと言ったように聞こえたんだが」

「奇遇です。ねハターン師匠。」

「私もあの人が自白したのを聞きました」

「ん？ 僕様ちゃんにはどこにいるのか全く見えないな」

「デイオシキは男がいる辺りに視線を向けているが見えないようだ。」

「まあ、目が悪いからだろうな。」

「ちよつと話を聞いてみるかイトラ」

「そうしましょう師匠。」

あれが絶対に犯人で間違いないですですから！」

目が悪いデイオシキや食事が生き甲斐のサラはともかくこの酒場の中の誰も気づかないというのはおかしい現象だとも思うが俺とイトラは捕まえてみることにしたのだった。

てめえは大切なものを盗んでいきやがった!

泥棒と思しき男は俺が近づいて行くのも気づかず平然と食事を続けている。

「ちよつといいか?」

俺が声をかけると男は驚いた顔をし、さらに側にいるイトラにも気づき、今度は心底うれしそうな顔をしてくる。

「え、何?」

もしかしてあんたには俺様が見えてるの?

そつちのお譲ちゃんも?」

7本ものナイフを装備し、特徴的な鉤鼻と黒ひげを生やしたおっさんに気づかない道理なんてないだろうに。

「何を言ってるんだ、当たり前だろう。」

もしかして幽霊か何かか？」

「いやあ、俺様は存在感の無さに関しては何がかつたものがあるから俺の姿を認識できるのは死んだ両親以外にいなかったからさ。」

それにそっちの女の子も超可愛いじゃん。

俺様に見える女の子に会ったのも初めてだから嬉しくてさ♪」

なるほどそういうことか。

だがそれは今は関係ないからとりあえず無視だ。

「ところでさつき自分で言っていたがお前が最近この街で盗みを働いている泥棒か？」

「おうともよ！」

俺様こそ泣く子も無視する大泥棒マック・ステイツド様よ！」

「師匠、こいつ白状したわよ。」

「さっさと張り付け獄門に処しましょう」

「そうだな、まさか自分から泥棒だと自白してくれるとは思わなかったが犯人で間違いないなら俺が直接手にかけてもいいいな。」

この街の第一位、ハターン・モンズータの物を盗んだんだから死ぬ覚悟はできているだろう」

俺は大剣を、そしてイトラは……：：：：そういえばこないだ母さんが来た時にライトボウガンを壊したまま修理してなかったつけ。

腰に提げた剥ぎ取り用ナイフを抜く。

「ま、待ってくれ！」

俺はこんな存在感の無さが嫌で自分をアピールするために盗みをしただけなんだ。

ここで俺が死ぬなんて十全じゃないだろ？

だから許してくれ」

「それだけか？」

「いや、俺も手当たり次第に盗みを働いてきたがまさかあのハつつあんの家にまで盗みに入ってたなんて知らなかったんだ！」

それにほら、情けは人のためならずって言うだろ？

俺だつて泥棒のプロを目指していたんだがこれからは真つ当に生きるからさ」

「それだけか？」

「ノーカウントだ、ノーカウント」

ベラベラと反省したふりをして心にもない事を言いやがって。

俺が心を読めないとしても思っているのか？

大切な宝（キリン娘本）を盗まれてかつてないほど怒り狂っているというのに犯人を見つけてみればこんな屑だったとはな……

俺は大きく息を吸い込み、

「こんなもんにプロなんてあるかあ——！」

俺は怒ってるんだよおー!」

と、怒鳴りつけてやった。

「師匠、こんな屑殺つてしまいましたしょう!」

店に居る他の席の客たちも俺とイトラの声に気づき、段々とこの泥棒マツクの姿が見えるようになってきているようだ。

「てめえは全殺しじゃコルアー!」

そして大剣とナイフをそれぞれに振り下ろす。

だがその攻撃は空を切り、マツクは飛び上がって天井に張り付くことで回避しやがった。

「おいコラ降りて来い!

大泥棒を名乗るなら最後までいい覚悟決めろや!」

「ふつ、俺様は俺様の存在を世に認めてもらうために盗み稼業をやってきたからこういう展開はむしろ大歓迎なのさ。」

さあ、酒場の皆さん、私が大泥棒マック・ステイッドですよー！」

そうやってマックは大声を張り上げると店内の全員がその存在に完全に気付く。

「師匠、私はこれまでにないくらいに殺意を出しているのにあの男は怯みませんよ。こんな師匠以外で初めてです」

途中から俺も疑問に思っていたのだがイトラはナイフを抜いた時点で黒化していたのだ。

なのにそのイトラに睨まれているのにマックは全然怯んだ様子を見せていない。

「それはたぶんあの男が殺意を受け流す能力にも長けていたのだろう。」

しかしあいつ、あそこからどうやって逃げる気なんだろうな？」

騒ぎはだんだんと大きくなり、食事に没頭していたサラやデイオシキまでもがその存在を認識したのを視界の端に確認できた。

やれやれ、これはまた血の雨が降るかもしれんな。

「てめえがあたしのパンツを盗みやがったんだな!

全殺しにしてやるから覚悟しやがれ!」

「あつはー、僕様ちゃんのコレクションを盗むなんてどんな人かと思えばただの生ゴミじゃないの。」

これはもう殺して解して並べて揃えて晒してやるしかないよね♪」

店内の他の客も色々な物を投げつけるがマツクは平然とした顔で避けまくる。

「さーばだ皆さん!

俺様はしばらくはこの街を離れるけどまた来るからその時はまた俺様の存在に気づいてくれよな♪」

そう言うとマツクは天窓を叩き割り、そのまま逃走した。

あの窓はただのガラスではなくユニオン鉱石という他の鉱石に混ぜることで真価を発揮する鉱石を混ぜて作られた特殊な防弾ガラスだというのにあつさり割つていったな。

そしてそれと同時にようやくギルドナイトが詰め所からやってきたが遅すぎだ。

マルが珍しくギルドマスターらしくテキパキと指示を出しているがすでにあいつの気配はこの近辺からは消えているから見つけるのは無理だろう。

「ハターン君今回はありがとねえ。」

おかげで顔は覚えれたし似顔絵を書いて手配書を出せば多少は被害を減らせるかもしれないわ」

「そんな事はどうでもいい。」

それより俺はもう帰るぞ」

結局は捕まえられなかったしな。

一応俺のコレクションは読む用、保存用、布教用の他にも隠し部屋の中の隠し部屋に予備の読む用、予備の保存用、予備の布教用もあるから諦めるしかないか。

再び怒りに火がついたサラとディオシキをなだめるのには苦労したが家の片付けもまだ済んでいないので細かい事はマルに任せて家に帰ることにした。

「つたくハターンがちゃつちやと捕まえてくれてればさー。

あたしが全殺しにしてやったつてのにさー」

「本当だよ。

ハタつちつたら肝心な時に使い物にならないんだから」

うう、俺の評価ダダ下がりか？

だってあそこまでの存在感の無さと身体能力を持つてるなんて思わないだろ。

「私は師匠の味方ですよ。

大丈夫、師匠は素敵な人ですから♪」

ああ、俺の癒しはもうイトラしかないのか……なんて師匠思いの優しい子なんだ。

「ふふっ、サラさんたちに責められる師匠も可愛い♪

私の『師匠が使用したグッズ』コレクションは師匠といればまた手に入るし今回は犯人の顔がわかったというところで良しとしましょう。

あの泥棒も次に会ったときが命日です♪」

イトラのやつ心を読まれないようにしてるけど何考えてるんだろいな。

可愛い笑顔だ。

で、家に着くまでずっとサラとデイオシキにギヤースカ言われていたのだが帰ってき
てみれば家が出る前は壊れた家具なんかでひどく散らかっていたというのに、室内は見
事に片付けられていた。

しかも壊れた家具（サラが壊したやつ）までも傷跡一つ残さず修繕されていたのだ。

「……まできれいに直すなんて俺の知る中じゃ鍛冶屋のトン爺さんくらいしか知らない
な……」

「ああー！あたしの勝負下着が帰ってきてるー♪」

「このこのおー心配したんだぞー♪」

下着に頬ずりしているサラ。

「僕様ちゃんのコレクションも部屋に返してあったからハタつちとイトラちゃんの盗まれた物も返ってきてると思うよ。」

それにほら、『最高にカッコいい大泥棒マック・ステイッドより』って書かれた手紙まで居間のテーブルの上に置いてあったし」

ディオシキに渡された手紙の封を切って読んでみるとこんな事が書かれていた。

『さつきはごめんねトイダーヴァの第一位ハつつあん。』

実は俺様は君の弟子のイトラ・ウボンガちゃんに恋に落ちてしまつてさ♪

俺様の存在に気づいた女の子ってのは初めてだから本当に嬉しくつてさ、次に来る時はその子を代わりに盗んでいくよ。

今回は俺様のハートが盗まれてしまったから俺様の負けつてことで壊れた家具の修

理と盗んだ物の返還をしておいたから。

それではあばよハつつあん！』

……こいつ馬鹿なんだな。

イトラを見れば俺以外に好意を持たれたことがよつぽど嫌なのか俺が手紙を読み終
わると同時に奪い取り破いて燃やしやがった。

はあ、また来るのか。だが次来ても俺はイトラをあんな泥棒なんかには渡すつもりは
ないけどな。

第八章：闇に潜む者編

そういや武器の修理してなかったな

「ハターン師匠、そういえば私の武器壊れたままでした」

大泥棒マック・ステイツドの騒動のあとはしばらくのんびり過ごしていたのだがそろそろ依頼でも受けるか、と思いギルドの掲示板に掲げられる依頼書を眺めていると突然イトラに武器が壊れていることを告げられたのだった。

そういえば母さんが来た時にギルドで研究のために捕獲されて連れ帰られたモンスター達との戦いでイトラの武器が壊れてしまったのを放置していたのを忘れていたのだ。

俺が『ハターンパワー全開！』でとりあえず直したが長時間の狩りには耐えきれないだろうしここらでトン爺さんに見せておくとするか。

「それじゃあトン爺さんのところに持っていくか。

結局あれから一度も行っていないイトラがこの街の第五位になったことを知ったら

驚くかもしれないしな」

あの爺さんは情報不通だから驚くほどのものを知らないし久しぶりに会うのも楽しみだ。

「サラとディオシキはどうする？」

トン爺さんのところに行つてくるけど」

サラとディオシキも酒場には来てはいたが依頼は全部俺任せにしていつもの席に着くとトランプで熱い火花を散らしていた。

「あたしは今ディーちゃんと激しい闘いの最中だからいかねーよ。

師匠はイトラと二人で行つてくれば？」

「僕様ちゃんもかつてないほどに熱くなってるからいまは無理だね♪

……つて、あー！

ちよつとサラにやん！

今インチキしたでしょ!？」

「してねーよ」

「ずりーよなー」。

「すりーよサラにゃん」

「だからしてねーって言ってるじゃん!」

いつもは気持ち悪いくらいに仲がいいのだがこと勝負事に関しては一切の手を抜かない二人は何やら掴みあいの喧嘩を始めた。

これはもう放置だな。

連れてつても面倒だし。

「さあさあ師匠。

二人で仲良く鍛冶屋に行きましょ♪」

「そうだな」

最近日常になってきたがいつものように俺はイトラを抱っこしてトン爺さんの鍛冶屋へと向かっていった。

途中ですれ違う観光客からは親子連れに見えるらしく微笑ましい視線を向けられるが俺ってそこまで老けて見えるか？

この街に住んでる人からは事情を察しているのか何も思われていないようだが。いや、むしろ意図的に関わり合いを避けているようにも見えるな。

イトラは恋人同士に見られていると思ってるのかこちらも鍛冶屋に着くまで終始笑顔でいつもの黒さはなりを潜めていた。

それからしばらく歩き、街外れにあるトン爺さんの店に到着した。

「おーい、トン爺さんいるか？」

あんたのほぼ唯一の客のハターンだ」

鍛冶屋の入り口は嚴重な鍵で固く閉じられているが中から金槌を振るう音が聞こえるので中にいるのは確かだろう。

「では師匠、少しお待ちください」

イトラは腰のポーチから細長い錐のようなナイフを取り出すと入口に備え付けられた嚴重な鍵に差し込んでガチャガチャしたと思っただらあつという間に全部解除してしまつた。

まつたくこんな犯罪じみた鍵開けテクなんてどこで学んだんだろうな。

「えへっ♪以前師匠に渡された自主学習用の本の中に狩りの本以外もたくさん入つてたので全部読みました。

この位の鍵なら私はもうマスターしましたよ♪

鍵開けに使つたナイフはディオシキさんにもらつたものですけど」

……結局はこの知識も俺が与えたものだったようだ。

つたく過去の俺はなんでこうも余計な知識ばかりイトラに与えちまつてるんだよ。

まあ、それは置いといて店の中に入ると中は熱気に包まれ、奥へ行くにつれてその熱

気は強くなり、これ本当に鍛冶仕事してるのか？と疑いたくなるような気味の悪い音までも聞こえてくる。

そしてシユバつと。

天井から人影が落ちてきた。

いや、シユバつと下りてきたのではなく落ちてきたのだ。

「あいたあゝ、お尻打っちゃったゝ」

面覆いで顔を隠し、長い髪を後ろでくくった可愛らしい少女が落ちてきたのだ。

「トン爺さんは変わり者だとは思っていたが天井で忍者を飼ってるなんてさすがだな。

ここで忍者が出迎えてくれるなんてさすがの俺も予想してなかったよ」

「いやいや師匠、この人は産業スパイとかじゃないんですか？

トン爺さんの技術を盗もうとする人たちは多いでしょうし」

やっぱそうだよなあゝ、こいつは絶対に新しいトラブルの元なんだろうなあゝ。

あ、忍者娘がこっちに気づいた。

「くっ、某としたことが背後を取られるとは不覚！

某の姿を見られたからにはお二人の命頂戴仕る！」

忍者娘は俺らに気づくと短刀お抜き放ち俺に切りかかってきた。
はあ、なんで毎回こんなのに絡まれるんだろうな……

忍者なんて絶滅したもんだと思ってたぜ

現状を説明しよう。

俺はイトラの武器の修理にトイダーヴァの街の外れに住んでいる天才鍛冶屋のトン爺さんの店を訪ねたんだ。

だが鍵が掛かっており、仕方がないのでイトラが鍵開けテクを使い中に侵入したまで
はいいが謎の忍者少女に襲われてしまったというのが前回までのあらすじというやつだな。

「お命頂戴！」

で、さつきまでのあらすじ説明に費やした時間はこの世界では1秒にも満たない時間であり、前の話の続きのまんま忍者つ子は短刀を抜き放って俺目掛けて飛びかかってき
てるわけよ。

「師匠を殺すな！」

だが、イトラが黒化することでイトラ眼（俺命名）を発動させた。
哀れ飛びかかろうとした姿勢のまま忍者娘は金縛りにあつたかのように動けなくなつてしまったのだった。

「うっふっふっふっふ♪」

師匠の手前、無駄に刃傷沙汰を起こすのは控えてたんですけどあなたみたいに危害を加えてきた人なら何をしても問題ないですよね。

大丈夫、可能な限り苦痛を与えて苦しませてあげるだけだから殺したりはしません。死にたくなつても絶対に決して何としても殺したりはしませんからね♪」

おつとこのままではまずいな。

「はい、ストップだイトラ。」

別にこの程度の雑魚をそこまでビビらすなよ」

「私はハターン師匠のためを想つての行動なんですよ。」

別に殺すつもりはないんだからいいじゃないですか。
トンお爺ちゃんに頼めばいい義手とかも作ってくれそうですし」

とは言いつつもちゃんとイトラは金縛りを解いてくれた。

忍者系女の子は地面にへたり込んだまま顔を青くしたままだに震えているが。

「さすがは俺の弟子だ、ちゃんと言うことを聞いてくれるのは嬉しいぞ。

あんたもすまなかったな。

俺の弟子はどうも突っ走っちまうからさ」

「きやは♪

もう師匠つたら〜♪」

「あ……あああ……う……う……」

イトラはすっかり元通りとなった。

さて、この忍者ちゃんもよく見ればずいぶんと可愛らしいな。

まだまともに会話も出来ないようだがとりあえず落ち着くまでまつしかないが。

おっと、イトラめ、さっそく俺にすり寄ってくるが今回は暴走しかけたのであえて放置だ。

「お主らそこで何やつとるんじや！」

「ここがこの天才鍛冶屋トン・カンジヤの工房だと知ってて侵入したのか!？」

騒動、もといイトラの気迫を感じ取ったのだらうトン爺さんが店の奥から出てきてくれた。

「ようトン爺さん、久し振りだな。

ちよつと仕事の依頼に来たんだが鍵がかかってたから勝手に開けて入らせてもらっている」

「なんじやハターン坊やか。

と、イトラちゃんに変な忍者がおるのう。

「誰じゃその子は？」

「やっぱトン爺さんも知らない奴か。」

さつきいきなり俺らを殺そうとしてきたんだがイトラが睨んだらこんなになっちまったんだよ」

忍者（笑）に視線を向けてみれば多少は回復してきたのか息は荒いが顔色はよくなってきた。

「それでこいつどうするトン爺さん？」

「この店の関係者じゃないんならギルドに突き出してそれ相応の処罰を受けさせることになるけど」

「師匠、そんなの甘すぎます！」

「ここは私が私刑で二度と師匠に齒向かわないように調教してみせます！」

「ここはワシの店なんじゃからあまり血なまぐさい事は止してくれんかのう」

しばらく何だかんだと議論をしていると忍者つ娘はさつきまで床で膝をついていた
と言うのに少し目を離した隙に姿を消していた。

「コリアー！某を馬鹿にするなー！」

それでも某は師匠から忍者娘としてのあらゆる技術を教わった究極の忍者、カヤネ・
グロルバなのだぞ！

さつきから忍者つ子だの忍者系女とか言ってくれちゃって！

しまいには忍者（笑）ってどーゆうことさ!?!」

天井に手足を突っ張って張り付く姿はなんとも滑稽だがどうやら怒っているようだ
な。

「気に障ったのならもつと言おう。」

俺は自分の命を狙ってくるような不埒者には容赦しない主義でな。

と言っても俺の弟子に勝てないようでは俺の髪の毛一本斬ることすら出来ないだろ
うがな」

それを聞いてカヤネとやらは今度は顔を真っ赤にして抗議をする。
本当に面白い奴だな。

「イトラ、今度はもう少し眼力を強くしてみろ」

「はい師匠♪」

そしてギュイイイイン、と音が聞こえそうなくらいの強烈な殺気をこめてイトラが視線を向けただけでカヤネは気絶した。

睨んだではなく見ただけだ。

「イトラの眼力はモンスター相手にも母さんの音使いの能力以上に効果を発揮しそうだな」

「はい、お義母様の音による肉体操作の能力を参考にして相手を見るだけで身動き取れなくする技術を身につけてみたくです♪」

また暴れられても面倒なので気絶したカヤネをそこらに落ちていたロープで縛りあげてやった。

イトラはニコニコと笑顔のまま俺を見てくるがその隣で先ほどのイトラの眼力を目の当たりにしたトン爺さんはイトラのアマリの変わり様に驚いていたようだ。

「以前この店に来た時は本当にこの子がハンターになつても大丈夫なのか心配に思っておったがハターン坊やの人を見る目というのは当たつておつたんじやのう」

「ああ、イトラは俺以上の才能があるから数年以内に俺を越えるさ。」

あつという間にトイダーヴァの街の第五位のハンターになつたしな」

さて問題はこの不法侵入娘のカヤネとやらをどうするかなんだが。

縛り上げたし今度は抵抗出来ないだろうからこのままギルドに渡すかな……

そんな事を考え始めたところで今度はチカが店の奥からやってきた。

なぜかえらくオシヤレしているが鍛冶仕事をしてたんじやないのか？

「久しぶりですねハターンさん。」

べ、別にこの服はハターンさんに見せたいから精一杯のオシャレをしたわけじゃないですから!!

……つて、あー!

この忍者あの時のー!!」

チカは足元に転がっていた気絶中の忍者女カヤネを見ると心底驚いたように指をさす。

「知り合いか?」

何やら面倒な予感がするが聞いてみると予想通りというか当たってほしくない俺の予感が的中する形になるのだった。

「こいつはあの『忍者娘愛好会』の新会長です!

以前ジャンボ村にいる時に会いましたがハターンさんをライバル視している女の子ですよ!」

……はあ、俺の『キリン娘愛好会』は潰れたというのにその敵対勢力はまだ俺を狙ってくるのか。

当初の目的であるイトラのボウガンの修理の依頼はどこへ行ったのか、俺はまたもや面倒事に巻き込まれていくのだった。

かつてのライバルの弟子

「それにしてもあの『忍者娘愛好会』がわざわざやってくるなんて何の用なんだろうな」

『忍者娘愛好会』と言えばかつて俺が会長をしていた『キリン娘愛好会』と長年ライバル関係だったために当時は何度も激しく意見をぶつけ合ったものだな。

キリン装備のおにやのここそ至高とする『キリン娘愛好会』と忍装備のおにやのここそ究極と考える『忍者娘愛好会』はそれはもう喧嘩も多く、俺も会長として相手方の会長とも何度か話し合いの席を設けたんだっけな。

時には拳で争うほど熱く語り合うほど話し合いは激しかったが、そのおかげで奴とは宿敵（とも）となったのはいま思い出してもいい思い出だ。

だが俺が会長職を退いたように奴も『忍者娘愛好会』の会長も引退したのだろう。それにしてもこんな子が二代目を継いでいたとはな。

「ハターンさん、こいつは現・忍者娘愛好会会長です。」

ハターンさんの宿敵（とも）だった忍者娘愛好会の先代会長は現在ハンターすらも引

退してジャンボ村にて訓練所の教官の教官をしているので私も向こうにいる時に会ってますから間違いないですよ」

なるほど産業スパイではなかったのか。

たぶん俺がトン爺さんの店にたまに来ていたという情報をチカから聞いたものの俺の住所がわからないからここで張っていたのかもしれない。

だがつい最近までジャンボ村に修行に出ていたチカはこの忍者カヤネが『忍者娘愛好会』の会長であると証言しているが俺にはこいつが会長職を名乗れるほどの覇気を持っているとは思えなかった。

何と言うか、俺と拳を交えたあいつのあとを継いだにしては組織の長としてだけでなく何もかもが足りないんだよな。

「師匠、そんな事はともかく、この殺人未遂女なんてギルドに渡すかこつそりと始末しちゃいましょうよ。」

「今日は私の武器を直してもらったならそのまま久し振りに狩り場に出る修行の予定でしたし」

そう言えば今日は何か依頼を受けようと思っていたんだっけな。

イトラの武器を修理に来たら面倒事に巻き込まれたからすっかり忘れていたな。

「なんじゃイトラちゃんはワシが鍛えた武器を壊しちゃったのかい？」

「実はそうなんだよ。」

「こないだ俺の母さんが来てカウカクシカジカでな」

いやまあ、今だから言うけど母さんが来なくても似たような修行を俺がさせるつもりだったから遅かれ早かれイトラのボウガンは壊れていたかもしれないんだけどな。

「どれ見せてみて……これは酷いな」

先ほどまでの冗談交じりの柔和な笑顔を消して職人の眼で渡されたイトラのボウガンをみるトン爺さんは驚き半分喜び半分と言った感じだった。

「とりあえず修理の依頼は承ったぞい。」

実はこないだ新しい機能を追加したボウガンの設計図を完成させたのだが使い道に困っておったからこのボウガンの修理のついでに強化もさせてもらうがいいかのう？」

トン爺さんの強化つてのは元となった武器の原型が失われるほどの強化だからどうなるのかは多少不安ではあるがイトラがさらに強くなるためにも今の武器、『阿武祖龍弩・アハトアハト』では物足りないだろうしちようどいいか。

チカもお茶を淹れてくると言っただけの店の奥へ行ってしまいこの部屋にはいま俺とイトラと忍者つ子のカヤネがいるだけ。

武器の修理が出来上がるまでのんびりまっていたのだがそこで再び忍者カヤネが目を覚まし、またもや騒ぎ立てる。

「こんな縄縛りなんて恥ずかしめを受けるなんてもう死にたい……」

つて、死ぬかコラー！

あんたが元キリン娘愛好会会長のハターンだったとは気付かなかったがそうと分かったからには某と勝負しろー！」

おお、ノリツツコミとはやるなっ！

「さつきから一人で何を騒いでるんだ。

話はチカに聞いたからお前が『忍者娘愛好会』の現会長つてのはわかったがそれで何で俺のところに来たんだ？」

縛られた状態でありながらも器用に魚のように飛び跳ねまくるカヤネ。

「某は先代『忍者娘愛好会』会長から『キリン娘愛好会』の上を行くくらい立派な組織とするように言われて愛好会の拡大に尽力を務めてきたのさ。

だと言うのに新聞を読んでみれば『キリン娘愛好会』が奴隷所持に密猟や禁止薬物の売買などを行ってギルドナイトに肅清されたそうじゃないですか!?

だから某は『キリン娘愛好会』を立ち上げた『忍者娘愛好会』の先代会長のライバルにして腐敗した『キリン娘愛好会』を潰した張本人たるハターン・モンズータを倒すことで『忍者娘愛好会』の地位を盤石なものとしようと考えてたんです！」

なるほどそういう理由で俺を襲って、もとい訪ねてきたのか。

それは何とも御苦労なこった。

「あー、遠くから来てもらって悪いけど『キリン娘愛好会』は完全に潰れたんだしそつちの一人勝ちでいいから帰ってくれないか？」

俺はいま弟子の育成で忙しいしお前みたいなやつに構ってるほど暇じゃないんだ」

イトラは黒化はしていないが心底哀れな物を見たような眼でカヤネを見つめている。そりやまあ、ずっとライバル視してきた組織に勝つために尽力してきたのに潰れてしまったからという理由での勝利などこれまでの努力が全て無駄になったように感じるのだろうか俺からしてみれば残念だったね、としか言いようがないな。

「……分かりました。」

それならばあなたの弟子とやらの實力を見せてもらいましょう。

かつてうちの先代会長とタメを張れるだけの男だったあなたが『キリン娘愛好会』を捨ててまで手にしたその子の實力が優れているなら私も諦めてジャンボ村に帰ります。だからあなたの次の狩りに同行させてください」

「ちよい待て！」

どうしてそういう流れになるんだ!？」

「師匠、この人は口で言っても自分の意見を曲げないタイプみたいですし狩りにつれて行ってみてはどうですか？」

ようするに師匠の弟子である私の実力が『キリン娘愛好会』以上に魅力的なものだと証明すればいいだけなんですし」

……それもそうか。

カヤネの眼は決して退く気がない決意に満ちた目をしてるし話し合いや拳による説得では納得しないだろう。

しかし俺が『キリン娘愛好会』を抜けた時に最初に弟子にしたのはディオシキなんだがイトラの実力を見せるだけでいいんだらうか。

「ま、いつか。

じゃあついて来いよ。

俺が『キリン娘愛好会』以上に価値を見出した俺の弟子の実力を見せてやるさ!」

その後トン爺さんが武器の修理を終え、受け取るとすぐに酒場に向かった。サラとディオシキが酒場を破壊してなければいいんだがな。

チカ s i d e

「あれ？」

ハターンさんはどこに行っただんですか？

それにあのちっこい弟子とカヤネも」

ハターンさんに渡しの気持ちに気づいてもらえるように台所で裸エプロンに着替えてきたと言うのに部屋にいるのはお爺ちゃんだけ。

「少しばかり遅かったのう。

さつき武器の修理が終わったんじやがハターン坊やはいトラちゃんとカヤネちゃんと一緒に酒場に向かったぞい。

何でも三人でクエストに出るそうじや」

なんてことなの！

ほんのちよつと眼を離れた隙にハターンさんとの貴重な時間が失われてしまうなんて……

お爺ちゃんももう少しハターンさんを引きとめておいてくれればよかったのに！
でも私は決して負けない。

あんなツルペタのちびっ子の弟子やムチムチンボインの美人の弟子なんかやつつけて私がハターンさんのお嫁さんになってみせるんだから！

……でも次にハターンさんがこの店に来るのがいつになるのでしょうか。

クエストの中身は……

何だかんだで『忍者娘愛好会』会長のカヤネ・グロルバも連れての三人での狩りに向かうこととなったのでギルドに来たわけだが先ほどまでトランプで無駄に熱い勝負を続けていたサラとディオシキの姿は見えなかった。

てつきり二人ともいつもの席で熱い勝負をいまだに繰り広げ続けていてると思ったんだがな。

「あらあらあく、ハターン君。

もうイトラちゃん武器の修理終わったんだあく♪」

「なんだマルか。

トン爺さんは天才だからあの程度の修理なら五分もあればお釣りがくるからな。

それとサラとディオシキを探してるんだがあなの二人がどこ行ったか知らないか？」

「トン爺さんはすごいからねえ、あの人的常識つてやつう、みたいなあく♪」

で、お探しのサラちゃんとディオシキちゃんなら店の中でギャーギャーうるさかったから勝負なら家でしなさいって言って追いつ返したのおく♪

もしかしたら今頃ハターン君の家は壊れちゃってるかねえく♪」

「ちよつ、待てや！」

あの二人が最高に『傑作!』って状態のまま家に帰したのかよ!？」

もしかしたら……いやほぼ確実に俺の家壊されてるんじゃないやね？

「そんな事は放つといて早く狩りにいきませんか？

某はあなたの弟子が『キリン娘愛好会』を抜けてまで手に入れるほどの価値があったか見極めるためにやってきたんだから時間がもったいないでしょ」

若干苛立たしげに文句を言ってくるカヤネ。

「……私に指一本触れることが出来ない雑魚のくせして何をほざいてるのかしら?」

そもそも今回の狩りは私とハターン師匠の二人っきりの予定だったのに特別に同行

を許可してあげた師匠にその態度はないんじゃないかなあ？」

だがイトラの一言で石のように固まってしまった。

カヤネも最初の固い決意はどこにいったのか、すでに二人の間には明確な格差が生まれているようだ。

「さて、ハターン君」。

受ける依頼が決まっていなければならこのクエスト受けてみない？」

イトラちゃんを名指しの依頼が来てるんだけどお」

と、一枚のクエスト用紙を渡してくるマル。

「なるほど、これは面白そうだな。

それじゃあ今度のイトラの相手はこれにするか」

マルもなかなかいい依頼を持ってくるんじゃないか。

これならイトラの成長具合もよくわかるしな。

「師匠、カヤネさんもおとなしくなってくれたことですしそろそろ狩りに行きましようよ。」

どんなモンスターが相手でも私は師匠の弟子として狩ってみせますよ♪」

いつも通りの笑顔といつも通りの黒い雰囲気を漂わせるイトラにこれまでの修行がだいぶ形をなしてきたように思えて何やら感慨深いものを感じる。

「よし行くか。」

今回受けた依頼は俺も昔したことがあるやつだが今のイトラならなんとかなりそうだし頑張れよ」

あえて依頼内容をここでは伝えずクエスト出発。

今回の目的地は街の中にある闘技場。

「さて、ここに今回二人に受けてもらうクエストについて説明しておこう。」

ターゲットはナルガクルガ、ティガレックス、グラビモス亜種、ディアブロス亜種、そ

して激昂ラージヤンの5頭。

まあ、イトラも一人なら簡単だろうけど今回は縛り要素としてカヤネも一緒に闘技場に放り込むから上手くやらないとカヤネが三死、もしくは即死でクエスト失敗するから気をつけろよ

ついでにカヤネも間近でイトラの腕を見るため何だからこれでいいだろ？」

「はい師匠！」

縛りプレイだなんて師匠からの愛を感じながら必ずやクエスト達成してみせますね
「♪」

うむうむ、やはりイトラは前向きに立派に育っているようだ。

弟子入り当初にこのクエストに挑戦させていたらもしかしたらミラボレアスのようには上手いかなかったかもしれないな。

ん？カヤネは何やら青ざめているがどうしたんだろうな。

「ちよつ、ちよつと！」

あなた達本気!?

それって最高難易度クエストの『武神闘宴』じゃないの！

某はまだ先代会長からハンターとしての教育はそこまでされてないのよ！ハンターランクも1なのよ!!」

「そんな事は知らん！

これが俺の教育方法だからな。

お前も俺を殺そうとしたんだから諦めて戦って来い。

なあと、『忍者娘愛好会』の先代や俺はハンターになってすぐに緊急でG級クエストを達成したからお前もいきなりそれくらいのこと出来るだろうし……ってあー、面倒くせえ。

あとは適当に頑張れ」

説明も面倒だしグダグダとうるさいので俺はカヤネとイトラを闘技場に投げ込むと観客席から高見の見物をする事となった。

さあ、狩りの始まりだな。

司会進行役の男が開始の鐘を鳴らし実況を始める。

「さあ始まりました『武神闘宴』ですが今回参加してくれたのはな、ななんとこのトイダーヴァの街が誇る第五位のハンター。」

『殺戮人形（キリングドール）』のイトラ・ウボンガちゃん10歳だー！

何でも今回は師匠である同じく序列第一位のハターンさんの提案で足手まといとなるハンターランクの新米ハンターを同行させての戦いになるそうですがどういう展開になるのか楽しみですねー♪」

ワーワーワーワー

観客の声援に手を振るイトラといまだに真っ青で震えるカヤネ。

正直に言って足手まといのカヤネをどう動かすかでイトラのハンターとの個人の力量だけでなくパーティーを組んでの狩りを行う時の指揮官（リーダー）となるかどうかを俺は見たいんだよ。

『最強』のハターン・モンズータの弟子イトラ・ウボンガ。

正々堂々手段を選ばず真っ向から不意討つてあげます！」

「……………」

イトラの気合は十分。

反対にカヤネの緊張も十分。

さあ、見せてくれよイトラ。

お前の天才性を。

俺って観戦ばかりしてないだろうか？

イトラとカヤネを闘技場に放り込んだあとは闘技場の職員からギルド上層部専用の特別席へと案内されたが丁重に断っておいた。

特別席というのはその名の通りギルドの要職についているような連中しか入れない席なのだがそういう席にいる年寄り連中は自身の出世などのためにハンター協会会長の息子である俺に言い寄ってきてうるさいからな。

ちゃんとチケットを買って一般席からの観戦をすることにした。

「それにしてもすごい熱気だなあ。」

イトラもこの街の第五位だし人気が出てきてもおかしくはないがここまで人気が出るものなのだろうか？

独り言のつもりで言ったのだがたまたま隣にいた客の一人が親切にも教えてくれた。

「お、あんたはトイダーヴァの第一位、ハターンさんだね。」

今回出場してくれたイトラちゃんの人気がここまであるってのはもちろんあんたの影響もあるだろうけどあの子の可愛さが一番の理由なんだよ」

「イトラの可愛さ？」

「おうともよ。

いつも一緒にいるあんたには分からないかもしれないけどイトラちゃんはハンターとしてよりもあの可愛さでファンクラブまであるんだぜ」

男はそんな自分も実はファンクラブの一員さ、と会員証を出して自慢げに言うてる。

イトラの可愛さはやはり万人向けだったようだな。

「ちなみに本人に許可もらってないけど彼女のグッズもたくさん出てるし、かなりの経済効果を生んでこの街は最近移住してくる人が急激に増えてるんだ。

今回の武神闘宴に参加するって情報もすぐに広まったのもそういうファンクラブの情報網を利用したからってわけさ」

「……まあ、弟子の人気は師匠として喜ぶべきか。

それじゃあ一緒に応援してくれよ。

今回は足手まといも放り込んだが天才鍛冶屋のトン爺さんに武器の改良をしてもらってきたばかりだから負けることはないだろうけどさ」

「そいつはまだ知らない情報だったな。

あの鍛冶屋トンが彼女の武器を作っていたのならこのクエストはまず間違いないけどイトラちゃんの勝利で終わるだろうね。

ちなみに俺はあんたと同じキリン娘が大好きだからあんたのファンでもあったんだぜ」

お、なんかこの男けっこう気が合うな。

たまたま席が隣になっただけだが男と俺はキリン娘の良さやイトラのことを話しながら、意気投合して観戦を続けていたのだがそれはまたも突然の邪魔者たちによつて阻止されてしまった。

「おーいハターン。

イトラが武神闘宴に参加するならあたしらも誘ってくれればよかったのによー」

「そうだよそうだよソースだよ。」

僕様ちゃんもイトラちゃんの試合なら何を置いても見たいんだから。

あ、その兄ちゃんどいてくれない？」

いつものように突然やってきて勝手なことをのたまいながら俺の隣にいたイトラのフアンの男を放り投げるデイオシキとその席に当然のように座るサラ。

こいつらには世間一般の常識は通用しないってのか。

「……おい、きちんとチケット買ってから来いよ。」

お前らも名指しの依頼とか受けてけっこう稼いできたんだし、もう金の心配はないだろう」

「ぎゃはは。」

僕様ちゃんの前では悪魔だつて全席指定なのよん♪

ハタつちもそんな常識人ぶらなくても自分に忠実な昔の自分を取り戻してみたらどうだい？」

「俺はそんなに常識知らずのアホではない！」

俺は否定するがサラとディオシキは元気よく、イエーイと拳を打ち鳴らし合ってそこから買ってきた菓子とジュースを手に観戦を始める。

はあ、イトラはこんな風にだけはならないでほしいな。

そしていよいよ試合開始の鐘が鳴った。

「さあ、始めましたトイダーヴァの街の第五位イトラ・ウボンガちゃんによる武神闘宴です。」

今回はイトラちゃん本人の提案により5頭のモンスター同時討伐というショーとなりますのでお楽しみください♪」

と、闘技場に向かって5頭のモンスターが同時に放り込まれ雄叫びをあげる。

「師匠ー愛してますよー♪」

愛しの師匠のためにも必ず勝って見せますからねー♪」

「……」

と、熱いラブコールを送ってくるイトラと青い顔のカヤネ。

あまりにも眩しすぎる笑顔に周りの観客達は恍惚の表情を浮かべながら気絶していった。

まったくお前の魅力は底知れないものがあるな。

俺を楽しませてくれるような狩りを見せてくれよ。

イトラ無双

イトラ side

ふふふ、ハターン師匠が見てる。

私を見る。

ああ、これほどまでに私が私らしく存在できるのはハターン師匠のお・か・げ♪

今回のクエストは私が勝つのは決定事項だけどシヨーなんだから盛り上げながらも師匠の弟子としての自覚を持った戦い方をしなくちゃね。

隣で青くなってるカヤネさんにも協力してもらいましょう……

「カヤネさん、今回のクエストは私自身もちよつと無理言ってもらって闘技場の人に特別なお願いをしたから震えてばかりいてはあつという間に死んでしまいますよ」

「え？それってどういう……」

ガチャガチャガチャガチャガチャン

闘技場の端に備え付けられていた5つ檻が重い金属音を響かせ開かれる。

そしてそこで司会者の声が闘技場の空気をさらに盛り上げるべく張り上げられた。

「さあ、今回の『武神闘宴』ですが出場選手のイトラちゃんの提案により、討伐対象であるナルガクルガ、ティガレックス、グラビモス亜種、デアアブロス亜種、激昂ラージャンの五頭を同時に相手どつてもらいまあああーつす！」

ワーワーワーワー

まったく、普通に五頭を同時に相手取るというだけでここまでの盛り上がりを見せるなんてこの街のハンターってのはこんなことも出来ないほどレベルが低いのかしら。

師匠的に言うならやれやれだぜ！つてところですね。

「ちよつ、ちよつとイトラちゃん！」

五頭同時なんて何考えてるのよ！

某はこの五頭とは下位ですら狩ったこと無いのよ!!」

「師匠ならこういうはずです。」

『俺の愛する可愛いイトラに不可能はねえぜ！』つて♪」

師匠のことだから心で思うだけにとどめるかもしれないけど私はちゃんと師匠の心の声を聞けますからね。

「だとしても！」

某は死にたくないですよ！」

本当にうるさい人ですなぁ。

この人がモンスターに殺されることがあつたら減点みたいですけど私自身が殺すぶんには問題ないんじゃないかな？

まあここは師匠の顔を立てて守ってあげましょうか。

「では狩りを始めましょう。」

穢れも濁りも淀みもしこりも微塵に砕いて天地に還してあげます」

まず最初、五頭のモンスター達は同時に私たちに向かって飛びかかってきた。

なので邪魔になるカヤネさんは襟を掴んで力いっぱいエリア際の離れた場所へ投げ飛ばしてあげた。

本当に足手まといですからね。

それと同時に向かってきたモンスターの中で一番近くにいたティガレックスの頭を踏み台として空高く舞い上がった。

師匠の動きも今はまだ完璧とまではいかないけどある程度なら模倣することができるようになりましたしこれ位師匠の弟子として出来ないでどうしますか。

空高く舞い上がった私はまず、新しい相棒『阿武祖龍弩・アハトアハトSP』を空中で真下に構え、まずは火炎弾を装填し、装弾数12発全部を叩きこんであげた。

「「「グギャアアアア」」」

それだけで火属性の攻撃に弱いナルガクルガが死んだ。

他の4頭もこれで決めるつもりでしたがまだ私の技術では空中での狙撃は狙いも甘くなるみたいですし仕留めるには至りませんでした。

まあ、あの中ではナルガクルガが一番動きが素早いですから即殺できてラッキーとでも考えますか。

「うふふふ、本当にタフなんですわねえ。

今の私は昔の自分が見たら驚くほど強くなったんでしようけど師匠なら相手に攻撃させる暇も与えずに一撃で5頭全てを狩り終わってるでしょうからまだまだ成長の余地あり、と言ったところでしょうね。

ああ、早くハターン師匠の領域までいきたいなあ♪」

とは言っても今の私には最初の火炎弾だけで全頭狩り終える実力はなかったのでもま次弾を装填し、残る四頭に向かって構えることにする。

だけど残った4頭は私には敵わないと思っただのか闘技場の端まで投げ飛ばしたカヤネさんに一直線に向かっていった。

「キイイーヤアアアアー！」

イトラちゃんイトラちゃんイトラちゃんイトラちゃん！

助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けてえええー！」

それでもその必死に逃げ回る姿は観客には受けがいらしく拍手喝采で私も見ていてちよつと吹いちゃいました。

本当に面白い人ですねえ。

……ん？

そういえば、ハターン師匠のライバルだった『忍者娘愛好会』の先代会長さんの後を継いだのがカヤネさんだとするなら私のライバルはこの人ということになるのでしょうか？

……なんか少し残念ですね。

まっ、今は目の前のただの獲物を仕留めることに集中しなくちゃいけませんね。

「次に生まれ変わったら私を殺せるくらい強くなりなさい。

それでも世界は何も動かないでしょうけど」

普通のボウガンと構造そのものが大きく異なっているので使う弾も通常弾でさえ、特注サイズの弾を使用するのが難点ですけどさすがはトンお爺ちゃんの新製品。

レベル3散弾を装弾数12発全て、速射機能（反動ゼロ）を使つて水平射撃するとよ

うやく勝負は決まった。

一番甲殻の分厚いグラビモス亜種の甲殻すら貫通し、残った4頭のモンスター全ての命を狩りとった。

うん、散弾でグラビモス亜種の甲殻を貫通させるだなんてトンお爺ちゃんだったらいい仕事してるじゃないですか♪

今回修理の際に改良もしてみたみたいですけどこの程度のクエストで使うのももったいないですしそれはまた今度ですね。

「正義は勝つー！」

もちろん観客席へのアピールも忘れない。

vサインを決めて観客席に手を振る。

その瞬間お客さん達全員によるスタンディングオベーションが巻き起こり、今日一番の最大の拍手と声援が飛び交う。

中には私が可愛いから勝つのは当たり前だ、なんて声もありますが私の可愛さは師匠のためだけのものなんですから誰にもあげませんからね。

カヤネさんは……居るのを忘れてうっかり散弾を撃っちゃったけどなんとか射程範

困から逃れていたらしく怪我もなかったのもそのまま足を掴んで引きずりながら闘技場を後にした。

ハターン side

「やはりイトラの運動能力も成長著しいな。

あの空に飛び上がる動きなんて以前に俺が見せたのとまったく同じ軌跡を描いていたぞ」

「ぎゃはは。

でもいいのかいハタつち？

今回こんな面倒なクエストを達成したんだしあとでご褒美をねだってくると思うよん♪」

「そんな馬鹿な。

「イトラはそんな現金な奴じゃないさ」

イトラは控え目で可愛らしいちよっぴり黒いだけの10歳の少女なのさ。

だがそれを聞いたサラもようやくポツポコーン（ポポの肉を細切れにして謎の製法ではじけさせたお菓子）を食べ終わったららしく口を挟んでくる。

「その油断があとで恐ろしい結果を招くなんて夢にも思わなかったのです……

てな展開になっちゃうかもしれないねーぞ♪

てか今日の晩飯なんだ？」

「お前は菓子でも食ってろ馬鹿弟子。

今日はこのまま酒場に行って晩飯食って帰るぞ」

時刻はすでに夕方。

町のいたるところから美味しそうな匂いが漂ってくる時間帯だ。

……やはりイトラへのご褒美も一応考えておかないといかんかもな。

第九章：狩り場で一泊するのって修学旅行気分になれそうじゃね？ 編

一人で夜を過ごすというのは叶わぬ夢

闘技場での武神闘宴を終えたイトラを連れてサラとディオシキも加えた俺達4人は酒場で食事も済ませて家に帰ったわけだ。

ちなみにカヤネは精神的ショックが酷いらしくギルドお抱えの病院に放り込んでやった。

「……っつかしまあ、予想はしていたがここまで壊されるとはなあ……」

俺の家は見事に破壊されていた。

それこそ前に大泥棒マック・ステイツドが来た時以上に破壊の限りを尽くされていた。

「いやいやハタっち。

僕様ちゃん達が勝負事で手を抜くなんてありあえないからある意味当然の帰結じゃないのかな？」

「盛り上がったぜえ、超盛り上がったぜえ！」

あたしの拳とディーちゃん拳によるカードバトルは最高だったのさ♪」

とりあえず食事の時にマルに大工の手配を依頼をしておいたから明日には修理してくれるだろうが今回はどこかに宿をとるしかないなこれは。

「それじゃあ今夜はこれにて解散だ。

明日には家の立て直しも住んでいるだろうからその時まで各自のんびりと過ごせよ」

俺もたまには一人になりたいし今夜は酒場で夜を明かそうかな。

そんな事を考えながら再び酒場に向かって走りだしたんだが後ろからイトラが追ってくる。

しかし、まだまだ俺の本気の走りについてこれるほどではないな。

さみしがり屋のイトラは一人で夜を過ごすのが嫌なんだろうが、今のイトラにちよつかい出すような命知らずはこの街にはいないだろうしたまには一人で夜を過ごすことを覚えさせるにはいい経験だ。

俺は振り返ることもなくトイダーヴァの街を走り抜けた。

そして酒場！

アルコールは飲めないが俺専用の席には専用の本棚も備え付けてあるから今夜は優雅に読書でもするかな。

適当に手にとった今月号の『月刊 狩りに生きる』を読み始める。

「お、この子めつちや可愛いじゃん！

でもギルドナイト志望かあ、どうセルナが食っちゃまうんだろうなあ……」

雑誌の特集でまたも可愛い女性ハンターの特集が組まれていたので懐かしの我が同志を思い出す。

そんな風に久し振りの一人の時間（周りに他の客はいるが）を満喫していた俺なのが不意に俺に声を掛けてくる男がいた。

そう男だよ。

これが可愛らしい女の子やカッコいい美女なら喜んで寡黙に渋く誘いに乗ったんだろうが男が相手ではあまり気乗りがしないな。

「心の隙間埋めましょうか？」

そして勝手に俺に近づいてくるなんてまた厄介事でも持ちこむ気か!?

俺に近づくには許可がいるぞこの野郎。

一体全体どこのどいつだよ！

「俺に何か用か……っってお前かよ」

「ええ、僕ですよハターンさん。

お久しぶりです。

風のまにまに漂う音楽家の副業にハンターをやっている吟遊詩人のロッド・キツサです」

「本当に久しぶりだな、『不憫』のロッド。

相変わらず不幸ライフを満喫しているような顔つきじゃないか」

「その名で呼ばないでほしいね『最強』のハターンさん。

師匠にも言われたけど僕は人よりも波乱万丈な人生を送っているだけで決して不幸ではないんだからさ」

と、人畜無害に見える完璧なまでの笑みを浮かべるロッド。

相変わらずポジティブな考え方の持ち主だな。

さてこの男、ロッド・キツサは俺の母さん、『頂点』のリユカ・モンスータの弟子の一人でこのトイダーヴァの街の第四位のハンターという実力だけは本物という一流の弓使いのハンターだ。

実力だけと言ったのはこのロッドが類稀な不幸体質のためにこれまで何百何千のモンスターを狩ってきたと言うのに一度もレア素材を手にしたことがないという異常なまでに不幸な男だからなのだ。

おまけに狩りに同行した奴に不幸をまき散らすという体質のために常にソロで下位装備（鉱石すらも上位、G級素材は決して出ない）で狩りに出かけているのだ。

「リュカ師匠のおかげでソロで下位装備のままでもG級モンスターを複数相手取るだけの實力はつきましたけど今だにハターンさんには敵いませんよ。

やっぱり僕は狩りよりも音楽の道が向いていると思うんですよね」

付け加えると音楽家としてはかなり引つ張りダコで不幸體質を差し引いてもその演奏を聞きたいという需要が殺到する天才音楽家なので本当にハンター稼業は副業としてやっている。

それでもこの街の第四位の座をキープしているあたりが母さんの弟子たる實力の証明となっているだろう。

「その考えには俺も同感だが、何か用事があるのか？」

俺はお前の不幸體質という異常性を緩和できる数少ない人間だが今夜は久し振りの一人だけの時間を得たからゆっくりと読書で優雅かつハードボイルドに過ごそうと思ってるのだ。

早々にどつか行ってくれとありがたいのだがね」

「ふふふ、やっぱりハターンさんは変わらないね。」

でも雑誌の『可愛い女性ハンター特集』を読むハードボイルドな人なんて僕は知らないけどね」

これまた相変わらず口の減らない奴め。

礼儀正しい癖にそう言うところはズバズバ言ってくるからこいつは厄介なんだよな。

心の隙間を埋めて欲しいのは自分だろうに俺に声掛けてくるあたり何か厄介事を持ってきたのは間違いないんだろうがはてさて今度は何を言い出すつもりだ？

「さて、単刀直入に言わせてもらいますと新しいメロディーが閃きそうなので僕と一緒にそのメロディーの採取に同行してほしいのですよ」

「断る！」

俺がついていく必要がどこにあるんだ」

「この綺麗な星空と虫たちの鳴き声の中、世界レベエエールの僕の音楽を聴くのも最高にハードボイルドなことだとは思いませんか？」

む、それは言えてるかもしれない。

「メロディーを思いついたら誰かに聞いてもらいたいと思っていたのでハターンさんに同行してほしいんですよ。」

大丈夫、何もモンスター討伐依頼とかではありませんし何も厄介なことなんてありませんから♪」

「……お前と一緒に狩りに出ると採取ツアーとかでも不幸まみれの展開になっちゃうかな。」

だがまあ、そこまで言うならついて行ってやるよ。

俺も家が弟子たちに破壊されて今夜は酒場で過ごすつもりだったから狩り場で過ごす夜も悪くない」

何やらロツドの口車に乗せられている気もするがやってくる厄介事を潰していくよりは自分から潰しに行けば少しは俺に降りかかる火の粉も減るだろう。

それにこいつもこれで俺の知り合いの中では特に常識人ではあるから助けてやりたくなっちゃうんだよな。

まず間違いなく厄介な展開になるだろうが……

そして不幸は加速する

自宅を元弟子のサラとディオシキの二人に壊された俺の名はハターン・モンズータ。なんとなくノリで酒場で夜を過ごそうとしていたんだが、知り合いにつかまっちまったわけなんだわ。

その知り合いつてのが、不幸すぎるが実力だけは本物という母さんの一番弟子にしてトイダーヴァの街の第三位のハンター、ロッド・キツサ。

こいつの提案により、俺はこいつと二人で音楽を聴くために溪流の素材採取ツアーに出向いたのだった。

「と、説明口調で現在の状況を説明したわけだがこれからどうするんだロッド?」

すでに狩り場に着いており、俺は月の光を眺めながらアイテムボックスの側にいたロッドに話しかける。

「ふふつ、あらかじめ予想していたけど僕が受けるクエストはたとえ採取ツアーだとし

でも支給品すら届いていないなんてもはや神がかつてゐるね。

ハターンさん、これはもう時間いっぱい使いきるまで街には帰れないしそんなに急いで何処に行こうとか決めなくてもいいよ」

ロッドに言われてアイテムボックスを覗いてみると、確かに採取ツアーだというのに支給品ボックスの中は空っぽだった。

俺の母さんは神様から愛されているとしか思えないくらい幸運な人なのにその弟子はとてつもなく不幸なんだな。

「でもこういうことも慣れっこさ。

僕は風のまにまに漂う吟遊詩人。

決して急ぐと言う事はしないんだよ」

「まあ、さうや。

俺はこんな風に月がよく見える場所ならいくらいても飽きないしな。

月は太陽と違って無遠慮に照らしつけないから好きだ」

とりあえず採取ツアーだから支給品がない事は予想していたので必要ないとは思いますが一応持ってきた荷物の確認をする。

「えーと、調味料、調理器具、愛用の枕と……」

「お菓子と、お弁当と、最愛の弟子と♪」

……いま何か幻聴が聞こえた気がするな。

「ハターンってばこんなに可愛い弟子を忘れて狩りに出ちまうなんてどういうつもりだよ」

聞こえない聞こえない。

「ぎゃはは。

ハタつちつてばキリン娘関連書籍（狩り場用）まで持ち込んでるなんて今更だけど筋金入りじゃない♪」

聞こえちや駄目だ、聞こえちや駄目だ、聞こえちや駄目だ！

「ほらほら師匠♪」

師匠の大好きなキリン娘三人衆がわざわざ来てあげたんだからもつと喜んだらどうです？」

ようやく認識。

俺の背後には弟子3人がいつものように来ていた。

三人はどうやら今回もキリンシリーズを着てきたようだ。

だが手は出さないぞ。

「……どうやってここまで来たんだお前ら？」

ここに来る馬車には御者を除けば俺とロッド以外に誰も乗ってなかったはずだが」

馬車はハンター用にギルドが用意したものだから御者を含めて最大5人まで乗れるようになっているがロッド以外に人の気配はしなかったのだが。

「それは存在論ですか？」

それとも単純な意味での問いかけですか？」

「後者だ」

「うふふ、怒った師匠も可愛いですねえ♪」

まあ、説明しちやいますと、私がサラさんとディオシキさんを暗器使いの技術で鎧の下に隠したあと、気配を完全に消して荷物の中にまぎれていたんです♪

ほら、私ってば体が小さいですし♪」

「そんな馬鹿な。」

「いくらイトラでも生きている限り気配を消すだなんてそんな事が出来る訳がないだろう」

いや、でもイトラなら……

しかし俺が気づけないなんて隠密スキルはもしかや俺以上か!?

「私の戦闘力は数値化するなら大体10000万ほどありますけどそれは10000万しか力を発揮できないのではなく0から10000万まで数値を自由に操れるのです。

だから戦闘力を0にすることで同じく気配も0になるから私の気配は木石程度しかなかったはずですよ」

まさかそこまで自在に自分の力を操れているとはさすがだな。

うーむ、しかしこれでは俺達の人数は5人。

ギルドではハンターが組むパーティーの人数は最大4人までと決められているのだからどうするべきか……

そんな事を考えていたのだがイトラにとってはそんな事はそんな事ではなかったように、勝手に解決策を話し始めた。

「二つのパーティーが同じクエストを受注したことにすればいいんですよ。」

だから私と師匠のラブラブチームとその他チームに別れて行動すれば無問題ですよ♪」

と言い、俺の手をとると猛烈な勢いで走り出すイトラ。

俺の手を引っ張ってるというのにイトラってば俺より足速いんじゃないのか？

「こつちはあたしらに任せてイトラと仲良くやれよー」

「僕様ちゃん達はロッドさんと三人で楽しくやつとくよ♪」

何やら白い布を口元に押し付けられて気絶したように見えるロッドの両腕を掴んだサラとディオシキはそのままズルズルと引きずりながら俺達とは反対方向に歩いて行った。

「さあ師匠！

ここは溪流なんですから虫の音もいいですけど私の喘ぎ声でも聞きたくないですか？」

寡黙で渋くてカッコいいハードボイルドな男らしさを求めて音楽家ロッドの一人演奏会に参加するという軽い予定すら吹き飛ばされた俺は体格差を無視して俺を引っ張って走り続けるイトラを見ながらこの先の展開に頭を悩ませるのだった。

ちよつと長い説明口調だな。

それにしても異常なまでに不幸なロツドの不幸が俺にもうつつたのだろうか……
それとも元々俺自身も不幸だったのだろうか……

月夜に煌めく血染めの刃

ここは溪流のエリア4。

イトラに連れられて適当に走り回った結果ここにきたのだが無人の小屋があったのでそこで月を眺めているというわけだ。

「月がきれいですね♪」

「そうだな」

「虫の鳴き声も風流ですよね♪」

「そうだな」

「……師匠は私のことを愛してくれますよね？」

「弟子としてな」

人が期待する答えは返さない。

そうは問屋が卸さないゼイトラ。

「もう！」

そこは師匠が『そうだな』と言って、私が『ならば関係を進展させましょう』って言うて襲いかかる場面じゃないですか！」

「俺はどんな時でも頭はクールでハートはホットなのさ」

イトラのことだから俺が『そうだな』と返し続けていればそう言うだろうことは5年前から予想がついていたかのように明瞭だったのでそのセリフは予想通り過ぎたのさ。

しかしこんなエリアのど真ん中に小屋を建てるなんて昔はこの辺りもモンスターがない平和な場所だったのかもしれないな。

「さて、どのみちネコタクチケットがないんだから50分は帰ることも出来ないしせつかくだから今夜は時間を延長して狩り場で夜を明かそう。

だが、今回はロツドの奴も一緒に来ているからあいつの異常なまでの不幸による影響で無事に朝を迎えられるかどうかからんから気をつけるんだぞ」

「はい師匠！」

でもでも、こんな狩り場でよるを過ごすなんて私初めてですつごいドキドキしちゃいます♪」

「そういうえばそうだな。

イトラ、ハンターたるものどんな過酷な環境でも生活出来ねばならんからせつかくなので今夜は狩り場での過ごし方を教えてやろう」

お互いに正座してイトラ向かい合い座学へと移る。

そして腕を振って袖口から黒板とチョークを取り出し、図を用いた説明をする。

もちろん白衣とメガネも出して雰囲気を出すことも忘れない。

これこそハターンクオリティ。

「まず狩り場で肝心なのは安全を確保することだ。

狩り場と言っても俺達クラスの達人になれば寝ていても起きることなく体が勝手に敵を殺戮してくれるし、そもそも俺みたいな強い存在に近寄ろうと考えるモンスターはまずいないのだがな」

「ふむふむ」

眼も取りながら俺の説明を一言一句聞き逃さないように真剣に聞くイトラ。

イトラのこういうところが俺は大好きなんだよな。

これまで教えてきた弟子たちはみんな、座学の時間が嫌いで真面目に聞こうとする奴は一人もいなかったからイトラの授業は教える身としても教え甲斐があつていいな。

「だが稀に襲ってくる勘違い系の馬鹿モンスターもいるわけだ。

今回はそういうモンスターの対処法を教えよう」

「なるほど、それじゃああんなモンスターとかですか？」

イトラの指さす方向には何を思ったかこちらに突進してくるモンスターの姿が。

「あれはジンオウガだな。

この渓流では最近モンスターたちの縄張り争いがあつたらしいがそれを制したのがジンオウガだと聞いている。

「以外と肉が上手いモンスターとしても一部で知られている」

もちろん俺はエリアに入った瞬間にエリア中に見えないくらい細かい、触れただけで切れるような糸を幾つも張り巡らせてあるのでジンオウガの存在にも最初から気付いていた。

それにこんな時のために探知用の糸以外にも罫を仕掛けておいたので移動することなく座学を続ける。

ジンオウガは構わず突進を続けるが俺達にぶつかる直前でその動きを止めた。

「……師匠、これってワイヤーですか？」

「さすがはイトラだ。

探知用の見えない糸と同じくらい細いワイヤーなのによくわかったな。

ここら一帯には攻撃用のワイヤーも一緒に張り巡らせておいたんだがジンオウガの奴はそれに気付かずにもんまと引つかかったわけだ。

これもトン爺さんの特別製だからジンオウガ程度に千切られるほど弱くはないしその内ジンオウガの体がバラバラになるだろう。

ちなみに七千ゼニーというお手頃価格だ」

ジンオウガは激しく動き回るがその度にワイヤーが喰い込み甲殻が裂け、血が噴き出す。

ジンオウガの体がバラバラになるまであと少しってところだ。

「仮にこいつの突進が直撃したとしてもジンオウガ程度の『どるーん』ってな掛声が聞こえてきそうなスピードの突進じゃあ俺の鎧には傷一つつけることはできないだろうかな」

「それじゃあ師匠。

師弟揃っての共同作業として二人でトドメを刺しましょうよ♪」

そう言つてイトラは愛用のボウガン『阿武祖龍弩・アハトアハトSP』を抜き放つがそれよりも先に俺の大剣はすでにジンオウガの首を切り落としていた。

「ふっ、そう言う事は俺よりも早く武器を抜けるようになってから言いな」

ボウガンはライトであれ、ヘヴィであれ抜いて、構えて、引き金を引くという3つの動作が必要だがイトラならば常人が『抜く』よりも早く3つの動作をこなして獲物を仕留めるくらいの手当はできると思ったのだがまだまだのようだな。

「いつかは師匠を越えてその時は力づくでもものにしてみせますからね」

「その時を楽しみにしているさ。」

俺は俺を越える存在はイトラをおいてほかにはいないと思つてるからな」

血に染まった大剣を地面に突き立て、それに背を預けるように座つて夜空を眺める。

そして当たり前のように俺の側から離れないイトラ。

「こんな夜も悪くないな」

殺意も殺気も悪意も敵意も何も無い、平穏な空間。
狩り場でありながらひどく落ち着いた空間で朝まで過ごすこととなった。

大泥棒マツク・ステイッド再び

てれれつて ぷるるつぶ たららつた てつてー♪

溪流で夜を過ぎした翌朝。

俺は迎えに来たギルドの馬車の笛の音で目を覚ました。

「おイトラ、朝だぞ」

「うにゆく、あと5時間……」

「もう迎えが来てるんだからそういう訳にもいかんだろう。
いい加減起きろー！」

「やあゝあゝっ！」

珍しくおねむのイトラは起きようとはせず、代わりに俺にしつかりとしがみ付いて離れなくなってしまうた。

たまに見せるこの子どもっぽさが堪らないのだがイトラに知られたら絶対に利用されるから気をつけねばいかな。

もしかしたらもう知られているのかもしれないが……

で、仕方がないので結局俺がイトラを担いでいくこととなり、エリア4の小屋に宿泊？するにあたって出していたベッドを片づける。

昨夜襲ってきたゾンオウガの首なし死体は剥ぎ取りが面倒という理由でそのまま引きずりながらベースキャンプへと歩きはじめる。

ベースキャンプには昨夜から別行動をしていたサラとディオシキ、それとロッドがすでに到着しており、持ち込んだ道具の片付け作業をしていた。

「やあハターン兄さん。

女性というのは凄いもんだね。

僕は一晩で女性に対する幻想を打ち砕かれましたよ……」

なぜか青い顔のロッドが荷物の片付けの手を止めること無くそう言った。

もしかしてロッドのやつはイケメンだし二人に食われちゃったのかもしれないな。

「やっぱサラとデイオシキの二人が迷惑掛けちゃったか。

とりあえずこの二人だけが女じゃないしお前にもいつかはきつといい事があるさ」

いやまあ、根拠はないし気休めかもしれないがなんとなく言いたくなっちゃうのさ。

ちなみに荷物の片付けというのもロッド一人でやっているだけでサラは俺の持ち込んだ食糧を食い荒らし、デイオシキは俺の持ち込んだ本を読みふけている。

そしてロッドが片づけてくれている荷物というのも全部俺の荷物だったりする。

いやね、俺も自分の荷物が多すぎるかな？とは思ったんだけどやつぱり狩り場用の本や狩り場用の調理器具はこのために所持してるんだから使いたくなるんだよ。

「あー、あとは俺がやるからロッドもゆっくりしてくれ。

なんか本当に色々とすまん。

あの二人は自分のことが大好き人間だから自分以外は興味を持ったやつ以外どうでもいいと考えてるんだが興味を持ったら持ったで迷惑をかける困ったちゃんだから」

「いえ、おかげで僕も新しいメロディーを思いついたので今回の採取ツアーの目的は達せられましたし構いませんよ」

やつぱこいつは相当のお人好しでもあるな。

母さんの弟子とは思えないほどまっすぐに育ったもんだ。

「お、ハターンじゃん！

どうしたんだよその首なし死体は？

食うのか？ジンオウガを食うのか？」

「ぎゃはは。

首ちよんぱでバーラバラってやつだねい♪」

「お前らも少しはロッドを見習え！

いっつも誰かに迷惑ばかり掛けやがって」

その後も俺をからかうことに心血を注いでるんじゃないか、と言うほどのサラとデイオシキの仲良しコンビによるちよっかいを受けながらも片付け作業を終えることが出来たのは俺がこの二人に慣れてしまったからだろう。慣れとは恐ろしいものだ。

それでも悪戯だけでなくジンオウガの死体の解体を手伝ってくれたあたり多少は弟子としての自覚もあるのかもな。

そうだよな？ 興味本位とかではなく師匠を敬つてのことだよな？

ふう、そんなことないか……戯言だよな。

イトラはスヤスヤと熟睡しているので起こすわけにもいかず、迎えに来ていた馬車に寝かせたまま乗せて起こさないように馬車を発進させ、トイダーヴァの街に帰ることは成功した。

そう帰ることに、だ。

街では街の厄介事が俺達を待ち構えていたのだ。

「では溪流採取ツアーの成功を祝って」

「「「かんぱーい」」」」

今回はロッドも含めた5人でのお祝いだ。その5人目のロッドは大人しい性格なのでいつも以上に盛り上がることもなく宴は静々と進んでいった。

それでもサラとディオシキのテンションの高さは半端ないんだけどな。

イトラもすっかり眼が覚めていつもの定位置、俺の膝の上でご満悦だし。

だが、ここで邪魔者が登場。

「そのお祝い、是非とも俺様も混ぜてもらえないかな？」

と言って、勝手に席に座り、勝手に食事に参加してきた男がいたのだ。

大泥棒マック・ステイツドだった。

「死ね」

イトラは最速で黒化し、ナイフを投げつけるがそれを上半身の動きのみで上手く回避した。

「おっと、イトラちゃんは今日もとてつもなく可愛いじゃないか。」

だが俺様は気配を限りなくゼロにしているからそつちの二人には見えていないみたいだね」

見ればサラとディオシキはマックの存在に気づくこと無く食事を続けていた。

こんな目の前にいてもこの二人に気づかせないだけの隠密スキルを持つているとは敵ながら天晴れだな。

「でも僕には見えてるよ。」

はじめまして、この街の第四位のハンター、ロッド・キツサです、と僕はキメ顔でそう言った」

「これはこれはご丁寧に。」

俺様は大泥棒のマック・ステッドです」

ロッドには見えていたらしく大泥棒に興味があるのかのんびりと握手をする二人。

この二人は意外と相性がいいのかもしれないな。

だが二人が握手をした瞬間何やら不思議な音が店内に響き、周りの客達が騒ぎ始め

た。

「おい、あれ大泥棒のマック・ステイッドじゃね？」

「こないだ俺のお宝を盗んで行つた奴だ！」

「私もあいつに色々盗まれてるわ」

他のハンターたちの視線が一齐にマックに向けられる。

「な、なぜだ!？」

俺様の隠密スキル、もとい存在感の無さは完璧だったはずなのに！」

「そりやたぶんこのロッドの異常なまでの不幸属性がお前に伝染したんじゃないのか？」

こいつの師匠である俺の母さん位しかこの異常なまでの不幸を無効化出来なかったんだし」

ロッドにしてみてもただの挨拶のつもりだったのだろうが騒ぎは広まり、すでにギルドナイトが俺達の周りに集まっていた。

「まあ、年貢の納め時だな。

イトラ、今のうちに眼力使ってみろ。

今度はマックにも効果があるはずだ」

「はい師匠。

イトラビイイーム♪」

と可愛らしい技名？とは裏腹にギュイイイイーンという音が聞こえそうなイトラの眼力によりマックはあっけなく気絶。

ギルドナイト達に御用となったわけだ。

去り際に意識を取り戻したマックは必ず戻ってくるぞおー！つとアホっぽく叫んでいたがイトラにその気がない以上俺はイトラを渡すつもりなんてない！

「ううーん、メロディーが閃いたぞ！

『心が光の矢を放つよ』って感じかな♪」

ロッドはまた新しいメロディが浮かんだようで先ほどの出来事などすっかり忘れ、弓であり、楽器でもある『竜頭琴』を矢を射つことで演奏し、その矢が連行されているマツクのに刺さったりもしていたが本人は気づいていないようなので俺はグツジョブとだけ言っただけだった。

『再び現る』とか言っといいきなり退場のマツクには同情するがそういうキャラだし問題ないな。

第十章：ネコの村の長かよ編

ネコネコ農場

ザツクザツク

カキーンカキーン

「さて、こんなもんでいいだろう」

そこは倒れた朽木、崩れた岩壁、伸び放題の雑草、そういったものですつかりと見る影を失った場所。

「それにしてもあのあと一度も来てなかったがここまで壊滅的被害をそのまま放置しておくなんてうちのネコどもは一体何をしていたんだか……」

さて、現状を説明しますと俺はいま自分の保有する農場へと足を運んだわけなのだが

前回来た時ディオシキが壊した設備や蹴り倒した樹木などの被害がそのまま残っていたのでその修繕作業をしているところなのだ。

「ご主人、こちらは無事に終わったのにや」

「おう、こつちも一通り片付いたし昼飯にするか」

「にやつほるんるん♪」

そしていま俺に話しかけたのが俺の農場の管理を全て任せてある農場管理責任猫のワリサだ。

尻尾のない綺麗な銀色の毛並みのネコなんだが、俺に異常なまでにべた惚れしているところなんかはたまにうつとうしく感じることもあるがイトラに近いものがあり、なかなか可愛いので結構長い付き合いでもある。

「はにゃ、やつぱり農場をディオシキさんが壊したまま放置していたおかげでご主人と一緒に汗水流して農作業ができるにやんて俺は幸せにや。これからもご主人のた

めにやらたとえ火の中水の中、ベッドの中やお風呂の中でもついて行く覚悟にや!」
「……そこはあえてスルーさせてもらおう。」

決して突っ込まないぞ」

持ってきた握り飯（イトラの手作り）を口に入れ、よく噛んで飲み込む。

イトラもハンターとしての成長は目を見張るものがあるが料理に関してはそれ以上なのだ。

イトラは今日も俺と一緒に農場へ来たが、ついていたがサラに限定スイーツの発売日だ、と言つて搔つ攫つていつちまったからな。

いつもサラと行動を共にしているデイオシキはまだ寝てたからつてのもあるけど。

そんな訳で珍しく俺は一人で行動しているのだ。

ワリサは除く。

「そーいやワリサ、俺の新しい弟子のイトラを覚えているか？」

今日の弁当もあいつが作ってくれたんだが料理に關しちや俺以上だろ」

そこで先ほどまで愛らしいアイルーらしい表情をしていたワリサは顔を曇らせて、

「俺はご主人の料理が一番好きにやんだからこの程度でご主人を越えたとは到底思えにやいにや」

この顔は俺が作ったものだと思つて食べてたらそうではなかったと知り、俺が作るよりも旨く感じたことをごまかそうとしている顔だな。

正直に旨いと言えばいいのにこいつも素直じゃないな。

「そういう俺はキリン娘が大好きだがネコにネコにキリン装備を着せたことないな……
また今度ワリサにも着せてみるか。」

「それにしてもこの農場えらく静かだな。」

「ディオシキに荒らされた農場を放置していたのは俺と一緒に農作業がしたかったからつてのはわかるけどどうして農場にはお前しかいないんだ？」

「この農場は広いし20匹は待機しているネコがいるだろう」

「先ほどから気になっていたのだがこの農場には常時20匹を越える農場ネコ部隊が配備されているはずなのだが今日に限つてワリサ以外にネコ達の姿を見ないのだ。」

「……実はいまアイルーの村でネコの王を決める選挙が開かれてるからみんなにやそつち

にいつちやっただにや。

もちろん俺はご主人一筋だからそんなにや選挙に興味はにやいにや!」

「選挙だなんてアイルーの村もずいぶんと発展してるんだな。

でもそれに参加しなかったら何か面倒なことになったりはしないのか?」

「参加しにやかったら黒づくめのネコ達に攫われて洗脳されちゃうみたいだけど俺はそんなにやもん怖くにやいにや。」

たとえ生まれた日は違えども死ぬ時はご主人腕の中で安らかに生き絶えたいのにや」

なんとも忠猫なこった。

だがその時突然物陰から黒い影が飛び出し、ワリサに飛びかかった。

「にやっ!」

にやにをするにや!」

現れたのは黒づくめの衣装を身に纏い、生意気にもサングラスを掛けた猫たちでそれぞれにワリサの四肢を拘束し、あつという間に縄で縛りあげると地面に穴を掘って消え

て行った。

「ご主人ヘルプミイイー！」

だが地面に出来た穴は丁寧に塞がれあとを追うことも出来ない。

「……なんとまあ、手際のいい連中だな。

とりあえず飯が終わったら助けにいつてみるか」

その後空になった弁当箱を鞆にしまうとワリサを探すために一旦家に戻るのだった。今回の出来事は面倒事につながるかもしれないが面白そうだったまには自分から動いてみるのも悪くないかもな。

ネコの村

青い空の下で可愛い弟子が作ってくれた弁当を食べ終わった俺は前回の続きとして攫われたワリサを助けにいこうと思ったのだが……

「そーいやアイルーの村がどこにあるかなんて俺は知らないな」

肝心のワリサの居所が分からなかったのだ。

やはりここはあまり気乗りはしないが家でまだ寝こけているだろうディオシキにでも助力を願うしかないか。

嗅覚が優れたディオシキならその明晰な頭脳（自称）と合わせてちやつちやと解決してくれるだろう。

なので考えていても仕方がないので弁当箱を片づけて家に帰ることにした。

家に帰ってみるといつもは昼過ぎても起きないディオシキがすでにベッドから起き出してソファァーで雑誌を読んでいた。

「おーいディオシキ。

ちよつと手伝つてほしいことがあるんだけどいいか？」

「おやや？ハタつちが僕様ちゃんに助けを求めるとなんて珍しいのねん♪

どうしたのかな？」

「いやなに、ちよつと俺の農場の管理を任せていたワリサを覚えてるだろ？」

あいつがアイルーの村に攫われたから村の場所を探すのを手伝つてほしいんだ」

こいつは俺と違って人付き合いが嫌いという訳ではないので俺よりも知り合いの数は多いだろうし、もしかしたらアイルーの村も知っているかもしれない。

俺は寡黙で渋いカツコいい男になるために知人や友人といった人づきあいをほとんど持っていないからな。

別に寂しくはないぞ。

「ほいほい了解したよ。

アイルールの村なら僕様ちゃんの明晰な頭脳を使うまでもなく行ったことがあるしね」

「さすがは俺の弟子だ。

神様つてのはどんな人間にも取り柄つてのをくれるもんだな」

「それじゃまるで僕様ちゃんが他に取り柄がないみたいに聞こえるんだけど……」

「他の取り柄はお前のマイナス要素と相殺してるからプラスマイナスでかろうじて残ったプラスがそれだけと言ったのだ」

「お前が弟子だった時はサラほどではないにしろ散々苦労掛けられたのを俺は忘れてないぞ。」

「まあ、いいよ。

それじゃあ早速行きましょうか。

「今向こうは次のアイルール村の族長を決める選挙で忙しいみたいだし邪魔しちや悪いしね」

「そういやワリサの奴もそんな事言ってたな。」

今回ワリサが攫われたのも族長選挙に参加しなかったからみたいだし」

考えてみれば選挙よりも俺に尽くすために農場に残ってくれたつてもワリサらしい忠誠心だな。

こりや帰ってきたらあいつに御馳走でも用意してやるか。

そんな事を考えているうちにディオシキは武具を身にまとい、大量の荷物を防具の下に仕舞った。

「よっし、準備完了よハタっち♪」

外に案内役のネコを呼んでおいたからあとはネコ車で向かうだけだから」

「それは仕事が早いな」

家の外に出るとディオシキの言う通りかなり豪華な造りのネコ車が待機していた。

ディオシキ曰く、ギルドに作ってある俺の口座から自動的に代金が引き落とされるよ

うになつてゐるらしい。

こう言うところはサラと違つてきつちりしてやがる。

……で、アイルーの村に到着！

移動途中は大した問題もなく、リオ夫婦に襲われた位なので説明は省略しよう。

着いた先は鬱蒼と生い茂る樹木に囲まれ、見渡す限りネコだらけだった。

場所が場所だけに人間が入れるような建物は少ないがその建物とネコの数からして人間の集落で例えるならレタリーポアの村くらいには発展したところだった。

「さあさあ、当選者予想くじの締切はあと少しだにやー！」

「アイルー村名物の選挙饅頭に選挙せんべいはいかがかにかにや？」

「安くしとくにや」

「宿泊施設ならもちろんうちの宿が安いよー……にや」

俺達を観光客と思つてゐるのかアイルー達は次々と色んなものを勧めてくる。

これがサラだったら絶対に余計なものばかり買い込んで目的を完全に忘れて遊び呆けてしまふだろうな。

まるで縁日のような盛り上がりなので俺も適当に買い食いし、せっかくなのでディオシキにも奢ってやった。

「さて、ワリサの匂いなんだが何か感じないかディオシキ？」

途中で買ったドドブラリングを贅沢に一個丸ごと使って作った林檎飴を舐めながら聞いてみる。

「大丈夫よハタっち。

ちやくんとワリサの匂いなら覚えてるからあと少しで着くはずよん♪」

俺がやった林檎飴を一口で食べたディオシキは残った棒を道端に置かれていたゴミ箱に捨てると一直線に歩きはじめた。

一口で。

着いた先は闘技場だった。

もちろんトイダーヴアの街とは規模が違うがそれなりに大きく、人間でも入れるように作られた入口や観客席から見るに人間の観客も多いんだろう。

「さあ、これより第3939回族長選挙大会が始まろうとしています。

それでは皆さん心行くまでお楽しみください！」

ワーワーワー

観客達は中央に集まっていく族長選挙の立候補者達を声援で迎え入れる。

「すごいやハタっち。

このアイルーの村では強いネコが族長になる掟だからここで戦って勝ったネコが次の族長になるのよ」

「それはワリサから聞いている……って、おい！

あそこにいるのはサラとイトラじゃないのか!？」

司会進行役に名前を呼ばれて中央に歩いて行くサラとイトラ。よく見ればアイルー以外にも人間がけっこういる。

「この選挙は立候補者の代理が認められてるから強さに自信がない人は政治的手腕、まあ大抵はお金だけど、それを使って人間を雇ったりするネコもいるわけよ。

ちなみに僕様ちゃんも昔頼まれて一度だけ参加しちゃったけど舞台を血の海に変えちゃったから出場禁止になっちゃったのよね」

ディオシキはおそらくサラとイトラも似たような理由で参加してるんだろうとも言う。

いやいや、サラやイトラのことだしこのままじゃディオシキみたいに舞台を血の海で染めることになっちまうぞ。

イトラの黒さは言わずもがな、サラもあれでいて戦闘狂だし。

「はあ、しゃーないから俺が止めてくるさ。

まったくあいつらときたらこんなしょーもない戦いにまで参加するなんてな」

あいつらがこのまま族長候補達と戦ったら殺し合いにまで発展しそうだしこれも師匠の仕事かもな。

まったく、やれやれだぜ。

囚われのワリサ

アイルー村の族長選挙はバトルロワイヤル形式だったらしく開始の笛が鳴ると同時に戦いは始まった。

が、飛び入り参加した俺が久しぶりに本気の闘気を発することで死傷者を出すことなく大半の参加者は意識を失い、残ったのはサラとイトラと俺だけとなった。

「お、ハターンじゃん。

こんな所で何やってんだよ」

「あ、師匠♪」

まさか私に会いたくてここまで追ってきてくれたんですか？」

俺に気付いた二人は楽しそうに手を振ってくる。

「はあく、おいサラ。」

新発売のスイーツを買うとか言って朝一で家を出たと思っただらなんでこんな所で殺戮ショーをおっぱじめようとしてたんだよ」

「いやあ実はさ、あたしはその新発売のスイーツを買おうと思っただら売り切れでさ。

そしたら店員にこの選挙に代理として出てくれたら無料でやるって言われて参加しただけで普通に暴れてスイーツをもらって帰るだけの予定だったんだぜ」

「その『普通に』の過程で他人に迷惑かけるなど普段から言ってるだろうが！

そんなつまらん理由でお前らみたい常人離れした戦闘狂が戦いの場に自ら赴くなんてどうかしてるぞ」

俺もそうなんだがサラは戦うことに喜びを見出してきてるからひとたび戦闘が始まれば見境なく破壊と暴虐の限りを尽くしちまうんだよな。

イトラもこないだの武神闘宴での戦い方を見る限り戦闘狂になってきているし。

「ほら、きゃっさと帰るぞ。」

ディオシキも昔この選挙に代理で出場して出入り禁止になるくらい暴れたみたいだ

し、さすがにお前らまで暴れたら二度とこの村に来れなくなっちまうじゃねえか」

「いいじゃん来れなくなっても。」

前向きに考えれば一つの村から出入り禁止を食らったではなく、それ以外の村には出入り自由なんだしさ」

「それは前向きとは違うぞ。」

一つの村に出入り禁止を食らうようなことをするようでは他の村からも出入り禁止を食らうのは時間の問題だ」

サラはなおも戦いたがっていたが他の参加者達はみんな俺が気絶させてしまったので渋々ながら棄権してくれた。

まったくこいつの扱いにはいつも苦勞する。

こいつは自分の望んだ生き方は他人にとっても望むところだと思っているから説得が難しいんだよな。

ふと、さつきまでサラの隣に立っていたはずのイトラに視線を向けてみるとこの選挙

本部で開会の挨拶をした司会役のアイルーと何やら話しこんでいた。

何をしてるんだ？

「えー、今回参加してくれましたイトラ・ウボンガ選手とサラ・ムーイ選手の棄権とその他の参加者が全員戦闘不能となってしまうのでイトラ選手の提案により、この村の次期族長はハターン・モンズータさんとなりましたにや」

ワーワーワーワー

司会者の発言により、観客全員によるスタンディングオベーション……そして拍手喝采……

「つておいー！」

ちよつと待てよ。

俺はこの村の族長をやるほど暇じゃないぞ！」

司会ネコは俺にかまわず言葉を続ける。

「なおハターン選手には拒否権はありませんにや。

それでは皆さん拍手拍手にや〜！」

パチパチパチパチパチ

なあんなんですかあ、この状況はあ。

「もうこのまま師匠が族長になってしまえばいつでも来たい時にこれますしいいじやないですか。

諦めが肝心ですよ♪」

いつの間にやら俺の背後に回り込んでいたイトラはそのまま俺に背中から飛び付いてきた。

サラの方も観客席にいるディオシキに気づき裂くを飛び越えたり他の観客を吹き飛ばしたりしてるし。

「やれやれ、ちょっと出かけてみればこんな災難に見舞われるとは俺ってばこれからどうなるんだろうな」

その後族長として正式に就任（拒否することを拒否されたため）し、俺の肩書がまた一つ増えることとなった。

面倒な手続きなどは全部放り出して俺達四人はネコタクに乗って家へと帰っていくのだった。

ふん、やってられるか。

「今回はハターンのおかげで暴れることは出来なかったけど新発売のスイーツはちゃんと買うことが出来たし結果オーライってところだな」

結局サラは新発売のスイーツとやらは棄権したというのに代理として出るように頼んできたネコを頼み込んで（脅しつけて）きっちりもらってきたそうだ。

それをディオシキやイトラとも分けあっており、俺も食ってみたが確かに旨かった。これなら今回の選挙に参加したサラの気持ちもわからんではないな。

そうして俺は揺れるネコタクの上で空を仰ぎながらトイダーヴァの街に着くまで一眠りするのだった。

……なんか忘れてね？

ワリサ side

カビ臭い臭いの充満した地下牢。

そこに絶対に脱出不可能というほどに縛られたネコとそれを囲むようにする二匹のネコ。

「へえええーるぷ！」

へえええーるぷミー！！」

そう！その囚われのネコというのがこの俺、ワリサにや。

ご主人がカツコよく勇者のごとく助けに来ると思つたので囚われのお姫様ポジションをしてみたいという理由でわざと捕まったけどいつまで待ってもご主人は助けにきてくれにやいのにや。

まったくやれやれだにや。

「助けなんか来るわけがないにやー。」

あのワリサともあろうお人、もといお猫が見苦しい真似はやめるにやー」

「まったくワリサつて言えばその名を口にするこゝともはばかられる最強最悪のネコだと聞いてたがこんな腰抜けだったとはのう。」

噂つてのはあてにならんもんじゃ……にや」

目の前にいるのはたったの二匹。

縛られているとはいえ、この俺の監視をたった二匹でするにやんて命知らずの馬鹿にや。

俺の予想だとご主人はきつと助けには来たが俺を助けるといふことを忘れてそのまま帰つたに違いにやいにや。

「……ふう、御主人は助けに来る気配もにやいし、俺もそろそろ自力で脱出しようかにや」

そうやって俺は拘束していた縄を容易く引きちぎり、伸びをして関節の調子を見ている。

うん、正常にや。

「なつ、貴様どうやってあの縄を解いたんだにやー!？」

あれは組織の開発した新技術により、力による破壊は絶対に不可能なはずにやー!」

「俺の噂を知ってるんだろ？」

だったら驚くにやよ、これが俺にやんだから。

そ・し・て、さよならだにや」

「ぐぎやあああー!」

まずは一匹。

金色の毛並みのネコの双眸に隠し持っていた鋏を突き立て、その腹をこれまた隠し持っていたナイフで切り裂き内臓を掻きまわし、両足の骨をグチャグチャにし、両腕を

切断してやったにや。

所要時間は0・0000006秒。

我ながらなかなかの目にも止まらない速さにや。

ご主人の技術で俺が使えないものにやんて一つもにやいにや。

ご主人のネコとしてこれ位の事が出来にやいでどうするにや。

『恐怖を感じない』体質というのも身につけてるけどこの状況に恐怖を感じていないのは元々この二匹が俺にとつて取るに足らない存在だからにや。

おっと、もう一匹をビビらせちまったかにや？

「ひっ……ひい、化物だー………にや」

先ほどから語尾に『にや』をつけないように無駄な努力していた奴にや。

まったく哀れだよにや。

「俺はよう。」

ご主人に助けてほしくてここで捕まってやってたけどお前らにムカついてなかった訳じゃにやいんだよにや。

だから……ケジメはつけにやいかんよにや〜」

単純な足の速さでも勝っていた俺は逃げ出した残りの一匹を捕まえるとその指を一本一本切断していき、さらに腕も細かく輪切りにしていき、両腕を切断し終わるとその喉に背後から包丁を突き立てた。

見ようによつては口から飛び出した包丁が舌が飛び出してるみたいだにや。

さて、これで終わり。

あとはご主人の元に帰るだけにや。

「さて、帰るとするかにや」

そうして一匹のネコは主人の待つ家に、いや、農場に帰るのだったにや。

にやははははは♪

第十一章：各キャラメイン編

たまには牧歌的に

さて、前回の話で何だかんだあつてネコの村の族長となつた俺だが、特に変わりない日常を送ることができている。

トイダーヴァの街に帰ってきてからもデイオシキに荒らされた農場に向かつて修理の続きをしたがいつの間にか帰ってきていたワリサとその他大勢のネコ達とで、すでに終わらせている。

そして街一番のハンターである俺にしかできないような難易度の高い依頼は今のところ来てないので狩りにもいかずにゴロゴロしている。

要するに暇なのだ。

具体的に言うならば、自室のベッドに横になりなつて新聞の『衝撃！先代王立古生物書士隊長ジョン・アーサーは生きていた!!』というあまりにも嘘っぽい記事に目を通すくらいに暇をしているのだ。

「そうだ！」

イトラに他人との狩りを経験させよう」

そんな俺が思いついたのがイトラに俺やサラやディオシキ以外との狩りをさせることだった。

すでにイトラはハンターの序列第五位というこの街でもかなりの実力者になってしまってるし、これ以上強くなつては一緒にクエストに参加できるハンターはいなくなり、ソロ狩りしかできなくなるだろう。

その前に他人との狩りの経験を積ませるのも悪くない。

将来この街の第一位の座はイトラのものになるだろうし、イトラの才能なら俺とは比べものにならない位に成長するからサラやディオシキといった上から数えた方が早いような連中でさえも足手まといに感じてしまいかねないからな。

「ではさっそく。」

……おいイトラ、ちよつとこつち来ーい」

「なんでしょう師匠♪」

最初から俺の部屋の前で待機していたかのような素早さで入ってきたイトラはベッドで横になっていた俺の腹の上に跨ってきた。

それにしても軽いな。

「あー、お前にもそろそろ他人との狩りの経験を積ませようと思つてな。

今日は農場へ行くぞ」

「農場ですか？

誰か待たせてる人がいるんですか？」

「まあ、そんなところだ。

行けばわかるさ」

狩りに使う荷物をまとめ、イトラを体の上からどかして家を出る。

農場に向かう途中にも何人かイトラと年の近いハンターとすれ違ったが俺がイトラと組ませるのはそんなレベルの低いハンターではない。

「さあて、農場に着いたな。

あいつらのことだから今日も暇してる奴らが何匹かいるだろう」

農場に着いた俺は手を叩いて連中を呼ぶ。

すると奴らはその音を聞いてすぐさま駆け寄り、俺の前で整列をする。

「ご主人に忠誠を誓う農場管理ネコ部隊、ただいま到着にや」

「ああ、御苦労ワリサ。

さてイトラ、今回お前がパーティーを組むのはこいつらだ」

「このネコさん達ですか？」

俺の知り合いで割とまともな性格をした連中なんてこのネコ達以外にいないからな
！（断言）

なんか自分で言つて悲しくなってくるけど。

「ちつつちち、イトラさん。

俺はこれでもこの街のオトモネコの序列第一位という輝かしいハンターとしての実

力を兼ね備（そにや）えてるにや。

それに他のやつらもご主人に忠誠を誓った猛者揃いですしイトラさんのハンターの先輩としてある程度のことを教えるくらいの實力はあるはずにや」

ワリサは自分の後ろに控えるネコ達を見て言う。

「まあ、そう言うことだ。

とりあえず今回はこいつらと行ってこいよ。

それじゃはいこれ」

俺はある物をイトラに手渡す。

「なんですかこれ？」

「これはネコミミカチューシャとネコ尻尾ベルトというものだ。

さすがにネコとは4人パーティーを組めないからモンニャン隊の一員としてクエストに行くのが今回の修行だからな」

べ、別にイトラのネコミミ&ネコ尻尾姿が見たいからではないぞ！

『にゃ〜』とか言われても嬉しくないぞ！

だが俺はキリン娘が好きだがそれ以外も大好きである、とだけ言っておこう。

「パーティーのリーダーはワリサになるがこれも珍しい体験と思っ行ってこいよ」

「分かりました師匠！

師匠がネコミミも好きだったなんて新しい発見もできましたし必ずやこのイトラ・ウボンガ、モンニヤン隊の一員としてアイテムを一杯取ってきてあげますにゃ〜♪」

ぐつはあ！きやくわあくいい〜いい〜♪

ていうか俺の心読んだのか!?

読まれちゃったのか!?

くううう、俺としたことが心に隙が出来ちゃったのかあああー！

だが可愛いから良し！

「……俺はまだまだ平気だ、まだまだ平気だ、まだまだ平気だ！

ふう、ではワリサ、イトラのことをよろしく頼んだぞ」

「了解にやご主人。」

では早速いくにや、副隊長、副副隊長ー！」

「にやー！」

それに答えたのはこの農場でワリサに次ぐ実力の持ち主のネコ。

ザアスとカリピヤーの二人だ。

「それじゃこいつらに色々教えてもらえよー！」

「はーい師匠。」

お土産を期待しててくださいいねー♪」

そうしてガーグア車で出発した4人は物凄い勢いで見えなくなっていくた。

愛の形

「さて、今回の狩りでは『モンニャン隊』のクエストということで必然的に俺がこのパーティーのリーダーをやるわけにやんだけど。

ぶっっちゃけイトラさんはご主人とどこまでいったのかにや?」

これがワリサちゃんの最初に言ったセリフだった。

「いやよう、俺もご主人のオトモをやってきて長いからご主人がいつまでも結婚しないのを心配してはいたんだがその相手がようやく見つかつたと思つたら子どもでしつてオチでちよつとがっかり……と思つてたらイトラさんつてかなり本気でご主人を狙つてゐたいじやにやいですか。

「だから俺も農場の連中もご主人の結婚は大賛成だからどれくらい関係が進んでいるのか知りたいんだにや」

けっこう大きく揺れるガーグア車に揺られながらも視線は真っ直ぐに見つめながら

聞いてくるワリサちゃんの瞳には私がハターン師匠に対する愛と似たものを感じた。

「俺つちもワリサの大將に賛成ニヤ。

農場に待機してる奴らももしも自分が人間だったらご主人のお嫁さんの座を狙いに行く！ つて連中ばっかだけど自分らがネコだという自覚があるから身を引いてるのニヤ。

そんなご主人の前に現れた本気でご主人との結婚を狙っているイトラさんにはさつさとご主人と結婚して幸せにしてほしいのニヤ」

「そうそう、私たちは単純にイトラ嬢が羨ましいんだみや。

イトラさんがご主人と結婚して出来る子どもとなれば、それはもうベリーベリープリーチーでしようしみゃ〜♪」

カリピャーちゃんとサアズちゃんも口をそろえる。

師匠との子ども……えへへ♪

「私は師匠を心から愛していますよ。

でも……実際に同衾（どうきん）までなんですよ。

その同衾にしたって本来の意味とは違うものなんですし……

だから進行状況は師弟関係から先に進めてないんです」

笑いたければ笑うがいいわ。

お義母様との一件のあと毎夜毎朝寝込みや風呂やトイレの時を狙って襲いかかってみただけ師匠つたら一切隙がないから全部不発に終わってるのよね。

「かー、ご主人つたらこんなに可愛いイトラさんに手を出さないなんてメンタル面も鋼だにや！

よしきたイトラさん。

こうなつたら俺らもご主人がイトラさんに手を出すように協力するにや！」

「本当ですか!？」

でも私も色々試したけど全然効果ありませんでしたし生半可な方法じゃあの難攻不落の師匠は落とせませんよ？」

そこで今度はカリピャーちゃんが懐から紙束を取り出した。

「ふふふ、そんな時に使うのがこれ『淫乱香』という媚薬の設計図ニヤ。

少しでもこの匂いを嗅いだ生物は例外なく発情してしまう薬なんだニヤ」

なんと素敵なものなのかしら♪

それがあれば私も師匠とついに結ばれることが……

「でもカリピャー。」

その淫乱香って材料にアレがいるんじゃないやかったかにや?」

「それとももしかして今回のクエストでアレに挑むつもりなのかみや?」

ワリサちゃんとサアズちゃんは驚いてるみたいだけどアレってなんででしょう?

カリピャーちゃんは自信满满みたいですけど。

「じゃっはっは♪」

「ご想像通り、アイツを狩りにいくんだニヤ！」

そこでカリピヤーちゃんは溜めを作り言った。

「そう、砦蟹シエンガオレンだニヤ！」

ババアーン！ とバックから擬音が飛び出してきそうな勢いで。

……なあくんだシエンガオレンか。

正直もつと手ごわいモンスターが相手かと思つてましたから正直期待外れもいいところですね。

でもワリサちゃんやサアズちゃんはすこし顔が青くなつてますね。

「あ、あの場所に挑むとはさすがはご主人に忠誠を誓つたオトモの中のオトモにや。

やるにや、カリピヤー！」

「確かにご主人とイトラさんがくつつけば子育てで家の仕事も忙しくなるだろうから私

「たちでもご主人と同居することが出来るかも知れないみや♪」

そんなに驚くほどの内容かしら？

それにちやつかり自分たちも師匠と一緒に同居する計画を考えていた辺り完全な善意でわけじやなかったのね。

そういえば師匠は家事も完璧だから家のことは全部自分でやってワリサちゃん達には農場の仕事しかさせてないでしたっけ。

「えーっと、シエンガオレンに挑むのがそんなにすごい事なんですか？

私はこれでもミラボレアス討伐や武神闘宴もクリアしてますしなんか今更感があるんですけど」

私の質問にはワリサちゃんが答ええてくれた。

「ちつつちつち、このオトモネコの序列第一位のワリサとその部下であるカリピヤー、サアズが言うシエンガオレンつてのは通常のシエンガオレンのことじゃにやいんだにや。

ここから少し北へ進んだところにあるアイルー族しか知らない道を通っていった先

に『ラオシャンロンの墓』という年老いたラオシャンロンが死にに來る墓場があるんだけどそこに目標となるシエンガオレンはいるのにや」

『ラオシャンロンの墓』は俺つちらアイル一族にのみ伝わる秘密の場所だから人間はおろか、竜人族にも知られてないけど、そこには大量のラオシャンロンの頭骨目当てのシエンガオレンが大量に住み着いてんだニヤ。

だから一流のオトモである俺つちらもためらってしまいうくらいの危険な場所なんだニヤ」

「さらに詳しく言うとう淫乱香を作るのに必要な素材がそこで採れるラオシャンロンの頭骨なんだみや」

なるほど、この三人がそこまで言うならこれは相当に厄介な仕事になりそうね。

「それじゃあ私に任せなさい。

師匠との愛を現実のものとするためなら蟹の10匹や20匹なんてことないわ！」

「……いや、言いにくいんだけど『ラオシャンロンの墓』にいる蟹の数は千や万を越える
そうにやよ」

「へ？」

ただですで行き先をガーグアに伝えてしまったので私たちを乗せたガーグア車は
止まることなくラオシャンロンの墓へと向かっていくのだった。

さすがに千や万の蟹に襲われるのはきついような……

モンニャン隊、蟹を狩る

進むにつれて増えてくるラオシヤンロンの骨。

ここら辺がもう『ラオシヤンロンの墓』でいいのかな？

そんな事を考えながら深い霧の中、イトア・ウボンガ率いるモンニャン隊は長く苦しい旅を乗り越え、こうして目的地へと到着したのでした。

ちなみに付け加えるなら今私たちを乗せたガーグア車は一頭のシエンガオレンに襲われている最中です♪

「ちよつとイトラさん！

このモンニャン隊は俺がリーダーだから『ワリサ率いる』じゃないと駄目にや。

「こればかりは譲れないにや！」

「まったくワリサの大将はセコすぎニヤ。

人間のハンターの序列五位の方がオトモの序列一位よりも上だしいいんじゃないかニヤ？」

そしてこの状況で言うセリフじゃないニヤ」

何やら細かいワリサちゃんもツツコミ担当のカリピャーちゃん。

「それにしてもシエンガオレンがこんなに積極的に攻撃してくるなんて知らなかったみや。

さすがの私でもこれだけの猛攻を避け続けるのはしんどいみや。
ぺちゃんこになっちゃうみや」

ガーグア車の手綱を握り、運転を担当するサアズちゃんは巧みなドライビングテクニックでシエンガオレンの攻撃を回避していく。

「それじゃそろそろ私があいつを仕留めてあげます。

サアズちゃん、あの蟹の真後ろに回り込んでください。

それとネコミミカチューシャが外れちゃいそうなので安全運転をお願いしますよ」

「合点承知の助みや！」

さつきからカチューシャが何度か飛んで行きそうになってたのよね。

これがなかったらモンニャン隊に参加出来なくなっちゃうし気をつけないと。

師匠の好みでもあるみたいですし。 うふ♪

そしてサアズちゃんは華麗なカーブを描きシエンガオレンの脚元を潜り抜け真後ろに移動する。

そこですかさず肩に担いでいたボウガンを抜いて構え、弱点である背中を隠すラオシャンロンの頭骨を散弾レベル3で破壊する。

「びぎやあああ〜！」

「ふーん、さすがにこの大きさのモンスターが相手じゃあ背中の頭骨を破壊するだけか。ではせつかくですし今までに使ったことのない弾でも使ってみようかしら」

そして新たな弾を装填し、引き金を引く。

シユン

使ったのは斬裂弾。

しかもトンお爺ちゃんの特製なので弾は空中で破裂し、細いワイヤーが幾つも飛び出しシエンガオレンに触れると同時に細切れにしていた。

「ニヤイスにやイトラさん！」

さすがはご主人の未来の一番弟子にや！」

「あ、そこはまだ今の一番弟子って言うてくれないんですね」

「そりやイトラさんは凄いいけど、まだ俺ら以上というだけでご主人の弟子としてならサラさんやディオシキさんには及ばにやいにや」

ワリサちゃんつたらけっこう正直ね。

まあ、そんなところも可愛いし、私と師匠に子どもが出来たら抱っこさせてあげてもいいわ。

「大将もイトラさんも気を抜いちや駄目ニヤよ。」

こいつはまだまだ序の口ニヤ。

この先に蟹のボスがいるはずだから気を引き締めるニヤ！」

カリピヤーちゃんの掛け声と共に私たち四人はラオシャンロンの墓のさらに奥へと進んでいく。

「俺っちが聞いた情報だどこの奥にいるはずニヤ」

それにしても、けっこう奥に来たと言うのに最初の一頭以外、シエンガオレン達は襲ってくる気配はないけどどこにいるのかな。

サアズちゃんにガーグア車を止めてもらって様子を双眼鏡で辺りを見渡して見る。

「うーん、どこにもシエンガオレンの姿は見えませぬね。」

周りの骨の山に隠れてるのかな？」

ついにはラオシャンロンの骨に三方向を囲まれた行き止まりに來てしまった。

「行き止まりかー。」

それじゃ仕方ないし來た道を引き返しましょう。

ワリサちゃん達はここのこと何か知らないの？」

私もこの場所のことは今日知ったばかりだし何も知らないんですよね。

「俺っちが聞いた話ではこここのシエンガオレンのボスはトンデモなく大きくて危険だから絶対に近づくな、と言われたことしかないニヤ」

と、首を振るカリピャーちゃん。

「俺も昔來たことがあるけどこんにゃに奥までは來たことはにゃいから詳しくは知らにゃいにゃ」

先ほどからモンスターの気配だけは相変わらず感じるので自分の武器をすぐに出せ

るように構えるワリサちゃん。

「それじゃとりあえず引き返しましょうみや。」

こんな場所では背後から襲われたらどこにも逃げ道はないみや」

そこでサアズちゃんが車を反転させた瞬間地面が揺れた。

「もしかして……この地面こそがこのボスシエンガオレンなの!？」

「にやんと先ほどから感じていた気配の大きさはこれだったのかにや！」

「気配が大きいのも隠れていたんじゃないかと最初から見えていたからにやのかにや
!」

さすがのワリサちゃん達も焦りの色を隠せないみたい。

ワリサちゃんが瞬時にワイヤーをバリヤーのように（ダジャレじゃないです）張り巡らせて地面（ボスシエンガオレン）が動いたことで舞い上がった骨の破片を弾き飛ばし、サアズちゃんがなんとか転がり落ちるようにしながら巨大なシエンガオレンの身体を

滑走する。

地面に無事に着地を成功させて見上げてみるとその大きさがよくわかるけどこれは凄いい。

まるで街が歩いてるみたいだわ。

ふふん、こうなるとは思ってたけど今回の狩り……否、モンニャン隊クエストはこいつを狩れば成功になるはず！

「さて、正々堂々手段を選ばず真つ向から不意討つてあげましょう」

そして私たちに気づいたシエンガオレンは剣を振り上げ、その巨体に似合わぬ速度で叩きつけてきた。

これが始まりの合図。

私たちはガーグア車を飛び降りそれぞれの武器を構えぶつかって行きました。

命令だ！ 消し飛べ！

思ったよりもボスシエンガオレンとの戦いは熾烈を極めています。

私の相棒『阿武祖龍弩・アハトアハトSP』も、トンお爺ちゃんによってさらに強化されたって言うのに、いくら弾を撃つてもその長き年月を経たのだから甲殻には傷一つつけることは出来ません。

ワリサちゃん達の武器も歯が立たないですし。

「いつものノリでこいつもあつさり細切れに出来ると思ってたけどそれは甘いみたいですねえ」

「落ち着いてる場合じゃにやいにやイトラさん！

俺らの武器が一切効かにやいんだからもつと焦った方がいいにや」

いつものような飄々とした余裕が消えてしまった風なワリサちゃんにも緊張の色が窺える。

その長めの綺麗な銀色の毛並みも汗でしっとり肌に張り付いているから正直近寄ってほしくないですね……

「でもそんなに心配する必要ないんじゃないんですか？

というかみんなも全然本気出してないじゃないですか」

私の一言に三匹は同時に固まる。

やっぱり本気じゃなかったんですね。

「にやはは、実はご主人からイトラさんのサポートに徹するように言われてたもんにやから」

「イトラさんに気づいてもらえたことだし、これで俺たちもこんなに手加減してふざけた殴り合いっこをする必要もなくなったニヤ。

さすがにここまで一方的に攻められるとついつい殺したくなってしまおうからしんどかったニヤ」

「では私もリミッターを解除しましょうみや。」

あの蟹にいい声で鳴かせてあげますみや♪」

3匹はそれまで使っていた武器を投げ捨て地面から新たな武器を取り出す。

「そういえば気になってたんですけどアイルーの皆さんはどうして地面をちよつと掘るだけで武器やら爆弾やらを掘りだせるんですか？」

これまでも野生のアイルーを見かけることも何度かありましたけどそうした野生のアイルーも地面から爆弾を取り出せていたのを不思議に思ってたんですよ。

「実は地面の下には『地下ネコ』っていうアイテムを地下から受け渡しする専門職のアイルーがいるのにや。」

だから俺らは自分の足元を掘れば必ずそこには欲しいアイテムがあるんだにや」

ワリサちゃんが取り出したのはドリル。

小さな体に似つかわしくない天を貫くかのような長大なそのドリルを構えると、それ

でボスシエンガオレンの脚を掘りだした。

「ナイスだぜワリサの大將！

ここからは俺つちがさらに傷を抉ってやるニヤ！」

ワリサちゃんが退くのと同時に向かったカリピャーちゃんはまだで嵐を纏ったかのような細長い大剣を両手で握りボスシエンガオレンの脚に叩きつけた。

「びぎやあゝー！」

するとありえないような巨体を誇るボスシエンガオレンがありえないことに横倒しになる。

「さすがのボスシエンガオレンもこの一撃には耐えきれなかったようニヤね。

俺つちの愛剣『ストームルーラー』は攻撃対象の大きさや重さに関係なく必ず吹き飛ばせるのニヤ！」

あれだけの長い剣を振るったのに息一つ乱さず、その大きな剣を軽く肩に担ぐカリピャーちゃんのお眼はまさしく狩人の眼だった。

「さあさあさあ、次は私が動きを封じますからトドメはイトラさんに任せましたよ」

「あ、わかりました」

そこで一歩前に出たサアズちゃんは地面に倒れてもがいていたボスシエンガオレンに向かって静かに歩み寄り、

「塵は塵に、灰は灰に、吸血殺しの紅十字みや！」

サアズちゃんの手から燃え盛る炎の塊が放たれた。

否、それは燃え盛る炎に包まれたワイヤーだった。

確か師匠の技にもワイヤーを使ったものがありましたけどこれって火をつけれるなんて幅の広い技だったんですね。

すでに完璧に身につけましたし今度からは私も糸を持ち歩くようにしましょうか。

「さあ、イトラさん。

ここで華麗にトドメを決めるみや！」

燃え盛るワイヤーで地面に縫い付けられたボスシエンガオレンは動きを極端に制限される。

それじゃあ私も奥の手を使わせてもらおうかしら。

この武器『阿武祖龍弩・アハトアハトSP』の『SP』の部分がどれほど変わったのかをこれまであまり描写してなかったけど、これは最高の見せ場ね。

「『阿武祖龍弩・アハトアハトSP』最終形態！」

トンお爺ちゃんによって改造されたこの武器の最終形態へと変形させていく。

付属パーツを使うわけでもなく、ただ変形させるだけなのにありえない位に巨大化した私の愛銃。

まったくトンお爺ちゃんはどうやってたらこんな改造が出来るのかしら？

まあだからこそ重さも変わってないから扱いにくくはないんですけどね。

「極上・銃王無神！」

発射あああああああー！

トンデモない爆音が辺りに響き渡り『阿武祖龍弩・アハトアハトSP』から放たれた弾はボスシエンガオレンに命中した瞬間に縦横無尽に……広がったかは不明だけどトンデモないエネルギーが噴き出し、その存在の痕跡を完全に消滅させた。

ボスシエンガオレンは完全にこの世から消滅したのだ。

「愛は勝つ！」

「つてイトラさん！」

消滅させちゃったら剥ぎ取りができにやいにや！」

「あ」

これにて今回のモンニャン隊は終了。

結局今回のクエストは収穫もほとんどなく、淫乱香を作ることも出来ずに農場へと帰ることになったけど師匠は笑顔で私達を迎えてくれました。

それどころか体力が常人とは比べものにならないはずの師匠が息を切らしながらも私を抱きしめてくれたのです♪

心はいつもより固く閉じられていたので読めませんでした。がきつと私の事が大好きな感情を知られるのが恥ずかしいからなんです。よう♪

いつか媚薬なんかなくても振り向かせて見せますからね師匠。

サライバル

おっす、今回はこのあたしサラ・ムーイがメインの話でいくぜ！

ここ最近イトラの出番が多いし、ハターンは主人公だから仕方ないにしてもあたしも出番が欲しいと思ったからちよつとあたしの日常を話そうじゃないか♪

ではスタート！

「サラちゃん、あなたにいく、名指しの依頼が来てるわよお♪」

今のあたしは一人で狩りに出ようと思つてギルドで掲示板を眺め……る前に腹ごしらえとしてハターンのツケで大量に食い溜めしているところだった。

あたしつてばなぜかどんだけ食つても太んねーからたくさん食わないとすぐに痩せちまうんだよな。

あ、もちろんあたしもけっこう稼いでるから代金を払えないわけじゃねーんだけど、あたしってば宵越しの金は持たない主義だから狩りに出たあと以外は大抵ハターンのツケにしているから今回だけ特別にハターンのツケにしているわけじゃねーからな。

「さてさてこのあたしに依頼ですかあ〜？」

あんまシヨボイ依頼だったら受けねえぞマル」

「そんな事言わないでえ〜。

とりあえず眼を通して見てよお〜」

もちろん見ずに断るつもりもないので依頼書を受け取り目を通して見る。

これは……あいつの依頼か。

「サラちゃんもつくづくあの子に好かれてるわねえ〜。

それでどうするのお〜？

受けるう〜？」

「……このあたしがアイツの依頼を逃すわけねーじゃん。

まつ、サクツと片づけてきてやるよ」

依頼書にサインをし、武器の確認をして店の入り口の戸を勢いよく開けて出て行く。何人かはあたしの顔を見て怯えてたみたいだから、どうやらあたしは喜んでるみたいだな。

あたしの本気で喜んでる時の笑顔は見た奴に恐怖を与えちまうみたいだ。

ハターン譲りつてわけじゃねーけど実はこう見えて（ハターンは見た目通りつて言うけど）デーンちゃんよりもイトラよりも一番戦闘狂なのはあたしだってことは自分が一番わかっているのさ。

そして今回の依頼は依頼主と直接会うことになっている。

幸いにもトイダーヴァの街に宿を取っているようなので依頼書を持って行き、依頼書に書かれた番号の部屋に入るとそこにヤツはいた。

「久し振りさねえ、トイダーヴァの序列第二位、サラ・ムーイ」

「確かに久しいな。」

「一応あたしのライバル、スーラン・ルシード」

「一応って何さ!？」

「私はあんたの永遠のライバルなのは太古の昔から決められた宿命っさ!」

「やっぱこいつおもしろいな♪」

「ハターンやディーちゃんにも、ライバルがいるけどあたしのライバルってのはちよつと鬱陶しいけどおもしろー性格なんだよな。」

「この女、スーラン・ルシードはランス使いであたしと同期でハンターになったんだけど何年前前にあたしに勝つために修行に出てたはずなんだが帰って来たってことはその修行は終わったのだろうか。」

「見なさいサラ・ムーイ!」

「この私の装備、今回はボーンSシリーズとネイティブスピアさ!」

「ランス使いにとって天敵のブルファンゴと突進対決を繰り返しながらついに勝利したことで作った装備なのさ!」

へー、ブルファンゴと正面から突進勝負して勝てるなんて修行の成果は結構なものみたいだな。

だがあたしのライバルを名乗るにはその装備はちよいとしよぼ過ぎだと思うけどなー。

「あんたは相変わらずレウスXシリーズに鬼哭斬破刀・真打か。

いつ見ても変わり映えしやしないさねえ。

こりや今回の勝負は私の勝ちさ」

「そう言うお前はいつ見ても違う装備を身につけてるな。

あたしはこの装備が好きだから理由無く代えたりはしねーよ」

オシャレハンターのつもりらしいが、あたしには分かん感覚だ。

とりあえずここらでこいつの依頼について説明すると内容はこいつと狩り勝負することなんだよ。

これまで何度か勝負してスーランは負ける度に修行の旅に出てたんだが、帰ってくる度にその成果をあたしに見せつけるために一緒に狩りに出てさらに勝負するんだ。

もちろんあたしの全戦全勝。

で、今回のターゲットは雪山でのティガレックス二頭同時クエスト。お互いに一頭ずつタイマンして先に討伐した方の勝ちってことらしい。

「それじゃあ行くかい？」

びつちしばつちしあたしの実力であんたを完膚なきまでに敗北という名の奈落の底に叩き落としてやんよ」

「そつちこそ覚悟はできてるんでしようね？」

私はブルファンゴとの突進勝負でも負けない実力を手にしたんだから、あんたなんかに負けるわけないさね」

これがこいつの面白いところ。

あたしに勝てるかと本気で思ってたやがるからあたしは毎回こいつを完膚無きまでに叩きのめすのが最高に楽しーんだよ。

じゃあさつそく狩り場に行こうじゃないか。

まあ、逃げるつもりだとしても逃がすつもりはねーけど。

「あたしの攻撃を前にして防御なんて意味があると思うなよ！」

まず最初、ティガレックスは振り上げた右の爪で地面ごとあたしを薙ぎ払おうとしてきたがヌルすぎる。

あまりにも大振りだったのでその前脚を兼ねたその翼に拳を叩き込み、その翼膜に大穴を開けてやった。

「ふん、戦闘力たったの5つてか？」

ティガレックスつつつてもこいつはハズレだなハズレ。

サイズも小さいし弱すぎてあたしの相手になりやしねーよ。まっ、手ぬかりなく手え抜いてやつから安心しろよ」

あたしに向かってくる勇気だけは褒めてやりたいがこのティガレックス程度が相手なら背中への太刀を抜く必要もない雑魚だ。

今回の狩りはスーランとのタイムアタックでもあるわけだけどここの程度が相手だと

あつさり過ぎてスーランにわりーな。

「スローすぎて欠伸が出るぜ。

あたしと戦うに実力不足だったってわけだな」

そうしてティガレツクスの頭に拳を叩きつけて地面に縫い付けてやった。

「あたしの殴った部位はまるでその部分が最初から存在していなかったかのように抉れていた。

これはハターンに教わった技ではなくあたしが編み出したあたしだけの技術。

「ディーちゃんはこんな力技は出来ないって言ってたけどもしかしたらイトラは出来るかもな。

今度教えてやろう。

それにベースキャンプも近くて便利だぜ。

素材の持ち運びって面倒だから剥ぎ取りも面倒だしせつかくベースキャンプに近いらだから死体ごとキャンプに運んどくか。

「さて、風も強くなって吹雪いてきたけど山頂のスーランの奴は大丈夫かな。

あいつつてば実力はそこそこのくせに度胸だけは一人前だからどんな状況でも退か
ねーだろうし」

ちよつくら山頂まで様子を見に行つてやるか。
今回もあたしの勝ちになつちまつたけど。

山頂決戦

スーラン side

現在地、雪山山頂。

「さて、サラとはスタート地点が別れちゃったし、こっちはこっちのティガレックスの討伐でもするさねえ」

と、考えていたらなんとティガレックスは背後にいましたとさ。

「グオオオオオー！」

「うわあー！」

慌てて距離を取ったけどあと少し回避が遅れてたら首と胴体が泣き別れするところ

だったさ。

「しかしでかい……」

サラのことだから下のティガレックスなんて数分で片付けるだろうし私も数分でこいつを狩らなきゃいけないさねえ」

ティガレックスは私との距離が開いたために突進を開始したので今回のために強化した愛用の槍と盾を構えティガレックスに突進する。

だが……

私はその突進勝負に負けてしまった……

そして木の葉のように吹き飛ばされた私は運悪く露出した岩肌にしこたま体を打ちつけてしまったのさ。

「ま……ずいさねえ。」

なんだってば私はこうも運が悪いんだろうねえ」

思い返せばこれまで何が楽しくてハンターをやって来たんだろうね。

生まれつき何でも出来る才能があったけど『ある程度』から上には伸びない器用貧乏な体質を改善するために命のやり取りが多いハンターという職業なら多少は成長も見込めるかと思ったらハンターとしての成長は止まっちゃったし。

やっところさランスによるブルファンゴとの突進勝負に勝てるまでに成長したと思ったらティガレックスには通用しなかったし。

「私の人生ってのはなんだったのかねえ」

ティガレックスは私が生きていることに気づいているため追撃を仕掛けようと再び突進を開始してきた。

「結局は天才のサラに私は勝てないのか……」

自分と違ってハンターとしての才能だけを持って生まれたような私のライバルサラ・ムーイ。

彼女を勝手にライバルにしたのも私とサラ以外で上位以上にまで成長した同期がいなかったただけだという単純な理由だけ……

サラは私よりも早くG級まであっさりとは駆け上がり私がG級に辿り着いた時にはトイダーヴァアの第二位という遙か先へと進んで行ってしまったのだけれども……
それでも彼女に私の実力を認めさせたかったさねえ……

「おーいスーラン無事かー？」

ああ、とうとう幻聴が聞こえるまでになってしまったか……
いくらサラでも下のティガレックスを倒してからこんな早く山頂までのぼてくるなんてできるはずないさね。

「うりゃー！」

だけど確かに聞こえるサラの掛声が響いたと思ったら突然辺りに眩しすぎる閃光が私の視界を潰す。

「グギヤアアアアアー！」

「ひぎやああああああくー！」

ちなみに上の悲鳴が私で下の悲鳴がティガレックス。

「おつすスーラン。

もしかして眼をやられちゃったのか？

まったくティガレックス相手にそんなピンポイントで攻撃受けるなんて災難だな」

「あんたの閃光玉でこうなったのさ！

というかあんたもう下のティガレックス狩ったっての!？」

「おう、もちろん太刀を抜くまでもなく頭蓋を粉碎して地面に縫い付けてきてやったぜ
！」

なんて豪快な……

でもそれでこそ私のライバル。

「どうせスーランのことだからティガレックス相手に突進勝負して負けたんだろ？」

あとはあたしに任せてゆっくり寝てろよ」

そういうとサラは動けない私に回復薬グレートをどばどば掛けたあと背中
の太刀に手を掛けた。

「さて、宴もたけなわ、お祭り騒ぎにらんちき騒ぎ。

このティガレックスは下で倒したティガレックスよりもでかいしあたしも本気を出してやるぜ！

うたえい！ 『鬼哭斬破刀・真打』!!」

その瞬間初めて見るサラの太刀は雪山の吹雪をもともしないくらいに輝いていた。

サラ side

これまでに狩ってきたモンスターの数はいちいち覚えちゃいねーけどこの太刀を抜かせるほどの大物は数えるほどしか狩ってないからな。

久し振りに楽しませてもらうぜ！

「さて、では鞘に戻すか」

「戻すんかい!?!」

うおう、スーランの奴突然ツツコミ入れてきたな。

怪我は大丈夫なのか？

「あ、あんた！」

いま何でその太刀抜いたのよ!?

もしかしてその太刀は儀式用ってやつ!?!」

「何を言ってるんだスーラン？

確かに剣は使うと欠けたり傷ついたりするからお祈りにしか使わない奴もいるらしいけど、あたしの場合は居合い斬りをするから鞘に戻したただだよ」

そういやスーランの前でこの太刀を使うのは初めてだったな。

もしかしてあたしのことを拳使いとも思ってたのか？
ま、いつか。

「ゆらーりい……」

技の溜めに入りながら閃光玉で目を潰され、のたうちまわるティガレックスを正面に
捉える。

「……ゆうらありい……」

ちよつと隙が大きい技だけどこいつほどの大物が相手なら大技じゃねーとカツコわ
りーしな。

「さて、では決めさせてもらおうぜ！

食らいやがれー！」

居合い切り炸裂。

その剣速は凄まじく、実際に切られ続けているティガレックスには鏗鳴りの音が聞こえるだけなんだろうけどな。

だがそんな眼の前で実際に技を食らっていることにすら気づいていないティガレックスの困惑など無視して鋭い斬撃を連続で叩き込む。

こんなこともあろうかと、鞘の中に下で殴り殺したティガレックスの血を入れることで鞘走りの速度を飛躍的に上げ、さらに腕の関節を意図的に外すことで人間の骨格ではありえないような角度からの斬撃までも可能としているあたしの斬撃。

それは避けることなど決して不可能な完璧なまでの斬撃。

「ひぎやああああー!」

そして最後、斬撃のあとには巻き起こった風がトドメを刺す。

シユババババババババババ

「完了、不備なし」

最後の一撃を繰り出したあと鞘に戻さなかった愛刀の血を振り払い、立ったまま死んだティガレックスを前にゆっくりと太刀を背中の鞘に戻す。
そして最後の鏗鳴りの音が雪山に木魂する。

チイイーン

それが合図となり、ティガレックスの死体はバラバラと崩れ落ちた。

ライバルの最後……

まったくやれやれだぜ！ ……と、ハターンなら言うところだな。
あたしも久しぶりに本気を出したから少し疲れちゃったよ。

「おい、スーラン。

終わったぞー」

壁際に倒れていたスーランを振り返ってみるとそこには雪に埋もれ、カチコチに凍っているスーランが……

一体なぜ!?

「っつておい！

大丈夫かよ!？」

慌ててスーランを担ぐと断崖絶壁の崖から飛び降り、スーランの持っていたランスと

セツトの盾をボード代わりにして雪山を滑走する。

「あー、そういやこんな雪山で回復薬グレートなんかをぶっかけたら怪我の治癒よりも先に凍りついちゃうわな。

うっかりうっかり」

あたしとしたことが最後の最後で失敗しちゃうなんてらしくねーな。

まっ、これはこれでいいか。

今回の勝負もあたしの勝ちだぜスーラン。

……

……

……

そして中継地点であるポケケ村で宿に泊まり、そのまま一夜を過ごす。

クエストの方はギルドに連絡入れておいたしあたしの名を出しておいたから面倒な事は全部マルが上手くやつといてくれるはず。

ただ難点を言うなら観光シーズンということもあり、フラヒヤ山脈はハンター以外にも観光客が多いということだ。

おかげで部屋は一つしか取れなかったがちよつと狭いだけで雪山の寒さを緩和してくれてるから別に問題ないだろ。

スーランの解凍もすでに終わってベッドに寝かしつけているので、あたしはその隣に潜り込むとそのまま眠りについた。

そして翌朝目を覚ましたわけなんだが隣では昨日までカチコチに凍って大ダメージを受けたというのにもう一晩で元気に回復したスーランが正座していた。

何か話でもあるのか？

「おはようつき、サラ。」

昨日はなんか色々迷惑かけたね」

「迷惑ってほどでもねーさ。」

結局ティガレックスは二頭ともあたしが狩ったし勝負に関してはスーランの負けだけだな」

ブルファンゴに突進で勝てるってのはすげーけどティガレックスとは比べものにならねーし案外こんなもんか、という思いはあるがそれでも一応ライバルのスーランの成長も見れたし今回の狩りもまったくの無駄ではなかったけどな。

実はスーランがティガレックスを見つけて突進勝負をするところはちようど見たのさ。

「それなんだけど……さ。」

私、ハンターやめようと考えてるんだ」

「はあ？」

お前すつげえつえーじゃん。

あたしの同期でハンターになった中で二番目につえーのになんでやめんだ？」

というかあたしと同時期にハンターになった連中はあたしとスーラン以外みんな狩中に死んじまつてるんだよな。

「私はサラには勝てないことがよくわかったつぎ。だから今回の狩りで勝てなかった

ら最初から引退するつもりだったのさ」

「ふーん、まあお前がそう言うんならそれでもいいけどハンター辞めた後、なんかしたいことでもあんのか？」

「軽っ！」

ちよ、ちよつとそこは引き留めるところでしょ!?

『スーランには狩りの才能がマジであっからやめんじゃねーよ』とか」

「お、今のあたしのモノマネけっこう似てたな。

もしかして今度は芸人として身を立てていくつもりか？」

「ちつがーう！」

つまり引き止めてほしいのよ！ わかる!？」

顔を真っ赤にして言うスーラン。

どうやらジョークのつもりだったみたいだけどあたしにはそういうの全くわかん

ねーんだよな。

「じゃあ引き止めてやるけど実際どうするつもりだ？」

今回の狩りでお前にあたしは倒せないってのは十分に理解できたぞ」

「ふふん、引き止めてもらって悪いけど実はハンターを辞めるつてのはある意味本音なのさ。

今回の雪山に限らず、私は狩り場に出るのが面倒だと思ってたからハンターに似た仕事をしようかと思ってるのさ」

「ほうほう、それはどんな？」

「つまり！

私の隠された『猛獣使い』の能力で捕獲してきたモンスターに芸を仕込んでショーをしたり、私自身も歌って踊れる闘技場専門のハンターになってがっばり稼ぎまくることにしたのさ！

サラにも今回の最後の勝負で勝つことが出来たし『トイダーヴァの第二位サラ・ムー

「イに勝った女』って書けば集客率アップは間違いないさね！
アイドルってけっこう憧れるしさ♪」

「おい！ それこそちよつと待てだぞスーラン！

このあたしがいつ、どこで、お前に負けたってんだ!？」

スーランはなぜか勝ち誇った顔をし、

「今回のティガレックス二頭討伐クエストの契約書の内容をよく確認しなかったの？

『なおこの狩りにおける勝者は雪山を下山する時に敗者に背負ってもらって山を降り
ることとする』って書いてあるでしょ？

つまり私は二頭のティガレックスを狩ることは出来なかったけど雪山を下山する時
にサラに担がれてここまで来たみたいだしこの条件なら私の勝ちってことで♪」

「ふっげけんなよー！

あたしは断じて認めねー！

そんな看板見つけ次第たたき割ってやる！」

「無駄よサラ。」

実はサラがそう言うのと想定して今回のクエスト出発前に、すでに看板を10万枚発注してあるから♪

さすがにこの枚数を全部割るのは難しいでしょ」

初めっからこうなることを予想していやがったのかこいつ……

確かにそれだけの枚数をたたき割るのはかったりし。

だけど、これでハンターをある意味辞めてアイドルデビューするって言うなら最後くらいいいかもしれねーな。

「OK、万事わかった。」

それじゃお前はお前でがんばるがいいさ」

「ええ、そうさせてもらおうっさ。」

すでに私が出るショーはものすごい人気でチケットはすでに完売してるけどサラには特別に安くしといてあげるっさ」

「無料じゃねーってところが、ちゃっかりしてんなお前は」

その後すっかり元気になったあたしとスーランはトイダーヴァの街に無事に戻り。

後日スーランの出るといふショーにハターン達と一緒に見に行つたけどありやなかなかのもんだつたぜ。

何しろモンスターがみんなスーランに懐いているらしいからショーとしては最高のものだったんだけど、『オオナズチと美女の戯れ』や、『ギギネブラによる美女の捕食』つてなショーはまさにヌトヌトのベトベトで男の観客には最高にウケが良かったな。

思わずあたしも濡らしちまつたよ。

まっ、そんなこんなでこうしてあたしのライバルは転職したのだったってオチで今回の話を締めさせてもらうぜ♪

自分の居場所

ぎやはは、今回はこの僕様ちゃん、デイオシキ・ブラザキちゃんがメインの話を始め
ちやうぜ♪

殺るぜ、超殺るぜ。

ではどうぞ！

「たまには一人つてのもいいもんね♪」

朝起きたらハタつちもイトラちゃんもサラにゃんも居ないから仕方がないのでギルドで遅めの朝食をとることにしたんだけど考えてみれば一人になるなんてこの街に移つてからは初めてかもしれない。

三人は匂いから判断するとハタつちとイトラちゃんは農場、サラにゃんは……街からは匂いがないから狩りにでも出かけたみたい。

だからギルドでマルと駄弁りながらハタつちのツケで食べようと思ったんだけど面

倒なことになっちゃったのよん。

で、ハタっち風に言えば、それは突然のことだった、って感じに今回の物語は始まるわけ。

「おいあんた、かなり美人だし俺の女になれよ」

その男はギルドに入った途端に声を掛けてきた。

「俺はハンター協会第1136支部の支部長イステ・カーツつてんだ。

俺の女になるなら金も欲しいだけやるよ」

この男、チビで不細工なうえに年は若そうだけどずいぶんと禿げあがってるわね。僕様ちゃんを知らないなんて自殺志願かしら。

「おいおいおい、黙ってないで何か言ったらどうなんだい？」

周りの客は僕様ちゃんに気づいたからか慌てて店を出て行く。

カウンターのの方でもマル以外の店員はみんな店の奥へと下がっていた。

唯一残ったマルも僕様ちゃんが暴れようとしているのを笑いを堪えながら見るなんてやっぱり大物なのよね。

「ふふふふ……ふふふふふふふふふ」

「おいおいおいおい、あんま俺を舐めてつと ぼてくりこかすぞー！」

「ぎやはははははははは」

久し振りの一人きりの一日つてのも暇で暇ですることなんてないと思つてたら最高に面白そうなおもちやが勝手に転がりこんできてくれるなんて僕様ちゃんたら最高にツイてるじゃないのよ♪

「ぎやははははは、ヤサシーヤサシー僕様ちゃんがお前みたいな屑にも理解できるくらいに分かり易く説明してあげるわ。

言葉よりも分かり易く視覚に訴えてあげる。

君の両目に死刑せ・ん・こ・く♪」

いやまあ、ギルドでの流血沙汰になるとマルにも迷惑かけるし、僕様ちゃんも一人殺したら最低でももう一人は殺さないと殺意を抑えられなくなつちやうから殺しはしないよ。

だけど死にたくなるほど殴ってあげる。

殺さないけど殴る。

だつて殴りたいんだもん♪

「ぐぎやあああああー！」

「え？　もう終わり？」

やったのは本気を出すための前段階として殺気を解放しただけ。

確かに僕様ちゃんの殺意は直視し難いらしいけど、これは暴れる前の準備段階ですらないのにこれだけで気絶なんて弱すぎるのよん。

もうちょっと肉体的にボコリたかったのに。

「あらあらあく、さすがにディオシキちゃんの本気のは目に毒よねえ♪」

「でもこれじゃ欲求不満で湧き上がる殺意と破壊衝動を抑えるのが難しいわよマル。代わりにボコられてくれない？」

「うーん、それはいいけどお♪」

その人々、裏で悪の組織とつながって色々とやらかしてるみたいだからあく、そつちの組織の方を潰したらあく？

こいつも上手く隠してるみたいけどお♪、ギルドナイトが動くのも時間の問題っばいからボコるなら早めにしたほうがいいけどお♪」

ふーん、やっぱ人は見かけ通りなのね。

でもそれはそれでいいかもしれない。

「悪の組織の壊滅……」

それなら正当な理由で僕様ちゃんも暴れられるわね。

こいつと違つて本気を出すことが出来る人がいればいいけど」

イトラちゃんでも僕様ちゃんの本気には耐えられないだろうと思つてこれまで三人と狩りに出た時は本気を出してなかつたけどこれなら正義の名の下に堂々と暴れられる♪

目の前で気絶した男は弱すぎたけど悪の組織に属する人ならちゃんと本気を出した僕様ちゃんを見ることくらいは出来るでしょうし。

先ほど店を出て行つた客の中に僕様ちゃんではなく、この男から離れようとして出た行つた人がいたからきつと彼が裏の繋がりがあつても僕様ちゃんが暴れることを良しとはしないわね。

まあ、ハタつちはどんな理由があつても僕様ちゃんが暴れることを良しとはしないだろうけど。

「ふふつ、臭いは覚えたからどこへ逃げても必ず捕まえてみーせーるーわーよー♪」

……

……

.....

くとある組織のアジト

足音を消して先ほど気絶させたイステ・カーツという男の匂いがする男を追っていたら、いかにも怪しい建物に入っていったみたい。

とりあえず最上階を目指して勝手に侵入してみたけど何やら中で話し声が聞こえるのでしばらく聞いてみますか。

それにしてもボロい建物だけとお金がないのかしら？

「ボス！」

ギルド内部へのスパイのイステ・カーツがやられました！」

「何い!？」

「殺されたのか！」

「分かりません！」

ですがイステはあの『殺獣鬼』デイオシキ・ブラザキです！」

「それはマズイな……」

疫病よりも多く殺すあの女に目をつけられて生きてられる者はいないと聞く。

ハンター協会の支部長の一人を味方につけてこの世界のハンター協会全てを乗っ取る計画を成功させるためにも早いとここのアジトを捨てて逃げ出さなければこっちにまで飛び火するぞ」

「そうですね、このままだとせっかくないだ潰れた『キリン娘愛好会』の金を奪ってようやくアジトも出来たばかりだということにこんなことで台無しにするのは嫌ですしね」

中にいるのは二人。

まさか僕様ちゃんに報復を考えもせずいきなり逃げる算段だなんて。

説明口調のおかげでこちらとしては事情がよく分かったけど暴れたい僕様ちゃんから逃げるなんて許さない。

では軽うしく暴れちゃいますか♪

ギイイイイイイ

建物自体が古いと扉までもボロみたいね。

「誰だ!?!」

「誰だと問われて言うのもなんだけど、『殺獣鬼』デイオシキちゃん……でえええつす！
ここからは普段の可愛らしい仮面を脱ぎ捨てた僕様ちゃんの本性丸出しのバトル展
開だけど黙って死んでね♪

イエーツツツ！ ぎやはははははは！

さて、ここらで説明しておくと僕様ちゃんが暗器しか使えないと思ってる人も多いと
思うけどあれは僕様ちゃんの自分に課した戒めで、今回みたいに本気で暴れる時は使わ
ない。

さつきギルドでもその前動作として殺気の解放を使っちゃったけどそれもまだ前動
作。

ここからが僕様ちゃんの本気の恐怖。

「貴方達は自分の最も恐れる幻覚を現実として認識する……」

「ひぎやああああー！」

使ったのは瞳術。

これまでハタっち以外でこの技を自力で解けた人はいないからこいつらもよくて廃人でしょうね。

さらにこの術の特徴は食らった人物は自分の心象世界を具現化することこそある。

最後にこの目を使ったのはかなり前、唯一の肉親である兄さんと真剣勝負をしたときだったかしら。

そのとき死んだ兄さんから受け継いだ眼球を移植して使っているから昔よりも強くなっているはずだしこの眼の本気は自分でもわからないのよね。

「でもこれ使うと視力が落ちるんだよねー。

まあ、もうほとんど見えないから関係ないか。

とーりーあーえーずー、死になさい♪」

この建物の他の部屋に控えていた連中はあまりにも弱かったみたいだから解放した殺意にあてられて気絶したみたいだけど手加減しておいたから死んではないはず。しばらくは来れないでしょうけど。

それに今頃建物に入る前に連絡しておいたギルドナイトに捕まっているだろうからこの二人は僕様ちゃんの本気を文字通り目の当たりにして死ぬという決定事項からは逃れられない。

自分がモンスターにでも食われるところを想像したのか二人のうちの一人は上半身と下半身が両断され。

もう一人は体に火が付き骨すら残さず燃え尽きた。

本人が考えたことが現実起こるだけから自分が死なないイメージを想像すれば助かるのに大抵の人は僕様ちゃんを前にすると生きることを諦めちゃうのよねん。

「UNYYY (うにー) ♪

やっぱ人が焼ける匂いと血の匂いってのは最高にいいねえ♪」

しかしもう敵はいないのでこれ以上自分の中の殺意が高まると自分で自分を殺しか

ねないので殺意やら高揚感を抑えながら扉の前に立っている人物が入ってくるのを待つ。

「はあいディオシキちゃん。ズバツと参上ズバツと後始末ツスよー！」

ウチこと、ルナ・ギドイト千人長が指揮を務めるから後は任せてくださいッス！」

来てくれたギルドナイトはルナさんだったのね。

まったくルナさんたら相変わらず後始末のときしか出てこないわね。

というかさつきからこの部屋の入り口の前で突っ立ってたのに僕様ちゃんは気づいていたよん。

「それじゃあ面倒な後始末は任せるわ。」

これ以上この匂いを嗅いでると自分が抑えられなくなっちゃいますからね」

家の方向の匂いを探知してみてもまだ誰も帰ってきていないようだけど仕方がないので家に帰る。

今日は僕様ちゃんがご飯を作って待ってましようか。

ハタつちはこんな僕様ちゃんを弟子以上に家族として愛してくれるから一緒にいたいと思える。

妻の座はイトラちゃんに渡すし、僕様ちゃんに結婚の意思はないけど、それでもこんな自分を受け入れてくれるハタつちは大好きだからね♪

「でもハタつちのことだからまた面倒なことに巻き込まれてるんでしょうねん……」

ほら、ハタつちって巻き込まれ体質だから♪

久し振りの主役復活

俺だよハターンだよ！

なんかここ最近弟子たちがメインだったが俺はその間農場にいたんだがそれからさらに面倒事に巻き込まれてたんだよ。

イトラがモンニヤン隊に参加したりサラがフラヒヤ山脈に行ったり、デイオシキが悪の組織を壊滅させたりしている間、俺は俺でけっこう大変で今回の話につながるわけだ。

ではスタート！

イトラをモンニヤン隊のクエストに送りだした俺は暇で暇ですることもないので農場で農作業に精を出していた。

そもそも俺の暇つぶしでイトラにパーティープレイをさせようと思ったが結局俺が狩り場にいけないんだったら俺の暇は潰れないじゃん！ と気づいたからの行動でもある。

それでまあ、農場の指揮官でもあるワリサやそのサポートを担当するカリピヤーとサアズの二匹もいないから帰ってくるまで俺が指揮をして他のネコ達を鍛えてやろうと思ったのだが、ネコ達の自己鍛練はワリサが考えたのだろう、俺が口を挟むことも出来ないほどのハードトレーニングだった。

なのでこうして手持無沙汰になってしまったので畑仕事に専念しているわけだ。

そうしてしばらくネコ達の修行を眺めながら農作業をしていたが時刻が昼になってくるのに気づき、持ってきていた弁当を出しながら昼食にしたんだがなんかこうして頑張るネコ達を見ながらの食事ってのもいいもんだな。

すると他のネコよりも一足早くトレーニングを終えていたネコが俺が昼食を食べ始めたのを見逃さず俺の膝に乗ってきた。

こいつらは俺に甘えることに關しては目ざといからな。

「それにしてもお前らはいつもこんなトレーニングしてんのか？」

正直俺が普段している鍛練よりも厳しいぞ」

せつかくなので話しかけてみた。

遠くでまだ修行中のネコ達が羨ましげな視線を向けてくるのをドヤ顔でそのネコ、この農場におけるナンバー4のハロウは見ながらと俺の質問に答えた。

「ご主人のどんな要求にいつでも応えるためにはこれ位こなせないとやっていけんから当然つにや。」

と言つても以前農場に現れた侵入者にワリサ隊長達農場三天王が負けてから始めたばかりなんですけどつにや」

ふうむ、ワリサ達を負かすほどの強者がいるとはだれだろうな。

だが今の俺にそんなことは関係ないのでハロウの真つ白でふわっふわのさわり心地最高の毛並みを堪能させてもらおうとしよう。

「確か侵入者が現れたのはイトラしゃんがご主人の弟子となる少し前だつにや。でもそんな話よりもつと甘えさせてくれつにや」

イトラが見たら嫉妬して殺すかもしれないくらいにすり寄ってくるハロウ。
やっぱネコはいいな〜♪

「はあく、暇でもそれを平和な一日だと思えばなんか楽しくなってきたなあ〜……」

農作業も楽しいし、たまにはこういうのも悪くない。

昼からも今日は今日は一日農作業に費やそう。

だが、そうやって楽しくなってきたところで邪魔が入る。

なんかこの『邪魔が入る』ってフレーズ使い過ぎじゃね？　とも思うが、でもそうとしか表現できないくらい俺が何かを楽しんでると、俺が安息を手にしようとする邪魔が入るのはすでに必然なんだよ。

「やつほ〜、ハターンくん〜♪」

ギルドマスターのマル・ギスタードちゃんがあく、暇で暇で暇が売れたら大儲けできくらいいに暇してるハターン君に依頼を持ってきてあげたわよ〜♪」

「マルよ、俺のプライベート空間でもあるこの『ハターン農場』に勝手に入ってくるって

ことはよつぽどの依頼なのか？

それと一応この門番に誰も入れないように言っておいたはずだが」

「光よりも早く入り込めば気づける門番なんていないわよお〜♪」

「お前はそこまで人間やめてたのか!？」

「何を言ってるのお〜？」

光よりも早く動くなんてえ〜、ただの技術じゃないのお〜♪」

確かにマルは年齢不詳だが俺がハンター登録した時から一切年を取っていないから少なくとも30は過ぎてているだろうし、そういう技術を持っていても不思議ではないかもしれないな……

「はあ、もういいさ。

ところで依頼ってのは何なんだ？」

「それがあゝ、トン爺さんからの依頼でねえ。」

店に来ればわかるってさあ〜♪」

能天気な笑顔で答えるマル。

その能天気さは俺の寡黙で渋くてカッコいい仮面を無効化してしまいかねんな。

もしかしたら俺が段々と馬鹿キャラっぽくなってきたのもこいつのせいじゃないだろうか？

「まっ、そんな事考えていても仕方ないし、トン爺さんにはけっこう世話になってるからな。」

その依頼、ハターン・モンスターが引き受けた」

かくして俺は農場でのまったり農作業タイムをかなぐり捨ててトン爺さんという魔物に挑むこととなった。

というのは大袈裟かもしれないがハンターとしての俺に来た依頼なので一旦家に帰って武具を装備してから向かう。

だが内容も確認せずに引き受けてしまうからこのあと大変なことになってしまうの

だった。

「おーい、トン爺さん来たぞー、俺だー、ハターンだー」

店の入り口は鍵が開いていたので中に入る。

この店はなぜか店内の広さが外観と反比例したように広いから声を張り上げないと店の奥まで届かないんだよな。

「おーう、ハターン坊やかー。」

勝手に入ってきてくれーい」

どうやら仕事中心というわけでもないようで一安心だ。

以前仕事中のトン爺さんの工房に上がり込んで周りが見えなくなっていたトン爺さんが殺そうとしてきたから逆に殺しかけてしまったことがあるからな。

店の奥へと進むと突き当りの部屋の扉が開いて中からトン爺さんが手まねきをする。

「街一番のハンターであるハターン坊やに頼むのは多少気が引ける依頼なんじゃがお前

さんにしてもらいたいのはこの新しい発明品の試運転なんじゃよ」

「……あー、それはいいがコレが新作か？」

「いったい何なんだ？」

いま俺の目の前にあるのは白くて大きな球体の何かだった。

武器には見えないが一体何の道具なんだ？

「これはのう、タイムマツスイ〜ンじゃー！」

「タイムマツスイ〜ン？」

「そうじゃー！」

これを使って時間跳躍してみてほしいんじゃー！」

自身満々で言うがこの何とも胡散臭い物体にどれほどの根拠があるというのだ？

タイムマシンと言うが時空の狭間に呑み込まれたりはしないんだろうか。

「ふふん、最近読んだ本に書いてあったのじゃが『吸血鬼』という怪異には時間跳躍する能力があるらしくてな。

それを参考に人間の血を吸うモンスター、ギイギを素材として作ったんじゃからまず成功するはずじゃ！」

ああ、だから白色なのか。

それにその本は俺も読んだがいくらなんでもギイギを素材にしてタイムマシンなんて作れないんじゃないだろうか？

「まあいいや。

とりあえず依頼内容に関しては了解した。

それじゃ俺はこれに試乗すればいいんだな？」

「そうじゃ、未来でも過去でもどちらでもいいから見えてくるがいいわい」

よし、それじゃ未来……は楽しみは取っておきたいから見たくないし過去に行こう。

「それじゃ行ってくるぜトン爺さん。
無限の彼方へー！ さあ、行くぞ！」

この頃から俺の運命は決まっていたのか……

いくらトン爺さんでも普通はタイムマシンなんて作れないと思うだろ？

だが実際にギイギを素材として作ったタイムマシンは目の前にあるのだから信じるしかあるまい。

トン爺さんの発明は武器や防具以外も完璧で失敗など何一つないのだから……

だから俺はタイムマシンに乗り込み時間旅行をする事となったのだ。

これはトン爺さんを信じての坑道であり、決してタイムマシンの存在を最初から信じてしまう頭が春な人ではない。

「さて、乗り込んでみたが行き先はどうやって入力すればいいんだ？」

意外と乗り心地は良く、俺は球体のタイムマシンの上に座る。

扉があつて中に入る作りにはなっていないがタイムマシンらしい機器もついているシンプルなデザインだ。

「イメージじゃ。」

イメージすればどうとでもなる！

それじゃ頑張つてこい！」

それだけ言うと突然タイムマシンが光り出し、そして……消えた。

シユン

……

……

……

「ふむ、とりあえず適当に過去に飛んだんだようだがここはどこだ？」

トン爺さんの工房からタイムマシンは転移したはずなのだが見渡す限りの草原だった。

しかも人の気配がまったくない。

「このタイムマシンは時間だけでなく場所までも転移してしまう仕組みになっているのか？」

「仕方がない、しばらく歩くしかないだろう」

タイムマシンは鎧の内側に隠し（暗器使いの能力で）、適当に歩き出す。

北か南か東か西に進めばいつかは人里につけるだろうしな。

見渡す限りの草原と頬を撫でる心地よい風を感じ、過去に来た実感がないからかピクニツク気分になっていたのだが、突然女性の悲鳴が聞こえてきた。

「キヤーーーーー」

義を見てしない訳にもいかないので声のした方に向かってみるとそこは血の海だった。

壊れた馬車が横たわり、焼け焦げたような人間の死体もある。

そして……見たこともないような龍の姿があった。

「ちっ！ あの野郎俺に勝てないとみてあつという間に逃げやがった！
これだから古龍つてやつはよう」

だが逃げた龍を追うよりも先にするべきことがある。

「おい！ 誰か生きてる奴はいるか!？」

倒れた馬車に駆け寄り生存者を捜す。

全身黒コゲになっている男の死体があつたが女性が生きていた。
背中に大きな火傷を負いながらも、一人の少女を抱きしめながら。

「おい、大丈夫か？」

俺はハンターだ、あの龍は追い払った」

「……あ、ありがとうございます。」

私はもう助かりませんがどうか……この子を助けてあげてください……」

そうやって女性は俺に腕の中に抱いていた少女を預けると息絶えた。

「い、いの子は……」

俺は眼の前の女性が最後に託した唯一の生き残りである少女を見て驚いた。それは間違いなく未来での俺の弟子、イトラ・ウボンガだった。

「これは俺が助けてもいいんだらうか？」

この後イトラはサラの弟子になり、そして俺の弟子になるが、ここで俺がイトラと出会うのはマズインじゃないだらうか……」

「う……ううん」

うお、目を覚ましそうだ。

「……誰？」

眼を覚ましたイトラは俺に気づいたようだが間一髪で俺は普段使っている『プロミウスシリーズ』の防具ではなく、ディアブロZシリーズに着替え終えていたのでフルフェイスの兜で顔を隠すことには成功していた。

この防具はコレクションの中でも特にお気に入りがイトラには見せたことがないから未来に戻ってもばれることはないだろう。

「俺は通りすがりのハンターだ。

君や君の家族がモンスターに襲われている現場に遭遇したので助けにきたんだ」

「……………パパは？」

「ママ……………は？」

顔をあげて回りを見るイトラ。

そして見てしまった。

変わり果てた自分の両親の姿を……………

「うあああああああー！」

「落ち着け！」

とにかく落ち着け！」

だがパニックを起こしたイトラは落ち着く訳もなく、暴れまわる。

「くっ、仕方ない」

俺は懐からネムリ草を取り出しイトラに嗅がせる。

「う……」

やはり色々なアイテムを鎧の内側に隠し持っていた甲斐があったな。

「しかしどうするかな……」

幸いにもここは街道みたいだし近くの街にでも向かってみるか」

この辺がどの辺かはわからないが治安がいいとは思えないし、奴隷売買や密猟を行っているアクトが会長をしている『キリン娘愛好会』も滅んでいない。

ここで放置してサラに会わせないとイトラも裏の住人に売り買いされる商品になりかねないし何とかしないと。

壊れた馬車の物はほとんどが燃えて使い物にならなかったのでイトラの両親と一緒に道の脇に埋葬した。

幸いにもイトラの両親の馬車は街道を走っていたようなのでどうにか向かうべき方向は分かったしな。

眠っているイトラを抱き上げると俺は街道を歩きはじめた。

こいつは宇宙人なのか？

イトラの両親の死体と壊れた馬車を道の脇に埋めて、イトラを背負って歩き出す。まっすぐに街道を進むとそこには見慣れた景色が広がる。なるほど、ここはトイダーヴァの街の近くだったのか。

「さて、過去の俺自身に会わないようにしながら誰か信用できる奴に預けるとなったら……やっぱマルにでも預けるとするか」

あんな奴でも一応ギルドマスターだし、どういう経緯で一時的とはいえサラの弟子になったのかは分からんがきつと上手くやってくれるだろう。

ギルドの入り口の戸を開けて酒臭い店内に入る。

店にいる客はの食事を中断することなく俺を見てくるが、その視線の中には俺がトイダーヴァの第一位のハターンだと気づいたものはいないようだ。

単純に砂漠の暴君ディアブロス亜種の防具を身に纏う俺に羨望の眼差しを向けてくるのが数人。

あとはすぐに食事に戻っていった。

昼間だから人が少ないというのもあるのだろうが、この街のハンターのレベルは他の街や村よりも格段に高いので大半のハンターはディアブロス亜種くらい狩れる連中ばかりだからな。

おかげですぐに俺に対する注目は収まった。

あまり目立つのはマズイ。

「あらあらあゝ、いらっしやゝい♪

トイダーヴァの街は初めてえゝ？」

カウンターの奥で突っ伏したまま起き上がることもなく話しかけてくるギルドマスターのマル。

その気だるそうな対応からして俺以外の客に対しても客らしい扱いをする気は皆無のようだ。

「ああ、旅のハンターなんだがここへ来る途中、新種のモンスターに襲われていた馬車を助けたんだが生き残りがいたのでギルドに預けようと思ってるね」

もちろん声は変えている。

マルは意外と鋭いところもあるので声から俺がハターン・モンズータだとばれたら問題になるしな。

「そうなのおゝ、あ、この子ねえゝ。

可愛い寝顔ねえゝ♪

ほっぺもぶにぶにだあゝ♪」

イトラのほっぺっぺでぶにぶに遊んでいる姿は子どもっぽくさえある年齢不詳の女マル。

と言うか羨ましい！

「両親はすでに死んでいてその死体を見てしまったことでパニック症状を起こしたからネムリ草で寝かしつけたんだ。

あと一時間もすれば起きると思うから頼んだよ」

「はいはあゝい♪

ちやくんとサラちゃんに預けるわねえ、ハターン君♪」

な！ ばれてる!?!

それにサラに預けるだと……

もしかしてマルには未来の自分（異時間同位体）と同期する能力でもあるってのか!?!

「ちなみに他の人にはあく、黙っておいてあげるからあく、未来に帰ったらちゃんと説明しなさいよおっ♪」

そう言うのと再び眠りについたマル。

まあこいつは謎が多いし今更一つや二つ変わったところが見つかつても別におかしくはないだろう。

イトラはマルの隣で暇をしていた受付嬢により店の奥へと案内された。
これであとは俺が心配することはないだろうな。

……さて、イトラを預けたことだし、他に過去だから出来ることって何かあったらどうか？

ギルドを出た後適当に歩きながら過去の自分に会わないように気をつけていると自然と俺の脚が向いたのは『ハターン農場』だった。

「これは……面白いことを思いついたぞ」

ワリサ達農場ネコ軍団と勝負してみることにしたのだ。

あいつらが考える以上に厳しい修行を自らに課しているからかなり強くなつてそうだしどれ位の強さなのか気になるしな。

「おーい、このネコども出て来ーい！

ちよつと俺と喧嘩しねーか？」

先ほどマルに変装を見破られたことも踏まえて骨格とホルモンバランスを意図的に操作して声はもちろん、性別までも変え、体臭までも変えてある。

これでさすがのワリサ達にもばれることはないだろう。

ちなみに防具はキリンシリーズに変えてある。女の体の時はいつもこれなのは俺だからだと言っておこうか。

おっと、そうこうしている内にさっそく出てきたみたいだ。

「おうおうおう、ここが天下の大ハンター、ハターン・モンスータご主人の農場だとしてのことかによ？」

どうせあんたも俺らのご主人に欲情しただけの変態なんだろうにや。
てめえ、喰い殺されたいのかにやん？」

ワリサの奴、俺だと気づいてないようだな。

だがワリサの眼をごまかせてもマルや未来で俺の弟子となった後のイトラが相手ならどんなに変装しても俺に気づくんだろうな。

まっ、とりあえず今はワリサ達とのバトルを楽しむとしよう。

「なあに、派手な喧嘩がしてみたかったからさ。

全員まとめてかかってこいやあー！」

「ご主人の文句は俺に言えにやー！」

ワリサのこの一言で待機していた他のネコ達もそれぞれに武器を構える。

こいつらかなり厳しい修行を自らに課しているようだし俺の強者としての本能がこいつらと勝負してみたいという気持ちを抑えられないんだよな。

「ニャー！」

一番最初に動いたのはカリピャーだった。

得意の大剣ストームルーラーを肩に担ぎ飛びかかると同時に叩きつけてきた。

「おっと」

だがそれを紙一重で避け、その小さな身体に拳を叩き込む。

だがだが、それこそがカリピャーの狙いだったようで俺が殴る隙を突いてサアズが燃え盛るワイヤーを展開する。

「この包囲網、抜けられるもんなら抜けてみるみや！」

「では言葉通り抜けさせてもらおう」

「みや?!」

ワイヤーは完全に俺の逃げ道を塞いでいたが所詮はワイヤーなので僅かにあつた隙間に自分の体を小さく折りたたみながら飛びあがり、その小さな隙間から逃れたのだつた。

そして空中で体勢を立て直すと

「みや〜」

サアズも倒した。

「にやつはー!」

この俺を忘れてもらつちや困るんだよにやつ

ワリサは俺がこれまでに見たこともない剣を手に飛びかかってきた。

「これはご主人の前では決して見せたことのない俺のトツテオキ。

天才刀工が作った刀、『剛剣マンジカブラ』にや！

色々な特殊能力を合成してるからこいつを喰らって安心して地獄に落ちるにやー！」
その剣は単純に斬りつけてきたかに見せて、正面と左右斜め前方の三方向を同時に斬りつけ、俺は回避をすることは出来たもののキリン装備の腰布の尻尾部分をちぎり飛ばした。

「ノオオオオー！」

俺のキリンシリーズになんてことしてくれるんだあー！」

「知ったことかにや。

ご主人のためにやら俺は鬼にも悪魔にもやれるんだにや」

いや、せめてどつちかは仏になってほしいぜ。

「とりあえず反省しろやー！」

並みのハンターでは止めることも出来ないほどの高速で振り回されていたワリサの剣を指二本で止める。

「にやに!?」

「俺にこの程度の事ができないとでも思ってたのか?」

そうしてワリサも殴り、気絶させた。

戦闘描写が短いのはそういう仕様だからだ。

こうして農場の三天王のワリサ、カリピヤー、サアズが俺に倒されたことで周りのネコ達には動揺が走り、烏合の衆と化していた。

「やばいにや、あの三人がやられたんじゃボク達には勝てないにや」

「こ、こうなったら全員で同時に飛びかかるかにや!?!」

「いや、それじゃ無駄な犠牲が出るだけにや」

「こいつらワリサに頼りっぱなしだったんだな。」

未来ではかなり鍛えていたのにこの程度だなんて、こりや未来に帰ったら俺が直々に鍛えてやらないとな。

「それじゃこれで帰るわ。

ハターンによろしく言つとけよー」

こうして農場をあとにするのだった。

ん？ そういや農場のネコ達がハードトレーニングをしていたのは農場に現れた不審者に負けたからじゃなかったっけ？

てことはこうして過去に來た俺がこいつらを倒しちまったからあの修行を始めたのだろうか……

第十二章：帰ってきたハターン編

跳んだ先でもまたまたトラブル

前回までのあらすじ。

天才鍛冶屋トン爺さんの発明したタイムマシンという胡散臭い乗り物に乗った俺はそのタイムマシンで過去へ跳び、謎のモンスターに両親を殺され、為すすべもなく殺されそうだった未来での弟子、イトラ・ウボンガを助け、トイダーヴァの街でギルドマスターのマルに預け、ノリで『ハターン農場』のワリサ達をからかって未来へと戻ろうと考えているところが現在であるというわけだ。

「それじゃあ未来へ帰るとするか」

街外れの人気のない場所に移動し、タイムマシンを懐から取り出しその上に跨る。

それにしてもこのタイムマシンは物凄い乗りにくいんだがトン爺さんは何を考えてこんなデザインにしたんだろうな？

どうせなら中に入るような造りにしてくればいいのに乗りにくいっただらあらしい。
ない。

だが、今更文句を言っても仕方がないので未来へ帰るイメージをする。

「無限の彼方に……つてこれも前回言ったからさすがにくどいよな」

そして辺りは光に包まれ、俺を乗せたタイムマシンは未来へと時間を越えた。

……

……

……

「さてさて、このタイムマシンは時間だけでなく場所までも移動するみたいだけどここはどこだろうな」

最初にトン爺さんの工房から時間跳躍をした時はトイダーヴァから少し離れた草原に出たが今回はどうやら火山に来てしまったようだ。

何しろタイムマシンは火山の火口の中の岩の小島のような場所に出ているのだから。

「クーラードリンクも常に持ち歩くようにして正解だったな。

さすがの俺も気合を入れなければこの環境では体力を奪われかねない」

すでにいつものプロミウス装備に着替えていた俺はタイムマシンをしまうと懐から取り出したクーラードリンクを飲み、一息つく。

そして溶岩の上を右足が沈む前に左足を出すという歩法で走り、火口からの脱出を済ませる。

「さっき過去へ行った時みたいにタイムマシンで時間移動した先で時間だけでなく場所も移動したのには何かその場所ですべきことがあるからなのかもしれない。

となると、この火山で俺が為すべきことでもあるのかもしれない」

タイムマシンのようなよく分からない物はよく分からない現象も伴うのだろうと納得し、しばらく道なりに進んでいくとそこには人が倒れていた。

「まあた面倒事っぽいけど見てしまった以上は助けないわけにもいかないしな。

おーい、大丈夫かー？」

倒れている人物に近寄って見るとそれは人ではなく、人に見せかけた人形だった。

「かかったな、アホがあー！」

そして俺が人形に近づいたのと同時に跳びかかってきた小さな影が現れた。

「おいおい、これが近づく人を攻撃するための罠だとしたら跳びかかる時に声を出すのは駄目だろう。」

もちろん俺は華麗に避けて声の主を蹴り飛ばし溶岩に向かって落つこととしてやった。

「だが、無駄に殺すのは俺の美学に反する。」

「これこそハターンクオリティ！」

熱に強い糸を一瞬で周囲に張り巡らせ、襲ってきた奴が溶岩に触れるか触れないかの位置で止めておく。

「てゆうか熱いし！」

「これ溶岩に触れてないけど熱すぎるってマジで!!」

改めて声の主を見てみると随分と布地面積の少ない火山にふさわしくないような格好をした女の子だった。

「お前が攻撃してこなければ俺もこんなことはしねーよ」

火口から引き上げてその体を拘束していた糸を解いてやった。

「うちっちは火山を根城にするカーザン族の族長の一人娘！

ヒノコ・カーザンじゃぞ！

このような行いをすればうちっちの80万の仲間が報復に来るぞ！」

「いやいやお前、この大陸中を探しても80万もの兵士を保持する国はないのにカーザン族みたいな辺境部族がそんなに人数いるわけないだろ」

「じゃ、じゃあ8万もの仲間が……」

「俺の記憶が確かならば、カーザン族はラティオ活火山に住む少数民族で人口3000人位の小規模ながらも争いを好まない連中だったはずだが」

これでも俺はトイダーヴァの街の第一位の地位を利用して大陸中の書物を読み、長いハンター生活であらゆる場所に赴いているのでハンターとして以外の知識も豊富なのだ。

それでも寡黙で渋いカッコいい男を目指していたので友人と呼べるような人間はほとんどいないのだがな。

いまにして思えば言つて悲しくなるだけの虚しさしかないがな。

「……そこまで分かつておられるとは。

それならば旅のお方、うちっち達カーザン族の村をお救いください！」

すでに糸による拘束から逃れていたヒノコと名乗った少女は突然飛びあがりジャンピング土下座をかましてきやがった。

おいおいおいおい、これはまた面倒事の予感がピンピンするぞ。

だが見て見ぬふりは出来ないしなあ。

現実逃避をしようにも視線を向けるようなものも何もないので仕方なくヒノコを見

るがその目は真に困っている者の眼だった。

俺の心は噴火により舞い散る火山灰のように何か重いものが降り積もっていくのだった。

ここでこの子を放っておいてトイダーヴァの街に帰るといふのもありなんだろうけど、

「俺ってば結局は助けてしまっただろうな……」

カーザン族の村

前回までのあらすじ（なんかこの始まり方が気に入った）

タイムマシンで未来に帰ってきた俺は、またも目標地点からずれて何の因果かラティオ活火山に出てしまった。

そこでこの火山に昔から住んでいるカーザン族と呼ばれる一族の族長の一人娘ヒノコ・カーザンという女の子を助けることとなり、その子の案内でカーザン族の村に向かっているところだ。

「もうすぐ着くぞ。

村の連中はみんないい奴らじゃから気を楽にしておれ♪」

「俺が緊張するなんてあるはずないさ。

ところでカーザン族って言えば屈強な戦士も揃っていると聞いていたが俺みたいな余所に頼るほど手強いモンスターでも襲ってきたのか？」

「それは村に着いてからうちうちの父さん、族長様が説明してくれるぞ」

ヒノコは振り返ることなくそう言うのと歩く速度を速める。

道は段々と狭くなり、人が入りづらいような道となり、ついには俺みたいに鍛え抜かれた者でないと通れないような道までも通って行く。

「カーザン族つてのは友好的な民族だと思っていたがこんな道を通らなきゃいけないような場所に村を作るなんて内向的な人たちだったんだな」

「んーん、これはあなたが最低限村を襲ったモンスターを撃退出来るかどうかの力量を見るためにわざと狭くて危険な道を通ってるだけで普通の安全な道もあるよ」

……この子はそこそこの実力者だとは思ったが俺の実力が見抜けない程度の実力しかなかったのか。

そーかそーか、OK、万事わかった。

「それじゃあ俺の実力を見せてやろう！」

「え？ きゃあー！」

ヒノコを肩に担ぎあげると俺は溶岩の中に飛び込んだ。

「きゃああああー！」

「ふはははははー！」

だが溶岩の中に沈み込むこともなく、かと言って糸を事前に張り巡らせていたわけでもないが溶岩の上に浮かんでいた。

「これぞハターン体術の極み、心を最高にクールにすることで足の裏に冷気を集め瞬時に溶岩を凍らせたのだ。

そして俺の実力はまだこんなものではない！」

溶岩の上を走り、一際背の高い岩に向かって飛びあがるとその岩に足を突きさして岩

肌に垂直に立つ。

そしててっぺんまで歩くように登っていくことで辺りを見渡すと火山の麓付近に一つの集落を発見した。

脚力と視力も並みではないのだ。

「お、あれがカーザン族の村か？」

早速向かうぞヒノコ」

「は……はいい〜」

ヒノコは先ほどまでの元気がないようだが特に気にせず村まで落ちるようにながら山肌を降り、村に向かう。

「さって着いた着いた、族長の家はどれだろうか？」

「……………」

返事がない、ただの屍のようだ。

「勝手に殺すな！」

さすがのうちつつちも山肌を駆け降りるときに何度か走馬灯を見てしまったじやろうが！」

「そんな事は知らん。

俺は試すのは好きだが試されるというのはあまり好きではないのでちよつとしたお茶目をしたくなつたのさ」

「あれがお茶目で済むか！」

ブンブンと頬を膨らませて子どもっぽく怒るヒノコ。

いつまでもこうしたダラダラと意味のない会話を続けていてもいいのだがそれでは話が進まないのだからここで真面目に話をしよう。

「族長の家はあそこじゃ。」

あのピンク色の屋根をした家がうちっちも住んでいる家じゃ」

「なるほど」

ピンクの屋根というのは珍しいがとてもかわいらしい家で分かりやすい。とりあえず族長に話をつけるとするか。

「すいませーん」

「……………」

返事がない。

「おかしいのう、いつもならこの時間、村には父さん以外にも誰かしらいるはずなのじゃが」

「そーいやこの村って人の気配がしないな。」

「というかカーザン族の村の建物がこんな巨大モンスターに踏みつぶされたようなデザインをした造りになってるといっては知らなかったな」

「何い!？」

「……確かによく見てみれば村の建物がみんな倒壊しておるのう」

ヒノコの表情が変わった。

「というか目の前のヒノコの家も壁に大穴があいているのにモンスターが襲ってきたことに今の今まで気付かなかったのか？」

「もしかしたら父さん達は死ぬ気であの化け物に勝負を挑んだのかもしれない！」

「カーザン族としてこのままあいつに殺されるのを待つくらいなら自分から戦いの場に向かうはずじゃ!!」

「そりやまた立派な考えだが助けを待たずに自分で何でも解決しようとするのはいただけねえな。」

「ところでこの村を襲ったモンスターってのは一体何なんだ？」

「……この村を襲ったのは覇竜アカムトルム。

火山の主、グラビモスすら歯が立たないまさしく最強のモンスターじゃ」

なるほどね、それならいくらカーザン族が強くとも手こずるわけだ。

今俺がこの場にいるのはタイムマシンのミスかもしれないが助けられるものなら助
けたいし見殺しにするのは後味が悪すぎる。

いっちょ一暴れするとしますか。

「なら正式に依頼するか？

このトイダーヴァの街の第一位、ハターン・モンスタに」

「なんと!? お前さんがあの『最強』のハターンなのか!？」

「ん? 言ってなかったか？」

まあいいさ、お前の家族も仲間もみんな俺が助けてやる。

アカムトルムくらいなら俺は何度も狩ったことがあるしな」

「それじゃあ依頼するぞハターン・モンスタ！」

火山の覇者、アカムトルムの討伐をしてくれい」

「大船に乗った気でいろ。

頼もしいことに俺は最強だ！」

愛剣『竜骨砕き』を取り出し火山における戦闘で大いに役立つ炎耐性を上昇させる。
さあ、ここからは俺の闘いだ。

「族長!

戦えない者達はどうにか近くの集落まで逃げのびることに成功したそうです!

我々も早く逃げましょう!!」

そこそこの実力がありそうな若い男が族長と呼ばれる男に言う。

装備を見る限り上位クラスのハンターのようにだがそれでもアカムトルムを相手にするには心許ない装備であちこちに焦げ跡が目立つ姿だ。

「俺が逃げるのは全員が避難を終えてからじゃ。」

今度は俺が一人でアカムトルムの相手を引き受けるからその間にお前は残りの前衛達と一緒に怪我人を連れて逃げちよれ」

そう言つて伝令に來た若者を下がらせる。

この族長、ヒノコの父は今回アカムトルムが村の近くで暴れ出したことで村の若い衆を率いてこうして戦えない子どもや女性や年寄りが逃げ切るための時間稼ぎをしているのだがその人数は当初の半分以下にまで減っていた。

運よく怪我で動けなくなっただけの者は後方に下がらせ、安全な場所まで避難させて

いったが、何人かはアカムトルムの巨体に突き飛ばされ、溶岩の中に落ちて骨も残さずに焼け死に。

またある者はその巨体に踏みつぶされ圧死し、原型をとどめること無く辺りを血の海に染めたがそれも火山の熱気ですぐに乾き、目立たなくなる。

そして最後の一人であった若者の姿が見えなくなつたことを見届けると族長はアカムトルムに向き直る。

「はっはー、待っててくれたのかアカムトルム？」

俺は族長として村を壊滅させたテメエを殺さにやいかんから逃げる訳にはいかんからもう」

もちろんアカムトルムにそんな考えがあるはずがない。

だがここまで長時間に渡り族長たちカーザン族の戦士との勝負に多少の疲れを感じる程度には弱っていたのだ。

「俺の村を壊した報いを受けるのじゃ！」

族長は両手に握っていた愛用のハンマーの柄を握りしめ再びアカムトルムに突貫した。

「うおおおおおおおー！」

「グオオオオオオオオオー！」

両者は激突した。

だが当たり前のことだが体の大きさが違いすぎたため族長はアカムトルムとの最後の勝負に負けた。

アカムトルムが疲れていると言ってもそれが両者の間にある決定的なまでの差を埋めるには至らなかった。

「くううう、本来の目的である村の皆が逃げるまでの足止めを果たしたのは良いがこりや俺には勝てねえな。

ヒノコよ……村の皆を頼んだぞ……」

アカムトルムは族長を吹き飛ばしたあと止まることなく自分に傷をつけた、鬱陶しいだけの存在を確実に殺すためにその鋭い爪を振り上げ……振り下ろした。

……だがその爪が族長の頭を千切り飛ばすこともなければ攻撃が逸れて地面を抉るということもなかった。

「あんたがカーザン族の族長だな？」

俺は通りすがりのハンター、ハターン・モンスターだ」

族長めがけて振り下ろされたアカムトルムの爪はハターンの腕一本で受け止められたのだ。

「さて、依頼人の父親も見つけたことだしこつから先は一方的にボコらせてもらうぜアカムトルム！」

その後の展開はこの場にいた族長と、ハターンに連れられてきたその娘ヒノコは一族の歴史に新しく『化物殺しの化物というの人間である』という一文を付け加えることとなるのだった。

ハターン side

以前アカムトルムを倒したのはまだ十代の時だったな。

似たようなモンスターのウカムルバスはこないだ『キリン娘愛好会』を潰す時におまけとして討伐したがそれでもアカムトルムを最後に倒したのは現在27歳の俺にとつてはかなり前のこととなる。

だが、だからこそ……楽しい!

「お前、随分と力自慢みたいだな」

愛剣『竜骨砕き』を両手で握り力を込める。

そして切る。

ガキイン!

「グ……アアア……アアア……」

「ほおう、俺の一撃を堪えるとはさすがは火山の覇者だけはある。だが次の一撃は受けようと思わん方がいいぜ」

最初の一撃はただの筋力と剣の重さを使っただけの斬撃。

だが二撃目に俺が繰り出した斬撃は俺の闘気を刃に練り込んだ一撃だ。大きく振りかぶって……斬る！

シュン

そして……火山が割れた。

「どうよ、次元をも切り裂く俺の斬撃は。

といってもこの一撃を食らって生きてた奴は見たこと無いけどな」

斬撃はアカムトルムは巨体を上下で真つ二つに切り裂き、溢れんばかりの大量の血が大地を赤く染めた。

アカムトルムとの勝負は俺の圧勝であつという間に片がついた。
だが、

「あ、ちよつとヤバいかもな……」

今回俺は一つ失敗した。

割と本気の斬撃を出したのはまあいい。

筋力と剣の重さだけによる一撃に耐えたアカムトルムの強さ（俺より弱いかな）に敬意を払つてのものだからだ。

問題はここが火山でこの技は延長線上、今回は手加減したから大体直線距離で1km位になるが、地面も火山もまとめて切り裂いてしまったことなのだ。

つまり火山までも切り裂いちゃったから溶岩が流れ出て物凄い速さで俺らに向かって流れてきてるんだわ。

「溶岩が流れてきとるうううー!」

あーあー、カーザン族の族長とその娘ってんなら多少の荒事に慣れているだろうに情けない声を上げちやつてまあ。

俺が原因だし助けない訳にはいかないしな。

「それじゃ二人ともしつかり捕まってるよ。

一気に下山するから舌嚙むんじゃねえぞ」

二人を担いで500mを5秒くらいの速度で駆け下りる。

どうにか火山が割れたことで流れだした溶岩流から逃れることは出来たがおかげでカーザン族の村があった場所はきれいに溶岩で埋まってしまった。

……俺が受けた依頼はアカムトルムの討伐だからこれって問題ないよな？

星が滅びかねん!

アカムトルムを倒して溶岩流から逃れたあと、俺は再びヒノコとそのパパを連れてカーザン族の村があつた場所に来ている。

「……………」

「……………」

「とりあえず壊された家屋の撤去作業をしなくて済んだと思えば儲けもんじゃないのか？」

「……………」

「……………」

俺の目の前には放心した親子、すなわちカーザン族の族長とその娘ヒノコがいるのが二人ともさつきからずつと黙りっぱなしなのだ。

そりやまあアカムトルムを倒す時に力加減を間違えて火山を切り裂いたことで溢れだした溶岩流によつてカーザン族の村を埋めてしまったのは悪いとは思うけど『村』を助けてくださいという依頼ではなかったし仕方がないだろう？

今はその溶岩も冷えてカチカチに固まつてしまつているからこの上に家とかを作り治すならそれほど手間じゃないだろう。

だがまあ……うん、これはアレだ。

このまま放置して帰ろう。

「報酬は村が建て直されてからでいいからギルドの俺の口座に振り込んでいてくれ。

それじゃ俺はこれで」

「待つのじゃー！」

ガシッ

「なんだ？」

帰ろうとしたところでヒノコに腕を掴まれた。

「ハターン・モンスータってのは事後処理も出来ないようなハンターなのか？」

うちつちは住む場所を失ったのじゃからここはお前さんが最後まで面倒を見るのが筋つてもんじゃないのかのう？」

「そりやまあ俺もやりすぎたとは思うけど。

どうしようも……できなくはないな」

「そうじゃろそうじゃろ♪」

お前さんがあのハターン・モンスータとなればこの状況をどうにかする策の一つや二つ出てくんはずがない。

して、どのような策があるのじゃ」

俺がどうにか出来るかというと途端に表情を明るくするヒノコ。

さつきから話ってくるのはヒノコだけだ。

何やら族長はじつと俺を見るだけで何も言ってこない。

「とりあえずこの溶岩を材料として家を建築すれば溶岩に埋まってしまった壊れた家屋を掘りだしたり他の場所に移住するより安く早く済ませることが出来ると思うから俺が村を作り直してやるよ」

言っている意味が分からないのかヒノコと族長は首をかしげるがそれを無視して俺は鎧の内側から竜骨砕きとは別の大剣を取り出し、地面（すっかり黒く固まってしまった溶岩）に突き立てた。

ズウン

音が響くと同時に地面でさつきまで黒かった溶岩が再び真っ赤になる。そしてそれを鍛冶屋が使う手袋を嵌めて触れることで形を作っていく。

「うん、久し振りにやってみたが上出来上出来」

あつという間に溶岩で一軒家を作り上げてしまった。

「な、なんでそんな事が出来るのじゃ!？」

溶岩を溶かして粘土みたくにつくりかえたつてのかい?」

「そうだ、この大剣は炎王龍テオ・テスカトルの素材を使って作った『テスカ・デル・ソル』って剣なんだが一振りでも周囲を焼け野原にするほどの大火力を持った火属性の剣なんだ。

もちろんこの手袋もどんな熱いものに触れても燃えない熱伝導しない素材を使って作られている」

天才鍛冶屋トン爺さんの造った物なので、出来は最高のものだ。

「それじゃこんな家なら文句はないだろ?」

あつという間に村ごと作ってやるからよく見ておけよ」

さすがに一つ一つ手作業で造るのは面倒だし手袋を外す。
ここからはさつきからから辺り一面に張り巡らせていた熱に強い糸を使う。

「俺的建築術発動！ うおりやあー！」

再び剣を地面に突き立て地面の溶岩を溶かす。

そしてさらに俺の気を込めることで、さながらアカムトルムの鳴き声による炎柱のように溶岩を宙に浮かべると糸で形を整えていく。

「完璧だ！」

おまけとして村周辺も含めてかなり整地したから人の往来も増えるだろう。

この村に入るための山の麓からの道も舗装しておいたし」

すでに俺の糸はこの火山一つまるまる包み込むように伸びているので手の届かない場所はないのだ。

さて、イトラもそろそろモンニャン隊のクエストを終わらせて帰って来るころだろうから早いとこ帰らないとな。

だが建物も見事に復元し、やれ帰ろうかとしたところで俺はまたもヒノコに捕まってしまうた。

「……離してくれないか」

「……」

「もう俺がハンターとしてすることはないだろう？」

アカムトルムも討伐したし、アフターサービスとして壊されて溶岩に埋まった村の建物も再建したしほかに何か依頼でもあるのか？」

「……結婚してください」

「はあ？」

今何か幻聴が聞こえた気がしたが気のせいだよな。

うん、気のせいだ。

「気のせいではありません。

うちつちはハターンさんのお嫁さんになります!」

「はあああ〜!?!」

と、ここで先ほどから黙って事態を見ていた族長が声を発する。

「いやはや実にすばらしい!」

ハターン殿、この村には村を守れなかった族長は、代わりに村を守った人に族長の座を渡さねばならないという掟があるのじゃ。

じゃからハターン殿には俺の一人娘ヒノコと結婚してこの村の族長になってほしいんじゃ」

ちよい待てこら!

こないだもネコの村で族長になっちゃったがあれと違ってこつちは強制的に結婚までさせられるってのか!?

冗談じゃねえ、そんな事がイトラに知られたらこのあいつは絶対に俺を殺したあと、この星ごと心中しようとするはずだ!

……つて、俺はイトラのことが好きだからこんなことを考えているのではなく、あくまでも世界の平和のためにここで結婚するのを避けたいという考えの元にこの結論に行きついたのであつて、イトラと結婚したいとか考えているわけではない!

「うちつちはもう、お前さんの魅力にもうメロメロじゃ♪」

今はうちつちに対する気持ちがないのかもしれないかもしれないがうちつちはかなりの床上手じゃからきつとトイダーヴァアの街に戻りたくなくなるような天国を味あわせてやるぞ」

くうつ、なんかそう言われるとヒノコもめつちや可愛く見えてきたがそれは絶対にあつてはならない事態だ!

だがしかあし! もしも結婚なんてしてしまつたら寡黙で渋いハードボイルドな男という俺のイメージを失つてしまうことになりかねん!

最近では面倒ごとにも慣れてきたがさすがに今回は厄介すぎる。

俺は体中の細胞全てに街に帰ることだけを命じて走り出した。

この状態の俺は500 kmを5秒の速さで走っているのかもしれない。

「待つてくりやれ〜ハターン様〜……」

ヒノコも族長も無視して走ったことで何とか1時間もしないうちにトイダーヴァの街に帰ってくる事が出来た。

ちようどイトラもモンニャン隊を終えて帰って来たばかりのようだったので心を読まれないようにきつちりと心を閉じてイトラを抱きしめてやった。

ああ、この柔らかい感触！ なんと可愛い弟子だ！

イトラが立派なハンターになるまでは俺は結婚なんて決してする気はないぞ。

改めてそう誓うのだった。

でもそうなるとうますますイトラは俺のことを狙ってくるような気が……

闘争の終焉

俺に勝てるものなんて誰もいなかった。

最強の名を欲しいままにし、逆らう者は殴り、気に食わない者は殴り、そんなことを続けていた。

そのため俺の力に惹かれてコバンザメのように寄ってくる屑はたくさんいたが誰一人として俺の心を満たしてくれる存在はいなかった。

そんな俺はアイルー村で喧嘩に明け暮れ、ありとあらゆる悪事を繰り返しひたすらに墮落の一途をたどった。

「頼む！俺には帰りを待つ家族がいるんだにや！」

「じゃあその家族もあの世に送ってやるぜ」

殺す。

「私は明日には彼との結婚式を控えて……」

殺す殺す。

「てめえがワリサか。」

俺らのシマで随分好き勝手してくれてるじゃねえか」

殺す殺す殺す。

俺はいつまで殺しつくせばいい？

いつになったら俺のこの渴きを満たしてくれる？

その問いに応えてくれる者は誰もおらず、周りには敵だった連中の死体しかなかった。

だがそうした敵も俺にとっては敵としては物足りない雑魚でしかなかった。
結局俺は鬼でしかないのか？

「俺は殺したくて殺してるわけじゃないんだけど……」

どんなに言葉を尽くしても語りきれず、モヤモヤと消えることのない不快感が胸を占める。

どんなに殺し、暴れまわっても積もり続ける殺意。

だがそんな俺に近づいてくる女がいた。

アイルー村でも嫌われ者として誰一人として近寄ってくる者がいない俺に近づいてきたその女を俺は自殺志願だと思つたのは不思議でもなんでもないだろう。

だがその女は自殺志願を考えるような弱い存在ではなかった。

「あなたは最低です」

と、一言面と向かつて言ってくる女。

そんな事を言われたらいつもの俺なら怒りに任せて殺すというのが自分らしさだと思つていたのだがそれが出来なかった。

「………そうか」

しばらくして、ようやく口に出来た一言がそれだけだった。

その後その女の顔を見ていることが出来ずに俺の方からその場を立ち去った。逃げ出したのだ。

しかしその女との因縁は切れなかった。

それからしばらくその女は俺のあとをつけ回り始めたのだ。

俺はやめるように何度も文句を言ったが結局女を殺すどころか一切傷つけることができなかった。女はやめることなく俺について回り、俺の素行の悪さについて口うるさく何度も同じことを言ってきた。

だがそれを心地よく感じる自分があることにも気づいた。

「お前はいつまで俺についてくるつもりだ」

「あなたが更生するまで何度も同じことを言い続けます」

「こんな会話をしていた。

「あなたの尻尾は毛並み同様に銀色に輝いていて綺麗ですね」

「なんだ、お前が俺を褒めるとは珍しいな」

「尻尾しか褒めるところはありませんけど」

それが俺達の日常だった。

だがそんな日常を悪くないと感じ始める自分がいるのも確かだった。

だがそれがある日劇的に変わった。

女が殺されたのだ。

「ハッハー、ワリサ。てめえこの女に惚れてたんだろ？」

俺らの家族を殺したみたいに俺らがお前の女を殺してやったぜ！」

俺は血だまりに浮かぶ彼女の死体を無言で抱き上げる。

すでに死んでいるのは誰の目にも明白だった。

「俺は……こんな女に惚れてなんかなかった。」

だがな！ この世のものは全て俺の物だ！

俺の許可なく俺の所有物であるこの女を殺したんだから覚悟はできてるんだろうなあ!？」

女に出会ってから久しく忘れていた俺の中の殺意、憎悪、憤怒が再び目覚めた。

『あなたは最低です』

彼女の言葉が思い出される。

ああそうさ、俺は最低さ。自覚している。

『あなたが更生するまで何度でも同じことを言い続けます』

馬鹿が、俺が更生する前にてめえが死んじまつてるじゃねえか！

俺はこいつのために怒っている訳じゃない！

断じてこんな女のためなんか闘う訳じゃない！

「ハッハー、さすがのワリサでもこの人数相手に勝てると思うなよ！

これからはこの俺が新しくこの街のボスになってやるのさ」

名も知らないネコが何か言っているがどうでもいい。

周りを囲んでいる100を越えるネコ達なんてどうでもいい。

とにかく俺の中の憂さを晴らさせろ！

「誰でもいいから殺させろ!!」

その叫びとともに周りの敵の殺戮を開始した。

……

……

……

最後に立っていたのはやはり俺だった。

さすがの俺も数の力には苦戦を強いられ、体中に大小100以上の傷を負い、彼女が

唯一褒めてくれた自慢の尻尾も千切れ飛んでしまった。

鬱陶しいだけの女だと思っていたがいなくなつて初めて分かった。

俺はこの女に惚れていたのだと。

「ぐ……ぐううう………」

声を上げずに泣いた。

こんな俺でも涙は出るなんてしらなかったな。

死体の山に囲まれながら俺は女を抱きしめた。

そしてすでに物言わなくなった彼女の唇に自分の唇を重ね、最初で最後の別れの口付けをする。

それからどれくらいの間が過ぎただろう。

遠くから足音が聞こえ、その足音は俺の背後で止まった。

「お前がワリサか？」

声は若く、というよりも幼い少年の声だった。

「俺がワリサだ」

「そうか、俺はトイダーヴァの街の未来の第一位となる予定のハンター、ハターン・モン
スータだ。

凶暴で手に負えない鬼のようなアイルーがいるというのでどんな奴かと思つてきて
みればただの噂だったようだな。

……鬼は涙を流せない」

少年は俺に近づき地面に座り込む。

辺りは暗く曇り、ちようど男のセリフが合図になったかのように雨が降りだした。

「今は思いつきり泣いておけ。

お前は鬼ではない、これからも強くなれる。

俺について来い」

守りたい存在を失つた俺に強くなる理由などあるものか！

これまでずっと一人だった俺の唯一親しくしてくれた彼女が死んだんだぞ、と、言いたかったが俺の口からは言葉は出ずにただただ涙が流れ落ちる。

この少年からは女と同じ包み込むような優しさを感じたのだ。

それから行く場所もなかった俺はハターンという人間の少年について行くことにした。

しばらくして、試しに手合わせを試してみたが俺の敗北だった。

俺よりも強い存在がこの世に存在しているだなんて思いもしなかったがとにかくハターンは俺とは別格の強さを持っていた。

負けたことなんてこれまでになかった俺にとって、ハターンはこれからの俺の目標となった。

俺はこの人に尽くすために生まれたのかもしれないと思えるほどに心酔した。

彼女のことを忘れたわけではない。

だがこのハターンという少年との出会いも彼女との出会いと同じくらいに俺の運命を決定づける気がしたのだ。

今度は失わないように、もしもハターンがピンチになることがあれば俺が助けられるくらい強くなるために、俺はトイダーヴァの街について行くのだった。

……トイダーヴァの街には俺を知るネコはいないらしくご主人と一緒に狩りに出ることでおトモネコの序列にて第一位の座も手に入れた。

それからしばらくしてご主人はディオシキさんという女の子を弟子として育てはじめ、それと同時に俺にも初めての弟子ができた。

「ワリサの大将はどうして俺たちを弟子にしてくれたんだニヤ？」

「確かに私たちを弟子にするメリットがワリサさんにはないと思うみや」

二人からしてみれば俺みたいになんか最強のネコに弟子入りできるにやんて意外にや出来事にやんだらう。

だがその質問に俺はこう返す。

「弟子にしたかったからにや」

俺の理由にやんてこんにやもんだにや。

彼女と出会い、ご主人と出会い、そうして弟子までも持つ身とにやった今の俺を過去の俺が見たら笑うかもしれにやいけど俺は今の生活に満足してゐるにや。

「さあて、今日もいつちよ狩りにでも行くかにや〜」

弟子を引き連れ、いつでもご主人の力ににやれるようにさらに己を磨く。

俺はトイダーヴァの第一位、ハターン・モンスターの一のオトモ、ワリサ。

過去の自分が求めても求めても手に入れることの出来なかつた充足感を胸に、積もつていく高揚感を感じながら俺はご主人のために今日も己を鍛えるのにや♪

第十三章：ヒーローとは俺のことだ編

弟子の願いを叶えるために

「疲れた……」

何がつかれたのかというと、もちろん昨日のトン爺さんからの依頼を安請け合いしてしまい、時間旅行したことだ。

過去に跳んで色々としたあと無事に現代に戻ってこれたものの、ラテイオ活火山まで飛ばされてしまいアカムトルムの討伐をすることとなり、さらにそのあとカーザン族の一人娘ヒノコ・カーザンから求婚され、全速力でこの遠く離れたトイダーヴァの街まで走って逃げてきたために俺の体は昨日からずっと気だるさが抜けないままだった。

「しかも俺を名指しした依頼が今日になって久し振りに来たと思つたら、またえらく面倒な依頼が来るなんてついてない」

昨日までは先ほどの説明のようにトン爺さんの手伝いという、どうでもいい事をするくらい暇を持て余していたのだが、こんな風に疲れて休みたいと思っている時に限って俺を頼る依頼が来るようになってきているのだ。

「マルに事情を話したところで、『ラティオ活火山からトイダーヴァの街まで一時間で走って帰ってくるなんてえ、馬鹿の大陸記録ねえ♪』とでも言われそうだから疲れを顔に出さずに俺宛てに来た依頼をポーカーフェイスで受注したが、さすがにダルイ。

だがまあ、俺宛ての依頼なんてそんなに来ないしこれが今日最後の依頼となるだろう。

「帰ったらのんびりさせてもらおうとしよう」

今のモノマネけっこう似てたんじゃね？

などと一人で思ったりもするが意外と虚しいので口には出さなかつた。

ちなみに今俺がいるのは自宅でもギルドでもなく、狩り場だ。

今日来ていた依頼は古龍種ばかりで、何でも古塔にてテオ・テスカトルとナナ・テスカトリとクシャルダオラとオオナズチとキリンが同時に現れたので全てまとめて討伐

して欲しいという依頼だった。

そしてその依頼を見事にクリアし、俺は古龍共の死体の上で横になりながら迎えの馬車が来るのを待っているところだったりする。

「それにしても今回の古龍達は弱かったな。

一応G級みたいだが5頭同時に襲ってきたくせに俺に実力の半分も出させることができないとは」

そうしたことを考えていると向かえの馬車がようやく着いた。

迎えの馬車も俺がクエスト達成するまでの間くらい、この場に留まって待っていてくれればいいのにも思うがG級の狩り場はその少しの間に一般人は死んでしまいかねない危険があるから仕方がないのかもな。

俺の狩りに使う時間は今回は一頭につき1秒、つまり今回5頭だったので5秒。

エリア内でモンスターと遭遇するまでの移動の時間を含めても10分もかからないのだが、いつも馬車の御者をやってくれるあいつはアホだから10分もあればベースキャンプで釣りを初めて釣り上げたハレツアロワナやカクサンデメキンを食べて頭がパアンとなって死んでしまいかねない時間だし待機させておくというのは無理がある

のだろう。

とにかく今日の依頼を終えた俺は帰ったら絶対に家で休むと固く誓い帰路についたのだった。

くトイダーヴァの街く

「お帰りい〜♪」

帰って来たばかりで悪いけどお〜、ハターン君に新しい依頼が来てるのお〜♪」

満面の笑顔で、俺が断るなんて全然考えてないような笑顔で、新たな依頼書を持ってくるマル。

「……なあマル。

さすがの俺も今回の狩り（前回のも含めて）でけっこう疲れてるしその依頼はまた今度に回せないか？」

「うーん、回せないこともなくはないけどお〜、とりあえず読んでみてえ〜♪」

イトラちゃんにもかかわりがあることなのぉ〜」

「イトラに關係すること?」

マルから依頼書を受け取り読んでみるとその依頼はとてつもないG級ハンターに対する依頼ではなかった。

それどころかハンターに依頼するような内容ではなかったのだ。

「これのどこが依頼だよ。」

俺が出張る必要なんて一切ないじゃねーか」

「でもちやくんとハターン君を名指ししての依頼よぉ〜」

指名料も多めに貰っちゃってるしい〜♪」

依頼：『子供向けヒーローショーに出てほしい』

内容：『今度子どもたちに人気の狩猟戦隊シュレンジャーのヒーローショーで怪我人が出たので代役として出演してください』

うん、実に分かりやすい依頼書だ。
何をすればいいのかよくわかる依頼書だ……

「……なんで俺がこんな子供向けヒーローショーなんかに出なくちゃいけないんだ？
てゆーかマル！ これのどこにイトラが関係してるって言うんだ！」

俺の怒号などどこ吹く風、といった様子のマルは先ほどから崩すことのない笑顔を作ったまま答える。

「実はあく、イトラちゃんこの『狩猟戦隊シユレンジャー』の大ファンみたいなのよお。私も好きだからあく、こないだ原作の本を貸してあげただけどお、えらく気に入っちゃってねえ♪」

「イトラの奴、こんなもんにまで手を出していたのか……
そう考えると子どもっぽくて微笑ましいなあ」

普段のイトラは俺に甘えて、俺に甘えて、俺に甘えまくっているところしか思い出せ

ないし、たまに10歳という年齢に似合わない妙に大人びて見えるところなんかときめいたりもしているが、それでもまだ10歳なので時折見せる子どもらしい行動に俺は意外と癒されていたりするのだ。

そんなイトラの久し振りに見せる『子どもっぽさ』を見るためならこの依頼を受けるのもいいかもしれないな。

「ほらあく、この本の挿絵のキャラく、このキャラは狩猟戦隊シュレンジャーを助ける通りすがりのヒーローなんだけど設定がハターン君にそっくりなのあく♪」

イトラちゃんこのヒーローの大ファンなのあく♪」

「わかった……その依頼、このハターン・モンスターが引き受けた」

イトラの笑顔のためなら悪くない。

これも師匠として以上に保護者的人間の役目でもあるな。

「この依頼は緊急だからあく、ショーは明日開かれるのおく。」

でもチヨイ役だしなんとかなると思うからあく詳しい事は明日監督に聞いてねえく



「明日行ってそのまますぐにショーに出れるくらいシヨボーイ役なら別に俺でなくてもいいような……」

「実はあゝ、そのショーのチケット手に入れ損ねちゃつてえゝ。

ハターン君が出てくれれば私もショーを見に行けるのよおゝ♪」

はいはい、どうせそんなこつたらうと思つてましたよ。

無茶振りに応えるのもハンターの仕事

絶好のお出かけ日和に恵まれた今日。

俺はいつものように弟子三人娘を引き連れてある場所に向かっていた。

「おいハターン。」

昨日貸してもらった本すっげー面白かったぜ！

最初はガキくせーもんだと思ってたけど読んでみればハマるもんだな♪」

「確かにそうね。」

僕様ちゃんは特にあの悪の組織が捕まえたヒーローを拷問するシーンにちよつとときめいちやつたわ♪

まさかあんなバカでかい獣のアレであくんなことしちゃんなんてもう最高なのよん♪」

昨日の夜、俺がヒーローショーに出ることは隠したままイトラをショーに誘うことに

は成功した。

だがそれを聞いたサラとディオシキの二人が自分たちも一緒にお出かけがしたいと言いだしたのだ。

それでショーの原作でもある本を貸してみたら……もの見事にハマったというわけだ。

ちなみにイトラに俺がショーに参加することになったからチケットを手に入れることが出来たということは内緒にしている。

なぜなら、その方がカッコいいからだ！

「おでかけ、おでかけ♪

師匠とお出かけなんて久しぶりです♪

しかもそれが、あの『狩猟戦隊シユレンジャー』のショーだなんてもう最高です♪」

先ほどから俺の手を取り隣を歩くこの可愛らしい弟子は普段の三倍増しに可愛い笑顔で俺を見てくる。

その可愛さは通りすがりの人達が皆気絶してしまうほどのものだった……

ちなみに比喩表現ではなく本当に俺達以外の人は気を失っているので俺達の歩いた

あとには屍のように倒れた人で埋め尽くされている。

だがどうにかギルドナイトが駆けつけるよりも先に目的地へと着いた。

「それじゃ俺はちよつとトイレに行ってくるから三人は先に中に入っていてくれ」

「分かりました師匠♪」

ああもう可愛いな。

イトラの今日の笑顔は百点どころか百二十点満点だ！

……だがふと、視線を変えてみれば物販コーナーでもう、お土産やらお菓子やらを買いあさっているもう二人の弟子の姿が映った。

うん、あいつらは俺のことをこれっぽっちも敬うつもりはないらしいからな。

あいつらもあれでいて可愛いところもあるんだが如何せん普段の態度に問題が多すぎるからな。

そんな二人を引率者のように引っ張っていくイトラの後姿を見ながら俺は関係者用の入り口から建物の中に入っていくのだった。

そして俺の名前が書かれた楽屋に入る。

「さつてと、マルは監督に詳しい話を聞けば大体分かるって言つてたけど監督はどこにいるんだろうな」

部屋の中は古臭い机と椅子があるだけで何も無い小さな部屋だった。

案外このシヨアの主催者はお金がないのかも知れん。

することもないので懐から折り紙を出して何か作ろうと思つたところで今回のシヨアの監督が入ってきた。

事前にマルから聞いていたが監督はこれでもかというほどにでっぷりと太った大男だった。

「おおーう、君がこの街の第一位ハターン君だね。

マルから聞いてるよ。自分からこのシヨアに参加したいっていてくるなんて君もよつほど『狩猟戦隊シュレンジャー』が大好きなんだね」

……ん？ いま変なことを言われた気がするが。

「マルさんが是非ともこのショーに参加したい人がいるから入れてやってくれと言われた時は戸惑ったけどそれもハターン君くらいの完璧超人なら安心だよ♪」

「ちよ、ちよつと待った！

俺はマルからの依頼でここに来ただけで志願してきたわけじゃありませんよ!!」

「そうなのかい？

でもそんなのあまり関係ないし別にいいよ」

まあ、確かにイトラがこのショーを楽しみにしているというだけで俺が頑張る理由にはなるわけだしな。

おまけでサラとディオシキの二人も。

「それじゃあ、はい。

このショーの衣装と台本。

ハターン君の役はセリフが多いからその台本の半分くらいになると思うけど上演はあと10分くらいだから急いで覚えてね」

「それこそ待ったー!!」

この台本厚みが5 cmくらいあるじゃないか!

そもそも台本をショーの上演当日に渡す奴がどこにいる!?

俺は昨日この話を受けたばかりで覚えることが少ないチョイ役だと思ってたぞ!

「でもまあ、ほら、もうすぐ始まっちゃおうし。」

急いで覚えてよ」

監督はそう言うとそのくさと消えていき、俺一人楽屋に残されることとなった。

……上等だぜ。

こうなったらこの完璧超人ハターン・モンスータの天才性を拾うてやろう!

……

……

……

く 観客席く

「うわー、こんなにお客さんがいっぱいいるなんて♪

やっぱり『シュレンジャー』は大人気なんですねぇ♪」

珍しく年相応に目を輝かせるイトラ。

その様子に隣の席に座っているサラとデイオシキの二人も思わず見蕩れてしまったのはイトラに『魅了』の能力が身についたりしたという裏設定が新しく構築されたからなのかもしれない。

なんか二人ともイトラに抱きついてるし。

ぬいぐるみ状態だな。

「それにしても客いっぱいだなー。

『シュレンジャー』ってのはやっぱり大人が読んでも楽しめる本だったしな」

「もうサラにやんつたら、それはさつきイトラちゃんが言ったでしょ♪」

「こりやうつかりだ」

とまあ、これ位に三人は浮かれていた。

これでさらにハターンがショーに参加すると知ったらどうなるのか想像も出来ないがもうすぐ現実となるのだから想像する必要はないだろう。

……と、舞台の端からこつそりと観客席を眺める俺は思ったのだった。

「おおーいハターン君。

そろそろ開演だけど準備は大丈夫かい？」

「大丈夫さ監督。

俺は天才だから他の役者さんのセリフまで完璧にマスターしたからな」

俺が本気を出せば、39文字×16行を1ページとするなら一秒で100ページは軽く読めるのだ。

それを聞いて安心した監督は舞台の裾に下がっていく。

さあ開演だ！

見つかるべき時に見つかるが候

狩猟戦隊シュレンジャーの説明。

シュレンジャーとは5人組のヒーローで、ギルドナイトすら手を焼く密猟者を無償で捕まえて殴る蹴るの暴行を加えた後『ギルドナイトが捕まえられなかった○○を捕まえただ。byシュレンジャー』という書き置きを残してギルドに渡す正義の味方。

だが実はシュレンジャーはとんでもなく弱く、いつも密猟者にボコボコにされて毎回ピンチになり、そのピンチを救う物語の真のヒーローがいる。

それこそが影の主人公スター・モンタンハだ。

つまり俺、ハターン・モンスターが今回扮する役というのがこれにあたる。

昨日引き受けて今日台本を渡されたというのにいきなり主役級の役をすることになるとは俺じゃなかったらできないぜ。

俺じゃなかったらな。

「しかしこのスター・モンタンハって奴は俺を元にしたみたいにそっくりだな。

ここまで俺に似ていたらイトラの奴も氣にいるわけだ」

スター・モンタンハは最強無敵でヒーロースーツの内側にあらゆる武器を仕込んでおり、糸を使って罟を張ったりモンスターをボンレスハムのように縛り千切ったり、果てはどんな状況においても恐怖を感じない体質でもあるそうだ。

ちなみにその正体は仮面で隠されているので誰も知らないらしい。

「ハターンさん、そろそろ本番です」

「ああ、分かった」

シヨウの関係者に呼ばれ、ヒーロースーツを着込んで顔を隠すためにも仮面をかぶり、俺は出番に備える。

.....

.....

.....

イトラ side

「もうすぐ始まりますねー♪」

「おう、なんかイトラも今日は特に元気いいなー」

「僕様ちゃんも楽しみで仕方ないよ♪」

それにしてもハタつちつたら一対何処に行ったのかしら？」

もう師匠つたらシュレンジャーのショーを見逃しちゃうなんて道に迷ったってこと
もないでしょうにどうしたんでしょうね？

弟子と師匠の共感覚で近くにいるのはわかりますし、きつと何か考えがあるに違いな
いです。

もしかしたらこのショーに乗じて私とキャツキャウフフの関係に……

「おいイトラ、そろそろショーが始まるから戻って来い」

そうでした。ショーが始まるのでしたね。

それにしてもサラさんはさつきまでお菓子を随分とたくさん買い込んでいたのにもう全部食べてしまったのでしょうか。

もしかして体の中には胃袋しかないのかな。

という事は心臓なんかは全て頭の中にあるからいつも考えなしの馬鹿な行動をするのかもしれないね。

もしサラさんが死んだらその体を解剖してみましよう。

「さあさあ皆さんよくぞお集まりいただきました！」

これより終了戦隊シユレンジャーのヒーローショーの開幕です！
心行くまでお楽しみください！」

司会の人がそういうと舞台の幕が上がりますが、まだ舞台には照明が灯っていないので真つ暗です。

「頃は二月、十八日の酉（とり）の刻ばかりのことなるに……」

ドキドキ、ワクワク♪

「何だかんだあつてシュレンジャーがピンチになった!!」

はいドーン！」

始まったと思つたらさつきまで暗かった舞台にスポットライトが当てられ、縛りあげられた5人のシュレンジャーと明らかに悪人っぽい密猟者が出てきた。

「はっはー、シュレンジャー。」

今日こそお前らの命は虚無の地獄へと永遠に追放され、その魂は二度と日の光を見ること無く擦り切れて行くだろう！」

「「「くそー、俺達が拾い食いをする習性を利用して眠り薬を仕込んだ食い物を転がしておくなんて!!」」」

うわっ、本の通りにシュレンジャーの5人のセリフがぴったり被ってる。

シュレンジャーはこの雑魚つぼさとスターさんが登場するための説明口調がいいの

よね。

いきなりの始まり方には驚いちゃったけどこの流れならすぐにあの人が出てくるはず♪

「会場のみんなー、シュレンジャーがピンチよー。」

「ここでみんな大好きスター・モンタンハを呼んでみましょうかー♪」

司会の人全員に呼びかける。

「せーの、「スター・モンタンハ参上！」……呼ぶ前に来ちゃった……」

なんとスターさんが呼ぶ前に出てきてくれました。

これは何か意図があったのでしょうか？

ハターン side

うわっ、まじい。

完全に出るタイミング早すぎたわ。

なんか会場にいる連中全員キョトンとしてるし。

どうしよう……

「行けー！ スターー！」

密猟者をぶち殺せー♪」

声のする方に目を向けてみればイトラだった。

なんか凄い元気いっぱいだしこの笑顔のためにも俺は最後までカッコいい憧れの師匠でなければ。

「ぐっふっふ、よく来たなスター・モンタンハよ。

実はシュレンジャーはただの囷で本当の狙いはお前だったのよ」

ナイス密猟者役のおっさん（未婚の48歳）！

俺が出てくるタイミングを間違えたことを誤魔化してくれた。

「ふつ、いつだってシュレンジャーがピンチになる時は俺の出番なんだぜ」

そして密猟者を瞬殺。

何？ 展開が早いって？

いいだよ、ただでさえ今回の話はいつもとより文字数増えちゃったんだから雑魚の始末みたいなシヨボイシーンに文字数割くのなんて面倒だから。

そしてシュレンジャーの縄をほどき、密猟者を渡したら連中は礼も言わずに去って行った。

お前ら本当にヒーローかよ！ ってツツコミを入れるのは無しなんだろうな。

「それでは最後に今回のシヨーに来てくれたスターさんたちとの握手会で今回のヒーローシヨーは終わりです」

どうやらこれでお終わりらしい。

イトラの奴絶対俺のところ握手に来るだろうし最後までバレナイといいんだがな

……

次次とやってくるファンとの握手を終えるとやはりイトラは俺の列、つまりスター・モントアンハの列に並んでいたようで俺の前まで来た。

「スターさんのファンです！」

私の師匠にそっくりだから大好きなんです!!」

目をキラキラさせて語るイトラは年相応の子どもらしさがあつて実に微笑ましい。

ああ、俺はこの笑顔のためにこんなシヨールに出演していたんだっけな。

「今日は来てくれてありがとう。」

これからも狩猟戦隊シユレンジャーをよろしく頼むよ」

もちろん声は変えてある。

内心バレないか心配だったがどうかその心配は杞憂に終わり、こうしてヒーローシヨールは無事に幕を閉じた。

ちなみにサラとディオシキは俺ではなく隣にいた密猟者の人と握手していた。

意外と密猟者役のおっさんは人気があるらしく俺の次に握手を求める子どもたちで

賑わっていた。

一方シュレンジャーの5人も俺の隣に並んでいたのだが握手会の間、最後まで誰一人として彼らと握手しようという子どもはおらず、一人で手を握ったり開いたりを繰り返してのヒーローたちは見えて可哀想なくらいに悲惨な光景だな。

「さて、俺も仕事を終えたい急いで着替えてイトラ達と合流しなければな」

更衣室に入ると一瞬で着替えを終え、さあ三人の弟子たちと合流しようと思って扉を開けて出るとそこにはなんと弟子三人の姿が……

「師匠つたらあの程度の変装でごまかせると思ってたんですか？」

「僕様ちゃんがいるのに体臭を変えなかったのは失敗だったね」

「それよりなによりマルから今回のショーにハターンが出ることは最初から聞いてたんだけどな」

うおおおー！ マルのやつなんでこの事を三人に言うんだあああー！
せつかくの『こつそりとイトラの笑顔を守ろう作戦』がパアじゃねえか！

「そんなこと無いですよ師匠。」

師匠のおかげで私は今日とても楽しかったです♪」

いつものように俺に飛び付いてくるイトラ。

「お、イトラだけずりーぞ♪」

「僕様ちゃんもハグハグするよん♪」

なぜか普段は甘えてこないサラとディオシキまでもくつついてくるのには驚いた。

だが弟子たちのこの笑顔を見れたことだし、まあ正体はバレてしまったがイトラを喜ばせるという当初の目的も達成できたことだし今回はこれでよしとするか。

第十四章：機械の体に熱いハート編

またも爺さんに迷惑かけられるぜ

『トン・カンジャ鍛冶工房』

そこは多くの鍛冶屋にとって聖地とまで呼ばれる場所。

トン・カンジャ

鍛冶屋にとって生き神扱いされる生ける伝説。

だがその店の所在は謎に包まれ、知っているのは極僅か。

だから今回のような騒動にまで発展してしまったのだろう。

柄にもない説明口調になってしまったが、今回もこの俺、ハターン・モンスータの身に起こった出来事を話すでしょう。

その日は俺を名指しの依頼が無かったので久しぶりの休暇を満喫していた。

この始まり方は前にもしたことがあるが、今回は前回の教訓を生かして終始家でゴロゴロすると決めたから問題は無いはずだ。

前回はちよつと農場まで出かけてイトラをモンニャン隊クエストに出したあとトン爺さんの依頼で過去へ行って謎のモンスターと戦い、現代に帰ってきたと思つたらすぐにアカムトルムとの戦闘でひどく疲れたからな。

何が何でも今日はゆつくり過ごす！

弟子三人も依頼がないためか、自分の部屋や台所や横になった俺の上に寝そべったりしながらそれぞれに自由な時間を過ごしているようだ。

「しかし……暇だな。」

やはり何かしようなかな」

さつきまでの決意はどこ吹く風。

当然の流れとして俺は生真面目な性格なので一日中ごろごろしているのは性に合わ

ないのだ。

「何かするんですか師匠？」

先程の説明で分かった人もいると思うが俺の上に乗っかっているのはイトラである。

ただこれまでと違って身長195cmもある俺が身動き取れないくらいがっちりとおさえつけられているあたりには弟子の成長を垣間見た気がする。

「ああ、ちょっと新しい趣味でも見つけようと思つてな」

そう言つてイトラを降ろして『キリン娘関連グッズ部屋』とは別の隠し部屋の鍵を開ける。

「さあ、何か暇を潰せそうなものはあるかな」と

「師匠、この部屋は何ですか？」

私は今まで見たことない部屋ですけど」

「この部屋は俺の趣味研究部屋だ。

俺は何をやってもすぐに極めてしまうから暇つぶしが出来そうな物をまとめてぶち込んだこの部屋で新しい趣味を見つけようと思ってな」

これまでも釣り、調合、採掘と言ったハンターの必須技術の修行や、音楽、料理、陶芸、絵画、武道などといった物まで暇つぶしに手を出して極めてまくったので新しい趣味が今更見つかると思えないけどそれらを混ぜ合わせることで新しいものが出来るかもしれないと思って作った部屋なのだ。

器用裕福な俺ならではの悩みだぜ。

「やつぱここにがあるものは全部極めちまったし暇が潰せないな。

イトラは何かしたいことあるか？」

振り返ってイトラに視線を向けてみれば、部屋の中の珍しい物を興味深そうに見ていた。

「そうですね。でしたら師匠とプランBがいいですね」

「プランB？」

「Bed（ベッド） in（イン）の略です♪

言い方を変えるならにやんにやんしたいと言えば分かりますか？」

「イトラ早熟過ぎ！」

大体俺はそこまでの事は教えてないのにどこで知ったんだよ」

「ギルドでマルさんに聞きました♪

師匠つてば女の子大好き人間なのに寡黙で渋いハードボイルドな男を今でも目指しているから娼館にも行かないらしいじゃないですか。

だったら私が、という流れです♪」

はあ、マルの奴イトラに余計なこと吹き込みやがつて……

俺は精神的に強いから性欲だけでなく食欲や睡眠欲なんかも気合で乗り切れるって

んだ。

別に手足が伸びたり口から火を吐いたりが出来るってわけじゃないぞ。

「まあいいや。

とりあえず今日はゆっくり「ハターンくん、依頼持ってきたわよお〜♪」……聞こえなかったことに出来ないだろうか」

家の前からマルの声が聞こえてきたがきのせいだ。

だが……そういや前回農場でのんびりしていたのを邪魔してきたのは結局マルだったな。

また何か面倒な依頼を持って来たんだろう。

しばらく息を殺して居留守を決め込んでいたのだがサラが玄関をあけてしまったよ
うだ。

「ハターンなら二階で居留守使ってるみたいだから勝手に上がってくれよマル」

「サラちゃんありがとう〜♪」

ああ、やっぱり来るのか……

普段の間延びした口調とは違い物凄い勢いで階段を駆け上がってきたマルが俺の部屋の扉を開けるまでに10秒もかからなかった。

「まったく何の用だマル。」

「こないだ古龍5頭同時討伐を済ませたしそんなにすぐに古龍が出たりはしないだろう。」

俺は最低でも古龍クラスのモンスターでもなければ今日は狩りには出かけないぞ」

「もおく、そんなに怒っちゃやーよおく♪」

昨日のヒーローショーに出てまた一段と男に磨きがかかったんだからもっとリラックスしなさいよおく♪」

「そんなお世辞に騙されはしないぞマル。」

とにかく俺は狩りには出ないしヒーローショーみたいなもんにも出ないからな！」

ノリでも何でもこいつの依頼は面倒すぎるから決して受けない!

「とりあえず見るだけ見てよお〜」

「い・や・だ!」

「んもお〜……それじゃイトラちゃんこの依頼受けてみない?」

「え? 私ですか?」

意外そうにマルから依頼書を受け取るイトラ。

てつきり俺を名指しの依頼だと思ったのだがイトラがやっても問題ない依頼なのか?
?

クエスト名『星がワシに作れというから……』

内容：ワシは天才鍛冶屋トン・カンジヤ。

世界中の鍛冶屋の憧れの的なのワシじゃがちょっと困ったことになってしまった。

もし引き受けてくれるならワシの工房まで来てほしい。
ちなみに超一流以外のハンターは来るな！

「これはまた、トン爺さんが何か厄介なこととしてかしたんだろうな。
超一流を希望してるぞ」

「師匠、内容は書いてませんけどこの依頼って私が受けてもいいんですか？」

依頼書と俺の顔を口語に見ながら聞いてくるイトラ。

なぜか部屋の入り口付近ではサラとディオシキの二人も覗いている。

「ちなみにいく、その依頼をギルドに持ってきたトン爺さんはあく」。

この依頼は誰かがすぐに引き受けてくれないとおく、この大陸が消滅しかねないって
言つてたわよお〜♪」

「トン爺さんがそこまで言うつてことは前回のタイムマシンよりもヤバいことが起きて
るのかもな」

さてどうするか。

正直この大陸が滅んでも俺は生き残る自信はあるが本当に大陸が滅んだら俺のキリングツズまで消えてしまいかねないしな。

「師匠が受けないなら私が受けますね。

師匠との愛の日々を満喫するためにはこの依頼を何とかしないとイケないっぽいですし」

「それはいいけど俺はだるいから手は貸さないぞ。

さつきから仲間になりたそうにこつちを見ている二人なら乗り気みたいだけど」

するとわざとらしくサラとディオシキの二人は俺の部屋に入ってきた。

「偶然話を聞いてしまったが、なんか面白そう無事話してるじゃん。

あたしはその依頼受けるぜ！

ハターンは家でゴロゴロしてろよ」

「もちろん僕様ちゃんも受けるよん♪」

それじゃちやつちやと行つてちやつちやと帰つてくるねー」

すでにそれぞれの愛用の装備に着替えた二人はイトラを担いでスタコラサツサと一路トン爺さんの工房へと向かつて行つた。

「あらあらあゝ、サラちゃんもおゝ、デイオシキちゃんもおゝ、とつてもいい子ねえゝ♪
ところでハターン君はどうするのおゝ?」

あの三人に任せたら依頼を達成出来ても二次災害が起きるんじゃないのおゝ♪」

「……はあ、そーいやその事考えてなかつたな。

仕方がない。俺もあいつらと一緒に走つてみるか。

別にお前のためじゃないぞマル」

マルの横をすり抜けて倉庫に入り装備を整える。

俺がこう言うことを見越したような笑顔が少しムカツクが俺は寡黙で渋いハードボ

イルドな男なのでこの程度で怒ったりはしない。

決して言いくるめられたように依頼を受けてしまったことに怒ってなどいないぞ！

そして愛用のプロミスシリーズを着込み、背中には大剣竜骨砕きを提げる。

それに鎧の内側に予備の武器を100本ほど。

そして弟子三人の後を追いはじめるのだった。

アイルガーX・剛（ゴー）

トン爺さんの依頼を結局引き受けることになった俺は先に家を出た弟子三人を追って爺さんの店に向かったわけだが三人は店の前で立ち止まっていた。

「おいお前ら何やってんだよ」

「あ、師匠。」

インターフォンを押してみたんですけど開けてくれないから鍵を開けて中に入ろうと思っただんですけどなんかトンお爺ちゃんのお店の鍵が新しい物に付け替えられてるんですよ。

「おかげで私はもちろんディオシキさんの鍵開け術も通用しなくなってるんです」

イトラは自分に出来ないことがあるのが許せないらしく説明しながらも試行錯誤をしているがディオシキに出来ないことが今のイトラに出来るとは思えない。

見ればディオシキとサラは他のルートから入ろうとしているが工房は窓は全てトン

爺さんの手作りだから俺でさえ壊すことは不可能だからな。

「まあここは俺に任せろ。」

壊すことも開けてもらうことも出来ない場合の対処方法を教えてやるから」

あまり使うことはないかもしれないが鍵開けのテクニクはもしも悪の組織に拉致された時なんか役に立つだろう。

イトラは強くなったがまだ最強無敵と言えるほどでもないし。

「まずは鍵の形状をよく見て鍵の内部構造を想像する」

頭の中でイメージし、地面の土を少し握って『気』を込めることで合鍵を作る。

ガチャ

「ほら開いた。」

イトラも次からは壊したりピッキングしたりするより合鍵を作るやり方を覚えろ。

「ディオシキはこだわりがるからピッキング以外で鍵開けをしないらしいがこの技術があつた方が今後に役立つはずだ」

振り返るとイトラは取り出したメモに色々と書きこんで自分でも土を手を取って試していた。

一回見ただけでこの技術を身につけてしまったようだ。

「お、なんだハターン来てたのかよ。」

それにもう玄関の鍵を開けるなんてさすがだな」

「ふふん、ハタつちには色々教わったけど僕様ちゃんは合鍵を作るなんて卑怯な真似だけは出来ないよん。」

鍵はピッキングか破壊に限るんだからね」

サラは覚える気がないから仕方がないとしてディオシキはどうにも変わったところまでこだわりを持つているから扱いにくいんだよな。」

「とりあえず中に入ろう。」

どうせ大したことないだろうけどトン爺さんの頼みごとは面倒な展開が多いと相場が決まっているのだ」

店の奥へ進んでいくといつもものようにトン爺さんの鍛冶の部屋の中から声が聞こえてきた。

「おいチカ！」

そっちの調子はどうだ？」

「こちらも順調だよ爺ちゃん！」

だけどちよつと煙が出てるのが気になるわね」

「む？ いかん！」

爆発するぞ！」

「え？ キャー！」

こ、これって放射能漏れてるんじゃない!？」

……出来ることならこのまま放置して帰りたい。

絶対に面倒なことになってるぞこれは。

「さあさ師匠。

中に入りましょうよ♪」

おい押すなイトラ!

これは絶対にヤヴァイ気がする!

「そうだぜハターン、入りにくいならあたしが開けてやるよ。

それがガチャつとな♪」

俺が止める間もなくサラは部屋の戸を開けて中に入る。

そしてそれに続いてイトラとディオシキが入っていくので仕方なく流れる的に俺もそれに続くことになった。

「おお、ハターン坊や達じゃないか。

もしかして依頼を受けてくれたのか？」

「お、お久しぶりですハターンさん。

ハ、ハターンさんが来るって分かってたらもっとおしやれしてたんですけど……」

先ほどまで危ない会話をしていたとは思えないほど部屋の中はきれいでいつも通り気楽に話しかけてくるトン爺さんと心なし顔が赤いチカ。

この様子だと依頼事態も大したこと無いんじゃないだろうか？

「ところでトン爺さん、依頼ってなんだ？」

別に俺達を名指ししてたわけじゃないけど序列の高いハンターを希望するほどの問題でもあるのか？」

そう言うトン爺さんは目を輝かして何かの箱を取り出した。

「実は新発明の性能を調べるために強いハンターに来てほしかったのじゃよ。それでこれが発明品」

「きつとハターンさんも見れば驚きますよ♪」

なんてつたつてこれが実際に大量生産出来たらハンターの時代は終わるかもしれないってくらいすごいものなんですから」

チカが発明品を箱から取り出した。

すると出てきたのはネコだった。

ただし機械じかけのカラクリのようだ。

「天才鍛冶屋トン・カンジヤの新発明！

機械ネコ『アイルガーX・剛（ゴー）』じゃ！」

「ち、ちなみに私はこの機械ネコの左手を作りました」

「自慢げに言われても反応に困る。」

「あー、俺は太った猫と切りそこなった　たくあんは嫌いなんだけど」

「なんじゃハターン坊やのくせに生意気な！

この美しいフォルムが分からんのか！」

機械ネコはでっぷりと太ったネコの姿をしていたのだった。

機械なのになんでこんなに太っているのだろうか？

「でも師匠、この機械ネコちゃん触るとけっこう柔らかいですよ♪」

「確かにこの手触りはすげーな。

ディーちゃんは触んねーのか？」

俺以外ではディオシキもトン爺さんの発明の機械ネコに近づかないようにしている。

「僕様ちゃんはそういう動物系を見ると殺したくて壊したくてたまらないから近づけな

いわ。

「だって触れた瞬間分解しなくなっちゃうもの」

確かに動物を見ると殺したくて仕方がないディオシキが近づくのは危険かもな。

理解、分解、溶解まであらゆる手段で破壊してしまいそうだし。

「そういえばこれの性能テストが目的だと爺さんは言ってたけどもしかしてこれと闘うのか？」

「ハターン坊やはすでに察しているみたいじゃから言うが今回の依頼とはこいつを起動したあと、暴れだすから戦って止めてほしいんじゃよ。」

「このアイルガーX・剛には、考えうる限り最高の装備を持たせたから電源を入れたら命令を聞かずに暴れ出してしまう構造になってしまったんじゃ」

「ちよつとそれはハタ迷惑すぎるぞ爺さん……」

「ハターンジョークってわけじゃないぞ。」

「だが爺さんは俺達が来たことに安心してしまつたようでいきなり電源に指を掛けて」

……

「それ、ポチつとにや〜♪

なあ〜んて今のは冗談♪

まだ押してないぴよろろ〜ん♪」

「おい爺さん！

語尾をネコっぽくしても全然可愛くねえぞ！

この発明品が暴れるのが分かってるなら起動なんかせずに作り直せばいいだろ！」

「あ、あのハターンさん。

その説得はすでに私もしたんですけどこの機械ネコは起動しなければ分解できないような仕組みにしちゃったから電源を入れてない時は壊すことも分解することも出来ないようになってるんです」

そう説明するチカ。

なるほど、起動しなければ壊すことも出来ない仕組みなら仕方がないか……つて仕方

無くない！

それなら溶鉱炉でまた溶かして再利用すればいいのに！

「でも可能な限りの戦闘手段を仕込んでるなら火薬とかも使つてそうだしやっぱりは戦うしかなかったんじゃないですか？」

「ぎやはは。ハタつちつてば心配症だねい。」

壊してもいいなら僕様ちゃんが殺してば解して並べて揃えて晒してあげるわよん♪」

「きやつほう♪ それにしてもあたしら4人が揃つて狩りをするなんて久しぶりじゃねーか♪

血が騒ぐぜ！」

弟子三人はすでに戦闘態勢に入っている。

「はあ……それじゃ俺も頑張るしかないな」

ネコバトル

いやまあ、機械だからと舐めていた俺も悪かったんだと思う。

だって、でっぷりと太った体型のネコ型ロボットなんて弱そうに見えるだろ？

だから『トン爺さんが電源を入れたら全員で攻撃しようぜ』って提案したけど他の三人に任せて俺は攻撃に加わらなくてもいいや、と思つてたら誰も攻撃しなかったから機械ネコ『アイルガーX・剛（ゴー）』は暴走して空の彼方へと飛んで行つてしまったんだよ……

「こりゃー！ お前さんら。」

ワシの発明が空の彼方へ飛んで行つてしもうたじやろうがあー！」

「あー、わりーわりートン爺さん。」

まさか誰も攻撃しないなんて思わなくてよ。

あんな機械相手に俺一人攻撃しなくてもいいと思っただよ」

「私も師匠が戦闘するところはあまり見る機会がないので師匠の観察をするのに忙しかっただよ」

「あたしはなんかめんどくせーから」

「大体電源を入れたら暴れ出すって言うから襲ってくるのを待ってたのに僕様ちゃん達を無視して空に飛び上がった機械ネコの方が悪いんじゃないかしら」

俺達4人はそれぞれに言い訳をしたがトン爺さんは納得してくれそうにない。

そりやそうだよな、まさか空の彼方へ飛んでいかれては回収のしようもないしな。

「とりあえず探してきてくれ……」

あのアイルガーX・剛（ゴー）はあまり遠くにはいかんじやろうけど街中に落ちたら破壊の限りを尽くすじやろうからな。

ワシは新しい発明を作りながら待つとるからちやんと見つけてきてくれよ」

そう言つてすでにまったりモードとなつたトン爺さんは茶を啜りながら次の発明に取り掛かり始めた。

たしかに引き受けた依頼を途中で投げ出すのは気が引けるし探すしかないわな。

「それじゃ全員で手分けして探そう」

「えー、私は師匠と一緒に行動したいですー」

「じゃああたしもハターンと一緒に行動したいですー」

「僕様ちゃんもハタっちと行動したいですー」

イトラはこう言うだろうとは思つてたけどサラとディオシキの二人は明らかにこの状況を楽しんでるな。

ニヤニヤと楽しんでいるのは俺の弟子らしいが実際にやられるのは嫌だな。

「……わかったよ、それにディオシキの嗅覚に頼れば手分けする必要なんてないだろうし」

実のところ手分けするのは俺一人サボってもいいんじゃないかね？　みたいな考えでカフエにでも行こうかと考えていただけだしな。

まあ、それでさっきの二の舞になては元もこうもないわけだが。

……そしてちよつと街中に出てみればディオシキの案内によりあっさり機械ネコは見つかった。

というか普通にギルドで見つかった。

「やつほく、今日も今日とて忙しく賑わってるわよ〜♪」

とギルドマスターのマルは言うが、普段は多くのハンターで賑わうこの店も今は客がほとんどいない。

受付嬢すら店の奥に避難しており店内に人は少ないのに賑やかという点においてはいつも以上だ。

店内にいるのは俺ら四人とマル。それともう一人の客にアイルガーX・剛（ゴー）である。

そしてアイルガーX・剛はプログラム通り（ミスらしいが）店内で破壊の限りを尽くし、そのもう一人の客をフルボッコにしていた。

「つーかあの男誰だマル？

えらいボコられてるけど」

アイルガーX・剛に殴られている男は必至に応戦しようとしているが手も足も出ずに殴られ放題。

すでに暴走した機械ネコを捕まえるということを忘れてしまった弟子三人は観戦に徹している。

「覚えてないのおく？」

あれはあく、元トイダーヴアの第五位のおく、テケツタ・カン君だよおく♪

ハンターとして復帰したから義手をつけて戻ってきたばかりなんだけどおく、ふらつと機械のネコがやってきてえく、見ての通りなおく♪」

確かによく見ればテケツタのようにも見えるがその顔はすでに殴る場所がないくらいに殴られまくっているので特定はしにくい。

「くっそー！ オイラは新たな義手で最強になったって言うのになんでこんなネコ一匹倒せねえんだよ！」

ヒラリヒラリとテケツタの攻撃を避け続けるアイルガーX・剛。

さすがはトン爺さんの発明だけあって一分の隙もないそのたたずまいは武士（ものふ）のような鋭さがあった。

「トドメ　ダ」

アイルガーX・剛はテケツタの拳（義手）に自分の拳を叩きつけた。

するとその勢いのままテケツタの拳は打ち砕かれ、頭から地面にめり込むという最高のギャグっぽい負け方をして勝負は終わった。

「サテ 待タセテシマッタヨウダネ。

私ハ あいるがーX・剛。 最強ノ兵器ダ

君達最強のはんたーヲ超越スルタメニ作ラレタ」

どうにも読みにくいセリフだがアイルガーX・剛は俺達と闘う気のようにだ。

「その前にお前には自我があるみたいだから聞いておきたいことがあるんだが」

「ナンダ？」

「お前の名前を入力するのに面倒くさいから以後アイルガーと略してもいいか？」

すまん、作者が書くのに面倒になったんだよ。

「構ワナイ。

私ハ 暴走出来レバ ソレ以外ニ拘ラナイ」

「ぎやはは。やつぱこういう展開になるなんてハタっちらしいじゃないのさ♪
僕様ちゃんは応援係をやるから」

「私も応援に徹しますね♪」

「なあマル。せつかくだから何か摘まめる物作ってくれよ」

弟子たちの声援を背に俺とアイルガーのバトルはついに始まった……
って、最初は俺が付き添いでお前ら三人が引き受けた依頼だろうが!!

……で結果。

ん？ もちろん俺の勝ちだ。

あんな機械に負けるわけないだろう。

「グググッ、コノ私ガ敗北スルナド……」

「いい勝負だったぜ。」

次は修理してもらって誰かれ構わず襲わなくなったらまた俺のところに来いよ」

戦闘シーンは全てカットという登場シーンに力入れ過ぎて竜頭蛇尾な展開になったが狙ってやったのだからこれでいいのだ。

「さつてと、あとはトン爺さんに預けて明日からまたのんびり暮らすとするかね」

背中では語るネコ

機械ネコアイルガーX・剛（ゴー）を破壊してトン爺さんに渡して修理が済んだあと。さてこれで俺も一仕事を終えたしのんびりしようと思えば店を出ようとしたところでトン爺さんに呼びとめられた。

「修理完了！」

おいハターン坊や、このネコお前さんの農場で飼わないか？」

「修理はやつ!？」

つてかそのネコ貰っちゃってもいいのか？

新兵器として大量生産して売り出すんじゃないのかよ！」

天才と言ってもだいぶ破壊したのに一瞬で修理するとは凄過ぎだろ！

「うむ、そのつもりだったのじゃが設計図を失くしてしまつてのう。

それにこのネコはプロトタイプじゃから採算度外視で最強に作ってしもうたから下手に売りに出したら面倒なことになりそうじゃし」

と言う訳でハターン坊やにやる、とトン爺さんは言うと、こちらの意見を聞かずに店の外に追い出すとシャッターを閉めてしまった。

今日はもう店じまいのようだ。

「つたくトン爺さんもけっこう自分勝手な人だよな。

お前はこれでいいのかアイルガー？」

渡されたアイルガーに視線を向けてみるとこいつも俺のところに来ることを望んでいたようで小さく肯くとそのまま黙ってしまった。

「おーい、お前けっこうしゃべってたのに何で離さないんだ？

もしかして言語機能を失ったのか？」

「あ、師匠。この子背中に何か書いてますよ」

サラとディオシキは「飽きた」と言って、先に家に帰っていたが例によつて俺の側にびつたり張り付いているイトラはアイルガーの背中を指差した。

「えーと、なにになに。」

『私はハターン様をモデルに作られたので寡黙で渋いカッコいいネコになるために背中で語る機能しかつけていません』……背中で語るつて、なんかこいつ俺よりも寡黙で渋くてカッコよくね?」

俺でさえここまで無口キャラつてわけじゃねえつてのにこいつ意外と凄いんじゃないかな
いだろうか?

しかも俺の好みに合わせて体型もスタイリッシュに改良されたから外見的にもカッコいいし。

そんな事を考えながら実際に農場に連れて行ってみたら案の定、アイルガーはメスのネコ達にモテモテでした。

「皆サン ヨロシクお願いシマス。」

趣味ハ読書デス」

とてもさわやかな笑顔とともに挨拶をするアイルガー。
つておい！ 背中で語る機能しかないんじゃないのかよ!?

「アレハ　じょーく　デス♪」

どうやらユーモアのセンスもあるようだな。

これなら農場のネコ達とも仲良くできるだろう。

……と安易に考えていたが、農場のネコ達の俺に対する忠誠心は鬱陶しいくらいに粘着質でした。

いや今回の場合は一匹だけだけどな。

「てめえなんざに用はねえつにゃ！」

アイルガーを連れて農場に入った途端にこの農場でのナンバー4、ハロウに言われてしまった。

どうやら新しい農場の仲間として紹介したのだが俺が認めるほどの強者と聞いてナンバー4の地位に固執するあまり、周りが見えなくなつてアイルガーを追い出そうとしているようだ。

「おいハロウ。隊長として命令するにや。

新入りのアイルガーとは仲良くするにや！」

「うっせー、隊長！」

俺はご主人に一番忠誠を誓つたネコなんだつにや。

隊長達三天王もいずれば俺がぶつ殺してご主人の一番のお気に入りネコになるんだつにや！」

ワリサの命令にも従わないハロウ。

何やら危ない発言だがどうやらハロウは本気のようにだ。

普段おとなしい奴ほど切れたら面倒というのがよくわかる光景だな。

当然の流れとしてこの後ワリサ達農場責任者のワリサとハロウの熱いバトルが繰り広げられたのだが意外にもハロウは善戦した。

「まさかこの俺がここまで手こずるまでに成長するとはやるにやハロウ」

「はっ、俺は隊長が作ったトレーニングメニューを常に三倍こなしていたからあんま舐めてっつと怪我するっにや」

踏み込んだ足が地面にめり込むほどの震脚と、ぶつかり合う互いの拳が生み出した衝撃波は大地を抉る。

「にやっはー！」

どちらのとも分からない血が大地を赤く染め、俺の頬にも降りかかってくる。

「お前ら、もうちよつと周りを見て闘えよー」

最初は俺は止めるのも面倒なので静かに観戦していたのだが（唯一俺についてきてくれているイトラでさえ、飽きて今ではお昼寝中）やはり勝負はワリサの方が優勢だった。

ワリサ相手にここまで粘るハロウも大したものだがワリサはまだ本気を出してはいない。

かつて触れるものすべてを傷つける『鬼』とまで言われたワリサの殺意は封印されたままなのだから。

「おいハロウよう。」

俺を本気にさせて生きていられると思うにやよ」

これ以上戦闘が長引くとワリサが過去を思い出して暴走しそうだし止めるべきか？

「おいハロウ。　ワリサが本気出す前にいい加減にバトル展開はやめ「才待チクダサイ、ゴ主人」……なんだアイルガー？

お前が二人を止めるってのか？

というかこの争いの原因はお前にもあるのだが」

「心配ゴ無用DEATH」

……何やら語尾が変だったが。

「あいるがーろけつとばんちー！」

アイルガーの腕が飛び出しハロウを捕まえる。

それと今更だが、どうやらアイルガーはカタカナのセリフは平仮名に、平仮名のセリフはカタカナになる仕様らしい。

「にゃ!？」

だがハロウも抵抗しようとするがアイルガーは陸海空全てにおける最強兵器として作られたロボットなので一度捕まえた獲物を逃がすような真似はしない。

ゆっくりと近づいて行ったアイルガーは取り押さえたハロウを担いで岩陰に隠れると何かを話しているようだ。

ほんの少しの間だというのにアイルガーはハロウの説得に成功したのか、変わり果てた姿のハロウを担いで再び俺の前までやってきた。

「燃え尽きたつにや……」

ハロウは先ほどまで散々暴れていたというのに急におとなしくなり、白い毛並みがより真っ白に燃え尽きた灰のようになってしまった。

「おいアイルガー。 お前何言つたんだ？」

「ナニ、チョット ゴ主人ノタメニ脅シテ オイタダケデス。

ソレト農場四天王ノ 新タナ一角ニハ 私ガ就任スルコトモ認メサセマシタ」

表情を変えることもなく、自然な立ち振る舞いのアイルガー。

そのアイルガーを見てワリサも関心しているようだ。

「お前にやら大歓迎だにや♪

ようこそ！ ご主人に忠誠を誓った最強のハターン農場軍団へ」

「ヨロシク オ願イシマス。

趣味ハ火を吹クコトデス」

すでにアイルガーが戦闘に介入してきたことでギリギリのところ、かつての殺意を抑えることが出来たワリサはすでにティーセットを準備して菩薩モードワリサとして甲斐甲斐しく働いていた。

本人曰く、『ご主人のネコとしてこの位の事が出来にやいでどうしますかにや』だそう
だ。

「そんじゃま、新しい仲間はお前らで歓迎してやってくれよ。」

俺はイトラが寝ちまったからもう家に帰るわ」

「ご主人、どうせならこのままイトラさんと関係に及んでもいいんだニヤ」

「私もご主人の子育てをするという建前で家に住みたいから子どもを作るなら早くしてほしいみゃ」

ネコ達は家に帰る俺にそんな事を次々として行くが俺はまだ結婚する気はない。

そう思つて気づいた。

……『まだ』？

何やら俺も考え方が段々と変わつてきているような気がするがこれもあいつらの洗脳に違いない！

「俺は寡黙で渋い固ゆで卵のような男であるはずなのだ！」

だがそんなセリフもすでに言い訳に聞こえるほど胸の内を満たしている熱い思いは大きく膨れ上がっていき、それを悪くないと思ひ始めている俺もいるのだった。

第十五章：これで終わりだハッピーエンド？ 編

武士道精神

突然だがここでトイダーヴァアの街とその街のハンターの序列について説明しよう。

トイダーヴァアの街は元々一人の竜人族のハンターが興した街で、最初に街の長をしていた竜人族はハンターとして稼いだ金と人脈を使い、あつという間に街を大きくしたという。

もちろんこれはかなり昔、俺が生まれる前の話だから聞いただけなのだが。

そしてハンターが長をする街ということとその街長にあこがれた強いハンター達が次々に集まりだし、他に類を見ないほどに腕のいいハンターが揃っているのだ。

ありえないような話だが、街のハンターの一割がG級ハンターというのはこの街が特別なのであって、大抵の街と呼ばれるだけの大きな場所でもG級ハンターは数える程度しかない。

そしてこの街の一割のG級ハンターの中でも特に一線を画したハンターが序列持ちと呼ばれている。

第一位がこの俺ハターン・モンスター。

「俺宛ての依頼は最近はトン爺さんの手伝い以外全く来ないので仕方なくのんびりしていた俺は久しぶりに外食をしようと思い、こうしてギルドに来ていたわけだが、不意にマルがそんな事を言ったのだ。」

「彼つて誰だ？」

「マルは顔が広いから誰と仲が良くても不思議ではないが何か嫌な予感がしたので訪ねてみた。」

「彼つてのはあく、彼のことよお〜♪」

「ハターン君もよお〜♪知ってるわよお〜♪」

「俺とお前の共通の知り合いで会いたい奴なんていないな」

「もお〜、彼はハターン君のこと好いてるんだからあく、帰ってきたら一目顔見せてあげなさいよお〜♪」

正直に言えばマルが言う『彼』について心当たりがある。

俺の嫌な予感というのはけっこうな確率で的中するのでマルが言う『彼』が俺の知る『アイツ』ではないことを願うが展開から言つてまず間違ひなくアイツだ。

俺のことが好きなのやつはどいつもこいつも粘着質で鬱陶しいという奴が多いのだがその中でも特に厄介なアイツだ。

急いで店を出ようとしたが時すでに遅し。

その時には店の入り口の戸が勢いよく開かれたのだった。

「ややつ！　そこにいるのは我が友ハターン殿ではござらんか！

拙者が帰つてくる日にちようどギルドで会えるとはまさに感激の極みでござるな！」

俺の勘は的中した。

テオ・テスカトルのプレスよりも暑苦しく、ネンチャク草よりも粘着質で俺に寄つてくる男。

トイダーヴァアの街の第三位、シドー・ブイセシンだった。

その性格は鬱陶しいだけなのだがその見た目が俺の寡黙で渋いハードボイルドな雰

困気と合わないからあまり一緒にはいたくない男なのだが見つかった位上は仕方がない。

シドーは周りにもかけることなくドカドカと店の中に入ってくると、さも当然とといった流れで俺の隣に座る。

「よう久し振りだなシドー。」

俺はあんたに会いたくなかったし出来ることなら狩り場から戻ってこないことを願っていたんだがな」

「またまたそんな冷たいことを言っちゃって。」

ハターン殿は本当は拙者に会いたいのになれなただけのツンデレさんでござるな」

シドーの十八番、『都合のいい解釈』。

こいつは俺がハンターになるより前からこの街でハンターをしていたかなりのベテランなのだが、なぜかけっこうな年だというのに必要以上に俺に構ってくる鬱陶しい奴なんだ。

俺がこの街に来る前までシドーはトイダーヴァの第一位のハンターだったのだが俺が現れて、さらに俺の弟子のサラがメキメキ実力をつけたことで今は第三位の席に着いているがそれでも一流の狩人であることには変わりない。

ちなみにシドーが第三位というのには無類のお人好しなために依頼外で追加の仕事をボランテアで受けて、いつも狩り場から帰ってくるのが遅くなったりはしているためにクエストクリア数が少ないからでもある。

「とりあえず久し振りに帰ってきたお前に顔は見せたい、俺はもう家に帰るぜ。

早く帰らないと弟子達が暇つぶしで家を完全に壊しかねないからな」

ついさっきの出来事なのだが、食つちや寝ばかりしていたサラをイトラが咎めたところ、二人にしては珍しく喧嘩になり、おまけになぜかディオシキまでも加わってしまい大暴れだったのだ。

そこで俺が喧嘩を止めたらなぜか『決着をつけるために壁を殴りつこして勝負しようぜ♪』、という流れになり三人によって家中の壁が壊されてしまったんだ。

さすがに俺もキレたんだが涙目で謝ってくる三人に怒れず、三人は反省する事はなかった。

「……ハターン殿の長い回想はともかく、先程まで拙者が出向いていた依頼先で面白い話を聞いたのでござる」

おっと、俺としたことが気を抜いていたか。

まあいい。

「面白い話？」

こいつにしては妙に真面目な顔をしているな。

「メラナト島にて新種のモンスターが大量に見つかっているそうでござる。

ハターン殿を名指しで来る依頼は滅多に無いでしょうし、たまには拙者と一緒に狩りに出かけてみないでござるか？」

眼を輝かせて語るシドー。

ここでシドーの装備について説明しておく、こいつは頭をラオシャンロンの頭部を

模した気ぐるみで隠し、それ以外は暁丸・覇のハンマー使い（ハンマーを二本使う二刀流でもある）という変わった装備なのだ。

シドーは俺が鼻頂にしている鍛冶屋、トン爺さんの店で俺以外の数少ない客でもあるのでそのマスクは被ったまま食事や風呂も可能という優れもので、実際にこいつがマスクを脱いだところを見たことがない。

しかも頭部の『ラオシャンロンフェイク』はその性能とは裏腹に、妙に可愛らしくデフォルメされているので傍にいる人間を芸人に見せる隠しスキル？ も持っているのだ。

つまり現在コイツの隣にいる俺は目の前のマルに笑いを堪えられながら接客されているわけだ。

そしてシドーはよほど俺と一緒に狩りに行きたいのか、尻尾があるならちぎれんばかりに振っているだろう喜びに満ちた笑顔だ。

ここで断るのは簡単だが、以前母さんがメラナト島に父さんが向かったと言っていたし興味はある。

このあいだタイムマシンで過去に行った時にイトラの両親を襲った古龍も方角的にはメラナト島に逃げた可能性が強いし行ってみるのも悪くない。

「断る……と、言いたいところだが、それもいかもしれないな。

よし、行きたい依頼もないし俺もメラナト島に行ってみるか」

「おお、それは嬉しいでござるな♪

すでにマル殿に船の用意は済ませてもらっているでござる！」

なんとも手回しのいいことだ。

だがこれを利用して今回の狩りをイトラの弟子卒業試験としよう。

遅すぎた位だがいつまでもイトラを俺の手元に置いておくわけにはいかない。

「まあ、一人立ちの時期ってやつだな」

そのあと無駄に熱いシドーに先に港向かうように言った俺は三人の弟子を呼ぶために家に帰るのだった。

侵入、メラナト島

シドーを待たせたまま一旦家に帰った俺はとりあえず三人を連れてメラナト島に誘おうと思ったのだが家では家の面倒事があつたようだ。

「……………これは一体どういうことだ？」

なんと帰る場所であつた家そのものが全焼していたのだった。それはもう見事に灰しか残らない位に見事なまでに。

「あ、師匠、お帰りなさい。

見ての通り家が燃えちゃいました♪」

「そりゃ見ればわかる！」

「ちゃんと理由を説明しろ！」

真つ先に俺に気づいたイトラが出迎えてくれたがさすがにこの家が燃えている理由

というのによほどのことに違いない。

これまでもサラとディオシキの喧嘩以外でも何だかんだで壊したこともあるしボヤ騒ぎも毎度のことかもしれないがそれでも全焼したことは滅多にない。

再建に時間がかかりそうだな。

「実はですね。

ディオシキさんはこの家ではいつもサラさんの部屋で過ごしていましたんですが、そのために自分の部屋は爆弾専用倉庫として使っていたらしいんですよ。

で、今回それに引火してボンだそうです」

なんてこった。

まさかあいつが以前住んでいた村を追い出されたのと同じ理由で俺の家が燃え尽きてしまうとは。

確かによほどの理由と言えなくもないがまったくなんてことをしてくれるんだ……

幸いなのは周りの土地も買い占めているから近所さんも居らず、俺の家以外に被害が出なかったことかもしれないな。

「お、やくつと帰ってきたなハターン。

デイーちゃんがまた家を壊しちまったけど許してくれるんだろ？」

「ぎやはは。　　またもハタつちの家壊しちやつたけど大事なものは全部地下の隠し部屋に仕舞つてあつたんだから別にいいでしょ？」

……まあ、別にいいけどさ。

お前らは本当にお気楽な思考をしているな。

「わーつてるよ。

どうせこんなこともいつものことだし怒りやしねえよ。

でも全焼したとなると立て直すのに時間がかかることになるだろうし、しばらく狩りに出かけるとするか」

「お、なんか今日はあんまり怒らないじゃないハタつち。

何かいいことでもあつたのかい？」

「ああ、実はサラは知ってるだろうけどこの街の第三位、シドー・ブイセシンから一緒にメラナト島に行かないかと誘われていてな。

イトラの修行も兼ねて行こうかと思つてたところなんだ」

卒業試験だということはイトラにはまだ内緒だ。

「分かりました師匠。

私は面識はありませんがそのシドーさんという人と一緒に狩りに出ることが今回の修行なのですな？」

「正確にはメラナト島に行くこと、だな。

さて、それじゃ準備はみんなもう済んだか？

今回は港まで馬車で行って港からは船でいくからな」

「「はーい、うん」」

返事ばかりいいがこれも今日までだと思つたと寂しく感じなくもないな。

そうして準備を整えた俺達は（狩りに使う武具は倉庫に仕舞ってあったので家が燃えても残っていた）、シドーも含めた五人でどうにかメラナト島行きの船に乗ることが出来たのだった。

ん？ 5人？

「そう言えばハターン殿。

今回の狩りの前に言っておきたいのでござるが、今回の狩りが終わったら拙者は結婚しようと思ってるんでござるよ」

「……へー、あまりそう言うことは狩りの前に言わない方がいいと思うんだが」

「そういえばそつちの子が新しいハターン殿の弟子でござるな。

はじめましてシドー・ブイセシンと申すでござる」

俺の話を聞いているのかいないのか（まあ聞いてないだろうが）、シドーはイトラに自己紹介をはじめた。

「……はじめまして、イトラ・ウボンガです」

「……なんかこう言っではなんだけどあなた、死相が出てるわよ。

ちなみに僕様ちゃんはディオシキ・ブラザキよん」

サラは顔見知りだがシドーのことは俺と同じく鬱陶しく感じているので挨拶はしない。

そしてサラは気づいていないようだがさすがにイトラとディオシキの二人は気づいているようだ。

今回五人という忌避される人数で狩り場に行く意味について……

「しかし5人での狩りつてのはなんか不吉だしここはハターンチームとシドーチームに分かれないか？」

ひとつのパーティーとして動くとか誰か欠けそうだし」

あまり意味はないかもしれないが一応こういう分け方でもしとけば多少は死亡フラ

グを回避できるだろう。

「ホッピョピョピョ♪」

ハターン殿ともあろう人がそんな迷信を信じるでござるか。

拙者達は大陸中に知られるほどの超一流のハンター」

「お前が気にしないならそれでいいんだけどな」

まあ、こいつもこれでいて強いしそう簡単には死なないだろう。

「実は拙者は泳げないが大丈夫でござろう。」

この辺りには水棲モンスターがたくさんいるというのが気になるでござるが」

おいおい、そんな死亡フラグを上塗りするなよ。

「あ、師匠、ロアルドロスが群れをなして大量にこつちに向かってきてます！」

こんな時にモンスター、それもロアルドロスが集団で襲つてくるとは面倒なおまけとして普通のルドロスもけっこういる。

「()は拙者に任せて先に島に向かっていてくれでござる！」

なあにすぐに追いつきますので心配()無用でござる()」

そう言つて立ちあがつたシドーは大きく跳躍して集まっていたルドロスの頭を踏み台として、集団のボスであるロアルドロスの群れに单身突っ込んで行った。

「あー、シドーの奴飛び上がる時に思いつきり反動つけやがつたから船底に穴が開いちまつてるぞー！」

珍しく慌てたような声を出すサラの視線の先にはかなりの大穴があいていた。

ちなみに船の大きさは俺達5人が乗れる程度の小さなものなので攻撃を受けたら一発で沈没してしまうだろう。

しかもそうこうしているうちになんか穴はさらに大きくなってきたし！

「マズイな、あたしは太刀使いだから鞘に海水が入ると錆びちまうからあとで手入れするのが大変なんだよな……」

「ぎゃはは。サラにゃんも僕様ちやんやハタつちみたいに暗器使いの能力を身につければ防具の下に予備が身につけられるのに。」

なんなら島にいたら僕様ちやんのコレクションを貸してあげるよ。

しよつちゆう武器を壊すから同じ種類の武器もたくさん仕舞ってるし」

「でも海に落ちて全身濡れ鼠になってしまったらその武器も錆びちやいますし数が多くても意味がないような気がします」

何やら間拔けな会話をしている弟子三人。

「つたく、面倒なことになったぜ！

もうじき船が壊れるから覚悟決めとけよ！」

最初からこうなるような気はしてたんだがやはり船は大破した。

そして俺達は海に投げ出されてしまった。

……が。

「こんなこともあるのかと俺は海の上でも自分の重さを消すことで歩く方法も知っているから問題はないのだがな」

海に投げ出された弟子三人を空中にいるうちに素早く拾って両肩と頭に乗せるとそのまま遠くに陰だけ見えていたメラナト島に向かうことにした。

……シドーを残したまま。

まったく無茶しやがって。

『今回の狩りが終わったら拙者は結婚しようと思っっているんでござる』

そう言っていたあいつを俺は一生忘れることはないだろう。

シドー・ブイセシン、俺達からモンスターの注意を引き付けるためにモンスターの群れに単身飛び込んだ立派な最後だったぞ。

だがお前が船が大破する要因を作ったのも忘れないからな。

何でも食べるのは元気の証拠♪

「ふう、さすがに弟子三人を担いで海を渡るのは疲れたな。

それでも全員無事に着いてよかった」

船がロアルドロスの大軍に襲われて大破してしまつたがために弟子三人を担いで島まで海の上を歩いて来たがもう一人の仲間、シドー・ブイセシンは見当たらない。

「あいつは俺達が四人になれるように犠牲になつたんだ。

大丈夫、みんなの心に生きているさ」

さようならシドー。

鬱陶しいが、いい奴だったよ……

「拙者はまだ死んでいないでござるよー!」

そんな事を考えていると空に輝く太陽が翳り、何かが降ってきた。

「とうつ、シドー・ブイセシン華麗に参上！」

「お前あの状況で生きてたのかよ!？」

あれはもう流れる的に死んでいるべきだろう！」

「そんな常識をぶち壊すのが拙者でござるよハターン殿！」

死んだと見せかけて実は生きてましたってキャラが最近は流行ると思うのでござる。

さあ、早く島の奥へ行こうではござらんか」

そう言つて一歩踏み出したシドーは……海に落ちて沈んで行つた。

「うわあ、ブクブクブクブク……」

シドーが着地した足場は海に浮かぶ小島のような小さなものだったため一歩下がっただけで落ちてしまうものだったのだ。

シドー死亡。

「一歩下がっただけで溺れ死んでしまうとはこの島は危険地帯だな。
みんな気をつけろよ」

さようならシドー2。

「ところでこの島で何をすればいいんだハターン。

イトラの修行らしいけど自由に散策すればいいのか？」

「そっぴやイトラちゃんもそろそろハンターとして独り立ちできるくらいには実力も付いてきたしこれが卒業試験だったりするのかな？」

ぎやははははッ！」

「もう！ 私は一生師匠について行くと決めただから絶対に弟子卒業なんてしませんからね！」

相変わらず勘が鋭い奴らだ。

ここまで慕われていると別れるのは辛いものがあるがこれは決定事項だからな。
詳しいことは狩りが終わってからだがとりあえずは……

「島の中に入って行こう。」

すぐそこにある入口は、昔この島に城を建築しようとした王がいたらしいから造りは立派だしな」

イトラの両親を殺した古龍の気配はこの島に着いてからより強く感じているからこの島にいることは間違いない。

だが場所までは詳しく特定はできないからな。

そうして進んでいくとえらく動きの鈍いモンスターが現れた。

「自分で動ける食人植物に巨大なイカか。

名前はヘッドイーターとクラーケンってところかな？」

食人植物の方とはかくイカの方はなかなか旨そうだ。

船が沈没してしまったから弁当も沈んでしまったしこいつらを食糧として狩って行く。

「それじゃとりあえず食事を「飯即斬! (ブシヤア)」……つてはえーな」

俺が言うよりも早く、パーティー一の食いしん坊サラは珍しく背中 of 太刀を抜いてイカを狩っていた。

ちなみに食人植物の方はディオシキが生のまま一口で丸のみにしていた。

「おいハターン、調理器具出してくれよ。」

「というか調理してくれよ♪」

「サラにゃんこつちの植物は生で食べても美味しいよ。」

(モグモグ)

なんとも逞しい弟子達だ。

イトラもちやつかり自分で取り出した鍋にイカと食人植物をぶち込んで豪快な鍋料

理を作り始めているし。

そんな訳でここらで食事タイムだ。

……

……

……

「そういえばイトラ。

今回の狩りが始まる前に行って奥ことがある」

「ふあい？」

「ふあんれふか？」

小動物みたいに口の中いっぱい頬張ったまま返事をするイトラ。

これはこれで可愛いがマナー違反なので注意しておく。

「口に食い物入れた状態で話すなよ。」

それと今回の狩りでお前は一人で狩りをするようになるがピンチになったら必ず俺が助けてやるから自分を見失うことがあっても決して自分一人で解決しようとするなよ」

「(もぐもぐゴツクン)」

師匠が助けてくれるのに自分一人で出来ないことをするほど私も子どもじゃないですよ。

どんな時でも決して無理はしません」

「だといいんだがな」

一応釘は刺しておく。

今回の狩りはイトラにとって最後の試練。

これからハンターとして一人でやっていけるかを見るための試練でもある。

俺を越えるハンターになるのなら自分の実力を理解し、必要とあれば俺に頼ることが出来なければいけない。

「ハターン、醤油とつてくれ」

「ハタつち、ご飯おかわり」

もう二人の弟子は緊張感の欠片もなく鍋をつついていいる。

「はいはい、これからこの島の最下層まで潜って行くんだからしつかり食つとけよ」

その後食事も終わり、次々と現れる新種のモンスターを狩りながら島の奥へと進んで行った。

そしてメラナト島最下層、そこに奴はいた。

禍々しいオーラを放つ二つの眼が暗闇からこちらの様子を窺っている。

まるでこちらの力量を品定めでもするかのように……

暗闇に浮かぶ二つの眼

そいつはにいた。

輝くような二つの瞳をメラナト島の内部を適当に散策していたら見つけたのだが俺はこの眼を、気配を知っている。

過去に会ったことがあるからだ。

「さあて出てこいよ……父さん」

「久し振りだね我が息子よ。

やっぱりここで待っていて正解だったよ」

暗闇から出てきたのは俺の父さん。

背後でサラとイトラがズッコケた音がするが俺は気にしない。

「やっぱハタっちのパパさんだったのね」

唯一驚いていないディオシキは以前に父さんとは会ったことがあるので匂いを覚えていたようだ。

「さすがは私の息子だな。

ハーレム要員を揃えてこの島にやってくるなんてさすがじゃないか。」

以前会ったときと変わらない子どものような笑顔で手を振りながら近づいてくる父さん。

その格好はおよそハンター協会会長という普段事務仕事をメインで行っているとは思えないほどに禍々しい装備、『ドラゴンX』シリーズに黒滅龍槍という出で立ちだった「相変わらず元気そうで何よりだ父さん。

母さんが探してたし、あんま長いこと島に籠っていたら嫌われちゃうぞ」

うっかり母さんの話を振ってしまったために、父さんはスイッチが入ったようだ。

そして結局は愛し合っているから何の問題もない、と言って父さんの母さんとの惚気

話が終わったのは30分も経ってからだった。

俺の父さんは母さんとの夫婦仲が気持ち悪いくらいにいいんだが風来坊な性格のため今回に限らずあちこちを放浪しているのだ。

けっこうな年のはずだが髪の毛はいつまでのふさふさで肌もモンスターだらけの島に長いこといたというのに若者みたいにピチピチでもある。

というか女の子に見えるからイトラよりも女っぽく見えるくらいだ。

父さんと一緒にいると、しょっちゅう俺の方が父親だと間違われてしまうくらい若い父親なのだ。

「ちなみに母さんからお前が新しい嫁さん候補の弟子をとつたと手紙で聞いているぞ。もしかしてそっちの小さい子かい？」

面倒なことになりそうだからあえてスルーしようかとも思ったのだが父さんに呼ばれたことでイトラが会話に加わってきた。

「始めまして師匠のお義父様。

ハターン師匠の未来のお嫁さんのイトラ・ウボンガと申します」

「おお、これはこれはご丁寧に。

私はハターンの父、ジドストラ・モンスターです。

息子と付き合っていくのは大変でしょうがこれからもよろしくお願いしますね」

「はい、お任せくださいお義父様♪」

あー、なんだろこの展開。

そろそろ物語の最後の締めとして割とシリアスなバトルに流れ込む空気だったのに
妙に和んでるし。

というか父さんもこんなに幼いイトラが俺と結婚することに賛成するなんてどうか
してるんじゃないのか？

「あたしとも始めましてだなハターンの父ちゃん。

トイダーヴァの街で第二位のハンターをしているサラ・ムーイだ」

「僕様ちゃんとは久し振りだね♪」

「ディオシキですよん」

なんか手持無沙汰だった二人までも会話に加わってきたし。

「はじめまして&お久しぶりですお二人さん。

息子よ、せっかくだからここらでお茶にしようじゃないか。

ティーセットくらい持つてきているだろう？」

そう言つてマットを敷いて座り込んだ父さん。

お茶菓子まで用意して相変わらずのマイペースぶりは健在のようだ。

「分かったよ。

仕方がないからここらで感動の親子の再会でもしてやるよ」

さつさと島の奥へと進みたかつた俺を足止めした父さんへの嫌味で言つたつもりだったのだが、父さんは言葉通りに取ってしまったようだ。

「さあ、お茶会を始めようじゃないか♪

可愛い息子とその未来のお嫁さんとの会話だから弾ませようか」

妙に張り切り屋の父さんの仕切りでお茶会は始まったのだった。

……

……

……

「ところで父さん。

せつかくだから聞いておきたいことがあるんだが」

「この島にいる理由か？」

それなら新種のモンスターが大量に見つかったからってことだぞ」

すでに三杯目の紅茶を冷ますことなく一気飲みする父さんは四杯目を注ぎながら
言ってきた。

熱くないのか？

「いや、それは知ってるけどこの島の地下に新種の古龍がいるはずなんだが知ってるか？」

イトラの仇のモンスターの気配は間違いないこの島から発せられている。

「ああ、光黒龍ギーラのことだな。

ギルドでもその生態は詳しく知られていないから古龍に分類されるんだろう。ちなみに私が島を出ないのもあの龍の探索が目的だからだ」

「つてことはその古龍の居場所がこの島ってことしかわかっていなんだな」

父さんが島に残っている理由は分かった。

「まあ、父さんが無事でよかったよ。

それじゃ俺らはこれからその新種の古龍の探索を続けるから父さんは一緒に来てい

るギルドナイト達を連れて帰ってくれ。

「どうか帰れ」

誰もが忘れていた設定かもしれないが父さんがこの島に勝手に訪れたためにハンター協会の会長に万が一があつてはならないので護衛として多くのギルドナイトの人員がこの島に割かれたことであちこちに問題が発生しているしな。

おかげでその問題に俺自身が巻き込まれたり、弟子たちが騒ぎを大きくしたりするから早いとこなんとかしておきたいという考えがあつてのことだ。

「ふふふ、私の息子は随分と立派になったもんだね。

これなら調査の続きはお前たちに任せることができそうだ」

そう言うとき意外なほどにあっさりと言葉を交わした父さんは荷物をまとめた。

「どうやら俺達が来るのを待っていただけですからに帰るつもりだったのだろう。」

「ああ、そうそう。」

「イトラちゃんだったね。君に一つ忠告しておこう」

帰りの荷物整理をしていた手を止めて父さんはイトラを見る。

「なんででしょう?」

「そんなに大したことじゃないし、息子が分かっているようだから余計なお節介なんだろうけど……息子を頼るんだよ」

それだけ言うと父さんは荷物をまとめて俺達が来た入口に向かって歩いて行った。

「師匠、私は師匠を頼る気持ちは必ず持ち続けますから大丈夫ですよ」

言葉の意味を本当に理解しているのかどうか……

父さんはイトラの眼の輝きの奥にあるものに気づいたのだろう。

「……さて、それじゃさつさと奥へと出発だ。」

イトラ、もう一度言っておくが俺を頼れ、俺を信じろ、俺を巻き込め」

それだけ言って島の奥へと歩みを再開する。

それ以降の会話は不要。

イトラが自分の問題を解決できるかどうかはイトラ自身にかかっているのだから。
そして島の深奥。

そこに奴はいた……

イトラの咆哮

イトラside

「あ、あああ……」

その龍の姿を見た時に思い出した。

これが光黒龍ギーラ……

私のパパとママを殺したモンスター。

私から全てを奪っていった憎しみの対象。

「見つけた……ついに見つけた！」

その情報が見た瞬間に頭の中に流れ込んできた。

そして師匠達がいることも忘れ背中に提げていたボウガンを構えながら一気に距離を詰めて飛びかかった。

「ああ、やっぱり私はあの時から成長できてなんかいなかったんだ。

無意味に生まれて無価値に死んでいくしかない存在だったんだ……」

私は最大の攻撃を繰り出しても傷一つつけることが出来なかったギーラを殺すという考えなんて吹き飛んで、私はすでにこの龍に殺されることを望んでいた。

あまりにも強いこの龍は私がこれまでに買ってきた獲物とは全然違うのだから。

「パパやママの場所に行けば楽になれるかも……」

そしてギーラの攻撃はすぐ目の前まで迫ってきてても体は反応せずに立ち尽くすだけだった……

ハターン side (戦闘前に時を遡って)

「やっぱ暴走しちゃったか。

まあ親の仇だしイトラの眼は愛や喜びと同じくらいに復讐と憎悪に淀んでいたからな」

「おいハターン！ それならあたしが連れて来た時になんでイトラを弟子にしたんだ!! 結局のところイトラはハターンの愛情を受け入れていなかったことになるんじゃないか！」

冷静な俺に驚いたような表情を向けてくるサラ。

「サラにゃん、ここは静かに観戦してましょ。

ハタつちにはハタつちの考えがあつてイトラちゃんを弟子にしたんだし。

それと僕様ちゃんもイトラちゃんの眼が復讐者の眼だということに気づいていたよん」

こちらは珍しく真面目な顔をしたディオシキは腕を組んだまま隣でイトラの戦いを静かに見る。

サラは人の心の機微には疎いがディオシキはそう言うところだけは俺から一番学んでいるからイトラの中の憎しみだけでなく、それ以外の感情にも気付いていたんだろうな。

その学んだことを活かすかどうかが気分次第なのが困りもんだが。

「イトラちゃんの過去はすでに聞いていたけどまさかこれほどの大物が仇だったなんてね。

これほどの龍はさすがに僕様ちゃんも手こずりそうだし。

で、どうするのハタつち？ そろそろ助けに入る？」

イトラのボウガンは眼の前のギーラの甲殻に傷一つつけていない。

確かにこのままではイトラは負けて殺されてしまうだろう。

だが、

「もう少しだ。

あいつは俺と約束した。

必ず俺を頼ると」

だから信じている。

自分では勝てないとわかった時に死を受け入れるのではなく俺達を、師匠や姉弟子など関係なく、仲間として頼ることが出来る一人前のハンターとして成長出来ていることを。

「極上・銃王無神！」

イトラは自身の最大の必殺技を繰り出した。

さすがはトン爺さんの発明だけあってその威力には驚きを隠せないがイトラの眼は憎しみで曇っている。

イトラはボウガンの引き金を引くとき、考えて引いてしまったのだ。

普段のイトラなら考えるよりも先に体が勝手に照準を合わせて引き金を引くことで誰よりも早い正確無比な狙撃を可能としているというのに、考えて引き金を引いてしまったがために隙が生まれた。

そしてそれは光黒龍ギーラが攻撃を攻撃として認識し、ガードする心構えを持つのに十分な時間だった。

ここまでかなのかイトラ？

お前はまだまだこんなもんじゃないはずだ。

さあ、ここでお前がするべきことはこれまでに教えてきただろう。

考えるんだ！ 俺の一番弟子！！

俺の手をとれ

イトラside

もう死んだっていいや。

師匠には迷惑かけちゃうけど仕方ないよね。

ここが私の限界だったんだよ。

こんなに強いんだからパパやママが殺されたのも仕方がないし私がここで死ぬのも仕方がないことなんだよ。

だから受け入れた。

眼の前の正体不明の圧倒的なまでに強い龍の一撃を。

……だけどその攻撃は私に当たることがなかった。

「我が弟子イトラ。」

ハンターとしての使命とはなんだ？」

光黒龍ギーラの攻撃を防いだのは、いつの間にか駆けつけてくれた師匠だった。

だけど師匠の顔はいつもとは違って初めて見る顔だった。

情けない弟子の私に失望しているのか、それとも怒っているのかわからないような顔。

「お前の過去は知っている。

だから復讐をするのは家族を殺され、一人残されてしまったお前にとって当然の権利だと思っている。

だがな……お前は両親を失ってからの今日まで、俺の弟子として過ごした日々を楽しいと感じていただろうか？」

私を見つめる師匠の眼には失望や哀しみなどではなく、私を想う愛があった。

師匠はいつも感情を表に出すことはないのに今ははつきりと私に対する包み込むような優しさを感じさせた。

それを見て胸が苦しくなる自分があることにも気づく。

愛されていたのに拒絶していたのは私の方だったのかもしれない、と。

「だったら過去を捨てるな！」

俺の弟子を名乗るのなら何も捨てることなく強欲に全てを手にして見せろ！
俺はそう教えてきたはずだ！」

そうだった……

師匠はいつも私を怒ることはなかったけど愛してくれていた。

普段は無愛想に装っても師匠はいつも周りのみんなを愛していた。

サラさんやディオシキさんが迷惑をかけてもいつも仕方がなさそうにしながらも受け入れていた。

私とは違う。

死を受け入れるのではなく、幸せを受け入れる覚悟。

それが師匠から常々習っていたことだった。

「だからナイトラ、お前は俺達を頼れ。

約束しただろ？」

静かにそう言っかけてくれる師匠の、これまで何度も見てきた優しさに溢れる目を……

私はようやく真つ直ぐに見ることが出来た気がする。

「さあてサラ！ デイオシキ！ お前らの妹弟子のピンチだぜ！

ここらで全員揃って最高の狩りをしようじゃねえか!!」

いつの間にか私の後ろに来ていたサラさんとデイオシキさんとも目が合う。

「なんかわりーなイトラ。

お前の気持ちを汲んで最後まで観戦に徹しようと思つてたけどやっぱ無理だわ。

お前が死んだらあたしが悲しーんだよ」

普段は大雑把で何も考えていないことを逆に誇っている能天気なサラさん。

「僕様ちゃんは最初からイトラちゃんがピンチになったら助ける気でいたからお礼なんていらぬよ。

最初からこうするつもりだったってだけの話だからね♪」

ちよつと危ない言動が多いけど師匠との関係を進展させるために協力してくれてた

ディオシキさん。

「ここまで来たらチームハターンでの狩りは止まらないぜイトラ。お前も参加するんだろ？」

そうやって差しのべられた師匠の手。

大きくて暖かい私の大切な人。

「はい！ 私はハターン・モンスータの弟子にしてサラ・ムーイ、ディオシキ・ブラザキの妹弟子、イトラ・ウボンガ！」

私と一緒にこの狩りを手伝ってください！」

しっかりと肯いて師匠の手をとる。

もう離さない、もう忘れない。

私の今の幸せの場所。

「そうこなくつちな、我が弟子よ。

それじゃあ覚悟しろよ光黒龍ギーラ。

俺らの本気はちつときついぜ」

振り返って光黒龍ギーラを睨む師匠。

その圧倒的なまでの迫力でギーラを後ずらさせる。

これが師匠の心の強さ。私の愛する人。

共に狩る。

私は狩人。ハンターのイトラ・ウボンガです！

ハターン side

イトラの奴さつきまで死ぬ気だったつてのに気持ちのベクトルが百八十度変わって生きるために狩る決意をしたようだな。

これまで苦戦を強いられることが極端に少なかったから分らなかったんだろが俺の弟子である以前にハンターとして、生きることを諦めるのはこれまでに奪ってきた

命に対する冒瀆にすらなりかねん。

決して死なず、常に狩る側で居続ける覚悟を持たようだ。

「俺の弟子を殺そうとした報いは受けてもらうぞギーラー！」

光黒龍ギーラーはまるで待っていてくれたかのように咆哮を響かせ俺らに向かってきた。

そしてそれに応えるように俺達も同時に飛びかかった。

これもまた一つの幸せなのか？

前回の流れから今回の話は物語のラスボスのモンスター光黒龍ギーラと俺達の熱いバトルが繰り広げられる思っている人が多いと思う。

俺だつてそうさ。

だがそんないいムードでは始まらない。

何故なら……

「父さん秘術：『帰つたように見せかけて実は帰っておらずラスボス討伐という美味しい所を持つていく』の術♪」

プスッ♪

「ギャオオオオオーン」

光黒龍ギーラは帰つたはずの俺の父さんに狩られてしまった。

……この展開には俺も驚いた。

だつてそうだろ？

ここは過去のトラウマを乗り越えたイトラが俺やサラやディオシキと手を取り合つて熱いバトルをするのが必然だろ？

それが父さんの黒滅龍槍の一撃で終わるだなんて。

「いやー、私もハンターとしてこれほどの大物は自分で狩りたかつたんだよ。

めんごめんご」

「気持ちのいい笑顔をありがとう父さん……なんて言うかポケエー！

せつかくたぎってきた俺の熱情（パトス）をどうすればいいんだよ!」

「それなら私と愛を営みませんか？」

気づけば俺の手を先ほどから握つたままのイトラがそんな事を言ってきた。

てゆーかさつきまで傍にいたサラとディオシキはいつの間にかやら気を利かせてくれ

たのかすでに消えてるし！

「私はもう師匠の手を離さないと決めたのでこれからはずっと一緒ですよ♪

あんなに熱いプロポーズをしてくれたんですもの、離れられっこないです」

「いやあ、ようやく孫の顔が見れそうだね。

それじゃ父さんもこの島での仕事は終わつたし一旦家に帰るよ。

式の日取りが決まったら連絡してくれよ」

そう言って母さんと同様にありえない早さで荷物をまとめて走り出した父さんは去って行った。

「……なんかもう疲れた」

しかしまあ、イトラも人を頼ることを覚えたとし、これで弟子は卒業だ。

俺もようやく久し振りに寡黙で渋い一人暮らし生活が送れそうだけ。

「師匠、弟子卒業ってどういうことですか？」

ん？ 心を読まれたか？

「まあ、言葉通りだ。

俺の教えることはもうないから一人立ちしてもらおうと思つてな。今回の狩りもイトラの卒業試験という目的があつて受けたんだ」

「でも私は師匠と離れたくはありません！

私のこの熱情（パトス）はどうすればいいんですか!？」

うおう、さすがは俺の弟子。

俺と同じような反応で返してきた。

「大丈夫さ。

イトラならもう一人でやっていける。

だからこれからは一人でハンターとして頑張つて行け。

なあにたまになら俺も手伝ってやるからさ」

そう言つて繋いでいた手を離し、イトラに師匠としての最後の言葉を放つ。

「お前は一人前だ！

それじゃあ元気でやれよ」

それだけ言うと俺は走り出し、島から勢いよく飛び出した。

愛ゆえに弟子を一人にする。

これも俺の愛だぜイトラ。

さらに強くなれよ。

……

……

……

島から海を走ることとダイダーヴァの街に帰ってきた俺はまず最初にギルドに向

かった。

「よう、マル。

帰って来たぜ」

いつも通りカウンターの上でだらだらしているマルに、珍しく自分から話しかけた。

「あらあ、その様子だとイトラちゃんも弟子卒業したみたいねえ〜」

「さすがはマルだな。

その事もすでお見通しか」

挨拶はその辺にして、俺はいつもの指定席ではなくカウンター席に腰掛けた。

「ところでマル。

狩りに行く前に頼んでいたものは出来ているか？」

「あらあらあゝ、私を誰だと思ってるのおお？」

すでにギルドが総力をあげて完成させてるわよおお♪」

「さすがだな。

いつもこれ位に仕事が早ければいいのにな」

「それよりもおお、本当に行っちゃうのおお？」

普段笑顔しか見せることのないマルにしては珍しく寂しげな表情を浮かべる。

「ああ、俺はこの街を出る」

俺が町に帰ってきたのはこのためだ。

家も全焼しちまったし、最低限の荷物を持って旅に出ようと考えていたんだ。そうしてマルとの短い会話を終わって席を立つ。

マルはそれを引き留める様子はないが視線はこちらに向いたままだ。

「最後だから言っておくけど、お前との付き合いも長かったが楽しかった。イトラのこともよろしく頼む」

「じゃあ最後だからあゝ、私も言っちゃうけどおゝ♪」

「この間延びした口調もしばらくは聞けなくなると思うと寂しいものもあるな。」

「ハターン君が狩りのあとに街を出て旅に出ることサラちゃん達に喋っちゃったから」
♪

「そうか……って何いー!？」

「家を見てきたらあゝ？」

「私からのおゝ、サプライズプレゼントも置いてあるからあゝ♪」

「マルはまだ何か言いたそうだったが無視して急いで俺の家があった場所に向かう。」

「俺は今回の計画のために家が全焼したのをこれ幸いと、俺による俺のための大陸中を」

旅するための一人用の馬車を注文しておいたのにその計画に歪みが生じてしまったのかもしれない。

そして俺の家があつた場所に待ち構えていたのは……

「こんなの頼んでないぜマル……」

それは巨大な家だった。

否、屋根には古龍観測所がよく使う飛行船のような気球が付いている。
つてことはこれは空を飛べるのか？

「あ！ やゝつと帰ってきたのねん♪」

「待ちくたびれたぞハターン」

「お帰りなさいませ師匠♪」

家の窓から顔を出してきたのはメラナト島に置いてきたはずの弟子三人娘の姿だつ

た。

「なんで島に置いてきたお前らがここにいるんだ!？」

先に島を出た俺よりも早く帰ってくるなんてどうやったんだよ!？」

「それは私が師匠をついに越えたからです♪」

イトラだったようだ。

「私はどうやら師匠の海の上を走る技術を身につけるだけでなく、師匠以上にその技術を使いこなすことに成功したみたいなのです。

なのでサラさんとデイオシキさんを担いで師匠よりも早く海を走って先回りしていただきます♪」

なんか満面の笑顔で自信満々に言うイトラ。

「こりやもう名実ともにイトラがハターンの一番弟子だな。」

あたしもここまで早くイトラが成長するとは思ってなかったぜ」

「それとハタつちが旅に出ようとしていることもすでに聞いていたから注文していた馬車も僕様ちゃん達も乗れるものに改良してもらったから」

妹弟子の成長が嬉しいのか、サラとディオシキも最高に楽しそうな顔をしているが俺の気持ちなんて今回も考えていないんだろうな……

俺が最初にギルドに注文していた一人乗りの馬車だつてのに、それをこんなバカでかい飛行船に注文内容を変えたつてことは、三人揃って付いてくる気満々なんだろうな。

「と、言う訳でこれからも一緒に大陸中のモンスターを狩りに行きましょうね♪」

眩しいくらい笑顔のイトラを前に俺は駄目とは言えなかった。

これも俺の甘さゆえなのだろうか。

「知ってましたか？ 女の子はある日突然女になるものなんですよ♪」

いや、そんなハナマル笑顔で言われても……

まあ、可愛いけど俺のソロ狩りライフという夢ががまたもガラガラと音を立てて崩れてしまった。

「……はあ、仕方がない。

それじゃ全員で旅に出るぞ！」

悩んでも仕方がない。

どうせ俺はこいつらを断ることなんてできない運命だったんだろうしな。

それならせめてその運命を楽しむまでだ。

そんな覚悟を決めていたところでイトラが最後の最後に最後の爆弾発言をしてきた。

「あ、それと師匠と私の婚姻届をギルドの方に提出しておきましたので私と師匠の関係は師弟関係から夫婦関係へと進んでおきましたので♪

これからよろしくお願いしおますね。あ・な・た♪」

「ノオオオオオオオオオオー！」

俺のこの絶叫はトイダーヴアの街によく響いたそうなの……

……

……

……

……この世にはまだまだ俺の想像を越えるようなモンスターがいるのかもしれない。いつかは俺の最強伝説にも終止符が打つたれるかもしれない。

だがそんなことはどうでもいい。

俺には何だかんだあったが一応愛する弟子であり、仲間である三人がいるのだから。

こうしてトイダーヴアの街を拠点としていた最強のハンター、ハターン・モンスターは最強の妻と最強の弟子二人と一緒に大陸中を飛行船で旅しながらさらに伝説を作っていくのだった……

「そーいや、イトラがハターンの妻なら、あたしとディーちゃんはハターンの愛人つてこ

とになるのか？」

「いつえーい、僕様ちゃん達も既婚者であるハタつちと、妻のイトラちゃん公認の不倫関係つてのも悪くないかもね♪」

背徳感が堪らないのよん。ぎやははははッ！」

「私は師匠が私を一番愛してくれるのなら愛人が何人いても構いませんよ♪」

昔と違って師匠ほど素敵な人を自分一人で独占しようとはしませんのでサラさんやディオシキさんなら歓迎です♪」

「さすがにそれは勘弁してくれ……」

やれやれ、こんな幸せも、俺の狩りと愛の日々なんだろうな。

くおわりく

登場人物設定 3

ヒノコ・カーザン

ラテイオ活火山に古くから住む部族の族長の一人娘。

ハターンとの出会いのシーンでは人形を囚にしてハターンを襲ったが実は死んだふりの達人でもある。

背中を大地という鉄壁の盾で守り、全神経を全面に向けて敵を狩るといった戦術方法を得意とするがハターンにそれをやっていたら天砲脚を食らっていたかもしれないわ

ハターンの妻の座を狙うがハターンに逃げられてしまい、その後あらゆる手段を用いてトイダーヴァの街を目指して旅に出る。

ハターンが飛行船で旅に出た事を知って各地を転々とするようになる。

ヒノコのパパ

かなりやり手の実力者族長。

自身も昔はハンターをしていたのだが如何せん寄る年波には勝てず、村の仲間を避難させるためにアカムトルムと戦って負けてしまい、殺される寸前でハターンに助けられた。

ハターンを次期族長にするために画策しているがその策が実を結ぶ日が来るのかは不明。

モンハンの世界って一夫多妻とかもありな気がしますしハーレム作るのもありかと考えたりもしていますが。

ヒーローショーの密猟者役のおっさん。

本当はもつと活躍させようかとも思っていました。飽きたので出番が少なかったw
売れない役者として6畳一間の家賃1000ゼニーのアパートに住んでいたのだが
シユレンジャーのショーに出たことがきっかけで司会役のお姉さんとゴールイン♪

しかも王都から来ていた劇団の人にスカウトされて、一流スターになり、二人の子宝に恵まれ、夢のマイホームを購入するまでに至った人。

その後は年を取って死ぬまで『あのハターン・モンズータと共演したことがある』と言って幸せに暮らしたそう。

ヒーローショーの司会役

最初男と女どちらにしようか決めずに書いていたのでなんかどっちつかずな口調とかなってしまっただが最終的には女性となり、密猟者役のおっさんとその後結婚して幸せになったそう。

ちなみに最後の握手会ではハターンの演じたスター・モンタンハの列に並んでいたそう。

アイルガーX・剛（ゴー）

言わずと知れた魔界戦記デイスガイアの『プリニガーX・轟（ゴー）』をモンハンの世界で作ってみたいと思つて出した機械ネコ。

その戦闘力はトン爺さんが採算度外視で作つたために国の一個師団を一匹で壊滅させることも出来るほど。

ただしハターン達には勝てなかつた！ みたいなっ♪

機械なので重火器を体に仕込んでおり、さらに握力200kgで一日三回一分間だけ使える邪眼を持つているという設定まで考えていたのに考えた段階で満足してしまつたのでなんか地味に終わった。

ちなみに陸海空全ての戦闘が可能なので当然、防水加工も万全であり、おまけ機能として風呂場で体重計代わりにもなるという便利なネコ。

しかしハターンは身の回りのことは全部自分でするので結局は農場でワリサ達と身体を鍛えながら（？）過ごしている。

登場時は試作品ということでメタボ体型だったがハターンの注文によりスタイリッシュなメカメカしいボディへと生まれ変わった。

ハターン農場親衛隊四天王の新たな一角。

シドー・ブイセシン

トイダーヴァアの街の序列第三位のハンター。

ハターンが来るまではトイダーヴァアの街で第一位の座についていたが、追い抜いたハターンやその弟子のサラを恨んではない。

むしろかなり大好き。

お人好しのために依頼を受けて出向いた先でしょっちゅう依頼外のボランティア活動をするために一回狩りに出かけると街に帰ってくるのに時間がかかるために依頼の達成数は少ない。

しかし腕はいいのでギルドとしても手放したくはない人材であり、その容姿も相まって子どもから絶大な人気があるために街での地位を不動のものとしている。

防具は暁丸・覇で頭はラオシャンロンの頭を模した『ラオシャンロンフェイク』。

作者が個人的にラオシャンロン（通常種）の眼が可愛いので好きという理由と「荒川アンダーザブリッジ」を読んでいてマスクキャラってのも出してみたいと思ったために

出したノリによつて考えられたキャラ。

武器の方はハンマー二刀流で、双剣使いみたいに鬼人化や乱舞もするために双剣使いに思われがちだが、あくまでハンマー使い。

作中では海で溺れ死んだ……ように見せかけて実はどこかで生きているかもしれない。

ジドストラ・モンスター

ハターンの父。

最初は『灼眼のシャナ』のダンタリオン教授みたいなキャラにしようかとも思ってたがそれでは普通だと思ったので別の意味で少し子どもっぽいキャラにw

ラスボス討伐という最後の美味しい所だけ頂いちやうというところでもないことをしてしまったがハターン達四人が戦ったとしても、どうせ瞬殺だろうからギャグとしてこ
うなつてしまった。

基本事務仕事ばかりをするハンター協会会長という地位にいるが本人は外で武器を

振り回してる方が好きなのでジドストラのサポートをする文官は先代の会長よりもずっと多い。

妻のリユカとの仲は超良好。

外見イメージは『バカとテストと召喚獣』の木下秀吉。

敢えて意外性を狙って可愛い系、むしろ男の娘にしたかったため。

イトラ・モンスター

憎しみで暴走した後には師匠であるハターンに諭され、その才能を愛によって開花させたスパークイトラ。

最後の最後でマルに頼んで無理矢理ハターンと入籍することに成功し、ハターンの妻という立場になる。

本人曰く『師弟関係が終わった以上、次の繋がりを求めるならコレ!』と決めていたように周りのノリによる後押しもあり、何の問題もなかったそう。

これから先もハターン一筋で波乱万丈な幸せな人生を送っていくことでしょう。

第終章：完結後の番外編

番外編：愛しの師匠、私を食べて♪

俺の名はハターン・モンスータ。俺が誰か忘れている人もいると思うが、それは仕方がないことだろう。

これでも大陸最強のハンターにしてハンター協会会長の一人息子であるって設定もあるが、基本的にそんなもの、実際に狩り場に出てしまえば塵芥にすぎないものだからな。

それに俺ももう三十歳だ。世間一般ではおじさんと言われても仕方がないだろうし、弟子がすでに俺以上に目立っているからますます影が薄くなっちゃったかもしれない。

そして現在進行形で俺の上にまたがっているのが本意ながら（内心は認めている）俺の弟子にして妻のイトラ・モンスータだ。

なにが進行形なのかは考えたくないが、そういうつもりなんだろうな……。

「師匠♪ おはようございます♪」

「ああ、おはようイトラ。

そして退いてくれないか？

起き上がれないんだが」

「うん、それ無理♪

だって私はいいい加減師匠との間に子どもが欲しいんですから」

だろうなあ、身長差が50センチ以上ある上に、これでもハンターとしてはゴツイ方である俺がまったく身動き出来ないように抑えているこの小さい弟子にして妻はどいてくれないんだよなあ。

「あのなあ、イトラ。

最初に言ったが、お前はようやく13歳になったばかりだろう。

そんなお前に手を出すのは渋くてカツコイイハードボイルドな俺らしくないだろう？」

「別にいいじゃないですか師匠。

すでに師匠がただのハードボイルドマニアなだけで、実際にハードボイルドじゃないことだなんて知れ渡ってるじゃないですか。

それに作者の六作目では百合とは言え、もっと過激な描写を入れてるのに私たちだけ肌を重ね合わせないだなんてずるいです！」

「いやいや、あつちは百合だから大丈夫だったんだよ。

俺はお前にとつて夫であり師匠でもあるが、保護者でもあり父親でもあるんだから流石に駄目だろう。

「おい、サラ、ディオシキ。どっちでもいいからイトラを止めてくれー」

弟子に助けを求めることは別にカッコ悪いことではない。

イトラが言うことを聞かないのだから、他の二人の弟子に助けを求めるつてのは今の俺に出来る最良の手段だ。

何故なら、俺は、子どもには、手を、出さん!!

だが俺の弟子は仲が良いのでチームワークの良さは俺でさえ手が出ないものがある。そして俺はイトラに寝込みを馬乗りされて身動きが取れない状況にある。

「ぎやはははは♪ 見てみなよサラにゃん。

ハタつちつてば、まあくだイトラちゃんから逃れようとしてるよ♪」

「だよなー、いい加減ハターンも観念してイトラを食っちゃまえよ。

全身を持久力と瞬発力を兼ね備えたピンク色の筋肉につくりかえたイトラなら小さくとも裂けること無くハターンのデカイもんをぶち込めるはずだぜ？」

おまけにイトラは溶岩に直接触れるのも雪山に水着で行くのも、ティガレックスに噛みつかれても傷一つつかない耐熱耐寒に丈夫さまで兼ね備えている。

「お前たちは俺を裏切るのか！」

俺は子どもに手を出さと言ったら出さん！

身体的な問題ではなく年齢的な問題だ！」

「うーん、いつまで経っても師匠は頑固ですなあ。

そこが魅力的でもあるんですが、すでに私は女ですよ。

身長こそ全然伸びていませんが、一生伸びないのだとしたら、今手を出すのも未来で

手を出すのも変わらないでしょうに」

と言いつつも、結局のところイトラは退いてくれた。

何だかんだ言っても、このやりとりもいつものことであり、両者の同意がなければ手は出さないというのもイトラのイトラらしさでもあるのだ。

「それじゃ師匠、代わりにこれをあげます」

「ん？　なんだ？」

……ああ、チョコレートか」

「ええ、チョコレートです。」

今回はバレンタイン企画ということで、たまたまバレンタイン当日が休日だったために、職場の若い子やパートのおばさんからすら義理チョコももらえなかった作者の代わりに師匠が受け取ってください」

なるほどな、この物語が最終回を迎えてからも日常的に繰り広げられていたありふれ

た光景が描写されるのは意外だったが、バレンタイン企画として投稿されるのなら分らないでもない。

弟子からのプレゼントだ。ありがたくいただくとしよう。

パクッ

「師匠！ 食べましたね？」

「どうですか？ 美味しいですか？」

「ああ、イトラの愛情がたっぷり詰まっっていて美味しいぞ。」

「ところでサラとディオシキはないのか？」

いつもならイトラの姉弟子でもある二人も騒ぎに首を突っ込むというのに、今回はえらく大人しい。

それにプレゼントらしい包みを持っていないがどういうつもりなのだろうか？

「なあ、ハターン。」

さつき子どもに手を出すつもりはないって言ったけど、あたしらは大人だろ？」

「……………？ 何を言ってるんだサラ。」

お前もだが、ディオシキもすでに大人だろう」

「ぎやははははははははは♪

ハタつちつてばまだ状況が分かってないみたいだよサラにやん♪

これは行動で示した方が分かり易いんじゃないかな？」

何を言っているんだこいつらは。

まるで分らんが……………何か企んでそうだな。

……………ここは避難し……………て……………。

「ぐつ……………何やら身体が熱く……………」

「ふふふふ、ようやく聞いてきましたね、師匠」

「ふっふっふっ、イトラの渡したチョコはあたしら三人の合作チョコなんだよ。

そして合作ならではの細工をしてあるってわけさ」

「具体的には媚薬……だねえ♪」

そう言うと三人は服を脱ぐとその肌をあらわにする。

その体にはチョコレートで女体盛りが如く盛られたチョコレートが！

「師匠、私は考えました。

私は普段から積極的に迫ることはあっても、師匠が手を出す気がない限り最終的なところでは引きます。

ですが、それは師匠が逃げ腰だからであって、私の意思ではないのです。

だから、媚薬と魅惑のチョココーティングをした私たちの裸身を晒せば手を出すのでは？ 作戦を決行したわけですよ」

不本意ながらサラさんとディオシキさんに手を出すついでみたいな感じで私にも手を出してもらおうってことです」

ヤバイ……これは俺の男としての本能が……、我慢の限界を超えてしまう。
かくなる上は……。

「全力で逃げる！」

イトラがのいてくれたことが幸いし、俺は勢いよく部屋から脱出することに成功した。

しかし安心はできない。

すでに六作目の最終話の影響で、狩り行為が全面禁止されたとはいえ、大陸各地を旅するために俺は今でも飛行船での生活を続けている。

流石の俺も、高度9000メートルからのヒモなしバンジーは危険だろう……が、それでも俺は子どもには手を出さん！

飛行船内に隠れていては見つかるかもしれないからな。

見事にダイブしてやろうじゃないか。地上へ！（最高に決め顔で俺は言った）

「アイキャンフライー！」

「あ、師匠が逃げましたよ！」

「つたく、ハターンのやつ往生際が悪いなあ〜」

「でもここって、ラテイオ活火山の付近だけど大丈夫かねん？」

……

……

……

すでに狩りは長い事していなが鍛え抜いた俺の体にとって9000メートルからのダイブは何の問題もなく成功した。

「着地成功。滞空中に媚薬成分の解毒も終了。」

「そしてここは火山のようだが……」

「あ、ハターンさん♪」

もしかして、うちっちをお嫁さんにしてくれる気になったのかのう？」

この声は……。

「バレンタインデーに空からやってきてくれるだなんて、なんといい渋くてカッコイイハードボイルドな登場なのじゃ♪

流石はハターンさんじゃのう♪」

「ラティオ活火山に住む少数部族のカーザン族族長の一人娘のヒノコ・カーザンかよ。

説明口調になったが、俺は弟子に迫られて逃げるために飛行船からダイブしたただけでお前のために落ちて来たわけではない。勘違いするな」

だが内心は焦っている。

出番がないと思っていた少女がまさかの2度目の登場をしたからではない。

それでもハードボイルドを目指す俺としては女子供に手をあげることなど出来んからだ。

が、かといって逃げるのも難しい相手だ。

なにしろヒノコの奴、この間新聞に載っていたが俺に追いつくために時速120キロで24時間走り続けることが出来る脚力と体力を身につけたそうだしな。

「ふふふ、わかってると思うけど、うちっちはハターンさんを逃がすつもりはないぞ」

「だろうな、新聞でお前の脚力と鍛えた理由は知っている。

だがそれでもまだ俺には遠く及ばないぞ」

「ふっふっふっふっふ、でも以前新聞に載った時よりも、うちっちはさらに鍛えてるから勝てないんじゃない？」

「今なら時速300キロは行けるはず」

「ちっちちっちつ、だがモンハンの世界じゃあ二番目だ。

俺の本気は時速53万キロだ（流石に嘘だが）」

まあ、それでも時速300キロくらいなら俺でもまだ勝てるのでその場は全力で逃げだすことで難を逃れた。

ただあの調子だと、本気で時速53万キロまで鍛えそうだしどうしたものか……。せめてイトラが16歳になるまで、あと3年は無事でいれればいいのだがな。

そうすれば俺もハンター協会の会長職を引き継いで、イトラとサラとディオシキの4人でのんびり暮らすだろう。

しかしイトラは16まで待てないのだろうし、こうなれば王立学術院の学院長にして王立古生物書士隊の隊長を兼任するシャルラ・アーサーという少女にでも助けてもらうか？

彼女は完璧なまでの百合らしいから俺に興味を持っていないようだし、しばらくは学院で教師として隠れるのも悪くはないのかもしれない。

「まあこれが俺の愛の日々だな（狩り要素は完全に廃止されたが）」

イトラSIDE

「やっぱり根本的に年が問題なんですよね。」

薬とか忍法で、手足や胸を大きくするのは出来ますけど、それでも私の年は13歳のままですからね」

こうなれば16歳になるまで待つしかないのかもです………なーんてそんなことを考えるほど私は大人しくはありませんよ。

媚薬自体は効いていたんですから、今度は逃げ出せない状況を作ってからにしましょう。

流石にこれ以上の我慢は無理ですもの。

覚悟してくださいよ、師匠。ふふふふふふふふ♪